

上細井中西部遺跡群

上細井中西部遺跡群

上細井中西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

《第1分冊・本文編》

上細井中西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

《第1分冊・本文編》

2024・3

2024.3

前橋市教育委員会

前橋市教育委員会

上細井中西部遺跡群

上細井中西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

《第1分冊・本文編》

2024.3

前橋市教育委員会



上細井中西部遺跡群調査地遠景赤城山を望む

図絵 2



A工区2区H-4 カマド遺物出土状況



A工区2区H-6 カマド全景（西から）



A工区 3-1区 J-1 全景（西から）

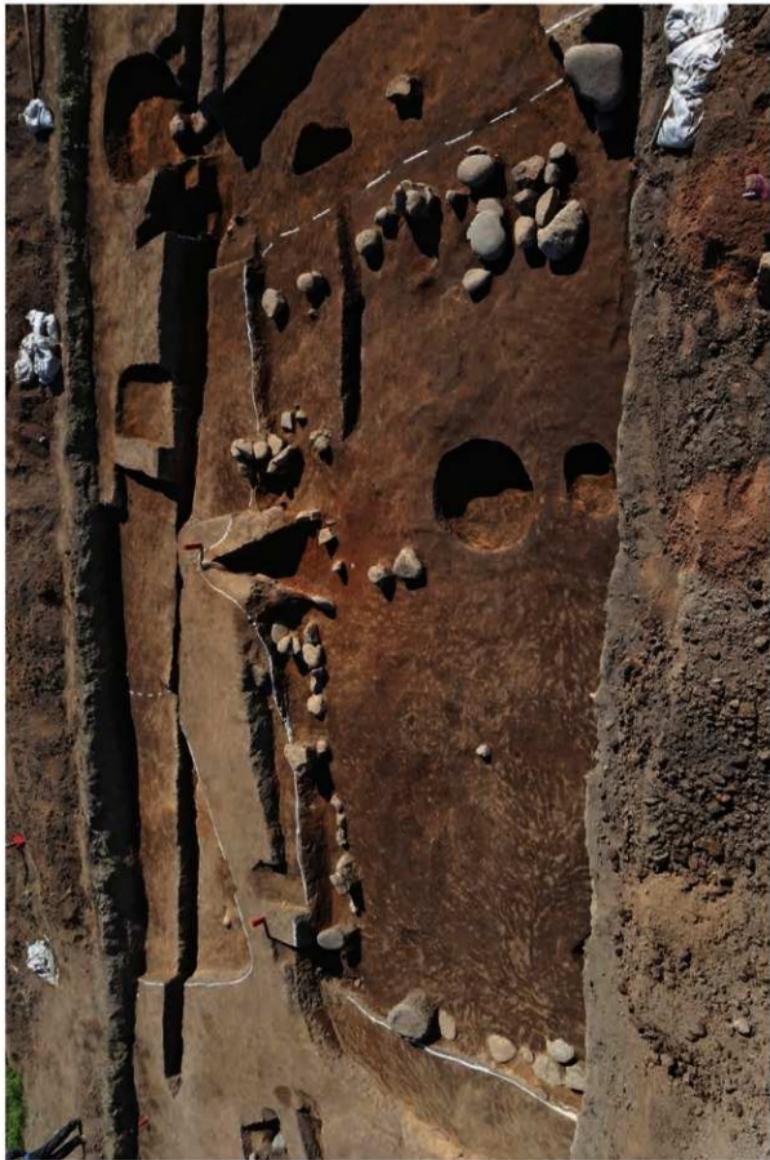


A工区 3-1区 J-1 遺物出土状況

口絵 4



A工区3区-3 全景（上が北）



A I [X3 - 3] H - 7 全景 (西面5)

図絵 6



A工区 4区H-11 全景（西から）



A工区 4区H-11 カマド脇遺物出土状況



BTK 1区Y-1 金屏(西か5)

図8

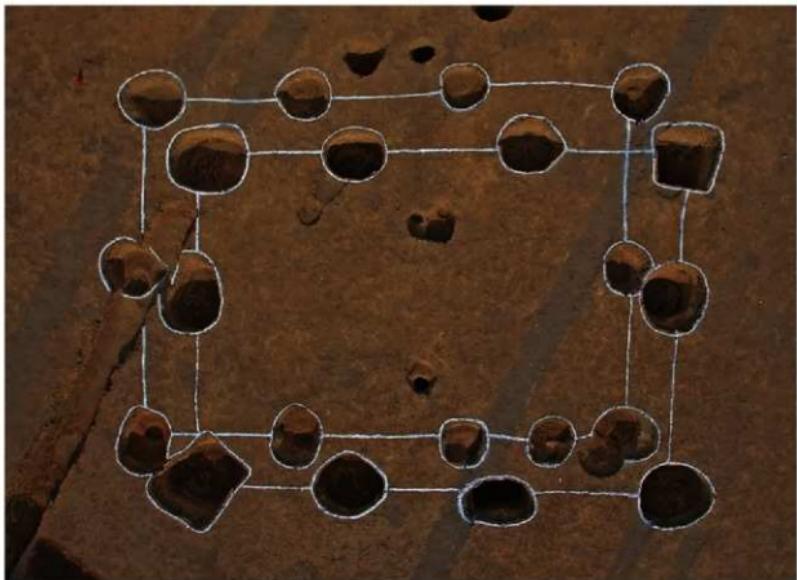


BT区2区全貌 (L-351)



B.T.K 2 [K]H – 3 (被災住居) 全景 (西から)

図10



B工区2区B-1・2全景（上が北）



B工区2区B-1・2全景人有り（上が北）



B工区4区J-1全景（西から）



B工区4区J-1土器出土状況

図12



B工区5区全景（上が北）



B工区5区H-48 石材出土状況（東から）



B工区5区B-1周辺全景（上が北）

図絵 14



B.T.E.5区H-59～68・70、W-2（上がE）



B工区5区J-1全景（南から）



B工区5区J-1炉全景（南東から）

図版 16



B工区5区D-17 墨書き土器「真」出土状況



B工区5区H-12 墨書き土器「⑩」出土状況



上細井中西部遺跡群 B I (K 7 区全景 (上が東))

図絵 18



B工区7区M-1石室（北から）



B工区7区M-1石室（東から）



C工区H-9 全景（西から）



C工区H-39 全景（西から）

図絵 20



C工区1区H-44 カマド遺物出土状況



C工区1区D-6 全景（南から）



D工区1区H-1全景（南から）



D工区1区JD-7土器検出状況

図絵 22



D工区2区H-9全景（西から）



D工区2区H-9カマド掘り方全景（西から）



D工区3区M-1全景（上が北）



D工区3区M-1石室全景（上が東）

図絵 24



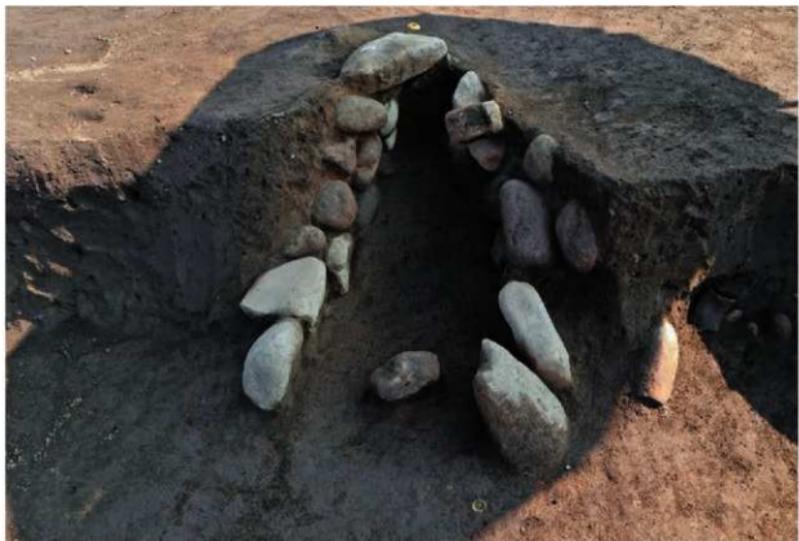
D工区3区M-1石室全景（南から）



D工区3区M-1墳丘の一部（西から）



D工区3区J-1全景（上が北）



D工区4区-1H-13カマド全景（西から）

図絵 26



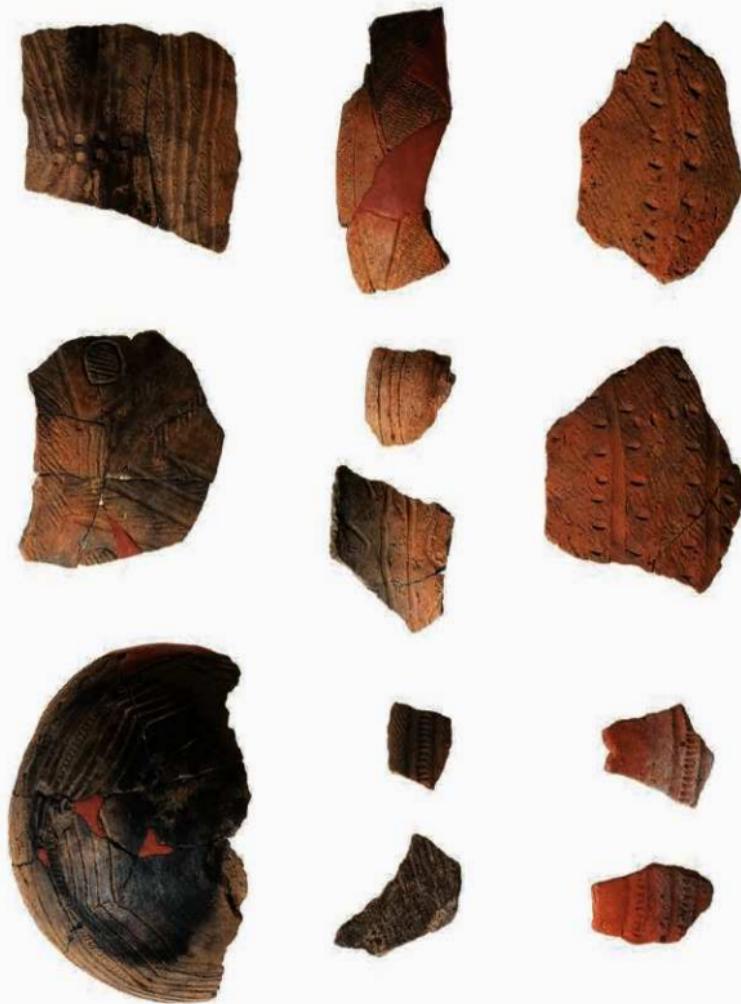
縄文時代出土遺物



B工区1区J-1出土遺物



A工区3-1区出土遺物



学生時代出土遺物



DTK3区1号古墳周縄出土大刀



DTK3区1号古墳出土舞





古代の出土遺物



墨書土器



A工区3-3区H-7出土墨書土器「石上」



平瓶・高盤・碗・瓦塔片・腰帶具

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する上細井中西部遺跡群は赤城山南麓の上細井町・青柳町に位置し、上細井中西部地区土地改良事業に伴う発掘調査です。調査の結果、縄文時代から平安時代にいたる多くの竪穴建物跡や円墳など多くの遺構を検出し、貴重な遺物を得ることができました。本報告書は、それらの記録と考察をまとめたものであり、学術研究はもとより郷土の歴史を学ぶ資料として役立てていただけたら幸いです。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、地権者をはじめ関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、酷暑・寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに心より感謝申し上げます。また、本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和6年3月

前橋市教育委員会
教育長 吉川 真由美

例　　言

1 本報告書は、上細井中西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 本報告書に掲載した発掘調査の要項は、以下のとおりである。

(1) 上細井中西部遺跡群No.1

所 在 地：前橋市上細井町1077他

遺 跡 略 称：30B19

発掘調査期間：平成30年5月14日～平成30年10月31日

発掘調査面積：7,266m²

発掘調査・整理担当者：小峰 篤・松村 麗敏（前橋市教育委員会事務局文化財保護課理蔵文化財係）

(2) 上細井中西部遺跡群No.2

所 在 地：前橋市上細井町1661他

遺 跡 略 称：31B21

発掘調査期間：平成30年10月30日～平成31年2月28日

令和元年6月6日～令和2年1月17日

発掘調査面積：15,384m²（うち平成30年度分3,334m²・令和元年度分12,069m²）

発掘調査・整理担当者：小峰・藤井賢一郎・村越 純子（同上）

(3) 上細井中西部遺跡群No.3

所 在 地：前橋市上細井町1545他

遺 跡 略 称：2B22

発掘調査期間：令和2年6月16日～令和3年1月27日

発掘調査面積：7,750m²

発掘調査・整理担当者：松村・藤井・村越（同上）

(4) 上細井中西部遺跡群No.4

所 在 地：前橋市上細井町1603他

遺 跡 略 称：3B24

発掘調査期間：令和2年6月5日～令和2年7月21日

令和2年11月13日～令和3年2月26日

令和3年6月23日～令和4年3月11日

発掘調査面積：13,764m²（うち令和2年度分6,860m²・令和3年度分6,904m²）

発掘調査・整理担当者：松村・村越（同上）

3 事業主体及び事業名

(1) 事業主体 群馬県中部農業事務所

(2) 事業名

・平成30年度（農山）県営農地整備事業（畑地帯担い手育成型）上細井中西部地区

・令和元年度（農山）県営水利施設等整備事業（畑地帯担い手育成型）上細井中西部地区

・令和2年度（農山）県営水利施設等整備事業（畑地帯担い手育成型）上細井中西部地区

- ・令和3年度（農山）県営水利施設等整備事業（畑地帯担い手育成型）上総中西部地区
- ・令和4年度（農山）県営水利施設等整備事業（畑地帯担い手育成型）上総中西部地区
- ・令和5年度（農山）県営水利施設等整備事業（畑地帯担い手育成型）上総中西部地区

4 調査主体 前橋市教育委員会

5 本書の編集は村越が行った。原稿の執筆分担は下記のとおりである。

第7章第1節：小川 卓也 第7章第2節：小島 純一 第7章左記以外：村越 純子

6 発掘調査・整理作業に携わった方々は次のとおりである。(敬称略順不同)

秋山 修・新井一史・安藤三枝子・石原三郎・伊丹茂一・市村政夫・植松千明・碓井俊夫・岡田正敏・小川希望・荻原一行・奥野末廣・尾上吉男・小野里夏子・神山早苗・川野京子・菊田武明・倉林 登・桑原和衛・小池 賢・小暮朱実・小林千恵美・小和瀬深夏・近藤哲夫・櫻井一男・齋藤簡詳・佐々木泉・佐藤秀幸・篠崎辰夫・白石真知江・代田綾子・陣内道由・神通信幸・鈴木正紀・都木英之・高澤京子・高津邦道・高橋民雄・武井博行・竹之内文男・立川千栄子・田所順子・田中進・田部井美砂子・田村ひとみ・長岡 保・中野 寧・南雲和義・奈良啓子・奈良精一・野上義一・信澤 勝・羽田郁子・樋高康広・平澤小夜子・平林しのぶ・藤原典子・町田妙子・松尾宏子・松岡利雄・松下 明・松本布三子・水口知江子・峰岸あや子・茂木昭弘・森泉芳昭・森下綾子・山口八代江・山田友子・湯浅たま江・湯浅道子

7 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で管理、保管している。

凡　　例

- 1 挿図中に使用した北は、座標北である。
- 2 遺構断面図、等高線図に表記した数値は標高を示し、単位は「m」メートルである。
- 3 遺構及び遺構内施設の略称は、次のとおりとする。

H：古墳、奈良、平安時代の竪穴住居跡	J：縄文時代の竪穴住居跡	T：竪穴状遺構		
B：掘立柱建物跡	I：井戸跡	W：溝跡	D：古墳、奈良、平安時代の土坑	
JD：縄文時代の土坑	M：古墳	P：ビット、貯蔵穴	A：道路状遺構	S：集石
O：落ち込み等	N：粘土探査坑	X：その他		
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は、原則として次のとおりである。この他は各図スケールを参照されたい。
遺構：全体図 1/500
　　住居跡・竪穴状遺構・土坑・ビット 1/60、1/80
　　溝跡 1/60、1/100、1/180、1/200、1/300、1/400
　　古墳石室 1/60　　竪断面 1/30
遺物：土器 1/3、1/4　　石器・石製品・土製品 1/1、1/2
　　鉄器・鉄製品・銅製品・古銭 1/1、1/2
- 5 計測値については、()は現存値、〔 〕は復元値を示す。
- 6 セクション注記の記号は、縦り・粘性の順で示し、それぞれ以下のように表現する。

○非常に縦り・粘性あり　　○縦り・粘性あり　　△縦り・粘性ややあり　　×縦り・粘性なし
なお、セクション注記と遺物観察表の色調については、「新版 標準土色帳」(農林水産技術会議事務局 財團法人日本色彩研究所監修2006)に掲載された。
- 7 遺構平面図中の破線は、推定線を示す。
- 8 スクリーントーンの使用は、次のとおりである

遺構	焼 土		灰		炭	
硬化面		粘 土				
- 9 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B	浅間Bテフラ (供給火山: 浅間山 1108年)
Hr-FP	榛名二ツ岳伊香保テフラ (供給火山: 榛名山 6世紀中葉)
Hr-FA	榛名二ツ岳渋川テフラ (供給火山: 榛名山 5世紀末~6世紀初頭)
As-C	浅間Cテフラ (供給火山: 浅間山 3世紀後葉)
As-YP	浅間板鼻黄色テフラ (供給火山: 浅間山 1万5,000年前)
As-Okp	浅間大窪沢テフラ (供給火山: 浅間山 1万8,000年前)
As-BP	浅間板鼻褐色テフラ (供給火山: 浅間山 2万年前~2万5,000年前)
As-MP	浅間室田テフラ (供給火山: 浅間山 2万7,000年前~2万8,000年前)
AT	姶良Tnテフラ (供給火山: 姶良カルデラ 2万9,000年前~2万6,000年前)
- 10 本報告書で使用した地図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」「長野」
 - 第2図 国土地理院1/25,000地形図「前橋」「渋川」

目 次

図絵写真・はじめに・例言・凡例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方針と経過	7
第1節 調査方針	7
第2節 調査経過	7
第4章 基本土層	11
第5章 遺構と遺物	12
第1節 各調査区の概要	12
1. A工区	12
2. B工区	12
3. C工区	12
4. D工区	13
第2節 各調査区の検出遺構	13
第1項 A工区	13
1. 1区	13
2. 2区	17
3. 3-1区	22
4. 3-2区	24
5. 3-3区	27
6. 4区	31
7. 5区	34
8. 7区	36
9. 10区	37
第2項 B工区	38
1. 1区	38
2. 2区	40
3. 3区	42
4. 4区	43
5. 5区	46

6. 7区	61
第3項 C工区	64
1. 1区	64
第4項 D工区	72
1. 1区	72
2. 2区	73
3. 3区	75
4. 4区	76
 第6章 科学分析	 83
第1節 テフラ分析	83
第2節 上細井中西部遺跡群出土炭化材同定	91
第3節 上細井中西部遺跡群出土の黒曜石製石器の産地推定	95
 第7章 まとめ	 100
第1節 上細井中西部遺跡群の縄文時代	100
第2節 上細井中西部遺跡群における弥生時代中期の土器群	104
第3節 上細井中西部遺跡群の竪穴建物の変遷について	110
第4節 磐石をもつ竪穴建物跡	115
第5節 上細井中西部遺跡群のカマドについて	122
第6節 上細井中西部遺跡群出土の文字資料	127
第7節 上細井中西部遺跡群出土の特殊遺物	130
 第8章 引用・参考文献	 136

挿図目次

第1図 上細井中西部遺跡群位置図	4
第2図 周辺遺跡（国土地理院2万5千分の1地形図「前橋」「渋川」使用）	5
第3図 上細井中西部遺跡群グリッド設定図	10
第4図 上細井中西部遺跡群基本層序と各調査区土層柱状図	11
第5図 C工区1区深堀地点1の土層柱状図	86
第6図 D工区1区深堀地点の土層柱状図	87
第7図 上細井中西部遺跡群テフラ分析写真図版（1）	89
第8図 上細井中西部遺跡群テフラ分析写真図版（2）	90
第9図 炭化材（1）	93
第10図 炭化材（2）	94
第11図 黒曜石産地分布図（東日本）	95
第12図 黒曜石製石器の産地推定判別図（1）	99
第13図 黒曜石製石器の産地推定判別図（2）	99
第14図 上細井中西部遺跡群諸磯式期の遺構の分布	102
第15図 赤城山南西麓における諸磯式期遺跡の分布	103
第16図 『弥生土器集成　本編2　北関東I』で取り上げられた上細井出土土器（群馬県立歴史博物館蔵）	105
第17図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器（1）	106
第18図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器（2）	107
第19図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器（3）	108
第20図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器（4）	109
第21図 A工区遺構分布図	113
第22図 BからD工区遺構分布図	114
第23図 碇石配置の類型（平野 2007を引用）	116
第24図 各類型の代表的な事例（縮尺不同）	118
第25図 上細井中西部遺跡群検出遺構と主な出土遺物	119
第26図 堀越中道遺跡検出遺構と主な出土遺物	120
第27図 阿地越遺跡検出遺構と主な出土遺物	121
第28図 上細井中西部遺跡群検出遺構	124
第29図 上細井中西部遺跡群検出の石材で構築されたカマド	125
第30図 周辺遺跡から検出された石材で構築されたカマド	126
第31図 上細井中西部遺跡群出土文字資料	129
第32図 上細井中西部遺跡群出土の特殊遺物	134
第33図 上細井中西部遺跡群出土の鍛冶関連遺物	135

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	6
第2表 テフラ検出分析結果	88
第3表 樹種同定結果	91
第4表 分析対象となる黒曜石	95
第5表 東日本黒曜石产地の判別群	96
第6表 測定値および产地推定結果	98
第7表 上細井中西部遺跡群各調査区の時期別住居軒数	112
第8表 群馬県内の事例一覧表	117
第9表 周辺遺跡出土の特殊遺物	132
第10表 周辺遺跡の製鉄・鍛冶関連遺構・遺物	133

第1章 調査に至る経緯

平成27年6月、群馬県中部農業事務所、前橋市（農村整備課）、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で上細井中西部地区土地改良事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて協議を開始した。

その後、平成28年度では発掘調査主体、調査方法、調査計画、調査経費等について協議を重ね、発掘調査主体は土地改良事業の受益地である地元自治体が行うことで合意に至り、市教委直営で発掘調査を実施することになった。また、上細井中西部地区土地改良事業は、平成30年度から令和4年度の5か年計画で施工され、埋蔵文化財発掘調査も当該事業と並行して実施すること相互に確認した。

発掘調査期間は、土地改良事業に伴う造成工事スケジュール等を考慮し、原則各年度の上半期を現場発掘作業、下半期を当該年度発掘調査成果の整理作業とした。これを受け市教委では、平成29年度下半期に、平成30年度工区を対象とした試掘・確認調査を実施した。群馬県中部農業事務所と市教委で試掘・確認調査結果と土地改良事業に伴う造成工事計画に基く、平成30年度工区内の発掘調査対象地の協議を行い、発掘調査の着手に至った。以後、発掘調査実施年度の前年度に試掘・確認調査を行い、協議を経て本調査実施というサイクルで進められた。

発掘調査は、群馬県中部農業事務所長と前橋市長との間で、年度毎に埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を取り交わして実施した。なお、遺跡名称は、遺跡の所在する「上細井町」、土地改良事業の地区名を表す「上細井中西部地区」等を考慮し、「上細井中西部遺跡群」とした。さらに、工事施工区別で遺跡名称を区分し、「No.1～No.4」を付番した。平成30年度工区（A工区）は「上細井中西部遺跡群No.1」とし、令和元年度工区（B工区）は「上細井中西部遺跡群No.2」、令和2年度工区（C工区）は「上細井中西部遺跡群No.3」、令和3年度工区（D工区）は「上細井中西部遺跡群No.4」と表記する。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

群馬県の中央部にある前橋市は、北に赤城山、西は榛名山に囲まれ、南には関東平野が広がる。前橋市の地域を地形および地質の特徴から区分すると、北東部の「赤城南麓斜面」、南西部の洪積台地である「前橋台地」、前記両者の間に挟まれて地溝状をなす沖積低地である「広瀬川低地帯」に分けられる。

この赤城南麓斜面には、赤城白川、藤沢川、荒砥川、柏川などの河川が流下し、丘陵性地形を侵食することで、南北に長い起伏のある丘陵性台地を形成している。また、こうした河川や台地端部での湧水の影響で、枝状の開析が進み台地と谷地が複雑に入り組む地形となっている。

上細井中西部遺跡群は、標高約400mの旧富士見村大河原付近を扇頂として東端を藤沢川、西端を細ヶ沢川とする広い範囲で緩斜面を形成している白川扇状地の扇端に所在する。

白川扇状地は、赤城白川が形成した火山麓扇状地である。白川扇状地上の平坦地形の開析は赤城火山の他の火山麓扇状地と比べて少ないので、赤城火山の形成史の中では新しい時期に形成された地形面であるといえる。白川扇状地の大部分は早田（1990）により古期扇状地と呼ばれ、扇状地の前面にあって広瀬川低地と接する浸食崖から張り出す新期扇状地と複合した合成扇状地である。

白川扇状地の扇端は標高130～120mで北西から南東に6kmで「広瀬川低地帯」と浸食崖で接している。

第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する赤城南麓斜面の台地上には、旧石器時代から中近世に至る非常に多くの遺跡が存在している。埋蔵文化財の宝庫とも呼べる一帯である。近年では、一般国道17号線の渋滞混雑緩和のために計画された大規模バイパス道（上武道路）の建設に伴い埋蔵文化財発掘調査が数多く行われ、様々な時代の遺構や遺物が見つかっている。この他にも、本遺跡の東では芳賀团地遺跡群（芳賀北部团地遺跡、芳賀西部团地遺跡、芳賀東部团地遺跡）五代南部工業团地遺跡群などで大規模な調査が行われている。

旧石器時代遺跡は、大きく暗色帯からAs-BPの比較的古い時代の石器群とAs-YP前後の新しい時期に分けられる。芳賀東部团地遺跡では、暗色帯・暗色帯からAs-BP層から石器が出土しており、暗色帯の文化層では環状ブロックを検出している。新田上遺跡ではAs-YP下から細石刃・細石刃核など120点余の石器群が出土しており、上細井中島遺跡のAs-Okp下や上細井岬山遺跡のAs-Okp含む層からは剥片等が出土している。

縄文時代の遺構は、前期が多く次いで中・後期、草創期・早期・晚期の遺跡は少ない。

草創期では引切塚遺跡や小神明湯気遺跡から尖頭器が出土し、堤遺跡からは槍先形尖頭器の製作跡が見つかっている。

早期は県内でも遺跡数は少なく、上細井中島遺跡で撫糸文系・沈線文系・条痕文系土器が出土し竪穴住居や配石が検出されている他は、引切塚遺跡と青柳宿上遺跡で遺物包含層が検出されている。

前期になると遺跡数が増加する。前期を通して芳賀東部团地遺跡では大集落が形成されていた。また、上細井岬山遺跡では前期後半の集落が見つかっており、赤城南麓には上細井五十嵐遺跡、旭久保遺跡、広面遺跡など多くの遺跡が広がっていた。

中期は前期と比べると遺跡は少くなり、加曾利E式期の集落が上細井中島遺跡、新田上遺跡、芳賀北曲輪遺跡、芳賀東部团地遺跡などで見つかっている。

後期では称名寺式期の集落が堤遺跡で発見され、小神明遺跡群や芳賀北曲輪遺跡などで後期の集落が見つかっている。

晚期の遺跡は極めて少なく、本遺跡周辺では引切塚遺跡や青柳宿上遺跡で遺物が断片的に出土するのみである。

赤城山麓での弥生時代の遺跡は非常に少なく、その規模も小さいことが明らかである。県内の弥生時代遺跡は後期の遺跡が多く、それ以前のものは発見が少ない。

新田上遺跡からは、弥生時代中期前半から後半にかけての竪穴住居跡が発見されている。

小神明倉本遺跡では中期から後期の、小神明勝沢境遺跡・小神明湯気遺跡では後期の竪穴住居が検出されている。

古墳時代ではふたたび遺跡数が増加し、前期では山王・柴遺跡や丑子遺跡、芳賀東部团地遺跡などで住居跡が、中期では丑子遺跡、新田上遺跡、東田之口遺跡、上細井北遺跡群No.2などで住居跡が見つかっている。

後期になると丑子遺跡、東田之口遺跡、引切塚遺跡、山王・柴遺跡、南橋東原遺跡などで集落が営まれていたことがわかっている。

本遺跡周辺では大規模な古墳は少なく、前方後円墳としては、大日塚古墳・丑子塚古墳・オブ塚古墳があり、その他は中小規模の円墳である。

『上毛古墳総覧』によると、南橋村に45基、芳賀村に64基、富士見村に29基の古墳があったとされるが現在は消滅してしまったものも多い。芳賀西部团地で31基、上細井北遺跡群No.1・2で3基の古墳を確認している。

赤城南麓は古代には勢多郡に属していた。勢多郡は「和名抄」によれば、深田・田邑・芳賀・桂萱・真壁・深渠・深澤・時澤・藤澤からなり、集落が広い範囲に分布していた。

奈良・平安時代になると古墳時代よりもさらに遺跡数が増加する。8世紀後半から10世紀中ごろまでの集落が

展開しており、特に9世紀の遺構が多い。天王・東組屋谷戸遺跡、上町・時沢西組屋谷戸遺跡、山王・柴遺跡や上細井五十嵐遺跡では拠点的な集落が営まれていた。

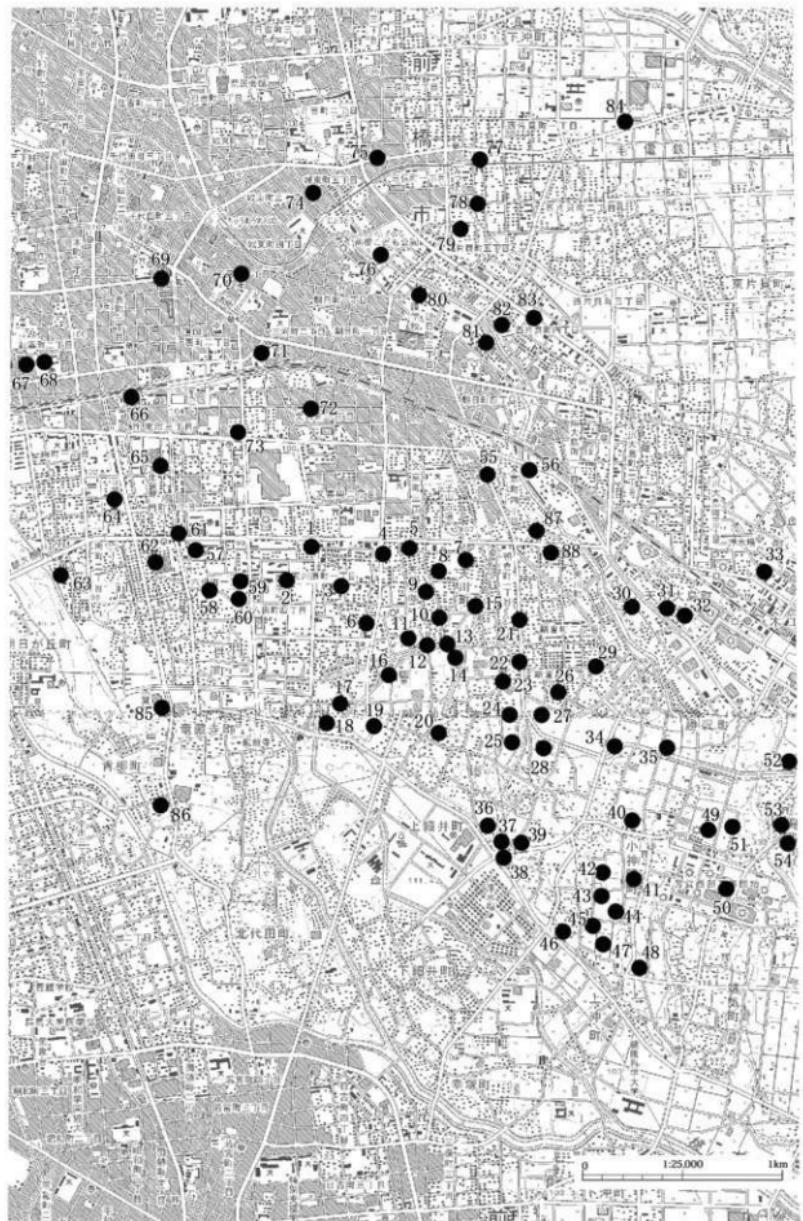
この時期の生産域の遺構として上細井五十嵐遺跡からAs-B下の水田跡が確認されている。また、丑子遺跡、上町・時沢西組屋谷戸遺跡からは、イネのプラントオバールが検出されており、この地域で稲作が行われていたことがわかる。

中・近世の遺跡は、大胡城や峯城の支城・砦・遠堀として、勝沢城、鳥取砦、時沢遠堀遺跡などがある。丑子遺跡では堀で囲まれた館跡が検出されており、東田之口遺跡や天王・東組屋谷戸遺跡および隣接する時沢東組屋谷戸遺跡では掘立柱建物跡が見つかっている。

この地域の中・近世の遺跡として注目されるのは、南北朝期（延文5年：1360年）に書き記された「神鳳抄」にある青柳御厨と細井御厨の位置であるが、現在のところ相当する遺跡は発見されていない。



第1図 上細井中西部遺跡群位置図



第2図 周辺遺跡（国土地理院2万5千分の1地形図「前橋」「渋川」使用）

第1表 周辺遺跡一覧表

凡例 集落・溝・土坑など○ 墳墓● 生産跡□ 水田・魚■ 遺物のみ△

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世
1	上綱井中西部遺跡群	○	○	○●	○	△	45	小神明の奇居						○	
2	上綱井山古墳	△	○	○●	○		46	上津上ノ山古墳			●				
3	上綱井中島遺跡	△	○●		○	○	47	上津神明宮裏遺跡			△	△			
4	時沢西浜林遺跡	△			○		48	埴生遺跡	○	●	○			○	
5	時沢森林遺跡			△			49	資本遺跡		○				○	
6	新田A遺跡	○	○	○	○	○	50	芳賀西湖和地遺跡	○●		●			○	
7	時沢宮東遺跡	△		△	○	△	51	西田遺跡	○		○●				
8	時沢西高田遺跡				○		52	芳賀北原遺跡	△		○	○			
9	時沢西高田B遺跡				○		53	鳥取の野			△			○	
10	時沢西側屋谷遺跡				○	■	54	鳥取福藏寺II遺跡	○	○	○	○	○	○□	
11	王久保遺跡				○	○	55	時沢大角谷A遺跡			△				
12	上町遺跡				○		56	時沢四ツ塚遺跡	△		△				
13	東組屋谷戸遺跡				○	○●	57	山王・柴道跡群	△	○	○●	●	●	●	●
14	天王遺跡	△		○	○	○	58	神明古墳			●				
15	時沢中屋敷遺跡			△	△		59	神明A遺跡			△				
16	王間久保遺跡	△		△			60	神明B遺跡			△				
17	孤塚古墳		●				61	引狩塚遺跡	△		○●	○			
18	八幡山の野				○		62	青柳宿上遺跡			○				
19	葉筋遺跡	△		△			63	南橋東原遺跡			○	○	○		
20	荒屋敷遺跡	△	△				64	旭久保II・III遺跡	○		○				
21	時沢吉田遺跡			△			65	旭久保B遺跡	△		○			○	
22	丑子遺跡		○	○	○	○	66	原之郷東原遺跡	○		○				
23	上綱井五十嵐遺跡	○			○■		67	九十九山古墳			●				
24	上綱井北遺跡No.2	●		○●	○		68	九十九古墳							
25	丑子山古墳		●	○			69	原之郷中子遺跡			△				
26	東田之口遺跡		○	○	○		70	原之郷腰沢遺跡	△		○			○	
27	上綱井北遺跡No.1	○	○●	○	○		71	原之郷白川遺跡			△				
28	南田之口遺跡	○		○			72	糸佐遺跡			△				
29	田之口遺跡			△	△		73	原之郷下白川遺跡			△				
30	祖之木原遺跡	△		○	○		74	小平の堀遺跡	○		○	○	○		
31	オブツ西古墳		●				75	小平金武遺跡	△						
32	オブツ塚古墳		●				76	鷲沢中郷遺跡			●				
33	芳賀北曲輪遺跡	○	●				77	時沢八万坊遺跡	△						
34	小神明富士塚遺跡	○		○	○	○	78	時沢甚太夫遺跡	△						
35	小神明富士塚下遺跡	△			○	△	79	時沢諏訪遺跡	△						
36	灰塗遺跡	△		△			80	時沢中谷遺跡	△			○			
37	南灰塗遺跡	△		○			81	時沢猿B遺跡	△		△		△		
38	南橋2号墳		●				82	時沢猿遺跡	△					○	
39	南橋1号墳		●				83	時沢庚東遺跡	△						
40	小神明の野					○	84	北所情戸遺跡	△						
41	大明神遺跡			○			85	青柳宿前日遺跡				○			
42	谷内遺跡		△		△		86	青柳寄居遺跡			○■	○			
43	時沢東堀遺跡					○	87	時沢東堀坊II遺跡			○				
44	谷端遺跡				○	○	88	時沢東堀坊遺跡						○	

第3章 調査の方針と経過

第1節 調査方針

埋蔵文化財発掘調査対象範囲とした箇所は、土地改良事業に伴う造成工事により切土が大規模に行われる部分、舗装道路として整備される部分、砂利道として整備されるが深く掘削が及ぶ部分など、埋蔵文化財の現状保存が困難な部分とした。その後、発掘調査対象範囲内で、試掘・確認調査を実施し、遺構の種別や数量、分布状況などを考慮して調査範囲の精査を行う。

当該土地改良事業では、工事施工区を施工年度によってA～D工区に区分されている。平成30年度がA工区、令和元年度（平成31年度）がB工区、令和2年度がC工区、そして令和3年度がD工区となる。これに合わせて遺跡名も工区毎に区別した。

遺構番号は、調査区毎に個別に付番することとし、1区H-1、2区H-1の様に遺構名称の前に必ず調査区名を表記することとした。

グリッド設定は、国家座標（世界測地系）X=48600、Y=-68600を基点（X0、Y0）とし、4mピッチで西から東へX1、X2、X3……、北から南へY1、Y2、Y3……、と付番した。グリッド呼称は、北西杭の名称を使用した。

発掘調査手順は、土木重機による表土掘削、人力での遺構検出作業、方眼杭等の設置、遺構掘下げ、遺構精査、遺構測量、写真撮影の順で行なった。土層断面図、遺物分布図等の図面作成にあたっては、平板・簡易造り方測量を用いた。遺構平面図、調査区全体図等の作成については、民間測量業者と業務委託を行った。

出土遺物の取り扱いについては、平面分布図を作成し、遺物台帳に各種記録を記載したのち収納した。重要と判断した遺物も同様である。なお、包含層の遺物は、グリッド単位で収納した。

第2節 調査経過

1. 上細井中西部遺跡群No.1

平成30年4月、群馬県中部農業事務所長との平成30年度埋蔵文化財発掘調査業務委託契約締結に向けた手続きに着手し、4月27日付けで契約締結となった。その後、現場事務所設置、発掘調査作業員任用、土木機械手配等の準備を進め、同年5月14日に現場での表土掘削作業を開始した。

A工区内では10か所の調査区を設定した。県道前橋赤城線以西を1～5区、以東は6～10区とした。現場発掘作業は、空梅雨で近年稀にみる酷暑だったこともあり熱中症に対する厳重警戒に努めた。A工区内での発掘調査は、10月31日をもって全て終了した。また、A工区内の発掘調査成果については、現地説明会（9月23日）を開催し、部分的ではあるが地域への還元ができた。なお、6区及び8区については、近隣の状況などを考慮し、最終的に調査不要と判断した。

その後、群馬県中部農業事務所と翌年度調査予定とするB工区内での発掘調査対象地選定に係る協議において、対象地面積の増大が見込まれることから、平成30年度に調査実施可能箇所を先行して発掘調査することになった。これを受け、11月1日から翌年2月28日までB工区内において3か所調査区を設定し、発掘調査を実施した。平成30年度発掘調査成果の整理作業については、出土遺物の洗浄作業及び注記作業、遺構ごとの仕分整理まで行った。接合・復元・実測等の整理作業は、翌年度に業務委託を行った。

A工区（平成30年度工区）

- 1 区：平成30年7月23日～平成30年10月31日（担当者：小峰・松村）
- 2 区：平成30年5月18日～平成30年10月10日（担当者：小峰・松村）
- 3 区：平成30年5月24日～平成30年10月31日（担当者：小峰・松村）
- 4 区：平成30年5月28日～平成30年9月20日（担当者：小峰・松村）
- 5 区：平成30年5月14日～平成30年6月14日（担当者：小峰・松村）
- 7 区：平成30年10月3日～平成30年10月12日（担当者：小峰・松村）
- 9 区：平成30年10月1日～平成30年10月5日（担当者：小峰・松村）
- 10区：平成30年8月20日～平成30年10月17日（担当者：小峰・松村）

B工区（平成31年度工区）

- 1 区：平成30年10月30日～平成31年1月31日（担当者：小峰・松村）
- 2 区：平成30年11月26日～平成31年1月31日（担当者：小峰・松村）
- 3 区：平成31年2月4日～平成31年2月28日（担当者：小峰・松村）

2. 上細井中西部遺跡群No.2

前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）では、平成30年度に令和元年度工区（以下「B工区」という）を対象とした試掘・確認調査を実施した。試掘・確認調査結果と土地改良事業に伴う造成工事計画を基に、上細井中西部土地改良区、群馬県中部農業事務所と市教委で、B工区の発掘調査実施スケジュールについて協議を行い、上武国道（国道17号バイパス）以南に4か所の調査区を設定した。

令和元年5月22日付けて、群馬県中部農業事務所長と埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、その後、現場事務所設置、発掘調査作業員任用、土木機械手配等の準備を進め、同年6月6日に現場での表土掘削作業を開始した。梅雨が長く続くなど天候不良や調査面積追加等により現地発掘作業に遅れが生じ、令和2年1月17日をもって現地での発掘調査は全て終了した。

B工区内の発掘調査成果については、現地説明会（12月15日）を開催し、地域への還元ができた。

発掘調査成果の整理作業については、出土遺物の洗浄作業および注記作業、遺構毎の仕分け整理を行った。接合・復元・実測等の整理作業は、翌年度に業務委託を行った。

B工区（令和元年度工区）

- 4 区：令和元年6月6日～令和元年11月11日（担当者：小峰・藤井・村越）
- 5 区：令和元年6月18日～令和2年1月17日（担当者：小峰・藤井・村越）
- 6 区：令和元年7月8日～令和元年7月10日
 令和元年8月19日～令和元年8月22日（担当者：小峰・藤井・村越）
- 7 区：令和元年8月28日～令和元年10月16日（担当者：小峰・藤井・村越）

3. 上細井中西部遺跡群No.3

市教委では、令和元年度に令和2年度工区（以下「C工区」という）を対象とした試掘・確認調査を実施した。試掘・確認調査結果と土地改良事業に伴う造成工事計画を基に、上細井中西部土地改良区、群馬県中部農業事務所、市教委の三者で、C工区の発掘調査実施スケジュールについて協議を行い、上武国道（国道17号バイパス）以北に1カ所の調査区を設定した。また、C工区西側に隣接する令和3年度工区（以下「D工区」という）

の一部（D工区1区）も合わせて発掘調査を行うこととした。

令和2年5月22日付けで、群馬県中部農業事務所長と「令和2年度埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を締結し、その後、現場事務所設置、発掘調査作業員用、土木機械手配等の準備を進め、同年6月5日に現場での表土掘削作業を開始した。現場作業は概ね予定通り進み、令和3年1月27日をもってC工区の発掘調査は全て終了した。また、発掘調査成果については、現地説明会を令和2年10月11日に開催し、地域への還元を図った。

また、C工区の遺構検出数量が当初の想定数量を下回るものであったため、D工区内で試掘・確認調査を実施し、D工区2区を先行して発掘調査することとした。調査は令和2年11月13日から開始し、令和3年2月26日をもって古代面の調査を終了したが、次年度に縄文面の調査を持ち越すことになった。

発掘調査成果の整理作業については、出土遺物の洗浄作業および一部注記作業、遺構毎の仕分け整理を行った。接合・復元・実測等の整理作業は、翌年度に業務委託を行った。

C工区（令和2年度工区）

1区：令和2年6月16日～令和3年1月27日（担当者：松村・村越）

D工区（令和3年度工区）

1区：令和2年6月5日～令和2年7月21日

令和2年12月15日～令和2年12月18日（担当者：松村・村越）

2区：令和2年11月13日～令和2年12月3日

令和2年12月25日～令和3年2月26日（担当者：松村・村越）

4. 上細井中西部遺跡群No.4

市教委では、令和2年度と令和3年4月に令和3年度工区（以下「D工区」という）を対象とした試掘・確認調査を実施した。試掘・確認調査結果と土地改良事業に伴う造成工事計画に基く、上細井中西部土地改良区、群馬県中部農業事務所、市教委の三者で、D工区の発掘調査実施スケジュールについて協議を行い、上武国道（国道17号バイパス）以北に2カ所の調査区（3・4区）を設定した。また、D工区の2区は令和2年度に古代の遺構の調査を先行して行っており、3年度は2面目の縄文時代遺構の調査を実施することとした。

令和3年6月10日付けで、群馬県中部農業事務所長と「令和3年度埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を締結し、その後、現場事務所設置、発掘調査作業員用、土木機械手配等の準備を進め、同年6月23日に現場での表土掘削作業を開始した。現場作業は概ね予定通りに進み、令和4年3月1日をもって発掘調査は全て終了し、洗浄作業、遺構ごとの仕分け整理を令和4年3月11日まで行った。出土遺物の注記・接合・復元・実測作業、遺物写真撮影等の整理作業は令和4年度に業務委託を行った。

なお、発掘調査成果については、現地説明会を10月17日に開催し、地域への還元を図った。

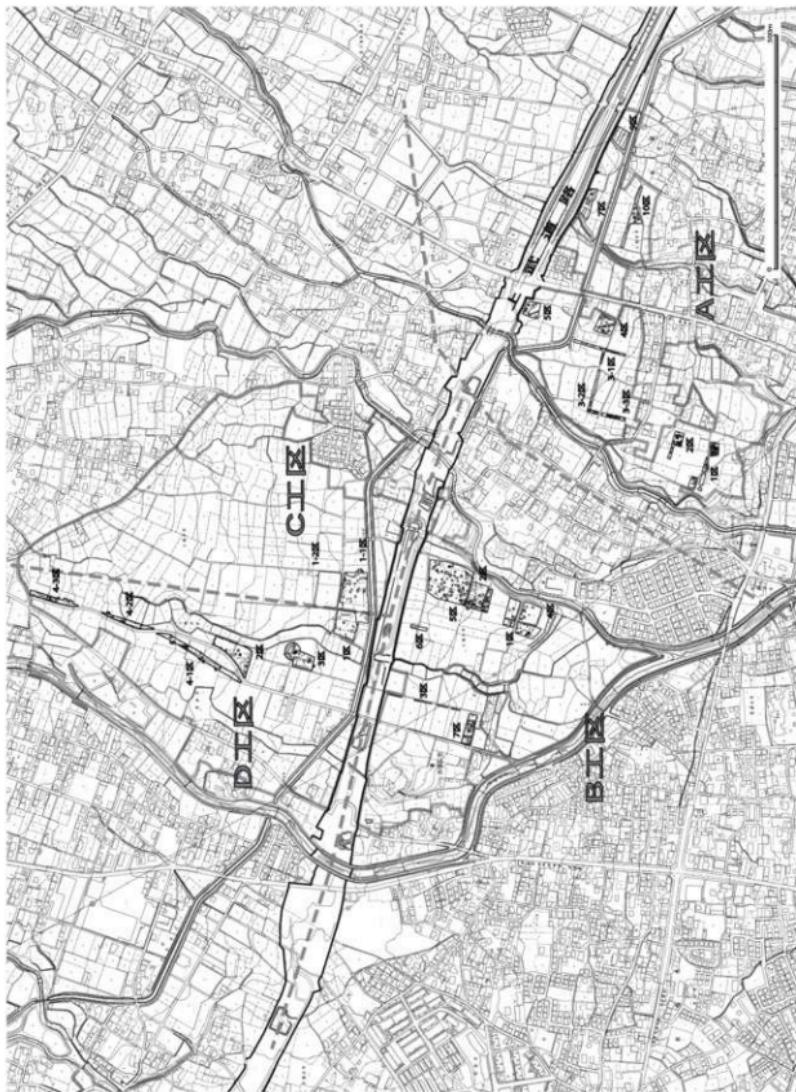
D工区（令和3年度工区）

2区：令和3年12月6日～令和3年12月28日（担当者：松村・村越）

3区：令和3年6月23日～令和3年10月11日（担当者：松村・村越）

4区：令和3年7月26日～令和3年8月5日

令和3年8月18日～令和4年3月11日（担当者：松村・村越）



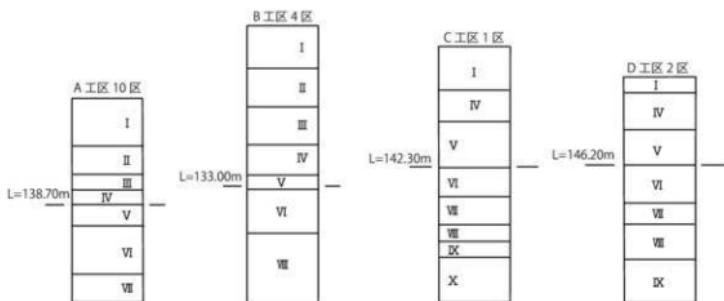
第3図 上細井中西部遺跡群グリッド設定図

第4章 基本土層

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X

基本層序

- I 現耕作土
- II As-B 混土層
- III As-C 混土層
- IV 漸移層
- V As-YP 混じりの層
- VI As-Ok1 混じりの層
- VII 白色軽石 (1~2mm) 混じりの層
- VIII As-BP 混じりの層
- IX 灰白色粘質土
- X 褐色軽石 (MP) 含む層



第4図 上細井中西部遺跡群基本層序と各調査区土層柱状図

第5章 遺構と遺物

第1節 各調査区の概要

1. A工区

A工区は、調査区域の南東、竜之口川の左岸地域に10カ所に調査区を設定した。

A工区1区では、竪穴建物跡が20軒、土坑2基、溝跡1条、集石の跡が検出されている。

A工区2区では、竪穴建物跡が18軒、土坑12基、竪穴状遺構2基、溝跡1条、不明遺構が3基検出されている。

A工区3区-1では、縄文時代から古代までの竪穴建物跡が12軒、粘土探掘坑が2基、井戸跡が1基、土坑3基、縄文時代土坑1基、ピット3基、溝跡が1条検出されている。

A工区3区-2では、竪穴建物跡が16軒、土坑3基、溝跡が3条検出されている。

A工区3区-3では、竪穴建物跡16軒、粘土探掘坑2基、土坑4基、縄文時代土坑1基、溝跡2条が検出されている。

A工区4区では、竪穴建物跡11軒、掘立柱建物跡1棟、粘土探掘坑1基、土坑4基、落ち込み1基、ピット1基、溝跡3条、道路跡2条が検出されている。

A工区5区では、竪穴建物跡9軒、土坑3基、溝跡2条、道路跡2条が検出されている。

A工区6区・9区では遺構の確認はされなかった。

A工区7区では、竪穴建物跡3軒、土坑6基、ピット3基が検出されている。

A工区10区では、竪穴建物跡8軒、土坑7基、ピット36基が検出されている。

2. B工区

B工区は赤城白川と觀音川に挟まれた間の地域の中で、上武国道よりも南側に7カ所の調査区を設定した。

B工区1区-1では、縄文時代から古代までの竪穴建物跡が8軒、竪穴状遺構が1基、土坑10基、縄文時代土坑6基、落ち込み2基、ピット2基が検出されている。B工区1区-2では、掘立柱建物跡2棟、土坑4基、縄文時代土坑1基が検出されている。

B工区2区では、弥生時代から古代までの竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡3棟、土坑9基、ピット100基が検出されている。

B工区3区では、竪穴建物跡7軒、縄文時代土坑4基、落ち込み1基、ピット1基が検出されている。

B工区4区では、縄文時代から古代までの竪穴建物跡が13軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基、土坑1基、縄文時代土坑25基が検出されている。

B工区5区では、縄文時代から古代までの竪穴建物跡が81軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、土坑18基、落ち込み2基、ピット91基、溝跡2条が検出されている。

B工区6区では、遺構の確認はされなかった。

B工区7区では、古墳が1基、竪穴建物跡9軒、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、ピット23基、溝跡2条が検出されている。

3. C工区

C工区は赤城白川と觀音川に挟まれた間の地域の中で、上武国道よりも北側に1カ所の調査区を設定した。C工区では、竪穴建物跡45軒、掘立柱建物跡1棟、土坑9基、縄文時代土坑15基、溝跡2条が検出されている。

4. D工区

D工区は赤城白川と観音川に挟まれた間の地域の中で、上武国道よりも北で、調査区全体の北東部に4カ所の調査区を設定した。その中でD工区1区は、C工区1区に接している。

D工区1区では、竪穴建物跡2軒、土坑9基、縄文時代土坑20基、ピット8基、溝跡3条が検出されている。

D工区2区では、竪穴建物跡10軒、土坑8基、縄文時代土坑6基、ピット128基が検出されている。

D工区3区では、古墳が1基、縄文時代竪穴建物跡4軒、土坑17基、縄文時代土坑16基、ピット9基が検出されている。

D工区4区では、縄文時代から古代までの竪穴建物跡が27軒、掘立柱建物跡1棟、土坑14基、縄文時代土坑6基、ピット151基、溝跡5条が検出されている。

第2節 各調査区の検出遺構

第1項 A工区

1. 1区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig. 2 PL. 2・150)

位置 X209、Y369・370 主軸方向 N—101°—E 形状・規模等 方形を呈し、中央部から西部は調査区外となる。長軸4.7m、短軸(0.9)m、壁高35cm。面積(3.7)m² 床面 平坦な貼床で硬化が顕著。周溝なし 重複なし 窓 東壁中央やや南寄りに設置。底部使用面に炭化物の分布あり。袖部分は明瞭に確認できない。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・甕・蓋、環状鉄製品・鉄滓、石器等。時期 8世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig. 2 PL. 2・150)

位置 X220・221、Y376・377 主軸方向 N—85°—E 形状・規模等 56g 南北にやや長い方形を呈す。北東隅が僅かに調査区外となる。長軸5.05m、短軸4.70m、壁高45cm。面積(21.96)m² 床面 平坦な貼床で硬化が顕著。部分的にローム面が残る。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置され、土師器壺が埋設状態にある。窓 東壁ほぼ中央に設置。底部使用面に焼土及び炭化物の分布あり。右袖部先端に礫を据える。焚口幅85cm、燃焼部幅78cm、煙道部長56cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・高台壺・甕・壺・瓶、鉄製品、敲石・石器・自然礫(磨石か)、葦網石等。時期 8世紀後半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig. 3 PL. 2)

位置 X220・221、Y378 主軸方向 N—82°—E 形状・規模等 遺構南半分は調査区がとなるが概ね方形を呈す。長軸4.40m、短軸(2.50)m、壁高35cm。面積(9.78)m² 床面 平坦でローム面が硬く締まり硬化が顕著。周溝あり 重複なし 出土遺物 土師器壺・台杯甕・甕・須恵器壺・壺・蓋・瓶・壺等。時期 8世紀後半。

H—4号竪穴建物跡 (Fig. 3 PL. 2)

位置 X221・222、Y377・378 主軸方向 N—103°—E 形状・規模等 遺構南壁部分は調査区外となるが、概ね方形を呈す。長軸3.40m、短軸(3.30)m、壁高35cm。面積(8.98)m² 床面 平坦な貼床で硬化が顕著。床面中央に径15cmの被熱痕あり、その周囲は長130cm、短80cmの浅い落ち込みとなる。周溝なし 重複なし 窓 東壁に設置。カマド南側は調査区外。底部使用面の炭化物、焼土、灰層は希薄。出土遺物 土師器

甕、須恵器坏。 時期 8世紀後半。

H—5号竪穴建物跡 (Fig. 3 PL. 2)

位置 X222・223、Y377 主軸方向 N—90°—E 形状・規模等 遺構の大部分は調査区外で南壁及び西壁の一部のみ検出。南東部がやや丸みを帯び、隅部と推定されることから概ね方形と考えられる。長軸 [3.38] m、短軸 (1.18) m、壁高40cm。 面積 (2.49) m² 床面 平坦な貼床で硬化が顕著。 周溝 なし 重複 なし
出土遺物 土師器坏・甕、須恵器甕。 時期 7世紀後半から8世紀。

H—6号竪穴建物跡 (Fig. 3 PL. 3)

位置 X232・233、Y383 主軸方向 N—96°—E 形状・規模等 遺構東部は調査区外となるが、概ね方形を呈す。長軸3.17m、短軸 (1.50) m、壁高7cm。 面積 (4.46) m² 床面 一部ローム面が表出するが、平坦な貼床で硬化が顕著。 周溝 なし 重複 なし 出土遺物 土師器甕、羽釜等。 時期 10世紀代。

H—7号竪穴建物跡 (Fig. 4 PL. 3)

位置 X232・233、Y382 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 遺構東部は調査区外。北壁部分は殆どが失われ明瞭でない。概ね方形を呈すと推察される。長軸 [3.78] m、短軸 (2.53) m、壁高10cm。 面積 (6.85) m² 床面 やや起伏を有する貼床で硬化が顕著。 周溝 なし 重複 H—8と重複。本遺構が古い。
出土遺物 土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、かわらけ等。 時期 10世紀代。

H—8号竪穴建物跡 (Fig. 4 PL. 3)

位置 X232・233、Y381・382 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 南北にやや長い長方形を呈す。長軸4.61m、短軸3.68m、壁高16cm。 面積 (11.55) m² 床面 平坦な貼床で硬化面を持つ。 周溝 なし 重複 H—7及びH—9と重複。本遺構はH—7より新しく、H—9より古い。 窯 東壁の南寄りに設置。底部の残存は良好で炭化物、灰屑を確認。カマド構築にあたっては、全体に礫を用いている。 貯藏穴 南東隅に設置。
出土遺物 土師器坏・甕・高台坏、須恵器坏・酸化焰焼成坏、羽釜、陶器甕、鉄釘等。 時期 10世紀後半。

H—9号竪穴建物跡 (Fig. 4 PL. 3・150)

位置 231・232、Y381・382 主軸方向 N—116°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸4.07m、短軸3.18m、壁高25cm。 面積 (12.76) m² 床面 平坦で硬化面を持つ貼床。 周溝 なし 重複 H—8と重複、本遺構が新しい。 窯 南東隅に設置。底部使用面に焼土が薄く残る。燃焼部幅95cm、煙道部長52cm。 貯藏穴 遺構北東部に設置、落ち込み状を呈す。 出土遺物 土師器坏・台付甕・甕、須恵器坏・蓋・甕、羽釜、かわらけ、刀子等。 時期 10世紀代。

H—10号竪穴建物跡 (Fig. 5 PL. 3・150)

位置 X231・232、Y380・381 主軸方向 N—125°—E 形状・規模等 遺構北壁部分は調査区外であるが、概ね方形を呈す。長軸 [4.88] m、短軸 (3.82) m、壁高35cm。 面積 (17.32) m² 床面 やや起伏を持ち、焼土の痕跡を多数有す。床面全体的に炭痕が散り特に壁際では塊を成す。硬化が顕著な貼床。焼失住居の可能性がある。 周溝 なし 重複 H—11と重複、本遺構が新しい。 窯 東壁中央やや南寄りに設置。底部使用面に炭層が分布。カマド前の礫は構築材が崩落したものと推察される。燃焼部幅70cm、煙道部長52cm。 出土遺物 土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、羽釜・土釜、灰釉陶器坏・綠釉陶器、近世陶磁器（波佐見）、

埴輪、鉄滓 時期 10世紀後半～11世紀前半。

H—11号竪穴建物跡 (Fig. 5 PL. 3・150)

位置 X230・231、Y380・381 主軸方向 N—90°—E 形状・規模等 遺構北壁部分は調査区外であるが、概ね方形を呈す。長軸4.10m、短軸(3.72)m、壁高50cm。面積(14.87)m² 床面 ローム面主体。硬化傾向を有す。周溝なし 重複 H—10と重複、本遺構が古い。竈 東壁中央やや南寄りに設置。カマド上面はH—10により壊されるが、底部使用面は残存し炭層が認められる。燃焼部幅50cm。貯蔵穴 北東部に設置。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・高台環・蓋・甕、土釜、近世陶器、繩文土器。時期 8世紀前半。

H—12号竪穴建物跡 (Fig. 6 PL. 3・150)

位置 X230・231、Y382・383 主軸方向 N—111°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸5.77m、短軸[4.56]m、壁高15cm。面積(25.6)m² 床面 耕作痕による擾乱が多く明瞭ではないが、擾乱以外は硬化が認められる。周溝 北辺及び東辺で確認。重複 H—13と重複する、本遺構が古い。竈 東壁の南寄りに設置されたと推察される。遺構自体の検出深度が浅く擾乱の影響を受けており、カマドの残存状況は不良だが、底部に焼土や炭が集中する。貯蔵穴なし 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・蓋・甕・高坏・羽釜・土釜、近世陶磁器、鉄釘、刀子、石器等。時期 11世紀代。

H—13号竪穴建物跡 (Fig. 6 PL. 3・150)

位置 X230・231、Y382・383 主軸方向 N—87°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸[5.14]m、短軸[4.62]m、壁高40cm。面積(22.54)m² 床面 耕作痕による擾乱の影響が大きいが、硬化傾向が認められるのはローム面である。周溝 北辺、西辺、東及び南辺の一部で確認。重複 H—12と重複する、本遺構が古い。竈 東壁中央やや南寄りに設置。上部は重複するH—12により壊されるが、使用底面には焼土や炭が分布する。焚口幅[71]cm、燃焼部幅59cm、煙道部長25cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器環・台付甕・甕、須恵器環・高台環・甕、土釜、灰釉陶器、近世陶磁器、鉄製品・塊形滓等。時期 8世紀前半。

H—14号竪穴建物跡 (Fig. 7 PL. 4)

位置 X229・230、Y383・384 主軸方向 N—84°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈し、南西隅は調査区外となる。また、北東隅は耕作痕による擾乱で壊される。長軸[4.22]m、短軸[3.49]m、壁高25cm。面積(14.50)m² 床面 全体的に小突起あり。ローム面で硬化が顕著。周溝なし 重複なし 竈 東壁に2か所設置。中央やや南寄りが1号カマド、中央やや北寄りが2号カマドとした。1号カマドは使用面底部に炭層が確認でき良好に残存するが、2号カマドは耕作痕により壊され右袖部が残る程度。使用状況から1号が古く、2号が新しい。1号カマド、焚口幅、不明、燃焼部幅68cm、煙道部長30cm。2号カマド、焚口幅[30]cm、燃焼部幅56cm、煙道部長24cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器環・台付甕・甕、須恵器環・高台環・甕、灰釉陶器等。時期 9世紀後半。

H—15号竪穴建物跡 (Fig. 7 PL. 4・150)

位置 X227・228、Y380・381 主軸方向 N—106°—E 形状・規模等 概ね正方形を呈すが、北壁は調査区外となる。長軸(4.32)m、短軸(4.02)m、壁高25cm。面積(16.74)m² 床面 平坦な貼床で硬化が顕著。貼床厚は15cmを測る。周溝 四辺に全周する。重複 H—16、D—2と重複する。H—16が最も古く、

次いで本遺構、D-2が最も新しい。竈 東壁中央やや南寄りに設置。右袖部先端に礫が据えられる。燃焼部幅53cm。貯蔵穴なし 出土遺物 土師器環・台付甕・甕、須恵器酸化焰焼成坏・甕、土釜、刀子、石器等。時期 8世紀後半。

H-16号竪穴建物跡 (Fig. 7 PL. 4)

位置 X226・227、Y380・381 主軸方向 N-86°-E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸3.53m、短軸2.84m、壁高35cm。面積 (7.35) m² 床面 一部ローム面が露出するが硬化は顕著。周溝なし 重複 H-15と重複する、本遺構が古い。竈 東壁中央やや南寄りに設置。底部の残存状態は良好で炭層が認められる。支脚となる細長い礫が中央よりやや左側に刺さった状態で検出。燃焼部幅86cm、煙道部長47cm。貯蔵穴なし 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・蓋、土釜、繩文土器等。時期 不明。

H-17号竪穴建物跡 (Fig. 8 PL. 4)

位置 X229・230、Y381・382 主軸方向 N-98°-E 形状・規模等 耕作による擾乱や他遺構との重複により、長方形を基調とするものと考えられる。長軸 (3.50) m、短軸 [2.82] m、壁高18cm。面積 (10.05)m² 床面 貼床で硬化が顕著であるが、一部ローム面が露出。周溝なし 重複 H-18と重複する、本遺構が古い。竈 H-18との重複により検出には至っていないが、H-18北壁際で焼土及び炭の分布が確認できることから、これをカマドの痕跡と考える。貯蔵穴なし 出土遺物 土師器環・須恵器環・高台环・酸化焰焼成高台环・羽釜・土釜、灰釉陶器、埴輪、石鎌、砥石等。時期 9世紀～10世紀。

H-18号竪穴建物跡 (Fig. 8 PL. 5・150)

位置 X228～230、Y381～383 主軸方向 N-97°-E 形状・規模等 耕作による擾乱や他遺構との重複により、方形を基調とするものと考えられる。長軸4.93m、短軸 (4.50) m、壁高18cm。面積 (15.8) m² 床面 硬化が見られ貼床と考えられる。一部ローム面が露出。周溝なし 重複 H-17、H-19と重複する。H-17が最も古く、次いで本遺構、H-19が最も新しい。竈 東壁中央やや南寄りに設置。底面には焼土及び炭が分布する。カマド付近から細長い礫、円筒埴輪片が出土。燃焼部幅85cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器環・甕・須恵器甕・壺・环・酸化焰焼成坏・高台环・蓋、土釜、灰釉陶器、円筒埴輪片等。時期 11世紀代。

H-19号竪穴建物跡 (Fig. 8 PL. 5)

位置 X220・221、Y376・377 主軸方向 N-101°-E 形状・規模等 西側は擾乱を受けているが、概ね方形を呈するものと思われる。長軸3.98m、短軸 (3.62) m、壁高25cm。面積 (10.94) m² 床面 硬く締まるが擾乱の影響を受けやや起伏を伴う。周溝なし 重複 H-18と重複する、本遺構が新しい。竈 東壁中央やや南寄りに設置。使用面底部に灰溜まりと焼土を確認。右袖部に残る灰白色粘土がカマド構築材と考えられる。燃焼部幅65cm、煙道部長54cm。貯蔵穴 北東隅に設置。出土遺物 土師器環・内面黒色処理坏・甕・壺・羽釜・土釜、埴輪等。時期 11世紀以降の所産と考えられる。

H-20号竪穴建物跡 (Fig. 9)

位置 X226・227、Y381～383 主軸方向 N-97°-E 形状・規模等 南北方向の長方形を呈す。長軸5.23m、短軸3.37m、壁高25cm。面積 (16.45) m² 床面 硬化面が確認でき貼床と考えられる。周溝なし

し 重複 なし 窟 捣乱により壊されたと推察される。貯蔵穴 南東隅に設置。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・酸化焰焼成环、羽釜、灰釉陶器、砥石、刀子・鉄製品等。 時期 8世紀後半。

(2) その他の遺構

H—1号溝跡 (Fig.10 PL.150)

位置 X211・212、Y370～372 主軸方向 N—17°—W 形状・規模等 南側は調査区外となっている。溝の南部は、弧状に形成された1号集石に沿っており、古墳の周濠であった可能性がある。長さ(10.50)m、上幅3.75m、下幅1.85m、深さ0.46m。 断面形 底面から鉢状に広がり立ち上がるU字形。 重複 なし 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・蓋・壺、石器、縄文土器、弥生土器、現代陶器等。 時期 8世紀後半。

1号集石遺構 (Fig.10 PL. 5)

位置 X226～227、Y381～383 形状・規模等 10cm程の円礫が集中的に分布する。西側は弧状に集中し、東側は直線状に集中する。長さ11.0m、幅1.8m。本集石は、埴丘の葺石の基礎であった可能性がある。 重複 なし 出土遺物 土師器甕、須恵器高环・甕、土釜、軟質陶器、羽口、鉄釘・鉄滓、石器多量、縄文土器等。 時期 時期不明。

(3) 土坑・ピット (Fig.9)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

2. 2区

(1) 穫穴建物跡

H—1号住居跡 (Fig.12 PL. 7・150)

位置 X224・225、Y357・358 主軸方向 N—67°—E 形状・規模等 長方形を呈し、遺構北西部は調査区外となる。長軸(3.70)m、短軸2.73m、壁高25cm。 面積 (7.0)m² 床面 全体的に起伏があり部分的にローマ面となる。明確な貼床は認められずカマド周辺のみ硬化面が確認できる。 周溝 なし 重複 D—8と重複する、本遺構が古い。 窟 東壁中央やや南寄りに設置。現地表面から遺構確認面まで浅いことから、削平された可能性が高い。燃焼部幅70cm、煙道部長30cm。 貯蔵穴 北東部及び南西部に検出されたが、南西部のものは床下土坑の可能性もある。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・削り出し高台環、縄文土器等。 時期 8世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.12 PL. 7・150)

位置 X227・228、Y358・359 主軸方向 N—100°—E 形状・規模等 南壁は調査区外であるが、概ね方形を呈すものと考えられる。長軸3.82m、短軸(3.21)m、壁高20cm。 面積 (10.93)m² 床面 硬化が顕著で貼床が確認でき、部分的にローマ面となる。 周溝 なし 重複 SX—1、D—4、D—7と重複する。新旧関係では、本遺構に対してSX—1は先行し、D—4及びD—7は新しい。 窟 東壁ほぼ中央に設置。残存状況は良好で、使用面底部に焼土、炭の分布が広がる。焚口幅65cm、燃焼部幅70cm。 出土遺物 土師器環・台付甕・甕、須恵器環・蓋・甕、羽釜、石器 時期 7世紀後半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.13 PL. 7)

位置 X229、Y359・360 主軸方向 N—85°—E 形状・規模等 遺構南側は調査区外であるが、方形を基調とするものと思われる。長軸3.18m、短軸(2.34)m、壁高25cm。面積 (6.02)m² 床面 貼床は明瞭でなく、部分的にローム面となる。周溝 東辺、西辺、北辺で検出。重複なし 窟 遺構南東部に炭が一部硬化して検出されていることから、カマドは東壁の調査区外部分に設置されていたものと推察される。出土遺物 須恵器壺・甕等。時期 不明。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.13 PL. 8・150・151)

位置 X230・231、Y359・360 主軸方向 N—104°—E 形状・規模等 遺構北側は調査区外であるが、南北方向にやや長い方形を呈するものと思われる。長軸(3.81)m、短軸3.52m、壁高40cm。面積 (13.2)m² 床面 カマド周辺及び遺構南側は固く締まる。周溝なし 重複なし 窟 東壁やや南寄りに設置。両袖部が残り、出土遺物も豊富で良好な残存状況である。両袖先端部に縦長の石材を据える。支脚は使用面底部に刺さった状態で出土。焼土はカマド壁面に残存。焚口幅54cm、燃焼部幅48cm、煙道部長60cm。貯蔵穴 北西部に設置。出土遺物 土師器壺・台付甕・甕、須恵器壺・高台壺・削りだし高台壺・蓋・甕・壺、繩文土器、石器等。時期 7世紀末から8世紀初頭。

H—5号竪穴建物跡 (Fig.14 PL. 9・151)

位置 X232・233、Y359・361 主軸方向 N—71°—E 形状・規模等 北東隅が調査区外であるが、南北にやや長い方形を呈す。長軸5.14m、短軸3.41m、壁高50cm。面積 (15.4)m² 床面 ローム面が固く締まる。周溝なし 重複 D—5、D—6と重複する。新旧関係では、本遺構が古い。また、SX—2とした遺構については、粘土採掘のためのもので本遺構に伴う可能性も考えられる。窓 東壁やや南寄りに設置。残存状況は良好で焚口から煙道端部まで深く掘り込まれる。袖部の先端には礫が据えられる。カマド内壁には焼土、底部に灰と焼土が散在する。焚口幅47cm、燃焼部幅53cm、煙道部長100cm。貯蔵穴 南西部に設置。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・甕・短頭壺、石器(磨製石斧)等。時期 8世紀後半。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.15 PL. 9・151)

位置 X232・233、Y361・362 主軸方向 N—118°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。遺構内にはピット状の擾乱が多く、東壁はほぼ壊されている。長軸3.70m、短軸[2.94]m、壁高35cm。面積 [11.17]m² 床面 摆乱の影響を受けやや起伏がある。ローム面であるが固く締まる。周溝なし 重複 H—7と重複する、本遺構が古い。窓 南東隅に設置される。遺構上部は擾乱により壊されるが、使用面底部は良好に残存し炭が分布する。カマド全体に礫を用いて構築され、天井部にも礫が残る。また、袖部の先端にも礫が据えられる。焚口幅33cm、燃焼部幅35cm、煙道部長30cm。貯蔵穴 南西隅に設置。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・酸化焰焼成壺・酸化焰焼成高台壺・蓋・甕・壺、羽釜、灰釉陶器、砥石等。時期 8世紀後半から9世紀後半。

H—7号竪穴建物跡 (Fig.15 PL. 9)

位置 X231・232、Y361・362 主軸方向 N—82°—E 形状・規模等 遺構西側が調査区外で、他遺構との重複もあり明確な形状は不明。方形を基調とするものと推察される。長軸3.50m、短軸(1.73)m、壁高25cm。面積 (4.31)m² 床面 硬化が確認され、部分的にローム面となる。周溝なし 重複 H—6と重複する、本遺構が新しい。窓 東壁の南寄りに設置。上部は擾乱により壊され、底部に焼土、灰を検出。焚口幅73cm、

燃焼部幅53cm、煙道部長30cm。 貯藏穴 北東隅に設置。 出土遺物 土師器壺・壺、須恵器環・高台環・酸化焰焼成高台環・壺、土釜、繩文土器、磁器（波佐見）等。 時期 10世紀後半。

H—8号竪穴建物跡 (Fig.15 PL. 9)

位置 X231・232、Y362・363 主軸方向 N—95°—E 形状・規模等 遺構西側が調査区外で、他遺構との重複もあり明確な形状は不明。方形を基調とするものと推察される。長軸 [3.50] m、短軸 (1.04) m、壁高45cm。面積 (4.1) m² 床面 硬化が確認される。部分的にローム面となる。周溝なし 重複 D—9と重複する、本遺構が古い。竈 東壁中央やや南寄りに設置。カマド直上でD—9と重複するため上部は壊される。底部には焼土、炭、灰が分布する。焚口幅70cm、燃焼部幅60cm。 貯藏穴 北東隅に設置。出土遺物 土師器環・壺、須恵器環・酸化焰焼成環・壺・壺、繩文土器等。 時期 8世紀後半。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.16 PL.10・151)

位置 X233・234、Y364・365 主軸方向 N—100°—E 形状・規模等 遺構南側が調査区外で、明確な形状は不明であるが概ね方形を呈すと推察される。長軸4.53m、短軸 (2.10) m、壁高55cm。面積 (8.3) m² 床面 硬化面が確認でき、一部貼床の可能性がある。周溝なし 重複 T—2、D—10～13と重複するが新旧関係については不明。竈 不明 貯藏穴なし 出土遺物 土師器環・台付壺・壺、須恵器環・酸化焰焼成環・高台環・盤・蓋・壺、羽釜、灰釉陶器皿等。 時期 11世紀前半。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.16 PL.10・151・152)

位置 X235・236、Y361・363 主軸方向 N—90°—E 形状・規模等 長方形を呈し、東壁は耕作痕により壊されている。長軸5.04m、短軸 (2.68) m、壁高20cm。面積 (12.61) m² 床面 硬化が確認でき、部分的に貼床を構築した痕跡が窺える。周溝なし 重複 H—11と重複する、本遺構が新しい。竈 カマド自体の検出には至っていないが、南東隅に焼土、炭の分布が存在することから、この位置にカマドが存在していたものと推察される。出土遺物 南東隅に土器片の集中部あり。土師器環・壺、須恵器環・酸化焰焼成環・高台環・酸化焰焼成高台環・壺・壺、羽釜、灰釉陶器、石器、塊型鉄滓等。 時期 10世紀後半から11世紀初頭以降の所産と考えられる。

H—11号竪穴建物跡 (Fig.16 PL.10・151)

位置 X235・236、Y361・362 主軸方向 N—111°—E 形状・規模等 東西にやや長い方形を呈すものと考えられる。H—10との重複により西壁及び南壁の一部は壊されている。長軸 (3.62) m、短軸3.02m、壁高15cm。面積 (5.91) m² 床面 硬化が確認でき、部分的に貼床を構築した痕跡が窺える。周溝なし 重複 H—10と重複する、本遺構が古い。竈 南東隅に設置。カマド中央部を横断するように耕作痕が入り燃焼部が壊される。焚口及び燃焼部底部に焼土、炭、灰が分布する。焚口幅 (70) cm、燃焼部幅57cm、煙道部長33cm。貯藏穴なし 出土遺物 南東隅に土器片の集中部あり。須恵器環・酸化焰焼成環・壺・壺、羽釜・土釜、灰釉陶器、刀子等。 時期 10世紀後半から11世紀初頭。

H—12号竪穴建物跡 (Fig.17 PL.10・151)

位置 X236・237、Y363・364 主軸方向 N—97°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。遺構南西部は攪乱により壊される。長軸4.61m、短軸 [4.41] m、壁高20cm。面積 (19.08) m² 床面 硬化が確認でき、部分的に貼床を構築した痕跡が窺える。周溝なし 重複なし 竈 東壁南寄りに設置。カマド手

前に灰搔き穴を有す。カマド周辺に礫が多く出土。使用面底部の焼土は希薄である。燃焼部幅57cm、煙道部長105cm。**貯藏穴** 南東隅に設置。**出土遺物** 土師器甕、須恵器甕・酸化焰焼成坏・甕、羽釜・土釜、石器、鉄製品、鉄滓等。**時期** 11世紀前半。

H—13号竪穴建物跡 (Fig.18 PL.10・152)

位置 X231～233、Y364 **主軸方向** N—82°—E **形状・規模等** 遺構南側は調査区外であるが、概ね方形を呈すと考えられる。長軸5.52m、短軸(2.98)m、壁高30cm。**面積** (13.65)m² **床面** カマド周辺で硬化面が確認できるが、攪乱や粘土探掘抗により明確でない。中央に焼土および灰の集中あり。**周溝** なし **重複なし** **竈** 東壁に設置。左右にロームを主体とする袖部を有す。焚口幅57cm、燃焼部幅53cm、煙道部長36cm。**出土遺物** 土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕、羽釜、灰釉陶器、縄文土器、砥石・石器、鉄製品、鉄滓、埴輪片、種子等。**時期** 8世紀前半。

H—14号竪穴建物跡 (Fig.18 PL.11・151)

位置 X236・237、Y365 **主軸方向** N—96°—E **形状・規模等** 遺構南側は調査区外であるが、概ね方形を呈すと考えられる。西壁は攪乱により壊される。長軸[5.10]m、短軸3.30m、壁高50cm。**面積** (7.54)m² **床面** ローム面で硬化が確認できる。周溝東辺、西辺、北辺で検出。**重複なし** **竈** 不明（調査区外と考えられる。）**貯藏穴** なし **出土遺物** 土師器坏・内面黒色処理坏・台付甕・甕、須恵器坏・酸化焰焼成坏・高台坏・甕・壺、灰釉陶器瓶、羽釜、陶磁器、縄文土器、砥石・石器、鉄製品、羽口等。**時期** 11世紀前半。

H—15号竪穴建物跡 (Fig.19 PL.11)

位置 X236・237、Y362・363 **主軸方向** N—106°—E **形状・規模等** 北東隅が攪乱により壊されるが、南北にやや長い方形を呈す。長軸4.05m、短軸3.66m、壁高20cm。**面積** (14.49)m² **床面** 貼床は明瞭でなく全体的に起伏がある。部分的にローム面で、カマド周辺に一部硬化面が残る。**周溝** なし **重複** H—16と重複する、本遺構が新しい。**竈** 東壁南寄りに設置。上部は攪乱により壊されるが、使用面底部には焼土、灰が残存する。焚口幅73cm、燃焼部幅53cm、煙道部長35cm。**貯藏穴** 北西隅及び南西隅に設置。**出土遺物** 須恵器坏・土釜、砥石等。**時期** 不明。

H—16号竪穴建物跡 (Fig.19 PL.11)

位置 X236・237、Y361・362 **主軸方向** N—101°—E **形状・規模等** 東壁が攪乱により壊される。やや不整形であるが概ね方形を呈するものと思われる。長軸3.80m、短軸(3.52)m、壁高30cm。**面積** (12.18)m² **床面** ローム面となる。部分的に耕作痕等で壊される。中央部がやや深く皿状を呈す。**周溝** なし **重複** H—15と重複する、本遺構が古い。**竈** 攪乱により壊されたと考えられる。**出土遺物** 土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・酸化焰焼成高台坏・捏鉢・甕、羽釜、灰釉陶器、縄文土器等。**時期** 不明。**特記** セクションベルト上に炭層を伴う中世火葬の痕跡が確認された。

H—17号竪穴建物跡 (Fig.20 PL.11・152)

位置 X238・239、Y362・363 **主軸方向** N—55°—E **形状・規模等** 南北にやや長い方形を呈す。北壁の一部は、地山崩落と思われる崩れが生じている。長軸4.11m、短軸3.13m、壁高50cm。**面積** 12.48m² **床面** 全体的に硬化が顕著で貼床と考えられる。**周溝** なし **重複なし** **竈** 東壁南寄りに設置。残存状況は良好である。住居跡全体が深く燃焼部と煙道部は段差を持つ。袖部は明瞭でないが、遺物（土師器甕）が据えられて

いることから袖が存在していた可能性が考えられる。燃焼部幅59cm、煙道部長35cm。**出土遺物** 土師器環・甕、須恵器環・酸化焰焼成环・盤・甕、縄文土器、陶器、石器等。**時期** 7世紀後半。

H—18号竪穴建物跡 (Fig.20)

位置 X232~234、Y362~364 **主軸方向** N—88°—E **形状・規模等** 土坑、粘土探掘抗等の他遺構と重複し、明確な形態は不明。長軸5.05m、短軸5.02m、壁高45cm。**面積** (21.01) m² **床面** 全体的に起伏があり硬化する。**周溝**なし **重複** 本遺構西側及び北側の粘土探掘抗、D—14と重複する。切り合いが激しく新旧関係は不明。**竪** 東壁南寄りに設置。燃焼部幅65cm、煙道部長35cm。**出土遺物** 土師器甕、須恵器酸化焰焼成环・土釜等。**時期** 10世紀代。

(2) その他の遺構

W—1号溝跡 (Fig.21 PL.12)

位置 X225・226、Y357~359 **主軸方向** N—4°—E **形状・規模等** 南側は調査区外となっている。長さ(6.20)m、上幅2.88m、下幅1.59m、深さ0.3m。**断面形** 底面から緩やかに立ち上がるU字形。**重複**なし **出土遺物** 土師器環・内面黒色処理环・甕、須恵器甕・酸化焰焼成环・高台环・酸化焰焼成高台环・羽釜、灰釉陶器・軟質陶器、羽口・石器、砥石、古錢等。**時期** 不明。

T—1号竪穴状遺構 (Fig.21 PL.12)

位置 X234、Y360・361 **主軸方向** N—4°—E **形状・規模等** 長方形を呈する。長軸3.60m、短軸2.64m、壁高45cm。**面積** 8.33m² **床面** ローム面で硬化が見られ、炭が分布する。**出土遺物** 土師器環・甕、須恵器環・甕・酸化焰焼成环・高台环・酸化焰焼成高台环・蓋・瓶、羽釜・土釜、縄文土器等。**時期** 不明。

T—2号竪穴状遺構 (Fig.22)

位置 X233・234、Y363・364 **主軸方向** N—90°—W **形状・規模等** 不整形。長軸3.98m、短軸3.04m、壁高45cm。**面積** (9.54)m² **床面** 全体的に起伏があり、硬化している。**重複** D—10・12、H—9と重複。D—10は本遺構より新しいが、D—11・H—9とは新旧関係が不明。**出土遺物** 土師器環・甕・須恵器環・高台环・内面黒色処理高台环・盤・甕・長頸瓶・壺・土釜、灰釉陶器、縄文土器等。**時期** 不明。

1号粘土探掘坑 (Fig.22 PL.12・152)

位置 X231~234、Y362~364 **主軸方向** N—45°—E **形状・規模等** 土坑状の遺構が重複した状態で、不整形。壁高135cm。**床面** 土坑状の遺構が連続し、起伏が激しい。**周溝**なし **重複** H—13、SX—3、D—14に切られる。H—18との切り合いは不明。**出土遺物** 土師器環・甕・須恵器環・酸化焰焼成环・高台环・酸化焰焼成高台环・盤・蓋・甕・壺・短頸壺・羽釜・土釜、灰釉陶器、縄文土器、鉄製品等。**時期** 10世紀から11世紀と考えられる。土坑状の遺構は同時期に形成されたものではなく、複数回にわたって掘削されたものである可能性がある。

(3) 土坑・ピット (Fig.23 PL.152)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

3. 3-1区

(1) 穹穴建物跡

H-1号穹穴建物跡 (Fig.25 PL.16・152・153)

位置 X284・285、Y315・316 主軸方向 N-83°-E 形状・規模等 方形を呈す。長軸4.34m、短軸(2.84)m、壁高80cm。面積 (7.95) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。周溝なし 重複なし 窟 東壁やや南寄りに設置。遺物（土師器甕）が袖部に据えられており、天井部にも使用されていた。煙道部先端にも煙抜き穴用に据えられていた。焚口幅60cm。貯蔵窓 南東隅に設置。出土遺物 土師器環・甕・高环・台付甕・小型甕・須恵器環・酸化焰焼成窓・高台窓・盤・蓋・甕・長頸瓶、縄文土器多量、陶磁器、土製円盤、円筒埴輪、布目瓦、石器、鉄製品、鉄滓等。時期 7世紀後半。

H-2号穹穴建物跡 (Fig.25 PL.16・153)

位置 X284・285、Y317・318 主軸方向 N-101°-E 形状・規模等 方形を呈すと考えられるが、東側は調査区外。長軸3.85m、短軸(3.24)m、壁高30cm。面積 (11.8) m² 床面 堅く締まるが、明瞭な床面は検出できず、凹凸がある。周溝なし 重複なし 窺 東壁に設置されたと考えられるが、調査区外。出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・酸化焰焼成高台窓・蓋・甕・壺・短頭壺、縄文土器多量、石器、紡錘車、鉄製品。時期 9世紀後半。

H-3・4は1号粘土採掘坑に変更したため、欠番。

H-5号穹穴建物跡 (Fig.25)

位置 X283、Y321 主軸方向 N-98°-E 形状・規模等 カマドの先端部のみ検出。形状は不明。長軸(0.52)m、短軸0.38m。面積 (0.15) m² 窺 東壁に設置。煙道部 (52.0) cm。貯蔵窓 南東隅に設置。出土遺物 土師器甕。時期 不明。

H-6号穹穴建物跡 (Fig.26 PL.17)

位置 X283・284、Y322～324 主軸方向 N-77°-E 形状・規模等 方形と推測されるが、東側半分は調査区外。長軸4.08m、短軸(2.96)m、壁高10cm。面積 (8.75) m² 床面 地山の褐色土を締め固めた様で、ほぼ平坦である。周溝なし 重複なし 窺 東壁に設置されたと考えられるが、調査区外。出土遺物 土師器環・台付甕・甕・須恵器環・甕・縄文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H-7号穹穴建物跡 (Fig.26 PL.17)

位置 X280・281、Y322・323 主軸方向 N-103°-E 形状・規模等 方形を呈すと考えられるが、南側半分は調査区外。長軸3.55m、短軸(2.04)m、壁高47cm。面積 (5.82) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。周溝なし 重複 D-2・3と重複、本遺構が古い。窺 東壁中央付近に設置されたと考えられる。出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・酸化焰焼成窓・蓋・甕・壺・壺・縄文土器 時期 8世紀代。

H-8号穹穴建物跡 (Fig.26 PL.17)

位置 X279～281、Y322 主軸方向 N-99°-E 形状・規模等 方形を呈すと推定されるが、北側半分は調査区外。長軸5.26m、短軸(3.45)m、壁高26cm。面積 (14.79) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。周溝なし 重複 H-14、D-2、P-3と重複、H-14より古く、D-2、P-3より新しい。窺 東壁

中央付近に設置。竈右側には構築材と思われる石材が残存していた。 **貯蔵穴** 南東隅に設置。 **出土遺物** 土師器壺・台付甕・甕、須恵器壺・酸化焰焼成壺・高台壺・壺蓋・甕・壺、縄文土器や多量、石器等。 **時期** 9世紀代。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.27 PL.17)

位置 X277・278、Y321・322 **主軸方向** N—94°—E **形状・規模等** やや南北に長い長方形を呈す。長軸2.86m、短軸2.15m、壁高30cm。 **面積** 6.15m² **床面** 平坦で堅く綿まる。 **周溝** なし **重複** なし **竈** 東壁やや南寄りに設置。焚口幅50cm焚口には多く灰が堆積していた。 **出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器甕・壺、縄文土器、石器、鉄製品等。 **時期** 不明。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.28 PL.17)

位置 X288、Y308 **主軸方向** N—92°—E **形状・規模等** 不明、東側から南側の大部分が調査区外。長軸3.28m、短軸(1.32)m、壁高80cm。 **面積** (3.29)m² **床面** 明黄褐色土の地山が締め固められている。やや凹凸がある。 **周溝** なし **重複** なし **竈** 調査区外のため不明。 **出土遺物** 縄文土器、石器。 **時期** 不明。

H—11号竪穴建物跡 (Fig.28 PL.17)

位置 X280・281、Y333・334 **主軸方向** N—88°—E **形状・規模等** 不明、東側半分以上が調査区外。長軸(4.98)m、短軸(1.44)m、壁高50cm。 **面積** (5.17)m² **床面** 明黄褐色土の地山床、平坦。 **周溝** 北西隅に検出。 **重複** なし **竈** 調査区外。 **出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器壺・壺蓋・壺蓋・甕・壺、灰釉陶器、縄文土器等。 **時期** 8世紀代と考えられる。

H—12号竪穴建物跡 (Fig.28 PL.17・18・153)

位置 X282・283、Y324・325 **主軸方向** N—90°—E **形状・規模等** 南北に長い方形を呈す。長軸4.41m、短軸[2.33]m、壁高40cm。 **面積** (9.78)m² **床面** 2号粘土探掘坑の覆土の上に床面を構築している。平坦で堅緻。 **周溝** なし **重複** 2号粘土探掘坑とW—1と重複。2号粘土探掘坑より新しくW—1より古い。 **竈** 東壁に設置されていたと推定される。 **出土遺物** 土師器壺・鉢・甕、須恵器平底壺・高台壺・壺蓋・酸化焰焼成壺蓋・甕、磁石・石器、縄文土器等。 **時期** 9世紀後半と考えられる。

H—13は2号粘土探掘坑に変更したため欠番。

H—14号竪穴建物跡 (Fig.29 PL.18・153)

位置 X279、Y321・322 **主軸方向** N—100°—E **形状・規模等** 南北に長い方形と推定される。長軸(3.44)m、短軸3.18m、壁高35cm。 **面積** (9.71)m² **床面** 全体的に堅く綿まり、平坦。 **周溝** なし **重複** H—8と重複、本遺構が新しい。 **竈** 調査区外、北壁に設置された可能性がある。 **出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器壺・壺蓋・甕・壺、縄文土器、石器、石製品等。 **時期** 8世紀後半と考えられる。

J—1号竪穴建物跡 (Fig.30 PL.18・154)

位置 X285・286、Y311・312 主軸方向 N—21°—E 形状・規模等 円形を呈する。長軸4.0m、短軸(2.6)m、壁高80cm。 面積 (8.49) m² 床面 平坦で堅く綺まる。 重複 なし 出土遺物 繩文土器、打製石斧・スクレイパー・リタッヂド・フレイク・剥片・磨石類、須恵器瓶・長頭壺等。 時期 繩文中期後葉加曾利E I式古段階。

(2) その他の遺構

1号粘土採掘坑 (Fig.29 PL.18)

位置 X283・284、Y321・322 形状・規模等 不定形で、複数の土坑状の遺構が含まれている。長軸5.42m、短軸(3.93)m、壁高99cm。 床面 土坑状の遺構を含んでおり、起伏が激しい。 重複 なし 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・甕、繩文土器、石器等。 時期 7世紀後半。

2号粘土採掘坑 (Fig.30)

位置 X283、Y324・325 形状・規模等 東側は調査区外のため不明。長軸[4.12]m、短軸(1.5)m、壁高91cm。 床面 南側はほぼ平坦であるが、北側が落ち込んでいる。 重複 H—12と重複。本遺構が古い。 出土遺物 土師器甕、須恵器甕、繩文土器等。 時期 不明。

W—1号溝跡 (Fig.28・30 PL.18・155)

位置 X279～283、Y325～334 主軸方向 N—21°—E 形状・規模等 長さ(38.20)m、上幅2.41m、下幅2.02m、深さ0.34m。 断面形 逆台形を呈する。 重複 H—12と重複。本遺構が新しい。 出土遺物 土師器壺・台付甕・甕、須恵器平底壺・酸化焰焼成平底壺・高台壺・壺蓋・甕・壺、繩文土器、陶器、石器・石製品、鉄製品等。 時期 7世紀～9世紀。

(3) 土坑・ピット (Fig.26・31 PL.19・154)

土坑・ピットについては、Tab.5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

4. 3—2区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig.33 PL.19)

位置 X251、Y314・315 主軸方向 N—107°—E 形状・規模等 南北に長い方形を呈す。長軸3.54m、短軸1.98m、壁高24cm。 面積 6.6m² 床面 全体的に堅く綺まり、平坦。 周溝 なし 重複 なし 窯 東壁南隅に設置。袖石、天井石等の構築材の石材が残存している。全長65cm、燃焼部幅32cm。 出土遺物 土師器壺・甕・壺、須恵器平底壺・酸化焰焼成平底壺・高台壺・酸化焰焼成高台壺・甕・土釜・羽釜、繩文土器、石器等。 時期 11世紀代。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.33 PL.19・155)

位置 X250、Y314 主軸方向 N—120°—E 形状・規模等 方形を呈すと推定される。長軸(2.21)m、短軸(0.81)m、壁高37cm。 面積 (1.98) m² 床面 全体的に堅く綺まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—15と重複、本遺構が新しい。 窯 東壁やや南寄りに設置。袖石などの構築材が多数残されている。全長140cm、燃焼部幅20cm。 出土遺物 土師器壺・甕・壺、須恵器平底壺・酸化焰焼成平底壺・高台壺・酸化焰焼成高

台环、羽釜、灰釉陶器、绳文土器、石器、铁制品等。 時期 10世紀後半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.33 PL.19・155)

位置 X249・250、Y314～316 主軸方向 N—97°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸4.17m、短軸3.38m、壁高41cm。 面積 (12.6) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 重複 H—10・H—15・D—2と重。H—10より古く、H—15・D—2より新しい。 窟 東壁中央やや南寄りに設置。全長120cm、燃焼部幅47cm。 貯藏穴 南東隅に設置。 出土遺物 土師器環・小型甕・台付甕・甕、須恵器平底环・酸化焰焼成平底环・高台环・酸化焰焼成高台环・蓋・甕・瓶、羽釜、绳文土器、石器、铁制品等。 時期 10世紀代。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.34 PL.20)

位置 X250・251、Y316・317 主軸方向 N—75°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸 [5.00] m、短軸 (2.76) m、壁高37cm。 面積 (7.62) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 北西部から西側。 重複 H—16と重複、本遺構が新しい。 窟 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器環・小型甕・甕、須恵器平底环・蓋・甕・瓶、绳文土器、石器、铁制品等。 時期 8世紀前半。

H—5号竪穴建物跡 (Fig.34 PL.20・155)

位置 X248・249、Y316～318 主軸方向 N—80°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸4.82m、短軸 (3.62) m、壁高46cm。 面積 (13.35) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—6・7と重複、本遺構が最も古い。 窟 東壁南東隅に設置。支脚と考えられる石材が残存していた。全長101cm、燃焼部幅56cm。 出土遺物 土師器環・小型甕・甕、須恵器高台环・酸化焰焼成高台环・坏蓋・甕・瓶・壺、灰釉陶器、绳文土器、石器等。 時期 8世紀前半。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.34)

位置 X248・249、Y318 主軸方向 N—115°—E 形状・規模等 窟先端部のみ検出のため、形状・規模不明。長軸 (0.82) m、短軸0.42m。 面積 (0.30) m² 重複 H—5・7と重複、本遺構が最も新しい。 窟 位置不明。煙道部長 (85) cm。煙道部に石材が残存。 出土遺物 土師器環・甕・灰釉陶器、绳文土器等。 時期 時期不明 (古代)。

H—7号竪穴建物跡 (Fig.34 PL.20)

位置 X248・249、Y317・318 主軸方向 N—77°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸3.86m、短軸2.87m、壁高43cm。 面積 (7.47) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 北東部。 重複 H—5・6と重複、H—5より新しくH—6より古い。 窟 東壁中央より南寄りに設置。両袖部が残存していた。全長114cm、燃焼部幅62cm。 出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・甕・瓶、绳文土器、石器等。 時期 時期不明。

H—8号竪穴建物跡 (Fig.36 PL.20・155)

位置 X250、Y317・318 主軸方向 N—97°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸 [3.74] m、短軸 (2.27) m、壁高22cm。 面積 (8.08) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—9・D—1と重複、H—9より新しい。D—1とは新旧関係は不明。 窟 調査区外のため不明。 出土遺物 土師

器坏・甕・須恵器平底坏・酸化焰焼成平底坏・蓋・甕・壺・灰釉陶器・繩文土器・石器・鉄滓等。 時期 10世紀代。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.36 PL.20・155)

位置 X249・250、Y318・319 主軸方向 N—98°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形と推定される。長軸4.23m、短軸3.35m、壁高42cm。 面積 (13.03) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 東辺・北辺・西辺。 重複 H—8・12と重複、本遺構が古い。 竈 東壁に設置されたと推定される。 出土遺物 土師器坏・甕・須恵器平底坏・高台坏・蓋・甕・壺・羽釜・灰釉陶器・繩文土器等。 時期 9世紀前半。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.34 PL.155)

位置 X249・250、Y314・315 主軸方向 N—106°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸 (3.54) m、短軸 (1.29) m、壁高19cm。 面積 (3.69) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—3・15と重複、H—3、H—15より新しい。 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。 出土遺物 土師器坏・甕・須恵器平底坏・酸化焰焼成平底坏・高台坏・酸化焰焼成高台坏・坏蓋・甕・瓶・壺・羽釜・土釜・灰釉陶器・繩文土器・石器・石製品等。 時期 10世紀後半。

H—11号竪穴建物跡 (Fig.36 PL.20・155・156)

位置 X248・249、Y319・320 主軸方向 N—86°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸 (4.96) m、短軸 (3.28) m、壁高31cm。 面積 (11.26) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—12と重複、本遺構が古い。 竈 東壁中央付近に設置。一部H—12に壊されているが、構築材と考えられる石材が多数残されていた。全長100cm、燃焼部幅40cm。 貯藏穴 竈左脇に設置。 出土遺物 土師器坏・須恵器甕・壺・坏・酸化焰焼成坏・高台坏・酸化焰焼成高台坏・羽釜・灰釉陶器・綠釉陶器・繩文土器・石器・鉄斧、鉄滓・塊型滓等。 時期 9世紀代と考えられる。

H—12号竪穴建物跡 (Fig.36 PL.20・155・156)

位置 X248～250、Y318・319 主軸方向 N—104°—E 形状・規模等 東西にやや長い方形を呈す。長軸 (4.50) m、短軸 [3.90] m、壁高27cm。 面積 (16.64) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—9・11と重複、本遺構が新しい。 竈 東壁南隅に設置。煙道部がよく残る。全長154cm、燃焼部幅54cm、煙道部長72cm。 出土遺物 土師器坏・内面黒色処理塊・台付甕・甕・須恵器平底坏・酸化焰焼成平底坏・高台坏・酸化焰焼成高台坏・蓋・甕・壺・瓶・羽釜・灰釉陶器・綠釉陶器・繩文土器・石器・鉄製品等。 時期 10世紀代。

H—13号竪穴建物跡 (Fig.37 PL.21・155・156)

位置 X254・255、Y315・316 主軸方向 N—68°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈す。長軸4.85m、短軸4.67m、壁高43cm。 面積 (20.6) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 北辺・西辺・南辺、東は竈の南側のみ検出。 重複 H—14と重複、本遺構が古い。 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。全長124cm、燃焼部幅56cm。 出土遺物 土師器坏・甕・小型甕・須恵器坏・高台坏・酸化焰焼成高台坏・坏蓋・甕・壺・灰釉陶器・繩文土器・石器・鉄製品等。 時期 8世紀前半。

H—14号竪穴建物跡 (Fig.37・38 PL.21・156)

位置 X254・255、Y315・316 主軸方向 N—101°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸3.34m、短軸(2.64)m、壁高23cm。面積(7.68)m² 床面 全体的に堅く綿まる、やや凹凸あり。周溝なし 重複 H—13と重複、本遺構が新しい。竈 東壁ほぼ中央に設置。全長76cm、燃焼部幅28cm。出土遺物 土師器甕、羽釜、灰釉陶器、鉄製品等。時期 10世紀代。

H—15号竪穴建物跡 (Fig.38 PL.21・156)

位置 X249・250、Y314・315 主軸方向 N—81°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸(3.54)m、短軸(3.42)m、壁高55cm。面積(6.75)m² 床面 全体的に堅く綿まり、平坦。周溝なし 重複 H—2・3・10と重複、本遺構が最も古い。竈 東壁やや南寄りに設置。全長74cm、燃焼部幅20cm。出土遺物 土師器壺、甕、須恵器壺、酸化焰焼成壺、甕、壺、灰釉陶器、縄文土器、石製品等。時期 8世紀前半。

H—16号竪穴建物跡 (Fig.34)

位置 X250・251、Y315・316 主軸方向 N—70°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸3.21m、短軸(2.04)m、壁高45cm。面積(4.37)m² 床面 全体的に堅く、やや凹凸がある。周溝なし 重複 H—4と重複、本遺構が古い。竈 調査区外のため不明。出土遺物なし 時期 不明。

(2) その他の遺構

W—1号溝跡 (Fig.38)

位置 X267、Y319・320 主軸方向 N—4°—E 形状・規模等 長さ(4.90)m、上幅0.79m、下幅0.60m、深さ0.13m。断面形不明。重複なし 出土遺物なし 時期不明。

W—2号溝跡 (Fig.38)

位置 X259、Y316～318 主軸方向 N—9°—E 形状・規模等 長さ(5.11)m、上幅1.0m、下幅0.6m、深さ0.09m。断面形不明。重複なし 出土遺物なし 時期不明。

W—3号溝跡 (Fig.38)

位置 X258、Y316・317 主軸方向 N—4°—E 形状・規模等 長さ(5.02)m、上幅1.09m、下幅0.54m、深さ0.16m。断面形不明。重複なし 出土遺物なし 時期不明。

(3) 土坑・ピット (Fig.38 PL.156)

土坑・ピットについては、Tab.5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

5. 3—3区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig.40 PL.21)

位置 X244・245、Y333・334 主軸方向 N—106°—E 形状・規模等 ほとんどが調査区外のため不明。長軸(2.13)m、短軸(0.60)m、壁高19cm。面積(0.97)m² 床面 平坦で堅緻な貼床。周溝なし 重複なし 竈 東壁に設置。袖石と構築材と考えられる石材が多数出土。全長82cm、燃焼部幅60cm。出土遺物 土師器壺、須恵器壺、酸化焰焼成壺、壺、羽釜、灰釉陶器等。時期 10世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.40 PL.21・22)

位置 X246、Y328・329 主軸方向 N—87°—E 形状・規模等 大部分が調査区外のため不明。長軸(4.35) m、短軸(1.13) m、壁高29cm。面積(3.14) m² 床面 平坦で堅緻な貼床。周溝なし 重複H—5と重複、本遺構が新しい。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。全長64cm、燃焼部幅60cm。出土遺物 土師器坏・甕・高坏(5世紀)・壺(5世紀)、須恵器坏・坏蓋・縄文土器、石器等。時期 10世紀前半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.41 PL.22・156)

位置 X248・249、Y321・322 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 北半分が調査区外だが、方形と推定される。長軸3.33m、短軸(2.58) m、壁高19cm。面積(7.39) m² 床面 平坦で堅緻な貼床。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。構築材と考えられる石材が出土。全長80cm、燃焼部幅39cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器坏・甕・高坏(5世紀)、須恵器坏・高台坏・酸化焰焼成高台坏・甕・壺・羽釜、灰釉陶器、縄文土器、石器、石製品等。時期 10世紀前半。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.41 PL.22)

位置 246・247X、Y331・332 主軸方向 N—112°—E 形状・規模等 方形を呈す。長軸3.40m、短軸(2.84) m、壁高12cm。面積 9.38 m² 床面 全体的に堅く縮まり、平坦。周溝なし 重複 H—12・13・15と重複、本遺構が最も新しい。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖石と考えられる川原石が残存していた。全長95cm、燃焼部幅50cm。出土遺物 土師器坏・甕・須恵器坏・酸化焰焼成坏・高台坏・坏蓋・甕・羽釜、灰釉陶器、縄文土器、石器等。時期 10世紀代。

H—5号竪穴建物跡 (Fig.40 PL.22・156)

位置 X246・247、Y328・329 主軸方向 N—93°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸4.28m、短軸3.72m、壁高52cm。面積 11.11 m² 床面 平坦で堅緻な貼床。周溝なし 重複 H—2・1号粘土採掘坑と重複。H—2より古い。1号採掘坑との新旧関係は不明。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖石、支脚が残存する。全長98cm、燃焼部幅44cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器坏・甕、須恵器坏・酸化焰焼成坏・酸化焰焼成高台坏・蓋・甕・羽釜、灰釉陶器、縄文土器、石器、石製品等。時期 7世紀後半。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.41 PL.22・156)

位置 X246・247、Y325・326 主軸方向 N—100°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸[3.68] m、短軸(2.40) m、壁高73cm。面積(8.45) m² 床面 全体的に堅く縮まり、平坦。周溝なし 重複 H—7と重複、本遺構が新しい。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。構築材の石材が多数残存する。全長112cm、燃焼部幅52cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器坏・甕・須恵器坏・酸化焰焼成坏・高台坏・酸化焰焼成高台坏・甕・羽釜、灰釉陶器、縄文土器、石器、鉄製品等。時期 10世紀前半。

H—7号竪穴建物跡 (Fig.41 PL.23・156)

位置 X246～248、Y325～327 主軸方向 N—95°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸[7.92] m、短軸(4.54) m、壁高46cm。面積(30.37) m² 床面 全体的に堅く縮まり、平坦。周溝なし 重複 H—6・14と重複、H—14より新しくH—6より古い。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。構築材が残存していた。全長154cm、燃焼部幅68cm。出土遺物 土師器坏・塊(5世紀)・高坏(5世紀)・小型甕・台付甕・甕・

壺・須恵器壺・酸化焰焼成壺・高台壺・皿・甕・瓶・壺・円瓶・紡錘車・灰釉陶器・繩文土器・石器・鉄製品、鐵滓。墨書き土器多量等。 時期 9世紀後半。 備考 住居壁際に礫が分布する。中には扁平な礫が間隔を空けて床面に置かれており、礫石の可能性がある。

H—8号竪穴建物跡 (Fig.42 PL.24)

位置 X248、Y325・326 主軸方向 N—73°—E 形状・規模等 東側は調査区外だが、方形を呈すと考えられる。長軸 [3.80] m、短軸 (3.28) m、壁高22cm。 面積 (8.96) m² 床面 平坦で堅緻な貼床。 周溝なし 重複 なし 窟 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・甕(含5世紀)、須恵器壺・酸化焰焼成壺・高台壺・酸化焰焼成高台壺・甕、羽釜、灰釉陶器、繩文土器、石器等。 時期 10世紀代。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.43 PL.24・157)

位置 X247・248、Y324・325 主軸方向 N—77°—E 形状・規模等 方形を呈す。長軸3.28m、短軸 (3.10)m、壁高25cm。 面積 9.12m² 床面 平坦で堅緻な貼床。 周溝 なし 重複 なし 窺 東壁中央よりやや南寄りに設置。構築材の石材が残存する。全長0.92cm、燃焼部幅55cm。 貯藏穴 南東隅に設置。 出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・酸化焰焼成壺・高台壺・酸化焰焼成高台壺・甕・壺・土釜、灰釉陶器、繩文土器、石器、鐵滓等。 時期 11世紀前半。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.43 PL.24・157)

位置 X247、Y330・331 主軸方向 N—100°—E 形状・規模等 東側は調査区外だが、方形と推定される。長軸4.48m、短軸 (2.32) m、壁高29cm。 面積 (8.54) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—12・13・15、W—2と重複。本遺構が最も新しい。 窺 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・甕・須恵器甕・壺・酸化焰焼成平底壺・甕、繩文土器、石器等。 時期 不明。

H—11号竪穴建物跡 (Fig.44 PL.24)

位置 X245、Y332・333 主軸方向 N—61°—E 形状・規模等 ほとんどが調査区外のため不明。長軸 (2.70) m、短軸 (2.22) m、壁高65cm。 面積 (3.5) m² 床面 平坦で堅緻な貼床。 周溝 なし 重複 なし 窺 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・高壺・甕、繩文土器等。 時期 5世紀代。

H—12号竪穴建物跡 (Fig.43 PL.24・157)

位置 X247、Y331・332 主軸方向 N—100°—E 形状・規模等 ほとんどが調査区外、重複のため不明。長軸 (2.60) m、短軸 (1.32) m、壁高15cm。 面積 (3.21) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝なし 重複 H—13と重複、本遺構が古い。 窺 調査区外のため不明。 貯藏穴 南西隅に設置。 出土遺物 土師器壺・高壺・甕・壺、繩文土器、石器・鉄製品等。 時期 5世紀代。

H—13号竪穴建物跡 (Fig.43 PL.24・157)

位置 X246・247、Y330・331 主軸方向 不明 形状・規模等 南北に長い方形と推定される。長軸 [6.30] m、短軸 (4.00) m、壁高29cm。 面積 (11.79) m² 床面 全体的に堅く締まり、平坦。 周溝 なし 重複 H—4・10・12・15、W—2と重複。H—12・15より新しく、H—4・10、W—2より古い。 窺 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・甕・壺・高壺・小型甕・台付甕・甕・須恵器甕・壺(古代)・高台壺(古代)・蓋(古代)、繩文土器、石器等。 時期 5世紀代。

H—14号竪穴建物跡 (Fig.44 PL.24・157)

位置 X246～248、Y327・328 主軸方向 N—81°—E 形状・規模等 東西に長い方形と推定される。長軸 [5.10] m、短軸3.20m、壁高39cm。面積15.02m² 床面 堅緻で平坦な貼床。周溝なし 重複 H—7と重複、本遺構が古い。竪 北東隅の貯蔵穴の南に焼土が広がっており、攪乱によって壊されているが東壁の中央より北寄りに設置されていたと考えられる。貯蔵穴 北東隅に設置。出土遺物 土師器環・小型甕・台付甕・甕（含5世紀）、須恵器環・酸化焰焼成环・高台环・酸化焰燒成高台环・皿（高台）・高盤・蓋・甕・瓶・壺、灰釉陶器、繩文土器、鉄滓、墨書き土器等。時期 9世紀後半。

H—15号竪穴建物跡 (Fig.45 PL.24・157)

位置 X246・247、Y330・331 主軸方向 N—102°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸 (4.45) m、短軸 (3.04) m、壁高28cm。面積 (13.07) m² 床面 平坦で堅緻な貼床。周溝なし 重複 H—4・10・13・15、W—2と重複。本遺構が最も古い。竪 H—10に壊されているため不明。出土遺物 土師器環・塊・甕・繩文土器・石器等。時期 5世紀代。

H—16号竪穴建物跡 (Fig.45)

位置 X245・246、Y330 主軸方向 N—103°—E 形状・規模等 不明。長軸 (0.68) m、短軸 (0.66) m。面積 (0.45) m² 重複 H—15と重複、本遺構が新しい。竪 東壁に設置されたと推定される。全長68cm、燃焼部幅50cm。出土遺物 なし。時期 不明。

(2) その他の遺構

1号粘土採掘坑 (Fig.35 PL.25)

位置 X246・247、Y328・329 形状・規模等 不定形。北側中央付近が抉られてオーバーハンプしている。長軸3.20m、短軸1.94m。重複 H—5と重複、本遺構が新しい。出土遺物 土師器甕・繩文土器等。時期 不明。

2号粘土採掘坑 (PL.25)

位置 X246・247、Y333・334 形状・規模等 不定形。長軸5.25m、短軸2.84m。重複なし 出土遺物 土師器環・高环・台付甕（5世紀）・甕・須恵器甕・壺・环・蓋・繩文土器・石器・石製品・鉄製品・ガラス片等。時期 8世紀前半。

W—1号溝跡 (Fig.46 PL.24)

位置 X246・247、Y329・330 主軸方向 N—99°—E 形状・規模等 東西に走向。長さ (7.12) m、上幅0.98m、下幅0.64m、深さ0.93m。断面形 逆台形を呈する。重複なし 出土遺物 土師器環・台付甕・甕・須恵器環・酸化焰焼成环・高台环・蓋・甕・瓶・壺、繩文土器、陶器、石器、鉄製品、骨（不明）等。時期 不明。

W—2号溝跡 (Fig.46 PL.25)

位置 X245～247、Y330 主軸方向 N—22°—E 形状・規模等 東西に走向。長さ (4.70) m、上幅1.02m、下幅0.74m、深さ0.81m。断面形 逆台形を呈する。重複 H—10・13・15と重複。H—13・15より新しく、H—10より旧い。出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・高台环・甕・瓶・壺、繩文土器、石器等。時期 不明。

(3) 土坑・ピット (Fig.46 PL.158)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

6. 4区

(1) 穴穴建物跡

H—1号住居跡 (Fig.48 PL.27・158)

位置 X299・300、Y325・326 **主軸方向** N—92°—E **形状・規模等** 遺構東壁、南壁は調査区外であるが、概ね方形を呈すと考えられる。長軸5.20m、短軸(2.86)m、壁高80cm。 **面積** (9.71)m² **床面** 平坦で堅緻な床面で硬化が顕著。 **柱穴** P₁ 及びP₂の2基を検出。P₁—P₂間寸法は、2.24m。 **周溝** なし **重複** H—2と重複、本遺構が新しい。 **竈** 不明（調査区外と考えられる。） **出土遺物** 土師器壺・塊・甕、須恵器高台付壺・甕等。 **時期** 8世紀代。

H—2号穴穴建物跡 (Fig.48 PL.27)

位置 X298・299、Y325～327 **主軸方向** N—90°—E **形状・規模等** 遺構東側が調査区外であるが概ね方形を呈すと考えられる。長軸6.82m、短軸(2.95)m、壁高80cm。 **面積** (16.2)m² **床面** 平坦で堅緻な床面で硬化が顕著。 **柱穴** P₁ 及びP₂の2基を検出。P₁—P₂間寸法は、2.55m。 **周溝** なし **重複** H—1と重複、本遺構が古い。 **竈** 不明（調査区外と考えられる。） **出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器蓋・甕、砥石、縄文土器、埴輪等。 **時期** 不明。 **特記** 覆土の堆積状況から人為的に埋められた可能性が考えられる。

H—3号穴穴建物跡 (Fig.49 PL.27)

位置 X297・298、Y324・325 **主軸方向** N—66°—E **形状・規模等** 南北にやや長い方形を呈す。長軸4.14m、短軸3.40m、壁高40cm。 **面積** 13.26m² **床面** 平坦で堅緻な床面で硬化が顕著。 **周溝** なし **重複** なし **竈** 東壁やや南寄りに設置。構築材は検出されず。焚口部分に灰が多く堆積。焚口幅32cm、燃焼部幅32cm、煙道部長14cm。 **貯蔵穴** 南東隅に設置。 **出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器高台壺・甕・瓶・壺、石器、縄文土器等。 **時期** 7世紀後半。

H—4号穴穴建物跡 (Fig.49 PL.27)

位置 X292～294、Y325・326 **主軸方向** N—79°—E **形状・規模等** 東西方向に長い方形を呈す。長軸5.32m、短軸4.02m、壁高70cm。 **面積** 20.58m² **床面** 平坦で固く綿まる。 **周溝** なし **重複** なし **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。燃焼部から煙道部にかけて垂直気味に立ち上がる。左袖部は良好に残存する。焚口幅45cm、燃焼部幅60cm。 **出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器壺・甕、縄文土器、形象埴輪、石器、石製品等。 **時期** 8世紀前半。 **特記** 遺構西半分に匹敵する大きさの床下土坑を作り。当初は別住居跡の可能性も視野に入れ精査を行ったが、確定には至っていない。覆土の堆積状況から人為的に埋められた可能性が考えられる。また、出土遺物が少ないことも特徴である。

H—5号穴穴建物跡 (Fig.50 PL.27・158)

位置 X291～293、Y324・325 **主軸方向** N—85°—E **形状・規模等** 僅かに東西に長い方形を呈す。長軸3.71m、短軸3.48m、壁高60cm。 **面積** 12.67m² **床面** 平坦で固く綿まる。 **周溝** なし **重複** なし **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。使用面底部の灰層からほぼ完形の土師器壺が出土。焚口幅64cm、燃焼部幅78cm。 **貯蔵穴** 南東隅に設置。 **出土遺物** 土師器壺・台付甕・甕、須恵器壺・甕、縄文土器、石製品等。

時期 7世紀後半。 特記 覆土の堆積状況から人為的に埋められた可能性が考えられる。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.50 PL.28)

位置 X292、Y320・321 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 カマドのみの検出で遺構本体は調査区外である。長軸(1.60)m、短軸(1.56)m、壁高30cm。 面積 (1.17)m² 床面 カマド前の一部で床面を検出。平坦で固く締まる。 周溝 なし 重複 なし 窯 住居跡南東隅に設置されたと考えられる。焚口幅51cm、燃焼部幅61cm、煙道部長21cm。 出土遺物 土師器甕、酸化焰焼成坏・甕、羽釜 時期 11世紀前半と考えられる。

H—7号竪穴建物跡 (欠番)

H—8号竪穴建物跡 (Fig.51 PL.28・158)

位置 X299・300、Y321・322 主軸方向 N—101°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸4.02m、短軸3.47m、壁高80cm。 面積12.74m² 床面 平坦で固く締まる。 周溝 北東隅及び南西隅を除きほぼ全周する。 重複 H—9と重複、本遺構が新しい。 窯 東壁中央やや南寄りに設置。焚口幅44cm、燃焼部幅59cm、煙道部長44cm。 出土遺物 土師器環・小型甕・甕、須恵器環・高台环・蓋・甕・瓶、繩文土器・土製品(カマド材)等。 時期 9世紀前半。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.51 PL.28・158)

位置 X299・300、Y320・322 主軸方向 N—5°—W 形状・規模等 北東隅は調査区外であるが、ほぼ正方形を呈す。住居中央部から北西部にかけて焼土が分布。長軸5.55m、短軸5.20m、壁高60cm。 面積(21.86)m² 床面 平坦で固く締まる。 周溝 なし 重複 H—8と重複、本遺構が古い。 窯 北壁中央やや東寄りに設置。カマド本体は調査区外であるが、左袖部は残存する。 出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・高台环・盤・蓋・甕・瓶、石器等。 時期 8世紀前半。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.52 PL.28)

位置 X301・302、Y322・323 主軸方向 N—104°—E 形状・規模等 遺構東側は調査区外であるが、概ね方形と考えられる。長軸3.70m、短軸(2.40)m、壁高70cm。 面積 (7.68)m² 床面 平坦で非常に固く締まる。 周溝 北辺、南辺、西辺に周る。 重複 なし 窯 不明(調査区外と考えられる)。 出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・高台环・盤・蓋・甕・瓶、繩文土器・石器等。 時期 8世紀前半。

H—11号竪穴建物跡 (Fig.52 PL.29・30・158・159)

位置 X299～301、Y323・324 主軸方向 N—109°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈す。長軸4.30m、短軸4.02m、壁高60cm。 面積16.34m² 床面 平坦で固く締まる。 周溝 南西部から南辺に沿って検出。 重複 B—1と重複、本遺構が古い。 窯 東壁ほぼ中央に設置。燃焼部から煙道部にかけて垂直気味に立ち上がる。焚口幅87cm、燃焼部幅83cm、煙道部長50cm。 貯蔵穴 南東隅に設置。 出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・高台环・环蓋・壺蓋・甕・長頸壺・土釜・埴輪・砾石・鉄製品・炭化物等。 時期 7世紀後半。 特記 燃失住居跡と考えられる。床面中央部から北側にかけて炭化材が検出された。また、北壁に刺さる状態の炭化材も確認できた。炭や灰の分布は床面広範囲に及ぶ。カマド脇の貯蔵穴付近に、生活用具としての土器がつぶれた状態で出土している。さらに、1軒の住居跡から石製紡錘車が4点出土している。そのうち1点は、軸が僅かに炭化して残存。

H—12号竪穴建物跡（欠番）

H—13号竪穴建物跡 (Fig.53 PL.30・159)

位置 X295・296、Y324・325 **主軸方向** N—96°—E **形状・規模等** ほぼ正方形を呈す。長軸5.30m、短軸5.24m、壁高60cm。面積26.36m² 床面 平坦で固く締まる。周溝なし 重複 W—1、W—2、A—1と重複する。W—1より古く、W—2、A—1より新しい。竪 東壁のかなり南寄りに設置。焚口幅52cm、燃焼部幅70cm。 貯藏穴 南西隅に設置。 出土遺物 土師器壺・甕・皿か、須恵器壺・高台壺・盤・上野型壺蓋・壺蓋・甕・瓶・土釜、繩文土器、石器、鉄製品等。 時期 8世紀前半。

(2) 据立柱建物跡

B—1号据立柱建物跡 (Fig.54 PL.31)

位置 X300・301、Y323・324 **主軸方向** N—5°—E **形状・規模等** 2間×1間の南北棟である。長軸[3.98]m、短軸(2.48)m。重複 H—11と重複、本遺構が新しい。柱穴 平面形が長方形の柱穴が4基確認された。各柱穴の規模は、長軸径90～120cm、短軸径80～90cm、深さ65～95cmとの入れるほどの大きさを持つ柱穴である。 出土遺物 土師器甕・須恵器蓋等。 時期 7世紀後半～8世紀前半。

(3) その他の遺構

A—1号道路跡 (Fig.55)

位置 X294～296、Y319～329 **主軸方向** N—7°—W **形状・規模等** 南北に走向。長さ[37.00]m、上幅[2.52]m、下幅1.44m。重複 W—2、H—13と重複、本遺構が古い。 出土遺物 なし 時期 不明。 特記 断ち割った土層断面などから、旧来は溝であった箇所を道路として整備したと考えられる。道路硬化面はハードロードを突き固めている。

A—2号道路跡

位置 X292・293、Y323・324 **主軸方向** N—34°—E **形状・規模等** 南西から北東へ走向。長さ[2.80]m。最大幅[2.04]m。重複 1号粘土探掘坑と重複、本遺構が新しい。 出土遺物 なし 時期 不明。

1号粘土探掘坑 (Fig.57)

位置 X291～294、Y322・323 **形状・規模等** 楕円形。長軸[10.05]m、短軸[6.85]m。重複 A—2と重複、本遺構が古い。 出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・高台壺・蓋・甕・繩文土器等。 時期 8世紀後半。

W—1号溝跡 (Fig.55 PL.31・159)

位置 X295～297、Y318～329 **主軸方向** N—15°—E（南側）、N—39°—W（中央）、N—5°—W（北側）。 **形状・規模等** 南北に走向。中央部で湾曲する。長さ(46.70)m、上幅1.42m、下幅0.48m、深さ0.53m。 **断面形** ゆるやかな逆台形を呈する。重複 W—3、H—13と重複、W—3より古く、H—13より新しい。 出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・高台壺・蓋・甕・壺・硯・繩文土器、土錘・石器・石製品等。 時期 9世紀代。

W—2号溝跡 (Fig.55)

位置 X295・296、Y322～329 主軸方向 N—10°—W (南側)、N—5°—W (北側) 形状・規模等 南北に走向。長さ (28.5) m、上幅1.00m、下幅0.48m、深さ0.39m。断面形 ゆるやかなU字形を呈する。重複 A—1、H—13と重複、本遺構が新しい。出土遺物 土師器壺、須恵器環、石器等。時期 8世紀～9世紀。

W—3号溝跡 (Fig.55)

位置 X292～299、Y319～329 主軸方向 N—49°—W (西側)、N—66°—W (東側) 形状・規模等 東西に走向。長さ (30.85) m、上幅0.68m、下幅0.42m、深さ0.22m。断面形 ゆるやかなU字形を呈する。重複 A—1、W—1と重複、本遺構が新しい。出土遺物 なし 時期 不明。

(4) 土坑・ピット・落ち込み (Fig.56 PL.31)

土坑・ピット・落ち込みについては、Tab. 5 土坑・ピット・落ち込み計測表を参照のこと。

7. 5区

(1) 穫穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig.59 PL.32)

位置 X306・307、Y282・283 主軸方向 N—96°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸4.02m、短軸3.72m、壁高50cm。面積 14.33m² 床面 平坦で堅緻な床面で硬化が顕著。北壁中央手前に床下土坑1基検出。周溝 なし 重複 なし 窯 南東隅に設置。カマド手前には石材が多く分布。カマド構築に使用されたものと考えられる。支脚は2本検出された。いずれも直方体に成形されており2本並ぶように直立した状態で出土した。焚口幅57cm、燃焼部幅42cm。貯藏穴 南西隅に設置。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・环・甕、土釜、鉄滓、石器等。時期 9世紀代。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.59 PL.32)

位置 X302・303、Y282・283 主軸方向 N—69°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈す。長軸3.82m、短軸3.62m、壁高 30cm。面積 13.46m² 床面 平坦であるが堅緻な硬化面は部分的である。周溝 なし 重複 なし 窯 南東隅に設置。焚口幅34cm、燃焼部幅30cm、煙道部長60cm。貯藏穴 南西隅に設置。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・甕、縄文土器等。時期 11世紀代。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.60 PL.33・160)

位置 X300・301、Y286・287 主軸方向 N—122°—E 形状・規模等 東西に長い方形を呈し、逆台形に近い形状。長軸4.72m、短軸3.54m、壁高30cm。面積 14.59m² 床面 平坦で堅緻な床面。周溝 なし 重複 なし 窯 南東隅に設置。構築材と思われる石材を検出。焚口幅36cm、燃焼部幅50cm、煙道部長44cm。貯藏穴 南西隅に設置。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗・甕、羽釜、土釜、縄文土器等。時期 不明(11世紀ないし8世紀前半)。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.60 PL.33)

位置 X307・308、Y286・287 主軸方向 N—113°—E 形状・規模等 方形を基調とする形状と推察される。長軸 [2.94] m、短軸 [2.72] m、壁高20cm。面積 (7.67) m² 床面 平坦で固く締まる。周溝 なし

し 重複 H-9と重複する、本遺構が新しい。竈 東壁北寄りに設置。煙道部は調査区外となる。焚口幅62cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・碗・甕、土釜、石器等。時期 11世紀後半。

H-5号竪穴建物跡 (Fig.61 PL.33・160)

位置 X304・305、Y281・282 主軸方向 N-79°-E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸3.88m、短軸3.24m、壁高30cm。面積 (12.34) m² 床面 平坦で固く締まる。周溝なし 重複 H-6と重複、本遺構が新しい。竈 南東隅に設置。住居内西側で石材が複数出土した。カマド構築に使用された可能性も考えられる。焚口幅80cm、燃焼部幅62cm、煙道部長56cm。出土遺物 土師器壺、須恵器壺・甕、灰釉陶器小椀、羽釜、土釜、鉄製品、鉄滓、土製品、縄文土器等。時期 10世紀前半。

H-6号竪穴建物跡 (Fig.61 PL.33)

位置 X304・305、Y280・281 主軸方向 N-91°-E 形状・規模等 他遺構との重複で明確ではないが、やや南北に長い方形を基調とするものと考えられる。長軸 [4.10] m、短軸 [3.76] m、壁高40cm。面積 (14.79) m² 床面 平坦で固く締まる。周溝なし 重複 H-5、H-7と重複、本遺構が最も古い。竈 煙道部先端の焼土のみ残存。カマド本体は重複するH-5により壊される。貯蔵穴 北西隅に設置。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・碗・甕、羽釜、土釜、灰釉陶器小椀、埴輪、縄文土器等。時期 10世紀代。

H-7号竪穴建物跡 (Fig.62 PL.33・34)

位置 X303・304、Y280・281 主軸方向 N-81°-E 形状・規模等 東西にやや長い方形を呈す。長軸3.50m、短軸3.02m、壁高30cm。面積9.53m² 床面 やや起伏を伴うが全体的には平坦である。周溝なし 重複 H-6と重複、本遺構が新しい。竈 東壁南寄りに設置。袖石、構築材、天井石が残存し、石材を使用したカマド構築の様子が明瞭である。焚口幅48cm、燃焼部幅40cm、煙道部長33cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・甕、内黒土器壺、灰釉陶器小椀、土釜等。時期 11世紀代。

H-8号竪穴建物跡 (Fig.62 PL.34・160)

位置 X306・307、Y284・285 主軸方向 N-82°-E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈す。長軸3.64m、短軸3.64m、壁高60cm。面積12.93m² 床面 中央部がやや窪むが全体的に平坦で堅緻な床面。北西部で複数の床下土坑を検出。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央やや南寄りに設置。両袖石、カマド内部にも構築材と思われる石材が残存する。焚口幅44cm、燃焼部幅50cm、煙道部長44cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・甕、石製品、陶器等。時期 8世紀後半。

H-9号竪穴建物跡 (Fig.60 PL.33)

位置 X306～308、Y286・287 主軸方向 N-78°-E 形状・規模等 北壁、南壁、西壁が攪乱等の影響受けており、明確な形状は不明であるが方形を基調するものと思われる。長軸 [4.40] m、短軸 [3.36] m、壁高5cm。面積 (5.74) m² 床面 平坦で固く締まる。周溝なし 重複 H-4と重複、本遺構が古い。竈 重複するH-4に壊される。出土遺物 なし 時期 不明。

(2) その他の遺構

A-1号道路跡 (Fig.63 PL.35)

位置 X302～306、Y279～286 主軸方向 N-39°-W(南側)、N-18°-W(中央)、N-34°-W(北側)。

形状・規模等 南北に走向。長さ（30.5）m、幅0.45m。 重複 A—2と重複、本遺構が新しい。 出土遺物なし 時期 不明。

A—2号道路跡 (Fig.63)

位置 X305～308、Y285・286 **主軸方向** N—101°—E **形状・規模等** 東西に走向。長さ（4.20）m。幅0.58m。 重複 A—1と重複、本遺構が古い。 出土遺物 なし 時期 不明。

W—1号溝跡 (Fig.63 PL.34・160)

位置 X301～303、Y282～288 **主軸方向** N—23°—W **形状・規模等** 南北に走向。長さ（28.00）m、上幅1.52m、深さ0.56m。 **断面形** 逆台形を呈する。 重複 W—2と重複、本遺構が新しい。 出土遺物 土師器坏・高坏・甕・須恵器蓋・环・碗・皿・甕・壺、灰釉陶器、土釜、取瓶、繩文土器、石器等。 時期 9世紀～11世紀。 備考 溝跡底部では水流の痕跡が認められるが、溝跡の使用目的は不明。

W—2号溝跡 (Fig.63 PL.34)

位置 X301～304、Y282～288 **主軸方向** N—22°—W **形状・規模等** 南北に走向。長さ（26.40）m、上幅1.42m、下幅0.42m、深さ0.78m。 **断面形** 長方形に近い。 重複 W—1と重複、本遺構が古い。 出土遺物 なし 時期 不明。

(3) 土坑・ピット (Fig.63 PL.35)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

8. 7区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig.65 PL.35・160)

位置 X365・366、Y316・317 **主軸方向** N—80°—E **形状・規模等** 南北にやや長い方形を呈す。長軸3.38m、短軸2.90m、壁高26cm。 **面積** 9.3m² **床面** 平坦で堅緻な床面。 **周溝** なし 重複 なし **竈** 南東隅に設置。左袖部は良好に残存している。全長112cm、燃焼部幅80cm。 **貯蔵穴** 南西隅に設置。 出土遺物 土師器坏・小型甕・甕・須恵器蓋・环・碗・甕・壺、黑色土器坏等。 時期 9世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.65 PL.36・160)

位置 X363・364、Y314 **主軸方向** N—94°—E **形状・規模等** 方形と推定される。長軸2.98m、短軸[2.02] m、壁高6cm。 **面積** (6.14) m² **床面** 平坦で堅緻な床面。南北に2基柱穴を確認。 **周溝** なし 重複 なし **竈** 東壁の中央付近に焼土と灰が確認され、カマドが設置されていたと考えられるが、残存状態は良好でない。 出土遺物 土師器坏・甕・須恵器坏・碗・甕・壺輪等。 時期 7世紀後半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.65 PL.36・160)

位置 X360・361、Y314・315 **主軸方向** N—52°—E **形状・規模等** 不明。長軸(2.58) m、短軸(1.30)m、壁高16cm。 **面積** (2.04) m² **床面** 平坦で堅緻な床面。 **周溝** なし 重複 なし **竈** 調査区外のため不明。 出土遺物 鉄製鋸鍼車等。 時期 不明。

(2) 土坑・ピット (Fig.65 PL.36・160)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

9. 10区

(1) 穴室建物跡

H—1号穴室建物跡 (旧) (Fig.67 PL.38・160・161)

位置 X352、Y341・342 主軸方向 N—90°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸 [3.80] m、短軸 [3.40] m、壁高49cm。面積 15.5m² 床面 平坦で堅緻な床面。周溝なし 重複 H—1号住居跡(新)と重複。竈 東壁に設置されたと考えられるが、H—1号住居跡(新)によって壊されている。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・高台付环・甕、鉄製品、石器等。時期 7世紀後半。

H—1号穴室建物跡 (新) (Fig.67 PL.38・160)

位置 X352・353、Y341・342 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸 4.62m、短軸 [3.50] m、壁高46cm。面積 15.5m² 床面 平坦で堅緻な床面。周溝なし 重複 H—1号住居跡(旧)と重複。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖の袖石が残存している。焚口幅48cm、燃焼部幅72cm、煙道部42cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・高台付环・甕、鉄製品、石器等。時期 7世紀後半。

H—2号穴室建物跡 (Fig.68 PL.38・160)

位置 X352・353、Y339・340 主軸方向 N—86°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸 4.10m、短軸3.62m、壁高27cm。面積 (14.4)m² 床面 平坦で堅緻な床面。周溝なし 重複 H—3、D—1と重複。H—3より新しく、D—1より古い。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖が良好に残存。左側は袖石が設置された痕跡が残り、右側には袖石が残されていた。支脚も残存する。全長108cm。焚口幅64cm、燃焼部幅62cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・环・甕等。時期 8世紀後半。

H—3号穴室建物跡 (Fig.68 PL.38・161)

位置 X353・354、Y338・339 主軸方向 N—74°—E 形状・規模等 方形を呈す。長軸3.70m、短軸3.53m、壁高43cm。面積 11.81m² 床面 平坦で堅緻な床面。周溝なし 重複 H—2と重複、本遺構が古い。竈 東壁中央よりやや北寄りに設置。両袖石とその上に天井石が残存する。支脚も残存する。全長152cm。貯蔵穴 南東隅に設置。周囲が粘土の土手が囲んでいる。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・石製品、繩文土器、土製円盤等。時期 6世紀後半。

H—4号穴室建物跡 (Fig.69 PL.39・161)

位置 X355・356、Y338・339 主軸方向 N—86°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈す。長軸 5.18m、短軸4.20m、壁高52cm。面積20.86m² 床面 平坦で堅緻な床面。住居北西に床下土坑1基検出。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。全長168cm、燃焼部幅90cm。貯蔵穴 南東隅に設置。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・甕、灰釉陶器等。時期 8世紀後半。

H—5号穴室建物跡 (Fig.69 PL.40・161)

位置 X350～352、Y339・340 主軸方向 N—80°—E 形状・規模等 南北に長い方形を呈す。長軸5.68m、

短軸4.20m、壁高50cm。 面積 22.11m² 床面 平坦で堅緻な床面。北西部に灰が広がっている。 周溝 なし
し 重複 なし 罠 東壁中央より南寄りに設置。全長126cm、燃焼部幅62cm。 貯蔵穴 南東隅に設置。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器甕、石器等。 時期 6世紀後半。

H—6号竪穴建物跡（欠番）

H—7号竪穴建物跡（Fig.70 PL.40・161）

位置 X355・356、Y341・342 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 南北にやや長い方形を呈すと推定される。長軸4.04m、短軸(3.83)m、壁高71cm。 面積 (13.52)m² 床面 平坦で堅緻な床面。 周溝 なし
重複 P—35と重複、本遺構が古い。 罐 東壁中央よりやや北寄りに設置されたと推定される。P—35によつて煙道部が壊されている。全長(36)cm、燃焼部幅52cm。 出土遺物 土師器壺・高壺・小型甕・甕、須恵器甕、石製品等。 時期 6世紀後半。

H—8号竪穴建物跡（Fig.70 PL.40）

位置 X337・338、Y332・333 主軸方向 N—78°—E 形状・規模等 カマド煙道部と住居の一部以外は調査区外のため不明。長軸(2.00)m、短軸(0.46)m、壁高31cm。 面積 (0.78)m² 床面 平坦で堅緻な床面。 周溝 なし 重複 なし 罐 東壁に設置されていたと推定される。全長72cm。 出土遺物 なし 時期 不明。

(2) 土坑・ピット（Fig.70 PL.40・161）

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

第2項 B工区

1. 1区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡（Fig.72 PL.42・161）

位置 X131・132、Y282・283 主軸方向 N—93°—E 形状・規模等 方形を呈する。長軸5.60m、短軸5.54m、壁高73cm。 面積 32.89m² 床面 平坦で堅く締まる地山床。 柱穴 4基の柱穴を検出。南北距離は2.9m、東西距離は2.88mである。 周溝 ほぼ全周をめぐる。北壁と南壁の中央付近には見られず、入口のあった可能性がある。 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 罐 東壁中央やや南寄りに設置。全長136cm、焚口幅40cm。 出土遺物 土師器壺・小型甕・甕、須恵器蓋・壺、鉄津、弥生土器（中期後半）、縄文土器、石器等。 時期 6世紀後半。 備考 罐の焚口部の外側をめぐるように小ピットが検出された。

H—2号竪穴建物跡（Fig.73 PL.42・43・161）

位置 X134・135、Y278 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈す。長軸3.2m、短軸2.34m、壁高71cm。 面積 8.07m² 床面 平坦な地山床。 周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 なし 罐 東壁中央より南よりに設置。袖部に袖石と構築材と考えられる石材が残存。全長130cm、焚口幅36cm。 出土遺物 土師器壺・甕、弥生土器（中期後半）、縄文土器、石器等。 時期 9世紀代。

H—3号竪穴建物跡（Fig.73 PL.43・161・162）

位置 X136・137、Y280・281 主軸方向 N—101°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸

3.22m、短軸2.10m、壁高38cm。 面積 (6.85) m² 床面 明確な硬化面は確認できなかった。 周溝 なし
重複 なし 窯 東壁中央に設置、煙道部は調査区外。明瞭な袖部は確認できなかったが、袖部付近に構築材
と考えられる石材が検出された。全長54cm、焚口幅40cm。 出土遺物 土師器壺・台付甕・甕、須恵器壺、鉄製品、繩文土器、墨書き土器等。 時期 9世紀後半。

J—1号竪穴建物跡はY—1号竪穴建物跡に変更。

J—1号竪穴建物跡（旧J—2号竪穴建物跡）(Fig.74 PL.43・162)

位置 X130・131、Y281・282 主軸方向 N—24°—E 形状・規模等 潛丸形を呈する。長軸4.10m、短
軸3.88m、壁高67cm。 面積 15.25m² 床面 住居の東側に多量の小礫を検出したが、敷石住居ではない。
重複 なし 炉 住居南側中央の土坑の底面から焼土を検出しており、炉の可能性がある。 出土遺物 繩文土
器、石器、弥生土器等。 時期 繩文時代前期後葉（諸磯c式期）。

J—2号竪穴建物跡（旧J—3号竪穴建物跡）(Fig.74 PL.43・163)

位置 X131～133、Y278・279 主軸方向 N—62°—W 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸
4.34m、短軸3.53m、壁高77cm。 面積 15.52m² 床面 平坦で堅く締まる。 出土遺物 繩文土器、石器、
石製品、弥生土器等。 時期 繩文時代前期後葉（諸磯c式期）。

J—4号竪穴建物跡はY—2号竪穴建物跡に変更。

J—3号竪穴建物跡（旧J—5号竪穴建物跡）(Fig.75 PL.44・163・164)

位置 X133、Y280 主軸方向 N—90°—E 形状・規模等 不整形。長軸3.00m、短軸2.50m、壁高64cm。
面積 6.82m² 床面 やや凹凸がある、明確な硬化面はない。 重複 なし 炉 住居の北東隅に焼土が分布し
ており、炉の可能性が考えられる。 出土遺物 繩文土器、石器、弥生土器。 時期 繩文時代前期後葉（諸磯
c式期）。

Y—1号竪穴建物跡 (Fig.75 PL.44・162)

位置 X131・132、Y276～278 主軸方向 N—34°—W 形状・規模等 東西に長い、潜丸の形を呈する。
長軸 (4.51) m、短軸4.22m、壁高16cm。 面積 約 (18.43) m² 床面 明確な硬化面は確認されていない。
重複 なし 炉 住居中央に検出。 柱穴 住居内の壁際に小ピットを7基検出。円を描くように分布している。
出土遺物 弥生土器甕・壺、繩文土器、石器、土師器甕等。 時期 弥生時代中期後半。

Y—2号竪穴建物跡 (Fig.75 PL.44・163)

位置 X134・135、Y276・277 主軸方向 N—3°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈すると推測さ
れる。長軸 (3.36) m、短軸3.32m、壁高30cm。 面積 (10.94) m² 床面 平坦で堅く締まる。 重複 なし
炉 なし 出土遺物 弥生土器鉢・甕・壺、繩文土器、石器等。 時期 弥生時代中期後半。

(2) 堀立柱建物跡

B—1号堀立柱建物跡 (Fig.78)

位置 X137・138、Y272～274 主軸方向 N—12°—E 形状・規模等 2間×2間の南北棟である。長軸7.44m、短軸3.16m。重複なし 柱穴 平面形が円形の柱穴が9基確認された。各柱穴の規模は、長軸径22～40cm、短軸径20～36cm、深さ13～28cmと小さめでややばらつきがある。出土遺物なし 時期 不明。

B—2号堀立柱建物跡 (Fig.78)

位置 X136、Y270 主軸方向 不明 形状・規模等 不明、柱穴二つの列をなす。重複なし 柱穴 平面形が円形の柱穴が2基確認された。各柱穴の規模は、長軸径40・46cm、短軸径36・48cm、深さ48・50cmと小さめである。出土遺物なし 時期 不明。

(3) 竪穴状遺構

T—1号竪穴状遺構 (欠番)

T—2号竪穴状遺構跡 (Fig.76 PL.45・162)

位置 X135、Y281・282 主軸方向 N—10°—E 形状・規模等 半円形を呈する。長軸2.7m、短軸2.38m、壁高67cm。面積 6.39m² 床面 明確な硬化面は確認されなかった。柱穴 壁際に4つの柱穴あり。南壁際より北壁際の柱穴のほうが深い。重複なし 出土遺物 土師器環、須恵器環・碗、縄文土器、石器、墨書き土器等。 時期 9世紀後半。

(4) 土坑・ピット・落ち込み (Fig.76・77 PL.44・164)

土坑・ピット・落ち込みについては、Tab. 5 土坑・ピット・落ち込み計測表を参照のこと。

2. 2区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig.80 PL.46・47・164)

位置 X147～149、Y250・251 主軸方向 N—75°—E 形状・規模等 北西部分は調査区外であるが方形を呈すると推測される。長軸5.83m、短軸5.24m、壁高50cm。面積 (30.9)m² 床面 平坦で堅く締まる。中央やや南側に床下土坑を1基確認。柱穴 平面形が円形あるいは楕円形の柱穴を4基確認。南北距離2.3m、東西距離2.06m。周溝 北東部と南西部（北西部は調査区外のため不明、南東部は見られない）。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。5基のピットが密集している。竈 東壁中央やや南寄りに設置。袖部がわずかに残っているが、残存状態は良好でない。全長164cm、焚口幅68cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・环・瓶・甕・壺、羽口、鉄製品、鉄滓、石製品、石器等。時期 8世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.81 PL.47・164)

位置 X148・149、Y251・252 主軸方向 N—85°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸4.50m、短軸3.56m、壁高50cm。面積 14.23m² 床面 平坦で堅く締まる。住居中央に床下土坑を1基確認。周溝 なし 重複 D—1と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。煙道部は搅乱によって壊されている。構築材と考えられる石材、天井石を検出。全長110cm、焚口幅46cm。出土遺物 土師器環・小型甕・甕、須恵器蓋・环・碗・瓶・甕・壺、鉄製品、縄文土器、石器等。時

期 9世紀前半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.82 PL.47・48・164・165)

位置 X146～148、Y252～254 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 北西部分は調査区外となるが、南北に長い長方形を呈すと推定される。長軸5.91m、短軸5.10m、壁高42cm。面積 (32.62) m² 床面 住居中央に焼土硬化面が大きく広がる。焼土・炭化材・炭化物が全体的に分布している。柱穴 平面形が円形の柱穴を4基確認。南北距離3.32m、東西距離2.34m。周溝 東壁(窓周辺には見られない)・南壁・西壁(北西部は調査区外のため不明)・北壁。重複 なし 窓 東壁中央やや南寄りに設置。燃焼部から煙道部がはっきり残っていない。全長 [118] cm、焚口幅: 80cm。出土遺物 土師器環・小型甕・台付甕・甕・壺・須恵器蓋・环・碗・甕・壺・鐵製品・鉄滓・石製品・繩文土器・石器 時期 8世紀前半。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.83 PL.49・165)

位置 X151・152、Y258・259 主軸方向 N—83°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸4.73m、短軸3.9m、壁高48cm。面積 19.75m² 床面 平坦で堅く締まる地山床。周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に1基? 窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部は明瞭ではない。全長 [104] cm、焚口幅50cm。出土遺物 土師器環・小型甕・甕・須恵器蓋・环・高环・甕・壺・繩文土器・石器等。 時期 8世紀後半。

H—5号竪穴建物跡 (Fig.83 PL.49)

位置 X148～150、Y258・259 主軸方向 N—84°—E 形状・規模等 遷構南西部分は調査区外となるが、方形を呈すと推測される。長軸4.86m、短軸(3.98) m、壁高34cm。面積 (19.59) m² 床面 平坦で堅く締まる地山床。周溝 西壁・北壁・住居の南西約半分は、調査区外のため不明。重複 なし 窓 東壁に設置したと推測される。残存していない。出土遺物 土師器環・甕・須恵器蓋・环・甕・石製品・軟質陶器・繩文土器。 時期 9世紀前半。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.84 PL.49・50・165)

位置 X148～150、Y253・254 主軸方向 N—99°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸6.40m、短軸5.0m、壁高60cm。面積 32.66m² 床面 平坦で堅く締まる地山床。柱穴 平面形が円形あるいは楕円形の柱穴を4基確認。南北距離3.38m、東西距離2.56m。周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に1基? 窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部は明瞭ではない。全長156cm、焚口幅90cm。出土遺物 土師器環・小型甕・台付甕・甕・須恵器蓋・环・碗・高环・捏ね鉢・瓶・甕・壺・黑色土器環・土製品・鉄製品・石製品・陶器・繩文土器・海巣穴泥岩。 時期 8世紀後半。

H—7号竪穴建物跡はY—1号竪穴建物跡に変更のため欠番。

Y—1号竪穴建物跡 (Fig.85 PL.50・165)

位置 X157・158、Y256・257 主軸方向 N—118°—E 形状・規模等 東側は調査区外となるが、東西に長い長方形を呈すと推測される。長軸(3.69) m、短軸2.82m、壁高31cm。面積 (10.65) m² 床面 中央から南側にかけて硬化面が広がっている。周溝 なし 重複 なし 出土遺物 弥生土器壺・筒・土師器環・甕・須恵器環・石器等。 時期 弥生時代中期後半。

(2) 堀立柱建物跡

B—1号堀立柱建物跡 (Fig.86 PL.50)

位置 X147～149、Y256～258 主軸方向 N—74°—E 形状・規模等 3間（南辺は4間になっている）×2間の東西棟。長軸6.19m、短軸4.32m。重複 B—2と重複。ほぼ同じ位置、同じ規模で建て替えられてると考えられる。本遺構が新しい。柱穴 平面形が円形あるいは梢円形の柱穴が11基確認された。各柱穴の規模は、長軸径50～86cm、短軸径50～74cm、深さ19～43cmと比較的小さくて浅いものが多い。出土遺物 土師器環・甕、須恵器甕。時期 8世紀代。

B—2号堀立柱建物跡 (Fig.87 PL.50)

位置 X147～149、Y256～258 主軸方向 N—75°—E 形状・規模等 3間×2間の東西棟。長軸6.16m、短軸4.27m。重複 B—1と重複。本遺構が古い。柱穴 平面形が隅丸形あるいは円形・梢円形の柱穴が10基確認された。各柱穴の規模は、長軸径80～120cm、短軸径60～118cm、深さ49～78cmと、B—1と比較して規模の大きく深さのある柱穴である。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・甕・蓋・椀・壺、陶器、鉄製品、石器、繩文土器等。時期 7世紀～9世紀代。

B—3号堀立柱建物跡 (Fig.88 PL.50)

位置 X151・152、Y256・257 主軸方向 N—4°—W 形状・規模等 2間×2間でほぼ正方形を呈する。長軸3.96m、短軸3.92m。重複 なし 柱穴 平面形が円形の柱穴が8基確認された。各柱穴の規模は、長軸径30～62cm、短軸径30～54cm、深さ25～39cm。比較的小さくて浅いものが多い。1号・2号堀立柱建物跡の柱穴に比べて数値のばらつきが少ない。出土遺物 土師器甕。時期 古代。

(3) 土坑・ピット (Fig.85)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

3. 3区

(1) 穫穴建物跡

H—1号住居跡 (Fig.90 PL.52・166)

位置 X95・96、Y222・223 主軸方向 N—104°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸5.82m、短軸(1.21)m、壁高55cm。面積 (7.14) m² 床面 ほぼ水平、堅く締まる地山床。中央部に小ピットが4基集中する。周溝 ほとんどが調査区外のため不明。重複 なし 窯 調査区外のため不明。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋、繩文土器、内黒土器等。時期 6世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.90 PL.52・166)

位置 X93、Y233～235 主軸方向 N—101°—E 形状・規模等 ほとんどが調査区外のため不明。長軸(4.98)m、短軸(1.1)m、壁高65cm。面積 (5.97) m² 床面 地山床、平坦で硬く締まる。周溝 なし 重複 なし 窯 ほとんどが調査区外のため不明。出土遺物 土師器環・甕・須恵器蓋・环・盤・甕・壺・薦編石・繩文土器等。時期 8世紀前半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.90 PL.52)

位置 X92、Y238・239 主軸方向 N—78°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸(3.0)m、短軸

(1.2) m、壁高67cm。 面積 (6.2) m² 床面 ほぼ水平の地山床。 周溝 北東隅。 重複 なし 窓 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器甕・壺、陶器、縄文土器等。 時期 8世紀前半。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.91 PL.52)

位置 X91、Y242・243 主軸方向 N—86°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸3.5m、短軸(1.74) m、壁高73cm。 面積 (6.62) m² 床面 ほぼ水平な地山床。 周溝 なし 重複 なし 窓 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・鉢・甕、須恵器蓋・甕、薦編石等。 時期 7世紀後半。

H—5号建物跡 (Fig.91 PL.51)

位置 X98、Y212・213 主軸方向 N—78°—E 形状・規模等 ほとんどが調査区外のため不明。長軸(3.48) m、短軸(1.33) m、壁高76cm。 面積 (5.24) m² 床面 ほぼ水平の地山床。明確な硬化面は確認されなかった。 周溝 なし 重複 H—7と重複、本遺構が古い。 窓 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・瓶・甕等。 時期 7世紀代。

H—6号建物跡 (Fig.92 PL.51)

位置 X98・99、Y210・211 N—77°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸 [2.92] m、短軸(1.5) m、壁高55cm。 面積 (4.64) m² 床面 地山床、平坦で硬く締まる。 周溝 南西隅、北壁。 重複 なし 窓 調査区外のため不明。 出土遺物 土師器壺・甕、石器、薦編石等。 時期 7世紀後半。

H—7号建物跡 (Fig.91 PL.51・166)

位置 X97・98、Y213・214 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 東側のほとんどが調査区外だが、方形と推定される。長軸 [4.24] m、短軸(1.02) m、壁高82cm。 面積 (4.24) m² 床面 やや凹凸のある地山床。 周溝 なし 重複 H—5と重複、本遺構が新しい。 窓 北西隅に設置。煙道部は調査区外。全長98cm、焚口幅60cm。カマド中央に小ピットがあり、支脚を据えた痕跡と考えられる。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器蓋・甕、薦編石等。 時期 7世紀後半。

(2) 土坑・ピット・落ち込み (Fig.92)

土坑・ピット・落ち込みについては、Tab. 5 土坑・ピット・落ち込み計測表を参照のこと。

4. 4区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig.95 PL.54・166)

位置 X139～141、Y279～281 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 方形を呈する。長軸5.7m、短軸5.0m、壁高72cm。 面積 28.88m² 床面 地山床、やや凹凸あり。硬く締まる。 柱穴 4基の柱穴を検出。南北距離は2.40m、東西距離は2.72mである。 周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。全長158cm、最大幅69cm、焚口幅68cm。構築材に粘土を用いる。 出土遺物 土師器壺・鉢・高壺・台付甕・甕、須恵器壺・高壺・甕、白玉、薦編石、縄文土器、石器等。 時期 6世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.96 PL.54・166)

位置 X145・146、Y284～286 **主軸方向** N—80°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈す。長軸5.88m、短軸3.62m、壁高72cm。 **面積** 23.39m² **床面** 地山床、平坦で硬く締まる。住居南西部に床下土坑を1基確認。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部は明瞭ではない。底部使用面には灰が広がる。全長162cm、最大幅114cm、焚口幅80cm。 **出土遺物** 土師器壺・小型台付甕・甕・須恵器蓋・环・碗・高环・甕・壺、墨書き土器、灰釉陶器壺、鉄製品、薦編石、縄文土器、石器等。 **時期** 9世紀前半。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.96 PL.54・166)

位置 X139、Y287・288 **主軸方向** N—65°—E **形状・規模等** 遺構南壁部分は調査区外となるが、方形を呈すと推定される。長軸3.16m、短軸(2.76)m、壁高16cm。 **面積** (6.01)m² **床面** ほぼ水平の地山床。明確な硬化面は確認されなかった。周溝なし 重複なし 竈なし **出土遺物** 土師器手捏ね・器台・台付甕・甕・S字状口縁台付甕、縄文土器等。 **時期** 4世紀後半。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.97 PL.54・55・166)

位置 X139・140、Y278・279 **主軸方向** N—85°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈す。長軸4.25m、短軸3.4m、壁高42cm。 **面積** 13.73m² **床面** 地山床で明確な硬化面は確認されなかった。床面中央に床下土坑を確認した。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。カマドの構築にあたっては、石材を用いている。底部中央には支脚と考えられる細長い川原石が直立していた。全長90cm、最大幅56cm、焚口幅48cm。 **出土遺物** 土師器壺・甕・須恵器蓋・环・碗・縄文土器、石器等。 **時期** 9世紀後半。

H—5号竪穴建物跡 (欠番)

H—6号竪穴建物跡 (Fig.97 PL.55・166・167)

位置 X140・141、Y273～275 **主軸方向** N—93°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈す。長軸4.61m、短軸4.11m、壁高51cm。 **面積** 20.22m² **床面** 住居北東側から南にかけて貼床と考えられる硬化面を確認した。周溝なし 重複 H—7と重複する。本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖に袖石、側面にも石材が分布し、カマドの構築にあたっては石材を用いている。底部の中央やや左寄りには支脚と考えられる細長い川原石が直立していた。全長112cm、最大幅66cm、焚口幅46cm。 **出土遺物** 土師器壺・小型台付甕・甕・須恵器環・甕・墨書き土器、石製品、鉄製品、薦編石、縄文土器、石器等。 **時期** 9世紀後半。

H—7号竪穴建物跡 (Fig.98 PL.55)

位置 X138～140、Y274～276 **主軸方向** N—91°—E **形状・規模等** 南半分は調査区外となるが、概ね方形を呈すと推定される。長軸6.8m、短軸(4.6)m、壁高66cm。 **面積** (30.69)m² **床面** 地山床で硬く締まる。中央やや北寄りに床下土坑を1基確認。周溝なし 重複 H—6と重複する。本遺構が古い。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置と推測される。両袖には袖石が残存する。全長160cm、最大幅52cm、焚口幅26cm。 **出土遺物** 土師器壺・台付甕・甕・壺・須恵器蓋・环・碗・甕・壺、内黒土器、薦編石、縄文土器、石器等。 **時期** 6世紀後半。

H—8号竪穴建物跡 (Fig.99 PL.56・167)

位置 X144・145、Y274・275 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 方形を呈す。長軸3.3m、短軸2.88m、壁高23cm。面積 10.17m² 床面 地山床で、明確な硬化面は確認できなかった。周溝なし 重複なし 窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。カマドの構築にあたっては石材と粘土を用いている。全長110cm、最大幅60cm、焚口幅50cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器环・碗・甕、黒色土器、灰釉陶器椀、石製品、縄文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.99 PL.56・167)

位置 X143・144、Y272・273 主軸方向 N—83°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸3.5m、短軸2.68m、壁高55cm。面積 9.9m² 床面 地山床で硬く締まる。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部は明瞭ではない。全長130cm、最大幅58m、焚口幅50cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・环・甕、薺編石、縄文土器（早期後葉）、石器等。時期 7世紀後半～8世紀前半。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.100 PL.56・167)

位置 X143・144、Y280・281 主軸方向 N—83°—E 形状・規模等 方形を呈す。長軸6.04m、短軸5.6m、壁高54cm。面積 33.62m² 床面 中央が窪んでおり、As-C 軽石を多量に含む黒褐色土が堆積していた。周溝なし 重複なし 炉 住居中央やや南東のP₁の底部には焼土が堆積していた。炉として使用した痕跡である可能性がある。出土遺物 土師器塊・甕・咲・高环・甕・壺、縄文土器、石器等。時期 4世紀後半。

J—1号竪穴建物跡 (Fig.101 PL.57・168)

位置 X147・148、Y281・282 主軸方向 N—9°—E 形状・規模等 円形を呈する。長軸3.28m、短軸(2.06)m、壁高33cm。面積 (6.13)m² 床面 ほぼ水平で、明確な硬化面は確認されていない。北西側に遺物と小礫が集中する。重複なし 炉 調査区内にはなし。出土遺物 縄文土器、石器等。時期 縄文時代前期後葉（諸磯b式期新段階）。

J—2号竪穴建物跡 (Fig.102 PL.57・58・168)

位置 X145・146、Y288・289 主軸方向 N—67°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸(3.54)m、短軸(3.5)m、壁高15cm。面積 (8.04)m² 床面 少分の凹凸がある。明確な硬化面は確認されなかった。住居内床面全面に小礫と土器片が密集して分布している。重複なし 炉 調査区内にはなし 出土遺物 縄文土器、石器等。時期 縄文時代前期後葉（諸磯c式期古段階）。

J—3号竪穴建物跡 (Fig.102 PL.58・168)

位置 X141・142、Y279・280 主軸方向 N—3°—E 形状・規模等 岬の丸いいびつな方形を呈す。長軸3.43m、短軸3.3m、壁高16cm。面積 10.53m² 床面 ほぼ水平で、明確な硬化面は確認されていない。住居の中央にわずかに小礫が集中する。敷石ではない。住居南側に台石を検出。重複なし 出土遺物 縄文土器、石器。時期 縄文時代前期後葉（諸磯c式期）。

J—4号竪穴建物跡 (Fig.102 PL.58・169)

位置 X145、Y280・281 主軸方向 N—18°—E 形状・規模等 岬の丸いいびつな方形を呈す。長軸3.4m、

短軸3.13m、壁高22cm。 面積 10.39m² 床面 住居南側がわずかに窪んでいる。明確な硬化面は確認されなかった。 重複 なし 炉 なし 出土遺物 繩文土器、石器等。 時期 繩文時代中期初頭（五領ヶ台式期）。

(2) 堀立柱建物跡

B—1号堀立柱建物跡 (Fig.101)

位置 X145・146、Y281・282 主軸方向 N—13°—W 形状・規模等 2間×2間でほぼ正方形を呈する。長軸4.58m、短軸4.52m。 重複 なし 柱穴 平面形が隅丸方形あるいは円形の柱穴が7基確認された。各柱穴の規模は、長軸径46～60cm、短軸径42～58cm、深さ12～69cmとやや小さめでばらつきがある。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器甕。 時期 8世紀～9世紀。

(3) 壁穴状遺構

T—1号壁穴状遺構跡 (Fig.102 PL.57)

位置 X141・142、Y282・283 主軸方向 N—23°—E 形状・規模等 南西方向に長い楕円形を呈する。長軸3.5m、短軸2.74m、壁高36cm。 面積 8.03m² 床面 明確な硬化面は確認されなかった。 重複 なし 出土遺物 土師器甕、須恵器壺・甕、繩文土器、石器等。 時期 9世紀代。

T—2号壁穴状遺構跡 (Fig.103 PL.57・167)

位置 X141・142、Y278・279 主軸方向 N—3°—E 形状・規模等 概ね隅丸形を呈す。長軸3.0m、短軸2.84m、壁高26cm。 面積 8.19m² 床面 ほぼ水平で、明確な硬化面は確認されなかった。中央やや南寄りに土坑を1基確認した。 重複 なし 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・甕・壺、灰釉陶器椀、繩文土器、石器等。 時期 9世紀代と考えられる。

(4) 土坑・ピット (Fig.103・104 PL.58)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

5. 5区

(1) 壁穴建物跡

H—1号壁穴建物跡 (Fig.106 PL.60・169)

位置 X143・144、Y258・259 主軸方向 N—91°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.06m、短軸3.63m、壁高62cm。 面積 18.97m² 床面 貼床で、カマドの前面に硬化面、カマドの北側に灰の範囲がある。土坑状の掘り込みあり。周溝 北壁・南壁。 重複 D—2と重複、本遺構が古い。 貯蔵穴 南東隅に設置。 瓢 東壁中央よりやや南寄りに設置。残存状態は悪く、袖は壊されている。燃焼部幅50cm、煙道部長40cm。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・高台付盤・甕・壺、灰釉陶器椀・皿、石製品、椀形鍛治滓、繩文土器、石器等。 時期 8世紀後半。

H—2号壁穴建物跡 (Fig.107 PL.60・169)

位置 X163～165、Y238～240 主軸方向 N—98°—W 形状・規模等 方形を呈す。長軸6.16m、短軸6.08m、壁高55cm。 面積 39.92m² 床面 平坦な地山床。 周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 瓢 西壁中央よりやや南寄りに設置。煙道部は長く良く残っている。全長250cm、燃焼部幅60cm、焚口幅52cm。 出土遺物 土師器壺・甕・小型台付甕、須恵器壺・高台付壺・盤・甕・壺、不明器種、近世陶器碗、近

世染付磁器碗、縄文土器等。 時期 不明。

H—3号竪穴建物跡 (Fig.108 PL.60・61・169)

位置 X161・162、Y246・247 主軸方向 N—86°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.77m、短軸3.52m、壁高60cm。 面積 17.6ml 床面 平坦な地山床。住居中央と北東に床下土坑を確認。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。構築にあたっては、石材と粘土を用いている。石材は加工されていない自然石で、内壁が擁壁として利用されたと考えられる。全長174cm、燃焼部幅70cm、焚口幅60cm。 出土遺物 土師器環・暗文环・鉢・甕・台付甕・須恵器環・高台付环・甕、縄文土器、石器等。 時期 7世紀末～8世紀初頭。

H—4号竪穴建物跡 (Fig.108 PL.61)

位置 X165、Y251・252 主軸方向 N—51°—E 形状・規模等 住居の北西部隅が調査区内にあり、方形と推定される。長軸(3.06)m、短軸(1.33)m、壁高62cm。 面積 (3.08) ml 床面 地山床、明確な硬化面は確認されなかった。 周溝 不明 重複なし 貯蔵穴 調査区外。 窟 調査区外。 出土遺物 土師器環・甕・壺、須恵器環・甕、縄文土器。 時期 8世紀前半。

H—5号竪穴建物跡 (Fig.108 PL.61)

位置 X169・170、Y232・233 主軸方向 N—103°—E 形状・規模等 方形を呈する。長軸3.02m、短軸2.6m、壁高24cm。 面積 7.8ml 床面 平坦だが明瞭な硬化面は確認されなかった。 周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖は明瞭ではない。全長78cm、燃焼部幅60cm、焚口幅40cm。 出土遺物 土師器環・小型甕・壺・須恵器環・碗・ハソウ・甕・壺、近世陶器碗、石器等。 時期 9世紀後半。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.108 PL.61・169)

位置 X167・168、Y233 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸(3.24)m、短軸2.82m、壁高29cm。 面積 (8.87) ml 床面 やや凹凸のある地山床。 周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖は明瞭ではないが、構築材と考えられる石材が窓内部と周辺から検出されている。全長102cm燃焼部幅76cm、焚口部幅60cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗 時期 10世紀前半。

H—7号竪穴建物跡 (Fig.109 PL.62・170)

位置 X166、Y231 主軸方向 N—114°—E 形状・規模等 カマドと考えられる焼土を伴う範囲の周辺のみを検出したため、全体の形状は不明。長軸0.95m、短軸0.56m。 面積 (0.50) ml 床面 カマドと考えられる範囲から北にわずかに硬化面を確認。 重複なし 窟 東壁に設置したと考えられる。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗、縄文土器等。 時期 9世紀後半。

H—8号竪穴建物跡 (Fig.109 PL.62・170)

位置 X168・169、Y234・235 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 正方形を呈する。長軸4.5m、短軸4.5m、壁高56cm。 面積 20.53ml 床面 平坦で堅く締まる地山床。 周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁ほぼ中央に設置。右袖は耕作痕で壊されているが、左袖は残存している。全長134cm、

燃焼部幅(50)cm、焚口幅(50)cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗、灰釉陶器碗、縄文土器、石器等。 時期 6世紀後半。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.110 PL.62・170)

位置 X163・164、Y234・235 主軸方向 N—91°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.68m、短軸3.02m、壁高45cm。 面積 12.25m² 床面 平坦で堅く締まる地山床。 周溝 なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。残存状態は悪く、袖は不明瞭でない。全長150cm、燃焼部幅80cm、焚口幅62cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・环、石製品、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.110 PL.63・170)

位置 X166・167、Y231・232 主軸方向 N—95°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸3.81m、短軸3.64m、壁高64cm。 面積 15.04m² 床面 平坦で堅く締まる地山床。 周溝 なし 重複 H—20と重複、本遺構が新しい。 貯蔵穴 なし 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。残存状態は悪く、袖は残存していない。全長142cm、燃焼部幅50cm。 出土遺物 土師器環・暗文环・高环・甕・壺、須恵器蓋・环・盤、甕・石製品、薦編石、縄文土器、石器等。 時期 9世紀前半。

H—11号竪穴建物跡 (Fig.111 PL.63・170)

位置 X164・165、Y233・234 主軸方向 N—4°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.15m、短軸[3.48]m、壁高50cm。 面積 (15.36)m² 床面 平坦な地山床。 周溝 なし 重複 H—30と重複、本遺構が古い。 貯蔵穴 北東隅に設置。 窟 北壁中央よりやや東寄りに設置、東壁中央より南寄りにもカマドがあったと考えられるが、H—30によって壊されている。袖はほとんど残されていないが、構築材と考えられる石材を検出。全長90cm、燃焼部幅70cm、焚口幅64cm。 出土遺物 土師器環・甕・台付甕、須恵器蓋・环・碗・皿・甕・壺、灰釉陶器碗・皿、石製品、鉄製品、近世陶器碗、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H—12号竪穴建物跡 (Fig.112 PL.63・171)

位置 X164・165、Y243・244 主軸方向 N—100°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.14m、短軸3.32m、壁高26cm。 面積 14.3m² 床面 カマド手前から中央にかけて硬化面を検出。 周溝 なし 重複 なし 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部は良く残存している。構築にあたっては、石材と粘土を用いている。全長96cm、燃焼部幅50cm、焚口幅30cm。 出土遺物 土師器環・甕・台付甕、須恵器環・碗・高台付皿・甕・黑色土器環・皿、石製品、近世磁器碗、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H—13号竪穴建物跡 (Fig.112 PL.64・171)

位置 X167・168、Y242・243 主軸方向 N—95°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸2.46m、短軸1.82m、壁高20cm。 面積 4.91m² 床面 平坦な地山床。北側に床下土坑を確認。 周溝 なし 重複 なし 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖石と考えられる石材が残存している。全長70cm、燃焼部幅52cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環、縄文土器。 時期 9世紀前半。

H—14号竪穴建物跡 (Fig.112 PL.64)

位置 X160、Y236・237 主軸方向 N—76°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.02m、短軸2.63m、壁高23cm。面積 8.55m² 床面 平坦で堅く綿まる地山床。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖はわずかに残存する。カマド内からカマド周辺にかけて構築材として用いた石材が検出された。全長76cm、燃焼部幅50cm、焚口幅42cm。出土遺物 土師器壺・甕・台付甕・須恵器壺、黒色土器、縄文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H—15号竪穴建物跡 (Fig.113 PL.64・65)

位置 X160・161、Y239 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.15m、短軸2.84m、壁高32cm。面積 9.46m² 床面 平坦な地山床、硬化面は確認できない。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖石が残存する。全長64cm、燃焼部幅48cm、焚口幅42cm。出土遺物 土師器壺・甕・台付甕・須恵器壺・甕、灰釉陶器壺、縄文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H—16号竪穴建物跡 (Fig.113 PL.65・171)

位置 X162・163、Y240～242 主軸方向 N—96°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.3m、短軸4.8m、壁高43cm。面積 26.27m² 床面 住居の北西に床下土坑を確認。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部はほとんど残っていない。全長154cm、燃焼部幅64cm、焚口幅48cm。出土遺物 土師器壺・暗文壺・甕・須恵器蓋・环・甕・壺、黒色土器壺、灰釉陶器壺、鉄製品、近世陶器碗、縄文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H—17号竪穴建物跡 (Fig.114 PL.65・66・171)

位置 X166～168、Y240・241 主軸方向 N—72°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.12m、短軸3.54m、壁高81cm。面積 18.65m² 床面 平坦な地山床。カマド左側の東壁際に床下土坑を確認。周溝なし 重複 J—1と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。煙道部まで石材で組まれていた。煙道部の天井が崩れ落ちていた。全長250cm、燃焼部幅70cm、焚口幅52cm。出土遺物 土師器壺・甕・壺・須恵器壺・碗・鉄鉢・甕・壺、黒色土器壺、鉄製品、縄文土器、石器等。時期 7世紀後半。備考 住居を半分ほど掘り下げた時点で大量の石材が出土。石材は中央部に集中し、住居が半分ほど埋まった時点で投げ込まれた可能性がある。覆土の観察では人為的に埋められた形跡は確認できなかった。

H—18号竪穴建物跡 (Fig.115 PL.66)

位置 X168・169、Y242・243 主軸方向 N—80°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.54m、短軸2.25m、壁高33cm。面積 (7.9) m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 竈 調査区外、東壁に設置されたと考えられる。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・碗・盤・甕・壺、灰釉陶器壺、縄文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H—19号竪穴建物跡 (Fig.115 PL.66)

位置 X159・160、Y232・233 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.7m、短軸3.3m、壁高28cm。面積 12.99m² 床面 平坦な地山床。住居中央に床下土坑を確認した。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖がわずかに残る、

構築材と考えられる石材を検出。カマドの構築にあたっては石材と粘土を用いている。全長100cm、燃焼部幅62cm、焚口幅40cm。**出土遺物** 土師器壺・甕・台付甕、須恵器蓋・环・碗、縄文土器、石器等。**時期** 9世紀後半。

H—20号竪穴建物跡 (Fig.110 PL.66・67・171)

位置 X166・167、Y231～233 **主軸方向** N—68°—E **形状・規模等** ほぼ正方形を呈する。長軸4.78m、短軸4.64m、壁高59cm。**面積** 23.9m² **床面** 平坦な地山床。**周溝** なし **重複** H—10と重複、本遺構が古い。**貯藏穴** なし **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖が残されている。全長(140)cm、燃焼部幅54cm、焚口幅42cm。**出土遺物** 土師器有孔鉢・甕等。**時期** 6世紀後半。

H—21号竪穴建物跡 (Fig.115 PL.67・172)

位置 X144・145、Y250・251 **主軸方向** N—98°—E **形状・規模等** 東西に長い長方形を呈する。長軸4.2m、短軸3.2m、壁高60cm。**面積** 13.53m² **柱穴** 2基検出。南北距離1.1m。**床面** 貼床、カマド前に硬化面を確認。**周溝** 北壁・南壁。**重複** なし **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。右袖は壊されている。煙突部と推定される箇所に焼土と凹みあり。全長100cm、燃焼部幅52cm。**出土遺物** 土師器環・甕、須恵器蓋・环・甕、鉄製品、縄文土器等。**時期** 8世紀前半。

H—22号竪穴建物跡 (Fig.116 PL.68・172)

位置 X145・146、Y251～253 **主軸方向** N—84°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸5.45m、短軸(3.5)m、壁高57cm。**面積** (13.8)m² **床面** 貼床、カマド手前に硬化面を確認。**柱穴** 住居南東に柱穴と考えられるピットを検出、調査区外に他の柱穴がある可能性がある。**周溝** なし **重複** なし **竈** 残存状態は悪く、袖は壊されている。全長114cm、燃焼部幅76cm、焚口幅46cm。**出土遺物** 土師器環・甕・小型甕、須恵器蓋・环・甕・壺、鉄製品、内耳鍋、石器等。**時期** 8世紀前半。

H—23号竪穴建物跡 (Fig.117 PL.68・172)

位置 X143・144、Y256～258 **主軸方向** N—79°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈すると推定される。長軸6.28m、短軸(2.7)m、壁高80cm。**面積** (12.09)m² **床面** 地山床、カマド前面に硬化面あり。**柱穴** 住居南東に柱穴を1基確認、調査区外に他の柱穴があると考えられる。**周溝** 東壁。**重複** なし **貯藏穴** 南東隅に3基ピットあり。**竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。焚口から煙道部まで良好に残存。全長136cm、燃焼部幅60cm、焚口幅50cm。**出土遺物** 土師器環・鉢・甕・小型甕、須恵器蓋・环・甕・壺、縄文土器、石器等。**時期** 8世紀前半。**備考** 北壁の焼土・炭化物の堆積の上部に被熱した石が検出されたが、東壁のカマドに先行するカマドの可能性がある。

H—24号竪穴建物跡 (Fig.117 PL.68・172)

位置 X159・160、Y241・242 **主軸方向** N—84°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸3.4m、短軸2.78m、壁高35cm。**面積** 9.77m² **床面** 平坦な地山床。**周溝** なし **重複** なし **貯藏穴** 南東隅に設置。**竈** 東壁ほぼ中央に設置。両袖部は残存するが、煙道部は明瞭でない。右側壁から石材を検出。全長[120]cm、焚口幅[60]cm。**出土遺物** 土師器甕・台付甕、須恵器環・碗・皿・甕・壺、黑色土器环、灰釉陶器碗・皿・壺、羽口・鉄製品、近世陶器碗・甕、縄文土器、石器等。**時期** 9世紀後半。

H—25号竪穴建物跡 (Fig.118 PL.68・69・172)

位置 X162・163、Y242～244 主軸方向 N=90°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.49m、短軸[2.72] m、壁高30cm。面積 [12.93] m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複 D—1と重複、本遺構が古い。貯藏穴 南東隅、北西隅に1基ずつ設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。右袖は残存しない、左袖には補強材と考えられる石材が残存。全長150cm、燃焼部幅110cm。出土遺物 土師器壺・甕・台付甕、須恵器蓋・壺・碗・皿・甕・壺、黒色土器壺・皿、灰釉陶器椀、須恵器甕転用紡錘車、鉄製品、縄文土器等。時期 9世紀後半。

H—26号竪穴建物跡 (Fig.118 PL.69)

位置 X159・160、Y244・245 主軸方向 N=80°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.86m、短軸2.8m、壁高70cm。面積 11.65m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖はわずかに残存。全長140cm、燃焼部幅70cm、焚口幅60cm。出土遺物 土師器甕、須恵器蓋・壺・碗・甕・壺、黒色土器壺・皿、鐵製品、縄文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H—27号竪穴建物跡 (Fig.119 PL.69・70・173)

位置 X160・161、Y244・245 主軸方向 N=89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.6m、短軸2.86m、壁高48cm。面積 11.31m² 床面 平坦な地山床。住居南西に床下土坑を確認。周溝なし 重複なし 貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。左袖は残存していない。全長130cm、燃焼部幅64cm、焚口幅50cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・碗・甕・壺、長頸瓶、灰釉陶器椀、銅製品、近世陶器碗・皿、縄文土器等。時期 7世紀後半。

H—28号竪穴建物跡 (Fig.119 PL.70・173)

位置 X142～144、Y259・260 主軸方向 N=88°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.94m、短軸3.69m、壁高44cm。面積 (13.96) m² 床面 地山床、カマドの前面に硬化面あり。床面上に灰と焼土・炭化物の層が全面に堆積。土坑状の掘り込みが2ヶ所あり。周溝 北壁・南壁 重複なし 貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖はわずかに残存している、煙道部の残りは良好。全長180cm、燃焼部幅90cm、焚口幅66cm。出土遺物 土師器壺・小型甕・甕、須恵器蓋・壺・黑色土器壺・縄文土器等。時期 8世紀後半。備考 燃失住居の可能性あり。

H—29号竪穴建物跡 (Fig.120 PL.70・173)

位置 X145・146、Y258・259 主軸方向 N=89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.76m、短軸3.66m、壁高65cm。面積 21.01m² 床面 地山床、カマド前面から南側にかけて硬化面あり。東辺にテラス状の高まりあり。土坑状の掘り込みが2ヶ所あり。周溝 北壁・南壁・西壁。重複なし 貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖、煙道が残存している。全長200cm、燃焼部幅60cm、焚口幅50cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・高台付壺・甕・壺、黒色土器壺・縄文土器、石器等。時期 8世紀前半。

H—30号竪穴建物跡 (Fig.111 PL.70・71・173)

位置 X165・166、Y233・234 主軸方向 N=85°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸[3.96] m、短軸3.02m、壁高57cm。面積 [12.21] m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複 H—11

と重複、本遺構が新しい。 貯藏穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部がわずかに残存する。全長 [130] cm、燃焼部幅 [60] cm、焚口幅56cm。 出土遺物 土師器環・小型壺・台付壺・壺、須恵器蓋・环、近世陶器碗、石器等。 時期 8世紀前半。

H—31号竪穴建物跡 (Fig.121 PL.71)

位置 X161・162、Y240・241 主軸方向 N—85°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.32m、短軸2.58m、壁高35cm。 面積 (8.21) m² 床面 平坦な地山床。 周溝 なし 重複 H—16と重複、本遺構が古い。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置と推定される。構築材として用いられた石材が検出された。 出土遺物 土師器環・壺、須恵器壺、薦編石、近世陶器碗、繩文土器等。 時期 不明。

H—32号竪穴建物跡 (Fig.121 PL.71・72・173)

位置 X145・146、Y260・261 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.18m、短軸3.34m、壁高50cm。 面積 (14.25) m² 床面 地山床、カマドの前面から全面に硬化面あり。西辺にテラス状の高まりがあるがT—1に切られて明確ではない。 周溝 なし 重複 T—1、P—1と重複、本遺構が最も古い。 貯藏穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖が残存し、天井石も一部残存。全長110cm、燃焼部幅42cm、焚口幅38cm。 出土遺物 土師器環・台付壺・壺、須恵器蓋・环・碗・壺・短頸壺、石製品、鉄製品、繩文土器、石器、炭化種子等。 時期 8世紀前半。

H—33号竪穴建物跡 (Fig.122 PL.72・174)

位置 X146～148、Y261・262 主軸方向 N—75°—E 形状・規模等 方形と推定される。長軸 (3.26) m、短軸 (2.06) m、壁高59cm。 面積 (5.06) m² 床面 貼床で、床面東半分に粘土を貼っており硬化している。北東隅に土坑が1基ある。 周溝 なし 重複 なし 貯藏穴 北東隅の土坑は貯藏穴の可能性がある。 窯 東壁、北辺から2.1mに設置。袖は壊されており、煙道部・天井部が一部残存。全長90cm、焚口幅 (80) cm。 出土遺物 出土遺物：土師器環・小型壺・壺、須恵器蓋・环・高盤・壺・壺・円面鏡、鉄製品、繩文土器、石器等。 時期 8世紀前半。

H—34号竪穴建物跡 (Fig.122 PL.72・73・174)

位置 X150・151、Y260・261 主軸方向 N—85°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.42m、短軸4.22m、壁高67cm。 面積 24.82m² 床面 貼床で、床面全面が硬化している。床面直上に灰と焼土・炭化物の層が全面に堆積。 柱穴 住居北寄りに柱穴を2基確認した。東西距離1.5m。 周溝 北壁・南壁・東壁・西壁のほぼ全周。 重複 なし 貯藏穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。左袖は壊されているが、天井部・煙道部・煙突部などが良好に残存している。煙出し用の土師器壺が2個体検出された。全長160cm、焚口幅120cm。 出土遺物 土師器環・台付壺・壺、須恵器蓋・环・長頸瓶・小型壺・壺・壺、鉄製品、近世染付碗、石製品、繩文土器、弥生土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H—35号竪穴建物跡 (Fig.123 PL.73・74)

位置 X157・158、Y235・236 主軸方向 N—91°—E 形状・規模等 方形を呈する。長軸4.1m、短軸3.76m、壁高49cm。 面積 16.14m² 床面 平坦な地山床。 柱穴 住居南西に柱穴を1基確認。 周溝 なし 重複 なし 窯 東壁中央やや南寄りに設置。両袖が残存し、残存状態は良好。全長140cm、燃焼部幅90cm、焚口幅80cm。 出土遺物 土師器環・高环・壺、須恵器蓋・环・壺、繩文土器、石器等。 時期 9世紀

後半。

H—36号竪穴建物跡 (Fig.123 PL.74・174)

位置 X158・159、Y237・238 **主軸方向** N—91°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸3.99m、短軸3.22m、壁高41cm。 **面積** 13.11m² **床面** 平坦な地山床。 **周溝** なし **重複** なし **貯蔵穴** 南東隅に設置。 **竈** 東壁中央よりやや北寄りに設置。両袖、袖石が残存。全長100cm、燃焼部幅70cm。 **出土遺物** 土師器環・小型甕・甕・須恵器環・碗・壺・甕・灰釉陶器椀・縄文土器・石器等。 **時期** 9世紀後半。

H—37号竪穴建物跡 (Fig.124 PL.74・175)

位置 X156・157、Y230・231 **主軸方向** (新) N—108°—E (旧) N—94°—E **形状・規模等** 東西に長い長方形を呈する。2軒の住居がほぼ同じ位置に建て替えられている。長軸(新)3.58m(旧)3.20m、短軸(新)2.62m(旧)3.1m、壁高(新)69cm(旧)31cm。 **面積** (新) 11.79m² (旧) 11.79m²。 **床面** 貼床、新しい方が深く、古い方が浅い。古い床面は硬化が顕著ではない。 **周溝** なし **重複** 新旧2軒重複。 **貯蔵穴** 新旧とも南東隅に設置。 **竈** (新) 東壁ほぼ中央に設置。全長110cm、焚口幅58cm。(旧) 東壁中央より南寄りに設置。全長(74)cm、燃焼部幅50cm。 **出土遺物** 土師器環・鉢・甕・須恵器環・碗・鉢・壺・甕・薦編石・縄文土器・石器等。 **時期** 新・旧とも9世紀後半。

H—38号竪穴建物跡 (Fig.124 PL.74・75・175)

位置 X157、Y229・230 **主軸方向** N—106°—E **形状・規模等** 方形と推定される。北側は調査区外。長軸2.84m、短軸(2.40)m、壁高70cm。 **面積** (6.38)m² **床面** 平坦な地山床。 **周溝** なし **重複** なし **貯蔵穴** 南東隅に設置。 **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖が残り残存状態は良好。カマド手前に構築材と考えられる石材が分布。全長110cm、燃焼部幅60cm、焚口幅50cm。 **出土遺物** 土師器環・甕・須恵器環・椀形鍛治溝。 **時期** 7世紀後半。

H—39号竪穴建物跡 (Fig.125 PL.75・175)

位置 X160・161、Y229~231 **主軸方向** N—86°—E **形状・規模等** 東西に長い長方形を呈する。長軸4.82m、短軸4.56m、壁高74cm。 **面積** 21.85m² **床面** 貼床、カマド手前に硬化面を確認。 **周溝** なし **重複** H—40と重複、本遺構が新しい。 **貯蔵穴** 南東隅に設置。 **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖・煙道部とも良好に残存。全長124cm、燃焼部幅48cm、焚口幅32cm。 **出土遺物** 土師器環・鉢・壺・甕・須恵器環・甕・土製品等。 **時期** 6世紀後半。

H—40号竪穴建物跡 (Fig.125 PL.75・175)

位置 X159・160、Y229・230 **主軸方向** N—85°—E **形状・規模等** 不整形。長軸3.99m、短軸(1.97)m、壁高40cm。 **面積** (6.89)m² **床面** 土坑と4つの窪みが検出され、土器片や鉄滓が出土。中央付近にわずかに硬化面を確認した。 **周溝** なし **重複** H—39と重複、本遺構が古い。 **竈** 調査区外? **出土遺物** 土師器環・甕・須恵器環・壺・甕・灰釉陶器椀・布目瓦・鉄製品・鉄滓・椀形鍛治溝・羽口・石器等。 **時期** 9世紀後半。 **備考** 製鉄関連遺構であると思われる。住居番号を付番しているが、人が居住していた痕跡は認められない。

H—41号竪穴建物跡 (Fig.125 PL.75・76・176)

位置 X148・149、Y260・261 主軸方向 N—101°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸 [4.10] m、短軸3.87m、壁高39cm。 面積 [15.36] m² 床面 貼床で、カマドの前面に硬化面がある。 周溝 北壁・南壁。 重複 H—42と重複、本遺構が新しい。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖は残存しているが、煙道部は壊されている。全長 (60) cm、焚口幅50cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋・环・碗・壺・甕、黑色土器塊、石製品、鉄製品、鉄滓、縄文土器、石器等。 時期 8世紀後半。

H—42号竪穴建物跡 (Fig.126 PL.76・176)

位置 X148・149、Y260・261 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸 5.35m、短軸4.1m、壁高82cm。 面積 22.21m² 床面 貼床で、カマドの前面に硬化面がある。 柱穴 住居南東と北東に柱穴を確認。南北距離3.4m。 周溝 北壁・南壁・東壁・西壁 重複 H—41と重複、本遺構が古い。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。ほぼH—41に壊されている。袖の基部と燃焼部の一部が残存。全長 (60) cm、焚口幅64cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗・壺・甕、石製品、鉄製品、近世陶器碗、縄文土器等。 時期 8世紀前半。

H—43号竪穴建物跡 (Fig.126 PL.76・176)

位置 X151・152、Y262・263 主軸方向 N—64°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸 (3.7) m、短軸2.8m、壁高33cm。 面積 (8.85)m² 床面 地山床。カマド前面に硬化面あり。 周溝 北壁・東壁・西壁 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや北寄りに設置と推定される。残存状態は悪く、袖は壊されている。全長164cm、焚口幅76cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗・長頸瓶・壺・甕、黑色土器環、石製品、縄文土器、弥生土器（中期）、石器等。 時期 9世紀前半。

H—44号竪穴建物跡 (Fig.127 PL.76)

位置 X154・155、Y229～231 主軸方向 N—107°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸 3.64m、短軸3.52m、壁高57cm。 面積 13.83m² 床面 平坦な地山床。住居の北東隅に床下土坑を確認。周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央に設置。両袖と煙道部が残存。全長120cm、燃焼部幅74cm、焚口部幅54cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・甕、縄文土器、石器。 時期 7世紀後半。

H—45号竪穴建物跡 (Fig.127 PL.76・77・176)

位置 X156・157、Y234・235 主軸方向 N—93°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸 4.24m、短軸3.36m、壁高50cm。 面積 14.62m² 床面 西側に貼床の一部が残存。周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部・煙道部が残存。カマドの内部に構築材と考えられる石材が検出された。全長130cm、焚口部80cm。 出土遺物 土師器環・小型甕・台付甕・甕、須恵器蓋・环・甕、鶴編石、鉄製品、縄文土器、石器等。 時期 9世紀前半。

H—46号竪穴建物跡 (Fig.127 PL.77・176)

位置 X155・156、Y237・238 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸 2.94m、短軸2.62m、壁高30cm。 面積 7.88m² 床面 平坦な地山床。 周溝 なし 重複 なし 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖はほとんど残っていない。右袖石とカマド手前に構築材の石材が出土。全長100cm、焚口幅70cm。 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗・壺・甕、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H—47号竪穴建物跡 (Fig.128 PL.77・78・177)

位置 X153～155、Y234～236 主軸方向 N—98°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸4.98m、短軸4.2m、壁高70cm。面積 19.89m² 床面 貼床、西側に床下土坑を、南北壁際に小ピットを確認した。周溝なし 重複なし 貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央やや南寄りに設置。両袖・煙道部とも残存。全長182cm、焚口幅74cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・削り出し高台付・壺・甕・鐵製品、繩文土器、石器等。時期 8世紀前半。備考 南壁中央付近が張り出すように膨らんでいる。住居の入り口であった可能性も考えられる。

H—48号竪穴建物跡 (Fig.128 PL.78・177)

位置 X152・153、Y232・233 主軸方向 N—105°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.18m、短軸2.66m、壁高38cm。面積 8.65m² 床面 地山床。南西隅と中央に床下土坑を確認。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。残存状態は悪く、袖は残っていない。全長80cm、燃焼部幅60cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・甕、羽口・鐵製品、鉄滓、楕形鍛治滓、湯玉、鍛造刺片、繩文土器等。時期 8世紀前半。備考 鍛冶遺構。遺構を掘り下げ始めて間もなく多くの石材が検出された。

H—49号竪穴建物跡 (Fig.129 PL.78・79・177)

位置 X151～153、Y237・238 主軸方向 カマド①N—5°—E カマド②N—106°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.91m、短軸3.49m、壁高42cm。面積 15.0m² 床面 貼床、中央西側に床下土坑を確認。周溝なし 重複 H—50と重複、本遺構が新しい。貯藏穴 南東隅に1基、北東隅に1基設置。竈 北壁ほぼ中央（カマド①）、東壁中央よりやや南寄り（カマド②）に設置。カマド①は粘土と石材によって構築されている。カマド①のほうが新しい。全長104cm、燃焼部幅50cm、焚口幅48cm。カマド②は左袖が残っていない。全長110cm、燃焼部幅90cm。出土遺物 土師器壺・小型甕・甕、須恵器蓋・壺・甕・灰釉陶器壺、石器等。時期 9世紀後半。

H—50号竪穴建物跡 (Fig.130 PL.79・177・178)

位置 X151・152、Y237・238 主軸方向 N—108°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.34m、短軸3.5m、壁高64cm。面積 20.32m² 床面 貼床、カマド手前に床下土坑を確認。周溝 南壁・西壁 重複 H—49と重複、本遺構が古い。貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。袖はわずかに残存する。左側面はH—49によって切られている。全長140cm。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器蓋・壺・鉢・甕・壺、灰釉陶器壺、剪石等。時期 8世紀前半。

H—51号竪穴建物跡 (Fig.130 PL.79・80・178)

位置 X150・151、Y236 主軸方向 N—82°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.01m、短軸2.0m、壁高52cm。面積 6.33m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 竈 南東隅に設置。袖石と天井石？と構築材と考えられる石材を検出した。残存状態は良好でない。全長70cm、燃焼部幅50cm。出土遺物 土師器壺・鉢・小型甕・甕、須恵器壺・甕 時期 8世紀前半。

H—52号竪穴建物跡 (Fig.130 PL.80・178)

位置 X154・155、Y241・242 主軸方向 N—106°—E 形状・規模等 不整形。長軸3.42m、短軸3.4m、壁高40cm。面積 11.54m² 床面 貼床、カマド手前に硬化面を確認。周溝 南壁・西壁 重複なし 貯

貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。右袖は残存していない、煙道部は良く残る。全長130cm、燃焼部幅60cm。**出土遺物** 土師器環・甕・須恵器環・碗・甕、縄文土器、石器等。**時期** 9世紀後半。

H—53号竪穴建物跡 (Fig.131 PL.80)

位置 X149・150、Y238～240 **主軸方向** N—95°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸4.22m、短軸[2.5] m、壁高51cm。**面積** 10.86m² **床面** 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央より南寄りに設置。袖部・煙道部残存し、残存状態は良好。全長100cm、燃焼部幅70cm、焚口幅46cm。**出土遺物** 土師器環・台付甕・甕・須恵器甕・壺、鉄製品、薦編石等。**時期** 8世紀代。

H—54号竪穴建物跡 (Fig.131 PL.81・178)

位置 X153・154、Y240・241 **主軸方向** N—93°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸[3.78] m、短軸3.04m、壁高54cm。**面積** [12.23] m² **床面** 貼床、中央付近に床下土坑1基、西壁際中央に土坑1基確認。周溝なし 重複なし 貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖石が残存し、煙道は長く伸びる。構築にあたっては、石材と粘土を用いる全長120cm、焚口幅50cm。**出土遺物** 土師器環・甕・須恵器蓋・环・碗・鉢・甕・壺、ロクロ甕、灰釉陶器椀、石製品、鉄製品、縄文土器、石器等。**時期** 9世紀後半。

H—55号竪穴建物跡 (Fig.132 PL.81・178)

位置 X153・154、Y241・242 **主軸方向** N—74°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸4.22m、短軸3.34m、壁高72cm。**面積** 15.85m² **床面** 貼床、カマドの手前から住居中央にかけて硬化面が広がる。周溝なし 重複なし 貯藏穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄り（カマド①）、東壁中央よりやや北寄り（カマド②）に設置。北寄りのカマドのほうが新しい。カマド①は全長170cm、焚口幅70cm。カマド②は全長150cm、燃焼部幅70cm、焚口幅64cm。**出土遺物** 土師器環・台付甕・甕・須恵器環・碗・甕・壺・壺、灰釉陶器椀、薦編石、縄文土器、石器等。**時期** 9世紀前半。

H—56号竪穴建物跡 (Fig.133 PL.82)

位置 X156～158、Y241・242 **主軸方向** N—111°—E **形状・規模等** 東西に長い長方形を呈する。長軸3.19m、短軸3.0m、壁高56cm。**面積** 10.27m² **床面** 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部は細く残存、煙道部は非常に長い。全長210cm、焚口幅50cm。**出土遺物** 土師器環・甕・須恵器甕・壺、薦編石、黒色土器環（破片）、縄文土器、石器等。**時期** 不明。

H—57号竪穴建物跡 (Fig.133 PL.82・178)

位置 X157・158、Y243～245 **主軸方向** N—89°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸5.2m、短軸3.23m、壁高48cm。**面積** 17.55m² **床面** 貼床で、非常に硬く締まる。北東隅に床下土坑を確認。周溝なし 重複なし 竈 東壁ほぼ中央に設置。残存状態は悪い。全長100cm、焚口幅60cm。**出土遺物** 土師器環・小型台付甕・甕・須恵器蓋・环・碗・甕・壺、黑色土器環（破片）、縄文土器、石器等。**時期** 9世紀後半。

H—58号竪穴建物跡 (Fig.134 PL.82・83・179)

位置 X156・157、Y244～246 **主軸方向** N—74°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸

5.5m、短軸3.62m、壁高40cm。 面積 20.85m² 床面 貼床、カマド手前から住居中央にかけて硬化面が広がる。 周溝 なし 重複 H-71と重複、本遺構が新しい。 貯蔵穴 南東隅に1基、南西隅に1基設置。 窟 東壁中央より南寄りに設置。 残存状態は悪く、左袖は残存していない。全長 [164] cm、燃焼部幅 [100] cm。
出土遺物 土師器環・台付甕・甕・須恵器蓋・环・碗・甕・壺、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H-59号竪穴建物跡 (Fig.135 PL.83・179)

位置 X154~156、Y247・248 主軸方向 N-70°-E 形状・規模等 北半分をH-61に切られるが、方形と推定される。長軸5.01m、短軸(3.65) m、壁高63cm。 面積 (20.62) m² 床面 貼床、全体的に硬化している。 柱穴 住居の南東と南西に柱穴を確認した。東西距離2.8m。 周溝 なし 重複 H-60、H-61と重複と重複、H-61より古く、H-60より新しい。 窟 東壁中央より南寄りに設置されたと推定される。構築にあたっては、粘土を多量に用いた。全長240cm、燃焼部幅110cm、焚口幅104cm。 出土遺物 土師器環・台付甕・甕・須恵器蓋・环・碗・壺、石製品、鉄製品、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H-60号竪穴建物跡 (Fig.136 PL.83・84・179・180)

位置 X155・156、Y247・248 主軸方向 N-79°-E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸5.56m、短軸4.10m、壁高50cm。 面積 (15.19) m² 床面 貼床、カマド手前に硬化面を確認。 周溝 なし 重複 H-59と重複、本遺構が古い。 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部・煙道部が良く残る、手前に構築材の石材が分布。構築にあたっては粘土と石材が用いられた。全長140cm、焚口幅50cm。 出土遺物 土師器環・小型壺・小形甕・甕・須恵器蓋・縄文土器、石器等。 時期 6世紀後半。

H-61号竪穴建物跡 (Fig.136 PL.84・85・180・181)

位置 X153~155、Y245~247 主軸方向 カマド①N-71°-E カマド②N-75°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸7.8m、短軸6.0m、壁高72cm。 面積 50.13m² 床面 貼床。住居中央から北壁にかけて床下土坑が3基確認できた。 周溝 北壁・西壁 重複 H-59、H-62と重複、本遺構が最も新しい。 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁中央（カマド①）と東壁中央より南寄り（カマド②）に設置。カマド②からカマド①へ作り替えられた。（カマド①）袖部はわずかに残存する。煙道は良く残る。作りが丁寧で規模が大きい。全長180cm、焚口幅90cm。（カマド②）残存状態は良好でない。全長200cm、焚口幅70cm。 出土遺物 土師器環・小型台付甕・甕・須恵器蓋・皿・环・碗・甕・壺、黒色土器皿、灰釉陶器椀・壺、カワラケ、鉄滓、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H-62号竪穴建物跡 (Fig.135 PL.85・181)

位置 X153・154、Y245・246 主軸方向 N-97°-E 形状・規模等 方形と推定される。長軸3.74m、短軸(2.0) m、壁高44cm。 面積 (4.88) m² 床面 明瞭な硬化面は確認できない。 周溝 なし 重複 H-61と重複、本遺構が古い。 貯蔵穴 窟 H-61によって壊されている。 出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・碗・甕、黒色土器等。 時期 8世紀後半。

H-63号竪穴建物跡 (Fig.137 PL.85・181)

位置 X152・153、Y247 主軸方向 N-92°-E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.16m、短軸2.2m、壁高24cm。 面積 7.53m² 床面 地山床。 周溝 なし 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窟 東壁中央やや南寄りに設置。両袖が残存している。全長100cm、焚口幅80cm。 出土遺物 土師器環・甕、

須恵器壺・甕・鉄製品、縄文土器等。 時期 9世紀後半。

H—64号竪穴建物跡 (Fig.137 PL.87・181)

位置 X150～152、Y246・247 主軸方向 N—97°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸4.91m、短軸3.36m、壁高37cm。 面積 17.53m² 床面 貼床。西壁中央付近と北壁中央付近に床下土坑を確認した。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖が残存し、煙道も長く残る。袖石と天井石と構築材と考えられる石材を検出した。全長150cm、焚口幅90cm。 出土遺物 土師器壺・小型甕・台付甕・甕、須恵器蓋・皿・耳皿・壺・碗・甕・壺、灰釉陶器椀・鉄製品、石器等。 時期 9世紀後半。

H—65号竪穴建物跡 (Fig.138 PL.87・181)

位置 X148～150、Y245～247 主軸方向 N—97°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.86m、短軸4.1m、壁高44cm。 面積 25.51m² 床面 地山床。カマド前面に硬化面あり、一度造り替えが行われている。内側に周溝がめぐる。周溝 北壁・南壁・東壁・西壁。 重複 D—6・7・8と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 南東隅にピットが4基あるが貯蔵穴かは不明。竈 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は悪く、袖は基部を残して壊されている。全長90cm、燃焼部幅120cm。 出土遺物 土師器壺・台付甕・甕、須恵器壺・甕・壺、鉄製品、縄文土器等。 時期 8世紀前半。 備考 床面内側の周溝から南辺の張り出し部分にかけての南北5m×東西3.4mの住居があり、その後外周の南北5.7m×東西4.2mの住居に造り替えが行われたと推定される。明確な時期差はないため、同住居とした。

H—66号竪穴建物跡 (Fig.139 PL.87)

位置 X151・152、Y248 主軸方向 N—86°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸3.1m、短軸2.95m、壁高32cm。 面積 (9.56)m² 床面 地山床。硬化面が確認できなかった。周溝なし 重複 H—67、D—5と重複、本遺構が最も古い。竈 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は悪く、煙道部はH—67に壊されている。全長(90)cm、焚口幅60cm。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・甕・壺、縄文土器等。 時期 8世紀後半。

H—67号竪穴建物跡 (Fig.139 PL.87・182)

位置 X152・153、Y248・249 主軸方向 N—83°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.54m、短軸2.79m、壁高57cm。 面積 約10.67m² 床面 貼床で、カマドの前面に硬化面あり。床面直上に灰と焼土・炭化物の層が全面に堆積。南壁中央付近と南西隅にピット・土坑を確認。周溝 北壁・南壁・東壁・西壁。 重複 H—66と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は悪く、袖は壊されている。全長90cm、焚口幅60cm。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・碗・盤・甕・壺、縄文土器、石器等。 時期 8世紀後半。

H—68号竪穴建物跡 (Fig.140 PL.88)

位置 X154、Y249・250 主軸方向 N—71°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.32m、短軸2.79m、壁高29cm。 面積 9.47m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 竈 東壁中央より北寄りに設置。残存状態は悪く、袖は壊されている。全長50cm、焚口幅64cm。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・甕、縄文土器等。 時期 9世紀前半。

H—69号竪穴建物跡 (Fig.140 PL.88・89・90・182)

位置 X157～159、Y249～251 主軸方向 N-76°～E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸7.4m、短軸5.5m、壁高102cm。面積 41.96m² 床面 貼床で床面全面が非常に硬く締まる。柱穴 住居の外に8基確認。周溝 北壁・南壁・東壁・西壁。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。両袖は東壁の棚状遺構と一体化している。煙道は長く良く残る。全長200cm、焚口幅80cm、煙道部長90cm。出土遺物 土師器壺・台付甕・甕・須恵器蓋・壺・碗・甕・壺、鉄滓、縄文土器・石器等。時期 9世紀後半。備考 住居の規模に対して出土遺物が少ない。建物外に囲むように柱穴を検出、外に柱を持つ住居跡と考えられる。東壁の棚状の遺構からも遺物（土師壺）等が出土した。北壁・東壁の壁面に鉄分の凝集がみられた。

H—70号竪穴建物跡 (Fig.141 PL.90・182)

位置 X146・147、Y248・249 主軸方向 N-68°～E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.61m、短軸[3.98]m、壁高53cm。面積 (14.67) m² 床面 一部貼床、焼土・炭化物が混じった硬化面が床面東側に広がっている。土坑が6基、ピットが2基検出された。周溝 南壁・東壁・西壁。重複 W-2と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 不明。竈 W-2によって壊されている。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・甕・壺・甕・長頸瓶、鉄製品、縄文土器等。時期 8世紀後半。

H—71号竪穴建物跡 (Fig.142 PL.90・182)

位置 X157、Y245・246 主軸方向 N-87°～E 形状・規模等 方形と推定される。長軸3.32m、短軸(1.65)m、壁高42cm。面積 (5.78) m² 床面 貼床、カマド手前に硬化面を確認。周溝なし 重複 H-58と重複、本遺構が古い。竈 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は良好、袖・煙道とも良く残る。全長120cm、焚口幅42cm、煙道部長50cm。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器蓋・碗・甕・壺、縄文土器等。時期 8世紀前半。

H—72号竪穴建物跡 (Fig.142 PL.90)

位置 X158・159、Y247・248 主軸方向 N-75°～E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.1m、短軸3.64m、壁高70cm。面積 15.55m² 床面 貼床、北壁際に床下土坑を1基確認。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖、煙道とも良好に残存。全長100cm、焚口幅44cm、煙道部長50cm。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・碗・甕・壺、黒色土器壺・縄文土器等。時期 7世紀後半。

H—73号竪穴建物跡 (Fig.143 PL.90)

位置 X168、Y230 主軸方向 N-64°～E 形状・規模等 方形と推定される。長軸(2.1)m、短軸(1.6)m、壁高62cm。面積 (2.25) m² 床面 明瞭な硬化面は確認されなかった。周溝不明。重複なし 貯蔵穴 不明。竈 調査区外。出土遺物 土師器壺・甕。時期 8世紀後半。

H—74号竪穴建物跡 (Fig.143 PL.90・91)

位置 X164・165、Y236・237 主軸方向 N-103°～E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.71m、短軸3.3m、壁高38cm。面積 12.66m² 床面 搾乱が東西に大きく入る。地山床、カマド前面に硬化面あり。周溝なし 重複なし 貯蔵穴なし（耕作痕によって壊されてしまった可能性あり）。竈 東

壁中央よりやや南寄りに設置。全長130cm、焚口幅90cm。**出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器壺・碗・甕・壺、黒色土器壺、鉄製品、縄文土器等。**時期** 9世紀後半。

H—75号竪穴建物跡 (Fig.144 PL.91・182)

位置 X151・152、Y238～240 **主軸方向** N—83°—E **形状・規模等** ほぼ正方形を呈する。長軸5.7m、短軸5.6m、壁高64cm。**面積** 33.64m² **床面** 地山床。カマド前面に硬化面あり。**周溝** 北壁・南壁・東壁・西壁。**重複** なし **貯蔵穴** 北東隅に設置。**窯** 東壁中央よりやや北寄りに設置。燃焼部から煙道部への立ち上がり、両袖が残存。全長120cm、焚口幅40cm。**出土遺物** 土師器壺・小型壺・小形甕・甕、須恵器碗・甕、灰釉陶器椀・縄文土器、石器等。**時期** 6世紀後半。

H—76号竪穴建物跡 (Fig.145 PL.91・92・182)

位置 X151・152、Y240～242 **主軸方向** N—91°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸5.24m、短軸3.68m、壁高44cm。**面積** 21.1m² **床面** カマド手前の住居中央付近が硬化し、焼土が分布。**周溝** 北壁・南壁・東壁・西壁。**重複** P—22と重複、本遺構が古い。**貯蔵穴** 南東隅に2基設置。**窯** 東壁中央より南寄りに設置。両袖・煙道とも良く残る。側壁に補強材の石材を検出した。全長150cm、焚口幅50cm。**出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・碗・甕・壺、灰釉陶器椀・段皿・土製品・石製品・鉄製品、銅錢・炭化物、縄文土器等。**時期** 9世紀後半。

H—77号竪穴建物跡 (Fig.145 PL.92・182)

位置 X150、Y235 **主軸方向** N—100°—E **形状・規模等** 不明。**面積** (0.53) m² **重複** なし **貯蔵穴** 調査区外。**窯** 燃焼部の一部と煙道部のみを検出（他は調査区外）。全長(90)cm、最大幅84cm。**出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器甕・縄文土器等。**時期** 8世紀後半。

H—78号竪穴建物跡 (Fig.145 PL.92・182)

位置 X157、Y251・252 **主軸方向** N—72°—E **形状・規模等** 方形と推測される。長軸(2.2)m、短軸(1.98)m、壁高54cm。**面積** (2.87)m² **床面** 明瞭な硬化面は確認できなかった。**周溝** 不明 **重複** W—2と重複、本遺構が古い。**貯蔵穴** 調査区外。**窯** 調査区外。**出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器甕・甕。**時期** 9世紀後半。

J—1号竪穴建物跡 (Fig.147 PL.97・98・183)

位置 X166～168、Y239・240 **主軸方向** N—113°—E **形状・規模等** 圓丸方形と推測される。長軸4.11m、短軸(3.2)m、壁高27cm。**面積** (10.22)m² **床面** 明確な硬化面は確認されていない。**重複** H—17と重複、本遺構が古い。**炉** 住居中央に位置する。真ん中には深鉢が埋められており、炉の石組みの南側はH—17によって壊されている。**出土遺物** 縄文土器、石器等。**時期** 縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）。

J—2号竪穴建物跡 (Fig.147 PL.98・183)

位置 X163・164、Y249・250 **主軸方向** N—129°—E **形状・規模等** 圓丸方形を呈する。長軸3.91m、短軸3.72m、壁高76cm。**面積** 13.35m² **床面** 明確な硬化面は確認されなかった。**重複** W—1と重複、本遺構が古い。**炉** 住居南壁付近に小さな円を描くように石材を配置した痕跡が検出されたが、焼土は検出され

なかった。 出土遺物 繩文土器、石器等。 時期 繩文時代前期後葉（諸磯b式期新段階）。

(2) 据立柱建物跡

B—1号据立柱建物跡 (Fig.146 PL.92・93・94)

位置 X160～162、Y249～251 主軸方向 N—16°—W 形状・規模等 2間×2間でほぼ正方形を呈する。長軸5.4m、短軸5.3m。重複なし 柱穴 平面形が隅丸方形の柱穴が10基確認された。その内、P_aとP_bは90°方向を変えて作り替えられている。柱の当たりが確認できる。各柱穴の規模は、長軸径0.8～1.22cm、短軸径0.5～1.0cm、深さ49～72cmとややばらつきがある。 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺、繩文土器等 時期 9世紀代。

(3) 溝跡

W—1号溝跡 (Fig.148 PL.94・183・184)

位置 X161～165、Y248～253 主軸方向 N—46°—E 長さ (25.3) m 上幅2.18m、下幅1.46m、深さ0.77m。断面形状 逆台形。重複 J—2、W—1と重複。J—2より新しく、W—2より古い。出土遺物 繩文土器、石器、土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・甕・高盤・平瓶・甕・壺、灰釉陶器碗、鉄製品等。時期 7世紀後半～8世紀前半および9世紀。備考 北東から南西方向へ直線的に走る。溝の底部には川砂が堆積し、流水があったことがうかがえる。

W—2号溝跡 (Fig.148 PL.95)

位置 X146～161、Y248～253 主軸方向 N—74°—W 長さ (59.5) m 上幅2.96m、下幅0.74m、深さ1.21m。断面形状 V字状。重複 H—70、H—78、W—1と重複。本遺構が最も新しい。出土遺物 繩文土器、石器、土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・甕、灰釉陶器碗・壺、近世染付碗、鉄製品。時期 8世紀前半。備考 ほぼ東西方向に直線的に走る。一部土橋状に溝底部が盛り上がっている。また、法面に複数のピットがあり、柵列である可能性がある。

(4) 土坑・ピット・落ち込み (Fig.147 PL.96・97・183)

土坑・ピット・落ち込みについては、Tab.5 土坑・ピット・落ち込み計測表を参照のこと。

6. 7区

(1) 古墳

M—1 (Fig.157 PL.105・106)

位置 X61、Y230～232 主軸方向 N—9°—E 墳丘 削平されていて形状は不明。石室 無袖型横穴式石室。全長4.69m、玄室長2.85m、玄室幅1.0m、羨道長1.84m、羨道幅0.95m。石材は粗粒輝石安山岩を使用している。石室西側に裏込石と考えられる10cm台の石がわずかに残されている。周囲 7区トレンチ西側で周囲の一部を検出。平面形状は、東側除く馬蹄形状となると考えられる。しかし、石室開口部と周囲の開く部分が一致していないことから、別の古墳の周囲であると考えられる。周囲の覆土は、最上層にAs-Bを非常に多く含む層が検出され、中層以下にはAs-C・混土やローム土等が検出されている。最大幅7.45m、深さ0.94mを測る。重複なし 出土遺物 土師器壺・甕、鉄製品 時期 7世紀。

(2) 穴室建物跡

H—1号穴室建物跡 (Fig.151 PL.100)

位置 X87・88、Y252・253 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 方形を呈すると推定される。長軸3.7m、短軸(2.62)m、壁高43cm。面積(9.53)m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 貯蔵穴調査区外。竈 調査区外。出土遺物 土師器壺・甕。時期 7世紀後半。

H—2号穴室建物跡 (Fig.151 PL.100・184)

位置 X84~86、Y250・251 主軸方向 N—81°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸3.78m、短軸3.68m、壁高58cm。面積14.6m² 床面 貼床、カマド手前に硬化面を確認。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部、煙道部とも残存する。全長128cm、焚口幅62cm。出土遺物 土師器壺・小型甕・甕・須恵器壺・碗・甕・壺、縄文土器(中期後葉)、近世陶器等。時期 7世紀後半。

H—3号穴室建物跡 (Fig.151 PL.100・184)

位置 X80~82、Y250・251 主軸方向 N—85°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.86m、短軸3.77m、壁高51cm。面積19.06m² 床面 平坦な地山床。周溝なし 重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖、煙道とも良好に残存。全長130cm、焚口幅60cm。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器蓋・壺・碗・盤・甕・壺、楕形鍛冶津等。時期 9世紀前半。

H—4号穴室建物跡 (Fig.152 PL.100・101・184)

位置 X79・80、Y250~252 主軸方向 N—82°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸6.02m、短軸5.14m、壁高47cm。面積32.74m² 床面 貼床全体的に堅く締まる。中央付近に床下土坑を2基確認した。柱穴 3基確認。南北距離2.7m、東西距離2.0m。周溝 南壁・北壁・東壁・西壁。重複B—1と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖、煙道とも良好に残存。左袖と右側壁に構築材の石材が残存する。全長170cm、焚口幅70cm。出土遺物 土師器壺・小型甕・甕・須恵器蓋・壺・碗・甕・壺 時期 8世紀末から9世紀初頭。

H—5号穴室建物跡 (Fig.153 PL.101・102・185)

位置 X82・83、Y252・253 主軸方向 N—87°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸5.92m、短軸5.53m、壁高65cm。面積34.45m² 床面 床面全面に炭化物が広がる。所々に粘土が焼けた様子が見られる。カマド手前から住居中央にかけての床面は、茶褐色の土師器に似た焼土硬化面が広がっている。柱穴 4基確認。南北距離3.0m、東西距離2.5m。周溝 南壁・北壁・東壁・西壁。重複 W—1とH—6と重複、本遺構が最も古い。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖は明瞭ではない、煙道は良く残っている。全長160cm、焚口幅100cm。出土遺物 土師器小型甕・甕・須恵器蓋・壺・碗・甕・壺、土師器壺転用土製品、石製品、剪編石、縄文土器(不明)、石器等。時期 8世紀後半。備考 焼失家屋と考えられる。

H—6号穴室建物跡 (Fig.154 PL.102・185)

位置 X80・82、Y252・253 主軸方向 N—82°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸4.8m、短軸4.43m、壁高53cm。面積(22.03)m² 床面 貼床、全体的に堅く締まる。周溝なし 重複 H—5、B—

I、W-1と重複H-5より新しく、B-1、W-1より古い。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。大半はW-1によって壊されていた。全長〔114〕cm、焚口部幅70cm。出土遺物 土師器環・台付甕・甕、須恵器蓋・环・碗・甕・壺、繩文土器等。時期 8世紀後半。

H-7号竪穴建物跡 (Fig.154 PL.102・103・185)

位置 X84・85、Y252・253 主軸方向 N-85°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸6.0m、短軸5.03m、壁高77cm。面積 29.8m² 床面 貼床が広い範囲で認められた。柱穴 4基確認。南北距離2.7m、東西距離2.1m。重複 H-8と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖、煙道部が良好に残存。右袖石を検出。全長180cm、焚口幅64cm。出土遺物 土師器環・小型台付甕・甕、須恵器蓋・环・碗・甕・壺、鐵製品、齒編石、繩文土器、石器、近世陶器壺等。時期 8世紀末から9世紀初頭。

H-8号竪穴建物跡 (Fig.155 PL.103・186)

位置 X83～85、Y253・254 主軸方向 N-81°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.31m、短軸〔4.2〕m、壁高49cm。面積 (18.78) m² 床面 貼床面が確認された。周溝 なし 重複 H-7、H-9と重複する。H-7より古く、H-9より新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央やや南寄りに設置。左側壁に四角く加工された石材が残存する。右袖の外にも構築材と考えられる石材を検出した。全長1.72m、焚口幅0.74m。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・蓋・碗・甕・壺等。時期 9世紀前半。

H-9号竪穴建物跡 (Fig.155 PL.103・104・186)

位置 X83・84、Y254 主軸方向 N-93°-E 形状・規模等 方形と推測される。長軸3.11m、短軸(2.63)m、壁高50cm。面積 (8.11) m² 床面 明瞭な硬化面は確認されなかった。周溝 なし 重複 H-8と重複。本遺構が古い。貯蔵穴 調査区外？竈 東壁（位置は住居南側が調査区外のため不明）。ほとんどをH-8によって壊されている。全長 [1.1] m、焚口幅 [0.6] m。出土遺物 土師器環・小型甕・甕、鐵製品等。時期 7世紀後半。

(3) 挖立柱建物跡

B-1号掘立柱建物跡 (Fig.156 PL.104)

位置 X79・80、Y251～253 主軸方向 N-8°-W 形状・規模等 2間×2間でほぼ正方形を呈する。長軸5.04m、短軸4.72m。重複 H-4、H-6と重複、本遺構が新しい。柱穴 平面形が円形あるいは梢円形の柱穴が8基確認された。各柱穴の規模は、長軸径60～96cm、短軸径52～70cm、深さ22～51cmとばらつきがある。出土遺物 土師器環・甕等。時期 不明。

(4) 溝跡

W-1号溝跡 (Fig.156 PL.104・105)

位置 X82～84、Y250～253 主軸方向 N-35°-E、N-10°-W 長さ (16.5) m 上幅3.2m、下幅2.0m、深さ0.39m。断面形状 継やかなU字形。重複 H-5、H-6と重複、本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器小型台付甕・甕、須恵器環・蓋・碗・壺、青磁碗、石器等。時期 不明。

W—2号溝跡 (Fig.156 PL.104・105)

位置 X76・77、Y247～252 主軸方向 N—7°—E 長さ (16.7) m 上幅5.11m、下幅1.06m、深さ 0.78m。断面形状 二段になっている。上段は緩やかなU字状、下は台形状の断面をしている。重複 なし
出土遺物 須恵器壺、石器等。時期 8～9世紀。

(5) 土坑・ピット

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

第3項 C工区

1. 1区

(1) 穴穴建物跡

H—1号豎穴建物跡 (Fig.160 PL.108・186)

位置 X150・151、Y183・184 主軸方向 N—96°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.41m、短軸2.40m、壁高32cm。面積 8.53m² 床面 地山に構築された貼床、カマド手前が硬化している。重複 なし 貯蔵穴 なし 窓 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は悪く、袖は残存しない。支脚と考えられる石材あり。全長68cm、燃焼部幅50cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器高台付碗、灰釉陶器、縄文土器等。時期 10世紀前半。

H—2号豎穴建物跡 (Fig.160 PL.108・186)

位置 X149・150、Y186 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈す。長軸2.66m、短軸2.28m、壁高44cm。面積 4.46m² 床面 平坦な地山床。明瞭な硬化面は確認されなかった。重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖石が残存し、袖石の上に天井石や構築材の石材も残る。全長80cm、燃焼部幅56cm、焚口幅34cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・蓋、縄文土器等。時期 8世紀代。

H—3号豎穴建物跡 (Fig.160 PL.108・109)

位置 X148・149、Y187・188 主軸方向 N—47°—E 形状・規模等 北西から南東に長い長方形を呈する。長軸3.54m、短軸2.63m、壁高52cm。面積 9.74m² 床面 地山床、明瞭な硬化面は確認できなかった。重複 なし 貯蔵穴 なし 窓 東壁中央より南寄りに設置。両袖部がわずかに残存、構築にあたっては、黄褐色の粘質土を用いている。全長100cm、燃焼部幅48cm、焚口幅48cm。出土遺物 土師器小型甕、須恵器環・鉄製品、縄文土器、石器等。時期 不明。

H—4号豎穴建物跡 (Fig.161 PL.109・186)

位置 X149・150、Y187・188 主軸方向 N—95°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.11m、短軸2.58m、壁高45cm。面積 8.74m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に堅く締まる。重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。残存状態は良好でない。全長100cm、最大幅54cm。出土遺物 土師器小型甕・甕、須恵器環・高台付碗・甕、鉄製品等。時期 9世紀後半。

H—5号竪穴建物跡 (Fig.161 PL.109・110・186)

位置 X150・151、Y190・191 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.76m、短軸2.92m、壁高24cm。面積 12.08m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から中央にかけて硬化面が広がる。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。両袖は明瞭ではない。全長80cm、最大幅68cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・碗、灰釉陶器碗、鉄製品、鉄滓、縄文土器等。時期 9世紀中葉。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.162 PL.110・186)

位置 X153・154、Y187・188 主軸方向 N—110°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.43m、短軸2.69m、壁高29cm。面積 9.64m² 床面 地山面に構築された貼床。重複なし 貯蔵穴 南東カマド右に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。両袖は明瞭でない。全長54cm、最大幅40cm。出土遺物 土師器環・鉢・甕、須恵器環・高台付碗・甕、鉄製品、鉄滓等。時期 不明。

H—7号竪穴建物跡 (欠番)

H—8号竪穴建物跡 (Fig.162 PL.110・187)

位置 X154・155、Y188・189 主軸方向 N—84°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸3.56m、短軸3.42m、壁高36cm。面積 13.03m² 床面 地山面に構築された貼床。重複なし 貯蔵穴なし 竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部はほとんど残っていない。全長68cm、最大幅78cm。出土遺物 土師器環・甕・蓋、須恵器環・蓋・鉢・甕、石製品、縄文土器、近世陶器等。時期 8世紀末。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.163 PL.110・187)

位置 X153・154、Y191・192 主軸方向 N—100°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.70m、短軸2.91m、壁高60cm。面積 11.25m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から南側にかけて硬化面が広がる。周溝 西辺、南辺、北東隅。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖石が残存する。全長104cm、最大幅54cm。出土遺物 土師器環・甕・蓋・須恵器高台付碗・蓋・壺、縄文土器、石器等。時期 8世紀中葉。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.163 PL.111・187)

位置 X153・154、Y194・195 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.26m、短軸2.56m、壁高51cm。面積 9.33m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から中央にかけて硬化面が広がる。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖が残存、黄褐色粘質土によって構築されている。全長150cm、燃焼部幅72cm、焚口幅54cm。出土遺物 土師器環・甕・蓋・須恵器環・縄文土器等。時期 不明。

H—11号竪穴建物跡 (Fig.164 PL.111・187)

位置 X154・155、Y195・196 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.75m、短軸3.20m、壁高45cm。面積 13.08m² 床面 地山面に構築された貼床。重複 B—1と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。右袖が残存、黄褐色粘質土によって構築されている。全長124cm、燃焼部幅60cm、焚口幅42cm。出土遺物 土師器環・壺・須恵器環・蓋

等。 時期 8世紀初頭。

H—12号竪穴建物跡 (Fig.164 PL.111・112)

位置 X155・156、Y191・192 主軸方向 N—97°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.50m、短軸3.67m、壁高40cm。 面積 17.2m² 床面 地山面に構築された貼床。 重複 D—1と重複、本遺構が新しい。 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央より南寄りに設置。両袖部が残存する。全長138cm、燃焼部幅74cm、焚口幅70cm。 出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・盤、縄文土器等。 時期 8世紀初頭。

H—13号竪穴建物跡 (Fig.165 PL.112)

位置 X156・157、Y184・185 主軸方向 N—97°—E 形状・規模等 いびつな方形を呈する。長軸3.86m、短軸3.54m、壁高57cm。 面積 13.89m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から南側にかけて硬化面が広がる。 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖石が残存している。右袖は黄褐色粘質土で大部分が構築されている。全長110cm、燃焼部幅52cm、焚口幅46cm。 出土遺物 土師器壺・皿・須恵器壺・蓋・甕等。 時期 8世紀前半。

H—14号竪穴建物跡 (Fig.165 PL.112・187)

位置 X157・158、Y183・184 主軸方向 N—80°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.01m、短軸3.42m、壁高43cm。 面積 14.31m² 床面 地山面に構築された貼床、全体に硬化面が広がっている。 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。カマドの周囲に構築材と考えられる石材が検出された。袖部は明瞭でない。全長90cm、燃焼部幅78cm、焚口幅70cm。 出土遺物 土師器壺・甕・須恵器壺・高台付碗・蓋・甕・壺、灰釉陶器、羽釜、鉄製品、鉄滓、石器等。 時期 9世紀後半。備考 カマド先端部に土師器甕が口縁を下にした状態で据えられていた（底部はない）。煙出しの穴を補強するためと考えられる。

H—15号竪穴建物跡 (Fig.166 PL.113・187)

位置 X157・158、Y185・186 主軸方向 N—90°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.90m、短軸3.16m、壁高30cm。 面積 13.18m² 床面 地山面に構築された貼床、全体に硬化面が広がる。南側はほぼ平坦だが、北側には凸凹がある。 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部が残存する。右袖に構築材と考えられる石材が分布する。全長104cm、最大幅72cm。 出土遺物 土師器壺・甕・須恵器蓋・石製品、石器等。 時期 8世紀前半。

H—16号竪穴建物跡 (Fig.166 PL.113・188)

位置 X157・158、Y187・188 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.35m、短軸3.09m、壁高32cm。 面積 10.92m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前に硬化面が広がる。 重複 D—2と重複、本遺構が新しい。 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央やや南寄りに設置。袖部は明瞭でない。全長54cm、最大幅54cm。 出土遺物 土師器壺・鉢・甕・須恵器甕・縄文土器等。 時期 8世紀前半。

H—17号竪穴建物跡 (Fig.167 PL.113・188)

位置 X157・158、Y189・190 主軸方向 N—109°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸

3.72m、短軸2.87m、壁高18cm。 面積 10.84m² 床面 地山面に構築された貼床、ほぼ平坦でカマド手前から北側にかけて硬化面が広がる。 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭でない。右袖から住居南東部にかけて構築材と考えられる石材が多数残存する。全長60cm、最大幅70cm。 出土遺物 土師器甕・須恵器環・高台付碗・壺・鉄製品、石器等。 時期 9世紀後半。

H—18号竪穴建物跡 (Fig.167 PL.114)

位置 X159・160、Y191・192 主軸方向 N—109°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.74m、短軸3.10m、壁高25cm。 面積 11.87m² 床面 地山に構築された貼床、硬化は明瞭でない。 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖は明瞭ではない。煙道部に構築材と考えられる石材が残存する。全長84cm、最大幅80cm。 出土遺物 土師器小型甕・甕・須恵器高台付碗・甕・壺、灰釉陶器皿、鉄製品等。 時期 9世紀末～10世紀初頭。

H—19号竪穴建物跡 (Fig.167 PL.114)

位置 X159・160、Y186・187 主軸方向 N—96°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.18m、短軸3.36m、壁高49cm。 面積 14.5m² 床面 平坦な地山床。 重複 なし 貯蔵穴 なし 窯 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭でない、黄褐色粘質土によって構築されたと考えられる。全長130cm、最大幅70cm。 出土遺物 土師器環・甕・壺、須恵器高台付环、縄文土器、石器等。 時期 7世紀末～8世紀初頭。

H—20号竪穴建物跡 (Fig.168 PL.114・188)

位置 X159・160、Y185・186 主軸方向 N—84°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸[3.90] m、短軸3.36m、壁高32cm。 面積 [14.17] m² 床面 ほぼ平坦な地山床。 重複 H—29と重複、本遺構が古い 貯蔵穴 なし 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖が残されている、黄褐色粘質土によって構築されている。全長100cm、最大幅62cm。 出土遺物 土師器環・甕・須恵器環、縄文土器、石器等。 時期 8世紀初頭。

H—21号竪穴建物跡 (Fig.168・169 PL.114・188)

位置 X159・160、Y184 主軸方向 N—83°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈すると推定される。長軸3.98m、短軸(3.23) m、壁高32cm。 面積 12.95m² 床面 H—29の床面上の上に構築された貼床。カマド手前から中央にかけて硬化面を確認。 重複 H—22・29と重複、本遺構が最も新しい。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部は明瞭でない。全長90cm、最大幅74cm。 出土遺物 土師器環・台付甕・壺、須恵器環・高台付碗・蓋・甕、鉄滓、縄文土器、石器等。 時期 9世紀後半。

H—22号竪穴建物跡 (Fig.169 PL.114・188)

位置 X160・161、Y184・185 主軸方向 N—79°—E 形状・規模等 不整形。長軸4.0m、短軸3.05m、壁高24cm。 面積 (9.99) m² 床面 平坦な地山床。 重複 H—21・29と重複、本遺構が最も古い。 貯蔵穴 南東隅に設置。 窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部が残存するが、煙道部は不明瞭である。全長40cm、最大幅48cm。 出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・甕・縄文土器等。 時期 8世紀後半。

H—23号竪穴建物跡 (Fig.170 PL.114・188)

位置 X161・162、Y184 主軸方向 N—101°—E 形状・規模等 不明。長軸(2.94) m、短軸(1.59) m、

壁高19cm。 面積 (3.85)m² 床面 平坦な地山床。 重複 なし 貯蔵穴 なし 窓 東壁中央付近に設置、北側半分は調査区外。袖部は明瞭でない。全長(40)cm、最大幅(42)cm。 出土遺物 土師器坏・小型甕・甕、須恵器坏、繩文土器等。 時期 9世紀後半。

H—24号竪穴建物跡 (Fig.170 PL.115・189)

位置 X163・164、Y184・186 主軸方向 N—102°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.46m、短軸3.82m、壁高29cm。 面積 17.57m² 床面 地山面に構築された貼床。 周溝 南壁 重複 なし 貯蔵穴 なし 窓 東壁中央より南寄りに設置。両袖部は明瞭でない。全長100cm、最大幅94cm。 出土遺物 土師器坏・甕・甕、須恵器高台付坏・蓋・甕・石器等。 時期 8世紀前半。

H—25号竪穴建物跡 (Fig.170 PL.115・189)

位置 X161～163、Y189・191 主軸方向 N—108°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.82m、短軸4.04m、壁高40cm。 面積 21.11m² 床面 地山面に構築された貼床。 重複 なし 貯蔵穴 南東隅に設置。 窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部は明瞭でない、右袖付近に袖石が残存。全長108cm、燃焼部幅94cm。 出土遺物 土師器坏・甕・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕・瓶・陶器等。 時期 8世紀中葉。

H—26号竪穴建物跡 (Fig.171 PL.115・116・189)

位置 X163・164、Y191・192 主軸方向 N—84°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.50m、短軸5.22m、壁高59cm。 面積 29.61m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に硬化している。重複 H—27と重複、本遺構が古い。 貯蔵穴 南東隅に設置。 窓 東壁中央より南寄りに設置。右袖が残存している。全長94cm、最大幅78cm。 出土遺物 土師器坏・高坏・甕・須恵器坏・高台付坏・高台付碗・蓋・甕・壺・鉄製品・鉄滓・繩文土器・石器等。 時期 不明。

H—27号竪穴建物跡 (Fig.172 PL.116・189・190)

位置 X164～166、Y192・193 主軸方向 N—85°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸6.26m、短軸5.80m、壁高23cm。 面積 37.89m² 床面 地山面に構築された貼床。 重複 H—26・28と重複、本遺構が最も新しい。 貯蔵穴 南東隅に設置。 窓 東壁中央よりやや南寄りに設置。左袖部は良好に残存する。周囲に構築材と考えられる石材が分布する。全長94cm、最大幅72cm。 出土遺物 土師器付甕・甕・須恵器坏・高台付碗・蓋・甕・灰釉陶器碗・壺・鉄製品・古銭・鉄滓・金床石・繩文土器・石器等。 時期 9世紀後半。

H—28号竪穴建物跡 (Fig.172 PL.116)

位置 X163～165、Y193・194 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.55m、短軸3.80m、壁高31cm。 面積 18.42m² 床面 地山面に構築された貼床。 重複 H—27と重複、本遺構が古い。 窓 東壁中央に設置。両袖が明瞭に残存している。全長104cm、燃焼部幅82cm、焚口幅76cm。 出土遺物 土師器坏・甕・須恵器坏・高台付碗・蓋・高坏・甕・灰釉陶器・近世磁器等。 時期 不明。

H—29号竪穴建物跡 (Fig.168 PL.116・189)

位置 X159・160、Y184・185 主軸方向 N—72°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸

4.30m、短軸（4.05）m、壁高41cm。面積（17.56）m² 床面 地山床、カマド手前から北側は凹凸があり床下土坑が検出される。重複 H-21・22と重複、H-21より古くH-22より新しい。貯蔵穴なし 窯 東壁南寄りに設置。残存状態は悪く、ほとんどはH-21によって壊されている。全長54cm、最大幅50cm。出土遺物 土師器環・台付甕・甕、須恵器環・高台付碗・甕、鉄製品等。時期 9世紀後半。

H-30号竪穴建物跡 (Fig.173 PL.117)

位置 X145・146、Y172・173 主軸方向 N-97°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.50m、短軸3.3m、壁高40cm。面積 15.27m² 床面 ほぼ平坦な地山床。重複なし 窯 東壁中央に設置。袖部は明瞭でない。全長96cm、最大幅84cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・高台付环・縄文土器、石器、生痕化石等。時期 不明（8～9世紀）。

H-31号竪穴建物跡 (Fig.173 PL.117)

位置 X147・148、Y170・171 主軸方向 N-87°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.64m、短軸3.64m、壁高32cm。面積 17.86m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から南側にかけて硬化面が広がる。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部が残存する。全長132cm、最大幅72cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・鉄製品等。時期 不明。

H-32号竪穴建物跡 (Fig.174 PL.117・190)

位置 X151～153、Y170・171 主軸方向 N-99°-E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸6.20m、短軸6.10m、壁高42cm。面積 39.05m² 床面 地山に構築された貼床、全面に硬化面が広がる。周溝 北・西・南壁。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。窯 東壁中央より南寄りに設置。両袖部は明瞭でない。全長142cm、最大幅96cm。出土遺物 土師器環・小型甕・台付甕・甕、S字状口縁甕・須恵器環・蓋・甕、灰釉陶器甕・石製品、鉄製品、縄文土器、石器等。時期 不明。

H-33号竪穴建物跡 (Fig.175 PL.118・190・191)

位置 X152・153、Y172・173 主軸方向 N-93°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.53m、短軸4.70m、壁高46cm。面積 27.05m² 床面 地山面に構築された貼床。全体的に硬化している。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。窯 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭ではない。全長130cm、最大幅62cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・高台付碗・甕、縄文土器、近世陶器等。時期 8世紀中葉。

H-34号竪穴建物跡 (Fig.175 PL.118)

位置 X151・152、Y176・177 主軸方向 N-97°-E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸3.15m、短軸3.10m、壁高46cm。面積 10.42m² 床面 地山面に構築された貼床で、カマド手前から北側にかけて硬化面が広がる。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。窯 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部は明瞭でない。全長94cm、最大幅66cm。出土遺物 土師器環・甕、縄文土器等。時期 不明（7世紀末・8～9世紀）。

H-35号竪穴建物跡 (Fig.176 PL.118・191)

位置 X151・152、Y178・179 主軸方向 N-94°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.40m、短軸3.02m、壁高60cm。面積 10.96m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前に硬化面が広がる。カマド手前の貼床の下から多数の小ピットを検出。重複なし 窯 東壁中央より南寄りに設置。両袖

石が残存している。全長94cm、最大幅52cm。**出土遺物** 土師器壺・甕、須恵器甕、石器等。**時期** 7世紀後半。**備考** 西壁中央より南に石を台にして口縁から胴部にかけての土師器甕が据えられていた。覆土に焼土がないことや土師器甕の内側が黒ずんでいたことから、明かりのための施設ではないかと考えられる。

H—36号竪穴建物跡 (Fig.177 PL.118・119・191)

位置 X154・156、Y173～175 **主軸方向** N—90°—E **形状・規模等** 東西に長い長方形を呈する。長軸6.10m、短軸5.80m、壁高56cm。**面積** 37.73m² **床面** 地山に構築された貼床、硬化は顕著ではない。住居中央から長軸約4mの大きな粘土採掘坑が検出された。**重複** なし **貯藏穴** 南東に設置。**竈** 東壁中央より南寄りに設置。両袖は明瞭でない。全長60cm、最大幅68cm。**出土遺物** 土師器環・台付甕・甕、須恵器環・高台付碗・蓋・甕、羽口、石製品、繩文土器、石器、近世陶器、生痕化石等。**時期** 8世紀初頭。

H—37号竪穴建物跡 (Fig.177 PL.191)

位置 X157～159、Y170・171 **主軸方向** 不明 **形状・規模等** 方形を呈すると推定される。長軸4.40m、短軸(2.70)m、壁高37cm。**面積** (10.78)m² **床面** ほぼ平坦な地山床。**重複** なし **貯藏穴** なし **竈** 調査区外と推定される。**出土遺物** 土師器環・甕、須恵器環・高台付碗・甕、灰釉陶器碗・鉄製品・石器等。**時期** 10世紀前半。

H—38号竪穴建物跡 (Fig.178 PL.119・191)

位置 X157・158、Y177・178 **主軸方向** N—81°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸3.90m、短軸3.36m、壁高52cm。**面積** 13.85m² **床面** 地山に構築された貼床、カマド手前から北側にかけて硬化面が広がる。**周溝** 南西隅。**重複** なし **貯藏穴** 南東隅に1基。**竈** 東壁中央より南寄りに設置。両袖部は明瞭でない。全長122cm、最大幅50cm。**出土遺物** 土師器環・甕・須恵器甕等。**時期** 7世紀後半。

H—39号竪穴建物跡 (Fig.178 PL.119・120・192)

位置 X157・158、Y178～180 **主軸方向** N—101°—E **形状・規模等** 東西に長い長方形を呈する。長軸4.10m、短軸3.82m、壁高41cm。**面積** 16.58m² **床面** 地山面に構築された貼床、硬化は顕著でない。**周溝** 北・西・南壁 **重複** なし **貯藏穴** 南東隅に設置。**竈** 東壁中央より南寄りに設置。左袖が残存、右袖は明瞭でない。全長130cm、燃焼部幅70cm、焚口幅64cm。**出土遺物** 土師器環・小型甕・甕、須恵器蓋・甕・壺、灰釉陶器、石器等。**時期** 7世紀末～8世紀前半。

H—40号竪穴建物跡 (Fig.179 PL.120・192)

位置 X159～161、Y181・182 **主軸方向** N—87°—E **形状・規模等** ほぼ正方形を呈する。長軸3.90m、短軸3.80m、壁高53cm。**面積** 15.92m² **床面** 地山面に構築された貼床。全体的に硬化している。**周溝** ほぼ全周。**重複** なし **貯藏穴** なし **竈** 東壁中央より南寄りに設置。両袖部は明瞭でない。カマドを構築する際に使用された粘質土が他の住居より白っぽい。全長98cm、最大幅38cm。**出土遺物** 土師器環・甕・須恵器高台付环・甕、石製品、繩文土器、石器等。**時期** 7世紀後半。

H—41号竪穴建物跡 (Fig.180 PL.120・192)

位置 X161・162、Y180・181 **主軸方向** N—105°—E **形状・規模等** 不整形。長軸4.00m、短軸3.81m、壁高37cm。**面積** 15.31m² **床面** 地山床。カマド手前から南側が硬く締まる。**周溝** 北・東壁、カマド左

側の一部。重複なし貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄り。左袖に袖石・構築材と考えられる石材が分布、袖部は明瞭でない。全長100cm、最大幅56cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・高台付碗・壺、石製品、鉄製品、銅製品、繩文土器、石器、近世陶器等。時期 8世紀後半。

H—42号竪穴建物跡 (Fig.180 PL.120)

位置 X159・160、Y179・180 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸4.42m、短軸3.22m、壁高59cm。面積 14.03m² 床面 地山面に構築された貼床、硬化は顕著ではない。重複 H—46と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭でない。右袖はH—46のカマドによって壊されている。カマドを構築する際に使用された粘質土が他の住居より白っぽい。全長130cm、最大幅60cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器甕、被熱碟等。時期 7世紀後半。

H—43号竪穴建物跡 (Fig.182 PL.121・192・193)

位置 X159・160、Y172・173 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸4.51m、短軸3.81m、壁高68cm。面積 17.15m² 床面 地山面に構築された貼床。カマド手前から南側に硬化面が広がる。重複なし 貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。両袖石が残存する。全長104cm、最大幅38cm。出土遺物 土師器壺・鉢・小型甕、須恵器壺・高台付碗・高台付皿・蓋・甕・壺、鉄製品、繩文土器等。時期 8世紀前半。

H—44号竪穴建物跡 (Fig.183 PL.121・193・194)

位置 X161～163、Y172～174 主軸方向 N—111°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸4.80m、短軸4.43m、壁高42cm。面積 22.76m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に硬化している。周溝 全周。重複なし 貯蔵穴なし 竈 東壁中央より南寄りに設置。両袖とも良好に残存する。全長110cm、燃焼部幅50cm、焚口幅：48cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器高台付碗・高台付皿・甕・石器等。時期 7世紀後半。

H—45号竪穴建物跡 (Fig.184 PL.121・193)

位置 X162・163、Y176・177 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸：4.50m、短軸3.99m、壁高35cm。面積 17.84m² 床面 地山面に構築された貼床、硬化は顕著ではない。周溝 北・西・南壁 重複 JD—6・7と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭でないが、袖石が残存する。全長100cm、燃焼部幅40cm、焚口幅34cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・高台付碗・蓋・甕・石製品、近世陶器等。時期 7世紀後半。

H—46号竪穴建物跡 (Fig.181 PL.120・121・194)

位置 X159・160、Y179・180 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.78m、短軸3.24m、壁高56cm。面積 13.73m² 床面 H—42の床面上に構築された貼床、カマド手前に硬化面を確認。重複 H—42と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に設置。竈 東壁中央より南寄りに設置。右袖は明瞭でない。カマドを構築している粘質土が他の住居に比べて白っぽい。全長110cm、最大幅40cm。出土遺物 土師器壺・甕等。時期 7世紀後半。

(2) 堀立柱建物跡

B—1号堀立柱建物跡 (Fig.186 PL.111)

位置 X154~156、Y194~196 主軸方向 N—2°—W 形状・規模 2間×2間ではば正方形を呈する。長軸5.82m、短軸5.64m。重複 H—11と重複、本遺構が古い。柱穴 平面形が円形の柱穴が8基確認された。各柱穴の規模は、長軸径48~66cm、短軸径32~62cm、深さ19~51cmとややばらつきがある。出土遺物 P₁から土師器壺・甕、須恵器壺、P₂から土師器壺・甕が出土。時期 8世紀初頭以前。

(3) 溝跡

W—1号溝跡 (Fig.185 PL.194)

位置 X161・162、Y185~196 主軸方向 N—6°—E 長さ (42.3) m 上幅1.55m、下幅1.26m、深さ47cm。断面形状 細やかなU字形。重複 なし 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・高台付碗・甕、繩文土器、石器等。時期 9世紀中葉。備考 C工区の1区—2の調査区のW—1と連続すると考えられる。C工区1区—2のW—1は主軸方向N—5°—W、長さ (18.6) m、上幅1.24m、下幅0.82m、深さ32cm。

W—2号溝跡 (Fig.185 PL.194)

位置 X160、Y192~196 主軸方向 N—2°—W 長さ (16.7) m 上幅1.0m、下幅0.65m、深さ68cm。断面形状 細やかなU字形。重複 なし 出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・高台付碗等。時期 9世紀末。

(4) 土坑・ピット (Fig.184・185 PL.122・194)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

第4項 D工区

1. 1区

(1) 竪穴建物跡

H—1号竪穴建物跡 (Fig.188 PL.123・124・195)

位置 X137・138、Y183~185 主軸方向 N—49°—E 形状・規模等 不整形。長軸4.11m、短軸3.30m、壁高66cm。面積 13.47m² 床面 ほぼ平坦な地山床、東側が堅く締まる。重複 H—2と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭でない。構築材と考えられる石材が多数残存する。全長134cm、最大幅70cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・碗・蓋・甕、羽口、鉄滓、繩文土器、石器等。時期 9世紀後半。

H—2号竪穴建物跡 (Fig.188 PL.124・195)

位置 X136・137、Y183・184 主軸方向 不明。形状・規模等 方形を呈すると推定される。長軸(3.10) m、短軸2.32m、壁高39cm。面積 (4.42) m² 床面 平坦な地山床。明瞭な硬化面は確認されなかつた。重複 H—1と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 不明。竈 不明。出土遺物 土師器壺・甕、羽口、鉄滓、繩文土器等。時期 8世紀中葉。

(2) 溝跡

W—1号溝跡 (Fig.188 PL.124)

位置 X127~132、Y185~192 主軸方向 N—16°—E で南北に走向、X129 Y185からN—78°—E で東西に

走向。長さ (34.95) m 上幅1.07m、下幅0.8m、深さ35cm。断面形状 緩やかなU字形。重複 なし
出土遺物 近世陶器、石器等。時期 近世(17世紀後半)。

W—2号溝跡 (Fig.189 PL.124)

位置 X135~143、Y190・191 主軸方向 N—84°—E 長さ 31.60m 上幅1.37m、下幅1.05m、深さ 22cm。断面形状 緩やかなU字形。重複 なし 出土遺物 なし 時期 不明。

W—3号溝跡 (Fig.189)

位置 X126~128、Y192~194 主軸方向 N—40°—E で南西から北東方向へ走向。長さ (10.50) m 上幅1.22m、下幅0.73m、深さ27cm。断面形状 不明。重複 なし 出土遺物 なし 時期 不明。

(3) 土坑・ピット (Fig.189 PL.195)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

2. 2区

(1) 穴穴建物跡

H—1号穴穴建物跡 (Fig.192 PL.126・196)

位置 X128・129、Y115・116 主軸方向 N—112°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸 (2.62) m、短軸2.33m、壁高30cm。面積 (6.47) m² 床面 地山面に構築された貼床、硬化は明瞭でない。重複 なし 貯蔵穴 南東隅に1基 窟 東壁中央より南寄りに設置。袖石が残存する。カマドの内外に構築材と考えられる石材が多数分布する。全長：70cm、燃焼部幅：34cm、焚口幅：26cm。出土遺物 土師器環・甕、須恵器蓋、鉄滓、繩文土器、石器等。時期 8世紀中葉。

H—2号穴穴建物跡 (Fig.192 PL.126・196)

位置 X125・126、Y114・115 主軸方向 N—103°—E 形状・規模等 方形を呈すると推定される。長軸 (3.70) m、短軸 (3.50) m、壁高34cm。面積 (13.53) m² 床面 地山面に構築された貼床、硬化は顕著ではない。重複 なし 貯蔵穴 南東隅に1基。窓 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭ではない。構築材と考えられる石材がカマド前に分布。全長：146cm、最大幅：56cm。出土遺物 土師器環・甕、石器等。時期 7世紀後半。

H—3号穴穴建物跡 (Fig.193 PL.126・196)

位置 X123・124、Y117~119 主軸方向 N—94°—E 形状・規模等 造構北西部分は調査区外となるが、方形を呈すと推定される。長軸 (4.68) m、短軸 (3.70) m、壁高57cm。面積 (12.19) m² 床面 ほぼ平坦な地山床。全体的に堅く締まる。周溝 南壁。重複 なし 貯蔵穴 南東隅に1基。窓 東壁中央より南寄りに設置。袖石が残存しているが、袖部は明瞭でない。全長：138cm、燃焼部幅：50cm、焚口幅：32cm。出土遺物 土師器環・台付甕・甕、須恵器環・盤・蓋・甕、鉄製品、石器等。時期 不明。

H—4号穴穴建物跡 (Fig.193 PL.127・196)

位置 X122・123、Y129・130 主軸方向 不明。形状・規模等 不明。長軸2.60m、短軸 (1.88) m、壁高34cm。面積 (4.73) m² 床面 ほぼ平坦な地山床で明確な硬化面は確認されなかった。重複 なし 貯蔵

穴 不明 窟 カクランにより壊されている。 出土遺物 土師器窯・甕、須恵器窯、縄文土器、石器等。 時期 8世紀後半。

H—5号竪穴建物跡 (Fig.193 PL.127・196・197)

位置 X122・123、Y120～122 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸4.62m、短軸3.25m、壁高53cm。 面積 15.72m² 床面 地山面に構築した貼床、カマド手前から南側に硬化面が広がる。重複なし 貯蔵穴なし 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部が残存し、煙道部が長く伸びる。燃焼部中央に支脚と考えられる細長い河原石が直立していた。全長：168cm、燃焼部幅：50cm、焚口幅：36cm、煙道部長：94cm。 出土遺物 土師器窯・甕、須恵器窯等。 時期 8世紀初頭。

H—6号竪穴建物跡 (Fig.194 PL.127・197)

位置 X121、Y121～122 主軸方向 N—108°—E 形状・規模等 大部分が調査区外のため不明。長軸(2.45)m、短軸(1.51)m、壁高28cm。 面積 (2.98)m² 床面 地山面に構築された貼床、硬化は顕著ではない。重複なし 貯蔵穴 南東隅1基。 窟 東壁中央より南寄りに設置されたと推定される。両袖部は明瞭ではない。燃焼部から煙道部にかけて、川原石によって組まれていた。全長：124cm、最大幅：90cm。 出土遺物 土師器小型甕・甕、須恵器窯・甕、石器、近代陶器等。 時期 8世紀代。

H—7号竪穴建物跡 (Fig.194 PL.127・128)

位置 X120・121、Y125～127 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.90m、短軸2.98m、壁高38cm。 面積 12.28m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に堅く締まる。重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基 窟 東壁中央より南寄りに設置。両袖は明瞭でない。全長：114cm、最大幅：32cm。 出土遺物 土師器窯・小型甕・甕、縄文土器、石器等。 時期 8世紀前半。

H—8号竪穴建物跡 (Fig.195 PL.128・197)

位置 X122・123、Y127・128 主軸方向 N—93°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸4.92m、短軸3.97m、壁高50cm。 面積 20.05m² 床面 地山面に構築された貼床、硬化は顕著ではない。周溝 北・西・東壁 重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖石と支脚が残存する。全長：120cm、燃焼部幅：60cm、焚口幅：44cm。 出土遺物 土師器窯・小型甕・甕、須恵器窯・碗・蓋・甕、石製品、縄文土器等。 時期 8世紀後半。

H—9号竪穴建物跡 (Fig.195 PL.128・129・197)

位置 X119～121、Y128～130 主軸方向 N—96°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸5.10m、短軸4.40m、壁高40cm。 面積 22.77m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に硬化している。周溝 ほぼ全周。 重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基。 窟 東壁中央より南寄りに設置。カマド右側は、袖石から煙道部まで石材によって組まれている。左側は燃焼部から煙道部まで石材で組まれている。全長130cm、燃焼部幅46m、焚口幅42cm。 出土遺物 土師器窯・甕、須恵器窯・蓋・甕、石製品、縄文土器、石器等。 時期 7世紀末～8世紀初頭。 備考 4.2mの住居の北側を約1m拡張している。

H—10号竪穴建物跡 (Fig.196・197 PL.129・130・198)

位置 X113～115、Y131・132 主軸方向 N—96°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸

5.53m、短軸5.07m、壁高55cm。 面積 28.54m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に硬化している。周溝 西壁。 重複 なし 貯藏穴 南東隅1基。 窓 東壁中央に設置。両袖が残存、中央に支脚と考えられる河原石が直立している。全長:120cm、最大幅:88cm。 出土遺物 土師器壺・甕・S字状口縁甕、須恵器壺・蓋、鉄製品、縄文土器、石器等。 時期 9世紀前半。

(2) 土坑・ピット (PL.198)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

3. 3区

(1) 古墳

M—1 (Fig.200~202 PL.134・135・199)

位置 X111~127、Y153~168 主軸方向 N—2°—E 墳丘 円墳。長軸32.5m、短軸28.1m、高さ(1.0)m。石室 両袖型横穴式石室。玄室長(3.02)m、玄室幅(3.57)m、羨道長1.58m、羨道幅(1.51)m。石材は粗粒輝石安山岩を使用している。裏込石は5~20cm大の石を使用している。周堀 平面形状は、石室南側の前庭部を除く馬蹄形状となると考えられる。周堀の覆土は、最上層にAs-Bを非常に多く含む層が検出され、中層以下にはAs-C・混土やローム土等が検出されている。上幅7.06m、下幅1.95m、深さ1.2mを測りローム層まで達していた。 重複 なし 出土遺物 土師器壺・甕・鉢・須恵器高台壺・蓋・甕・壺、鉄製品釘・鐵・坂状品・模・縄文土器、石器(剥片)、錢貨(寛永通宝5枚)、近世陶磁器。 時期 7世紀。

(2) 竪穴建物跡

J—1号竪穴建物跡 (Fig.203 PL.137・200)

位置 X116・117、Y165・166 主軸方向 N—77°—E 形状・規模等 不整形。長軸4.76m、短軸4.60m、壁高53cm。 面積 18.02m² 床面 ほぼ水平で、中央部分が堅く締まる。人頭大の礫が住居の北側・中央南側に分布する。 重複 なし 炉 調査区内にはなし。 出土遺物 土師器壺、縄文土器、石器(ヘラ状石器・スクレイバー・リタッチャード・フレイク・凹石・剥片)等。 時期 縄文時代前期。 備考 縄文深鉢が底部を床面に接して直立した状態のもの、口縁部側を床面に接した逆さまの状態のものが1点ずつ検出された。

J—2号竪穴建物跡 (Fig.203 PL.137・201)

位置 X119・120、Y161・162 主軸方向 N—46°—E 形状・規模等 楕円形を呈する。長軸3.57m、短軸3.50m、壁高30cm。 面積 10.42m² 床面 ほぼ平坦で明確な硬化面は確認されなかった。住居中央に土坑が検出された。 重複 なし 炉 調査区内にはなし。 出土遺物 縄文土器、石器(ヘラ状石器・リタッチャード・フレイク・剥片)等。 時期 縄文時代(諸磯c式期)。

J—3号竪穴建物跡 (Fig.203 PL.137・201)

位置 X120・121、Y162・163 主軸方向 N—105°—E 形状・規模等 楕円形を呈する。長軸2.52m、短軸2.19m、壁高17cm。 面積 5.06m² 床面 平坦な床面で、明確な硬化面は確認されていない。 重複 なし 炉 調査区内にはなし。 出土遺物 縄文土器、石器(剥片)。 時期 縄文時代(黒浜式刷新段階)。

J—4号竪穴建物跡 (Fig.203 PL.137・201)

位置 X120・121、Y162・163 主軸方向 N—107°—E 形状・規模等 楕円形を呈する。長軸3.13m、短軸

2.91m、壁高17cm。 面積 8.4m² 床面 ほぼ平坦な床面。明確な硬化面は確認されなかった。 重複 JD-16・17と重複、本遺構が古い。 炉 住居北側中央の壁際に焼土の集中部を確認した。炉跡の可能性あり。 出土遺物 繩文土器、石器（ヘラ状石器・スクレイパー）等。 時期 繩文時代（黒浜式期新段階）。

(3) 土坑・ピット (PL.136・199・201)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

4. 4区

(1) 穴穴建物跡

H-1号 穴穴建物跡 (Fig.210 PL.139・203)

位置 X116・117、Y108～110 主軸方向 N-90°-E 形状・規模等 不整形を呈する。長軸4.10m、短軸4.04m、壁高63cm。 面積 15.48m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から中央にかけて硬化している。 重複 D-1と重複、本遺構が古い。 貯藏穴 南東隅に1基。 窟 東壁中央よりやや南寄りに設置。残存状態は悪く、両袖は明瞭でない。全長：90cm、最大幅：54cm。 出土遺物 土師器杯・甕・須恵器杯・蓋・甕・壺、石器（スクレイパー・リタッチャード・フレイク・剥片）等。 時期 8世紀後半。

H-2号 穴穴建物跡 (Fig.210 PL.139・203・204)

位置 X118・119、Y108・109 主軸方向 N-99°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈す。長軸3.49m、短軸3.20m、壁高48cm。 面積 11.06m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前に硬化面を確認。南側は窪んでいる。 重複 なし 窟 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は悪く、両袖は明瞭でない。全長：100cm、最大幅：56cm。 出土遺物 土師器杯・甕・台石・鉄製品刀子・羽口・鉄滓・縄文土器・石器（石礫・剥片）等。 時期 8世紀後半 備考 北側のピット内に金床石と思われる被熱した繰と鉄滓が検出される。鉄の精錬を行っていた遺構と考えられる。

H-3号 穴穴建物跡 (Fig.211 PL.140・204)

位置 X118、Y106・107 主軸方向 N-87°-E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.66m、短軸2.43m、壁高28cm。 面積 9.59m² 床面 平坦な地山面、明瞭な硬化面は確認できなかった。 重複 なし 貯藏穴 南東隅1基。 窟 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は悪く、両袖は明瞭でない。全長：120cm、最大幅：60cm。 出土遺物 土師器杯・甕・須恵器蓋・甕・縄文土器等。 時期 8世紀前半。

H-4号 穴穴建物跡 (Fig.211 PL.140・204)

位置 X120・121、Y107・108 主軸方向 N-92°-E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.54m、短軸2.66m、壁高14cm。 面積 9.95m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に堅く締まる。中央部に焼土が広がる。 重複 なし 貯藏穴 南東隅1基。 窟 東壁中央より南寄りに設置。残存状態は良好でなく、両袖は明瞭でない。全長98cm、最大幅60cm。 出土遺物 土師器杯・甕・須恵器杯等。 時期 9世紀後半。

H-5号 穴穴建物跡 (Fig.212 PL.140・204)

位置 X124・125、Y98～100 主軸方向 N-116°-E 形状・規模等 南西から北東方向に長い長方形を呈する。長軸3.99m、短軸3.42m、壁高45cm。 面積 13.54m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に硬化

している。重複 H-1と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央より南寄りに設置。両袖が残存する。全長104cm、最大幅54cm。出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・高台付塊・甕・壺、縄文土器、石器（リタッヂードフレイク）等。時期 9世紀後半。

H-6号竪穴建物跡 (Fig.212 PL.140・141・204)

位置 X126～128、Y92～94 主軸方向 N-105°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.90m、短軸4.31m、壁高34cm。面積 21.94m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に硬化している。柱穴 6基の柱穴を確認。南北距離1.92m、東西距離1.16m。重複 H-7と重複、本遺構が新しい。貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖は明瞭でない。全長100cm、最大幅78cm。出土遺物 土師器環・小型甕・台付甕・甕・須恵器環・蓋・甕・壺、敲石、石器（凹石）等。時期 8世紀前半。

H-7号竪穴建物跡 (Fig.212 PL.141・205)

位置 X126・127、Y91～93 主軸方向 N-91°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.98m、短軸3.66m、壁高33cm。面積 (15.64) m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から南側にかけて硬化面が広がる。周溝 北・西・南壁、北東隅。重複 H-6と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央より南寄りに設置。両袖は明瞭でない。全長：124cm、最大幅：66cm。出土遺物 土師器環・甕・須恵器蓋等。時期 7世紀後半。

H-8号竪穴建物跡 (Fig.214 PL.141・205)

位置 X129・130、Y91・92 主軸方向 竈①N-104°—E 竈②N-94°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.15m、短軸3.76m、壁高48cm。面積 20.66m² 床面 JD-1・JD-2、J-1の覆土の上に床面を構築している。明確な硬化面は確認されなかった。重複 D-2・3、JD-1・2、J-1と重複、本遺構が最も新しい。貯蔵穴 南東隅に1基。竈 ①東壁中央より南寄りに設置。両袖とも明瞭でない。全長148cm、最大幅100cm。②東壁中央より北寄りに設置。両袖とも明瞭でない。全長42cm、最大幅38cm。①と②の新旧関係は不明。出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・高台付塊・蓋・甕・壺、縄文土器、石器（スクレイバー・リタッヂードフレイク・剥片）等。時期 8世紀後半。

H-9号竪穴建物跡（欠番）

H-10号竪穴建物跡 (Fig.214 PL.144・145・205)

位置 X137・138、Y65・66 主軸方向 北：N-29°—E、南：N-145°—W 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸5.30m、短軸(3.96)m、壁高80cm。面積 (22.03) m² 床面 地山面に構築された貼床、北カマド・南カマドの手前に硬化面が広がる。重複 なし 貯蔵穴 北東部（北カマド）に1基、南東部（南カマド）に1基。竈 北：北壁中央よりやや東寄りに設置。袖部は明瞭でない。全長142cm、最大幅44cm。南：南壁中央より東寄りに設置。焚口部から煙道部まで川原石によって整然と組まれている。全長80cm、燃焼部幅24cm、焚口部幅22cm。カマド覆土中に含まれる焼土が少なかった。出土遺物 土師器環・鉢・台付甕・甕・壺、須恵器甕・壺、縄文土器、石器（剥片）等。時期 7世紀前半。

H-11号竪穴建物跡 (Fig.216 PL.145・205)

位置 X139～141、Y59～61 主軸方向 N-81°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸

6.02m、短軸(4.70)m、壁高65cm。面積(24.21)m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から北側にかけて硬化面が確認される。周溝 北壁。重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭でない。全長:110cm、最大幅:80cm。出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・甕・壺、S字状口縁甕・繩文土器、石器(スクレイバー・打製石斧・剥片)等。時期 8世紀前半。

H—12号竪穴建物跡 (Fig.216 PL.145・205・206)

位置 X141~143、Y57~59 主軸方向 N—89°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.94m、短軸4.08m、壁高45cm。面積 21.23m² 床面 地山面に構築された貼床、カマド手前から南側にかけて硬化面が確認される。周溝 北西・北東壁。重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部は明瞭ではない。全長124cm、最大幅80cm。出土遺物 土師器環・塊・高环(4世紀)・甕・須恵器環・高台付环・蓋・高环・甕・壺、S字状口縁甕・繩文土器、石器(石錐・剥片)等。時期 8世紀後半。

H—13号竪穴建物跡 (Fig.217 PL.141・142・206)

位置 X112~114、Y117・118 主軸方向 N—88°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸4.80m、短軸4.13m、壁高43cm。面積 20.0m² 床面 地山面に構築された貼床、全体的に硬化面が広がる。周溝 北壁・東壁北側。重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央より南寄りに設置。焚口部から煙道部まで川原石によって整然と組まれている。全長130cm、燃焼部幅44cm、焚口幅40cm。出土遺物 土師器環・甕・須恵器蓋・甕・石器(打製石斧)等。時期 7世紀後半。

H—14号竪穴建物跡 (Fig.218 PL.142・206)

位置 X112・113、Y115・116 主軸方向 N—83°—E 形状・規模等 東西に長い長方形を呈する。長軸3.05m、短軸2.66m、壁高35cm。面積 8.78m² 床面 ほぼ平坦な地山床。重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基。竈 東壁中央よりやや南寄りに設置。袖部が残存する。右袖には袖石が残る。全長80cm、最大幅60cm。出土遺物 土師器環・甕等。時期 8世紀前半。

H—15号竪穴建物跡 (欠番)

H—16号竪穴建物跡 (Fig.218 PL.142・206)

位置 X128、Y95・96 主軸方向 不明 形状・規模等 北西部のみ検出、他は調査区外のため全体の形状は不明。長軸(1.18)m、短軸(1.05)m、壁高34cm。面積(0.78)m² 床面 贼床の検出はなし。重複なし。未確認。竈 未確認。出土遺物 土師器環・甕・須恵器環・甕・繩文土器等。時期 8世紀代。

H—17号竪穴建物跡 (Fig.219 PL.147・206・207)

位置 X147~149、Y37~39 主軸方向 N—108°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸6.08m、短軸6.06m、壁高43cm。面積 39.04m² 床面 住居全体に土坑状の掘方あり。平坦な掘方面を約10cm埋め戻し床面を形成している。明確な硬化面は確認されなかった。柱穴 柱穴を8基検出。南北距離3.04m、東西距離2.56m。重複 D—5と重複、本遺構が古い。貯蔵穴 南東隅に1基。竈 なし 燃土跡 なし 出土遺物 土師器甕・台付甕・壺・甕・須恵器環・甕・繩文土器、石器(スクレイバー・打製石斧・剥片)等。時期 4世紀代。

H—18号竪穴建物跡 (Fig.219 PL.147)

位置 X146・147、Y36・37 主軸方向 N—41°—W 形状・規模等 方形を呈すると推定される。長軸(4.30)m、短軸3.76m、壁高28cm。面積(13.57)m² 床面 ピット状の掘方が全体に分布。平坦に掘り下げた掘方面を約5cm埋め戻して床面を形成。明確な硬化面は確認できなかった。重複なし 窟なし 燃土跡なし 出土遺物 土師器壺・小型甕・壺、縄文土器、石器(リタッヂードフレイク・打製石斧・剥片)等。

時期 4世紀代。

H—19号竪穴建物跡 (Fig.220 PL.147・207)

位置 X148・149、Y34・35 主軸方向 N—99°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸4.41m、短軸4.31m、壁高59cm。面積17.86m² 床面 地山面に構築された貼床、地山面に土坑・ピット状の掘方あり。柱穴 柱穴を7基検出。南北距離1.88m、東西距離1.9m。周溝 全周 重複 H—20と重複、本道構が新しい。貯蔵穴なし 窺 東壁中央より南寄りに設置。袖部は明瞭でない。カマドの覆土中から大量の土師器甕破片が出土。全長100cm、最大幅44cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器高台付壺・蓋・甕、縄文土器、石器(剥片)等。時期 8世紀初頭。

H—20号竪穴建物跡 (Fig.221 PL.147・207)

位置 X148～150、Y35・36 主軸方向 N—60°—E 形状・規模等 ほぼ正方形を呈する。長軸5.14m、短軸4.91m、壁高46cm。面積(15.55)m² 床面 地山床、土坑状の掘方あり。西側が溝状に窪む。重複 H—19と重複、本道構が古い。貯蔵穴なし 窺 未確認。出土遺物 土師器台付甕・壺、縄文土器、石器(スクレイバー・剥片)等。時期 4世紀代。備考 H—19のP₃はH—20の柱穴と考えられる。南西隅に直径50～80cmの大型の礫が検出される。

H—21号竪穴建物跡 (Fig.221 PL.147・207)

位置 X149・150、Y31・32 主軸方向 N—91°—E 形状・規模等 南北に長い長方形を呈する。長軸3.11m、短軸2.89m、壁高48cm。面積9.17m² 床面 地山面に構築した貼床、カマド手前から北側にかけて硬化面を確認。重複なし 窺 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部、袖石が検出された。全長90cm、燃焼部幅40cm、焚口部幅32cm。出土遺物 土師器壺・甕・壺(4世紀)、須恵器壺、縄文土器、石器(リタッヂードフレイク・剥片)等。時期 8世紀後半。

H—22号竪穴建物跡 (Fig.222 PL.148・207)

位置 X148・149、Y30・31 主軸方向 N—92°—E 形状・規模等 北側に耕作痕があるため全体形状は不明、方形を呈すると推定される。長軸4.10m、短軸(4.05)m、壁高42cm。面積(15.13)m² 床面 地山面に構築された貼床、南側に硬化面を確認。土坑状の掘方が北側に集中する。重複なし 貯蔵穴 南東隅に1基。窺 東壁中央よりやや南寄りに設置。両袖部が残存する。全長90cm、燃焼部幅42cm、焚口部幅38cm。出土遺物 土師器壺・甕、須恵器壺・甕、縄文土器、石器(スクレイバー・リタッヂードフレイク)、近世陶器等。時期 8世紀前半。

H—23号竪穴建物跡 (Fig.222 PL.148・207)

位置 X149・150、Y28・29 主軸方向 N—72°—E 形状・規模等 南北に長いひづな長方形を呈する。長軸3.62m、短軸3.20m、壁高61cm。面積11.16m² 床面 地山面に構築された貼床、硬化は顕著ではない。

重複 なし **貯藏穴** なし **竈** 東壁中央付近に設置。袖部は明瞭でない。カマド手前から左側に構築材と考えられる石材が検出される。全長108cm、最大幅52cm。 **出土遺物** 土師器壺・壺・甕、須恵器酸化焰焼成塊・蓋、縄文土器、石器（スクレイバー）等。 **時期** 8世紀前半。

H—24号竪穴建物跡 (Fig.222 PL.148・207)

位置 X150、Y23・24 **主軸方向** N—93°—E **形状・規模等** 西側は調査区外。方形を呈すると推定される。長軸(4.18)m、短軸(1.82)m、壁高25cm。 **面積** (5.56) m² **床面** 地山面に構築された貼床、中央から南側に硬化面を確認した。 **周溝** 東壁北側・南壁。 **重複** P—14・15と重複、P—14より新しく、P—15より古い。 **貯藏穴** カマド右側。 **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。左袖部が残存する。全長90cm、最大幅84cm。 **出土遺物** 土師器壺・台付甕・甕、須恵器壺・甕、縄文土器等。 **時期** 8世紀後半。

H—25号竪穴建物跡 (Fig.223 PL.148・149・208)

位置 X151～153、Y22・23 **主軸方向** N—87°—E **形状・規模等** 南北に長い長方形を呈する。長軸5.16m、短軸4.24m、壁高30cm。 **面積** (22.77) m² **床面** 竪穴の中央から南側に地山面に構築された貼床が広がる。掘方は東側・中央が帯状・土坑状に窪む。 **周溝** 東壁北側・南壁西側。 **重複** H—26と重複、本遺構が新しい。 **貯藏穴** カマド右脇に1基。 **竈** 東壁中央よりやや南寄りに設置。右袖は調査時に欠損し、基底部が残存する。粘土で煙道を作り、側壁面に大型半梢円窓、その天井に扁平窓を据えている。全長130cm、最大幅60cm。 **出土遺物** 土師器壺・甕・須恵器壺・高台付壺・蓋・壺、縄文土器、石器（リタッヂードーフレイク）等。 **時期** 不明。 **備考** 壁際の一部に焼土がまとめており、焼失住居の可能性がある。

H—26号竪穴建物跡 (Fig.223 PL.208)

位置 X151、Y22・23 **主軸方向** N—98°—E **形状・規模等** 東側はH—25によって壊されている。方形を呈すると推定される。長軸3.60m、短軸(2.12)m、壁高10cm。 **面積** (7.2) m² **床面** 竪穴南東側に貼床、掘方は帯状に窪む。 **重複** H—25と重複、本遺構が古い。 **竈** 未確認。 **出土遺物** 土師器壺・壺（含4世紀）・甕等。 **時期** 不明。

H—27号竪穴建物跡 (Fig.224 PL.143)

位置 X129、Y93・94 **主軸方向** N—90°—E **形状・規模等** 北西隅以外は調査区外のため全体の形状は不明。長軸(2.70)m、短軸(0.92)m、壁高13cm。 **面積** (1.66) m² **床面** 貼床は確認されなかった。 **周溝** 北壁西側・西壁。 **重複** なし **貯藏穴** 未確認。 **竈** 未確認。 **出土遺物** 土師器壺・甕、縄文土器、石器（剥片）等。 **時期** 8世紀代。 **備考** 炭化材が西隅に集中しており、焼失住居の可能性がある。

H—28号竪穴建物跡 (Fig.224 PL.149・208)

位置 X149、Y37～39 **主軸方向** N—98°—E **形状・規模等** 西側は調査区外、東壁南側はトレンチで壊されていて全体の形状は不明。長軸6.18m、短軸(1.81)m、壁高27cm。 **面積** (10.17) m² **床面** 平坦な地山床、全体が堅く締まる。 **柱穴** 柱穴を2基検出。南北距離2.9m。 **周溝** 北壁東側・東壁北側。 **重複** なし **貯藏穴** 未確認。 **竈** なし **出土遺物** 土師器器台・甕・壺、縄文土器等。 **時期** 4世紀代。

J—1号竪穴建物跡 (Fig.225 PL.143・208)

位置 X129・130、Y91・92 **主軸方向** N—68°—E **形状・規模等** 不整形。長軸4.00m、短軸3.08m、壁

高 63cm。面積 10.69m² 床面 壁際が傾斜してやや高くなる。柱穴 2基の柱穴を確認、南北距離1.5m。重複 H-8、JD-1と重複、本遺構が古い。炉なし 焼土 穹穴中央やや北西側に微量の焼土が集中。出土遺物 土師器壺、縄文土器、石器（打製石斧・スクレイパー・リタッヂド・フレイク・石核・剥片）等 時期 縄文時代前期後葉（諸磯c式期）。

（2）掘立柱建物跡

B-1号掘立柱建物跡 (Fig.225 PL.143・144)

位置 X128・129、Y90・91 主軸方向 N-15°-E 形状・規模 3間以上の南北棟。長軸5.6m。重複 3間以上の掘立柱建物が、ほぼ同じ場所に建て替えられている。柱穴 平面形が円形の柱穴が8基確認された。各柱穴の規模は、長軸径60~90cm、短軸径54~70cmとややばらつきがある。出土遺物 土師器壺・甕・台付甕、須恵器甕等。時期 不明。

（3）溝跡

W-1号溝跡 (Fig.226)

位置 X124・125、Y95~101 主軸方向 N-9°-E 南北に走向する。長さ (22.58) m 上幅1.12m、下幅0.48m、深さ29cm。断面形状 U字形。重複 H-5、畠跡3と重複。H-5より古く、畠跡3より新しい。出土遺物 土師器不明、縄文土器等。時期 不明（古墳時代以降）。

W-2号溝跡 (Fig.226 PL.142)

位置 X106~108、Y127・128 主軸方向 N-105°-E 東西に走向する。長さ (6.08) m 上幅1.40m、下幅0.47m、深さ34cm。断面形状 継やかなU字形。重複 なし 出土遺物 縄文土器、石器（打製石斧）等。時期 不明。

W-3号溝跡 (Fig.227)

位置 X134~136、Y70~79 主軸方向 X136・Y70で屈曲しN-112°-Eの東西に走向する。X136・Y70~X134・Y75までN-19°-Eの南北に走向する。X134・Y76~X135・Y79までN-13°-Wの南北に走向する。長さ (36.50) m 上幅1.6m、下幅1.2m、深さ40cm。断面形状 逆台形。重複 河道1、W-4・5と重複。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器壺・甕・須恵器甕・壺・石製品、縄文土器、近世陶磁器（筒碗）、近世土器等。時期 近世以降。

W-4号溝跡 (Fig.227)

位置 X134・135、Y77~81 主軸方向 N-2°-E 南北に走向する。長さ (13.90) m 上幅 (2.60) m、下幅 (2.40) m、深さ25cm。断面形状 継やかなU字形。重複 W-3と重複、本遺構が古い。出土遺物 なし 時期 不明。

W-5号溝跡 (Fig.227)

位置 X135、Y72・73 主軸方向 N-38°-E 南西から北東に走向する。長さ (2.97) m 上幅0.49m、下幅0.19m、深さ42cm。断面形状 逆台形。重複 W-3と重複、本遺構が古い。出土遺物 なし 時期 不明。

(4) 土坑・ピット (PL.208)

土坑・ピットについては、Tab. 5 土坑・ピット計測表を参照のこと。

第6章 科学分析

第1節 テフラ分析

(株)火山灰考古学研究所

1. はじめに

北関東地方西部に位置する赤城山南麓とその周辺には、赤城、榛名、浅間など近くに分布する火山のほか、中部地方や中国地方、さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、火砕物）が多く降灰している。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代、さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（たとえば町田・新井 2011）などに収録されており、考古遺跡などでテフラに関する調査分析を行って、年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、遺物包含層や遺構の年代などに関するデータを得られるようになっている。

前橋市上細井中西部遺跡群No.3の発掘調査においても、層位や年代が不明な土層が検出されたことから、野外調査（地質調査）を実施して、土層やテフラ層の層序記載ならびに高純度での分析試料の採取を行った。さらに、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析）を行って、指標テフラの検出同定を実施した。調査分析対象地点は、C工区1区深掘地点とD工区1区深掘地点の2地点である。

2. 調査分析地点の土層層序

(1) C工区1区深掘地点

C工区1区深掘地点では、下位より暗灰褐色粘質土（層厚20cm以上）、黄橙色や桃色の粗粒火山灰を多く含む暗灰褐色土（ブロック状、最大層厚4cm）、暗灰褐色土（層厚16cm）、成層したテフラ層（層厚20cm）、灰褐色粘質土（層厚9cm）、成層したテフラ層（層厚10cm）、褐色砂質土（層厚11cm）、黄橙色細粒軽石層（ブロック状、最大層厚2cm、軽石の最大径2mm）、褐色砂質土（層厚3cm）、黄白～黄灰色軽石混じり黄色土（層厚20cm、軽石の最大径5mm）、黄白色軽石をごく少量含む黄褐色土（層厚11cm、軽石の最大径3mm）、黄色軽石混じりでやや暗い褐色土（層厚17cm、軽石の最大径4mm）、やや灰色をおびた黄色土（層厚4cm）、黄色軽石層（ブロック状、最大層厚5cm、軽石の最大径8mm）、やや黄色をおびた灰色土（層厚7cm）、やや黄色をおびた灰色土（層厚17cm）、灰褐色土（層厚7cm）が認められる（第5図）。

これらのうち、下位の成層したテフラ層は、下位より風化した乳白色粗粒火山灰層（層厚10cm）、風化した褐色細粒火山灰層（ブロック状、最大層厚2cm）、黄灰色粗粒火山灰の層相を部分的に残す風化した黄色軽石混じり乳白色粗粒火山灰層（層厚8cm）からなる。一方、上位の成層したテフラ層は、下部の橙色軽石層（層厚4cm、軽石の最大径5mm）と、上部の黒灰色粗粒火山灰混じり橙色軽石層（層厚6cm）からなる。

(2) D工区1区深掘地点

D工区1区深掘地点では、下位より風化した灰色岩片混じりでやや灰色がかった褐色粘質土（層厚10cm以上、岩片の最大径17mm）、黄橙色や桃色の軽石を含む軽石層（ブロック状、最大層厚2cm、軽石の最大径4mm）、黄橙色や桃色の軽石を含む暗灰褐色粘質土（層厚8cm、軽石の最大径4mm）、灰色岩片混じり暗灰褐色粘質土（層厚12cm、岩片の最大径13mm）、成層したテフラ層（層厚22cm）、灰褐色土（層厚13cm）、黒灰色粗粒火山灰混じり橙色軽石層（ブロック状、最大層厚5cm、軽石の最大径5mm）、褐色砂質土（層厚8cm）、黃色粗粒火山灰層（ブロック状、最大層厚2cm）、砂混じり褐色土（層厚11cm）、やや黄色がかった褐色土（層厚21cm）、黄色細粒軽石混じり褐色土（層厚20cm、軽石の最大径3mm）、黄色軽石層（ブロック状、最大層厚5cm、軽石の最大径3mm）、

やや灰色がかった黄色土（層厚14cm）、やや黄色がかった灰色土（層厚20cm）、暗灰褐色土（層厚12cm）が認められる（第6図）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より橙色細粒軽石混じり暗灰色粗粒火山灰層（層厚12cm、軽石の最大径2mm）、橙色細粒火山灰層（層厚2cm）、橙色軽石混じり暗灰色粗粒火山灰層（層厚8cm、軽石の最大径7mm）からなる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

上述した2地点で採取された試料のうちの13試料を対象に、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出・同定を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 砂分の含有率に応じて試料3～6gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第2表に示す。本遺跡におけるテフラ検出分析の結果、次の5種類の軽石や火山ガラスを検出することができた。

タイプa：無色透明のバブル型ガラス。

タイプb：灰色の軽石（最大径4.9mm）や、淡灰色～灰色、灰白色、淡褐～褐色のスポンジ状軽石型ガラス。
不透明鉱物以外の重鉱物（以降、重鉱物）として、斜方輝石や单斜輝石を共伴する。

タイプc：灰白色～白色のスポンジ状や、細かく発泡した白色織維束状の軽石型ガラスで、産出層準では淡灰色や無色透明の分厚い中間型ガラスが認められる。

タイプd：淡灰色～灰色や無色透明の中間型ガラスで、少量の白色のスポンジ状軽石型ガラスを伴う。

タイプe：黄色軽石層に含まれる淡灰色の分厚い中間型ガラス。重鉱物として、斜方輝石や单斜輝石を共伴する。

C工区1区深掘地点の試料12には、タイプaの火山ガラスがごくわずかに含まれている。また、試料11では、タイプbの火山ガラスが少量認められる。試料6や試料4にも、タイプbの火山ガラスが含まれている。さらに、試料3ではタイプc、試料2ではタイプb、そして試料1ではタイプeの火山ガラスがそれぞれ認められる。

一方、D工区1区深掘地点では、試料9にタイプaの火山ガラスが少量含まれている。また、試料3～1ではタイプbの火山ガラスが認められ、試料1には軽石も少量含まれている。

4. 考察

テフラ検出分析で認められたテフラ粒子のうち、タイプaの火山ガラスは、その特徴から約3万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT、町田・新井 1972, 2011、早田 2019）に由来する可能性が高い。また、タイプbの火山ガラスは、採取されたテフラの層相を合わせると、約2.9～2.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group、新井 1962、町田・新井 2011、早田 2019など）に由来すると考えられる。したがって、本遺跡群のNo.3およびNo.4では、それぞれ4層ものAs-BP Group構成層が検出されたことになる。このうち、最下部を構成するテフラ層は、層相や岩相、さらにAT包含層の直上に層位があること

から、As-BP Group の最下部を構成する室田軽石 (MP, 森山 1971, 早田 1990, 1996) と考えられる。

タイプ c の火山ガラスが検出された C 工区 1 区深掘地点の試料 3 には、その層位や火山ガラスの特徴から、約 2.2 万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石 (As-Sr, 町田ほか 1984, 町田・新井 2011, 早田 2019 など) が混在していると考えられる。また、その上位の試料 2 に含まれるタイプ d の火山ガラスは、その層位や特徴から、約 2 万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢テフラ群 (As-Ok Group, 中沢ほか 1984, 早田 2019 など) に由来すると考えられる。

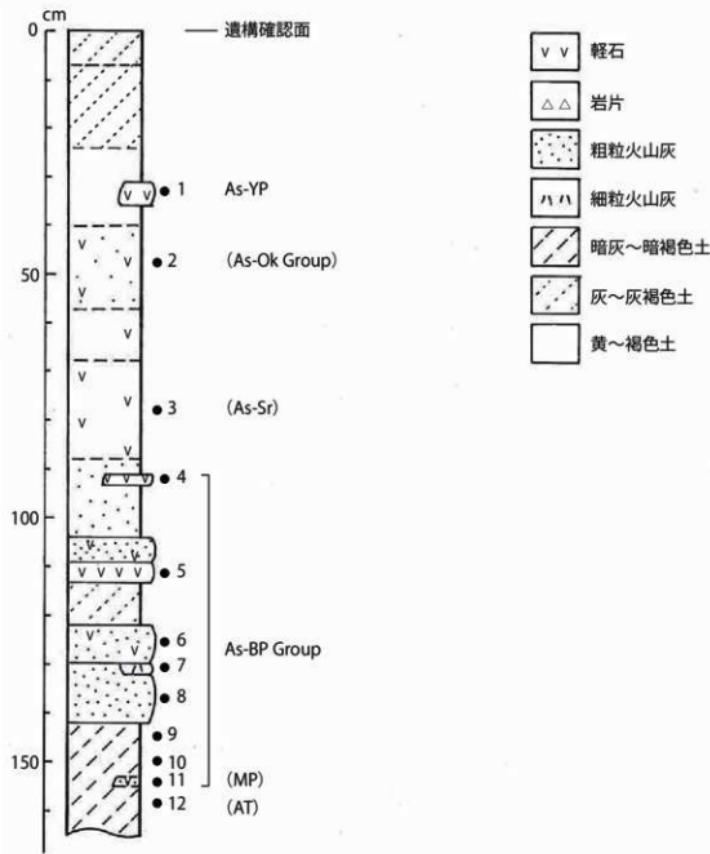
さらに、ローム層最上部にある黄色の軽石層 (C 工区 1 区深掘地点の試料 1) は、層位や層相、さらに火山ガラス (タイプ e) の特徴などから、約 1.65~1.5 万年前に浅間火山から噴出した浅輪板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井 1962, 町田・新井 2011 など) に同定される。

5.まとめ

前橋市上細井中西部遺跡群において、野外調査（地質調査）とテフラ分析（テフラ検出分析）を実施した。その結果、下位より始良 Tn 火山灰 (AT, 約 3 万年前)、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約 2.9~2.4 万年前) のうちの室田軽石 (MP) を含む 4 層、浅間白糸軽石 (As-Sr, 約 2.2 万年前)、浅間大窪沢軽石群 (As-Ok Group, 約 2 万年前)、浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約 1.65~1.5 万年前) を検出することができた。今回の分析により、本遺跡群では、これらの少なくとも 8 層もの指標テフラを利用した後期旧石器文化の詳細な編年研究が可能なことが明らかになった。

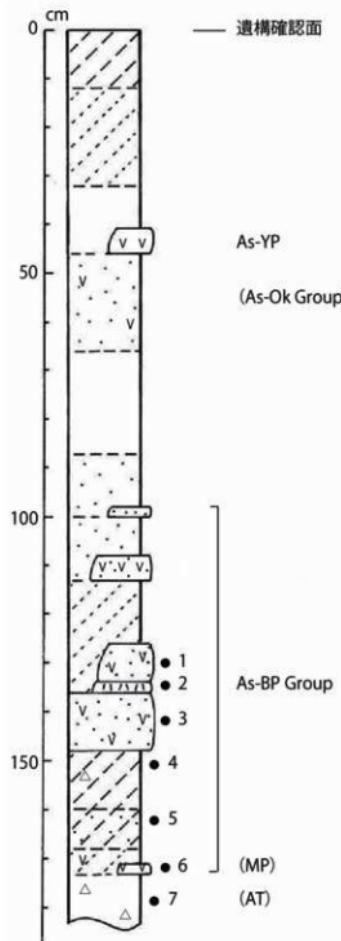
文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, pp.1-79.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縦文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, №53, pp.41-52.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質。地図研専報, №14, pp.1-45.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—。科学, 46, pp.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (2011) 新編火山灰アトラス (第 2 刷)。東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究に關係するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, pp.865-928.
- 森山昭雄 (1971) 棚名火山東・南山麓の地形—とくに軽石流の地形について—。地理学報告, №36・37, pp.107-116.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山 黒斑～前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, №14, pp.69-70.
- 早田 勉 (1990) 群馬県の風土。群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編 I 原始古代 I」, pp.37-129.
- 早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第 1 テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学 加速器質量分析計業績報告書, №7, pp.256-267.
- 早田 勉 (2019) 北関東地方西部における旧石器時代の火山噴火と環境変化。令和元年度岩宿フォーラム講演要旨集, pp.19-25.



第5図 C工区1区深堀地点1の土層柱状図

● : テフラ分析試料の層位。数字 : テフラ分析の試料番号。



第6図 D工区1区深堀地点の土層柱状図

● : テフラ分析試料の層位. 数字 : テフラ分析の試料番号.

第2表 テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			おもな重晶物
		質	色調	最大径	量	形態	色調	
C IK 1区深掘地点1	1	*			md		淡灰	opx, cpx
	2	**			md, pm (sp)		淡灰~灰, 黑色透明	opx, cpx
	3	*			pm (sp, fb) > md		灰白~白, 淡灰, 黑色透明	opx, cpx
	4	(*)			pm (sp)		淡褐	opx, cpx
	5							opx, cpx
	6	(*)			pm (sp)		灰~灰白	opx, cpx
	11	*			pm (sp)		褐, 灰白~灰	opx, cpx
	12	(*)			bw		無色透明	opx, cpx, (am)
	1	*	灰	4.9mm	*	pm (sp)	灰	opx, cpx
	2				(*)	pm (sp)	灰	opx, cpx
D IK 1区深掘地点	3				**	pm (sp)	灰白~灰	opx, cpx
	9							opx, cpx
	10				*	bw	無色透明	opx, cpx, (am)

**** : とくに多い、 *** : 多い、 ** : 中程度、 * : 少ない、 (*) : 非常に少ない、
 bw : バブル型、 pm : 軽石型、 md : 中間型、 sp : スボンジ状、 fb : 繊維束状、 opx : 方輝石、 cpx : 斜方輝石、 am : 角閃石。
 重晶物は不透明部以外、重晶物の()は、量が少ないと示す。

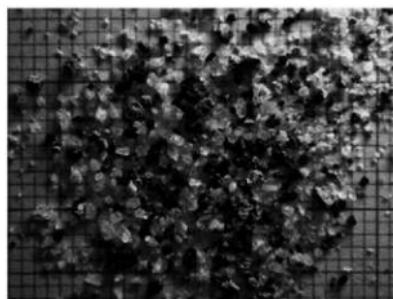


写真1 C工区1区深掘地点1・試料1（落射光）
As-YP. 淡灰色中間型ガラスを少量含む。
felsic鉱物に富み、重鉱物として斜方輝石
や單斜輝石を含む。背景は1mmメッシュ。

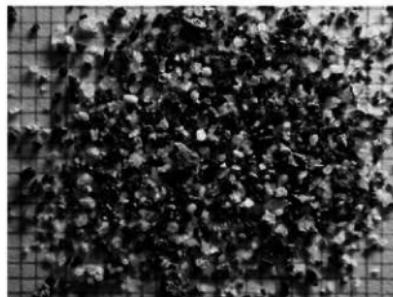


写真2 C工区1区深掘地点1・試料3（落射光）
灰白～白色のスponジ状軽石型や、白色の繊維束状軽石型、淡灰色および無色透明の中間型のガラスを少量含む。重鉱物には斜方輝石
や單斜輝石が認められる。背景は1mmメッシュ。

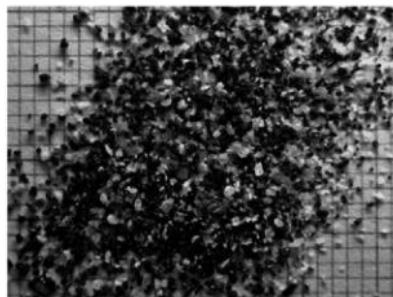


写真3 C工区1区深掘地点1・試料4（落射光）
As-BP Group の一部。淡褐色のスponジ状軽
石型ガラスがごく少量含まれている。重鉱物
には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。背
景は1mmメッシュ。



写真4 C工区1区深掘地点1・試料5（落射光）
As-BP Group の一部。灰色の軽石やスポンジ
状軽石型ガラスを少量含む。重鉱物として、
斜方輝石や単斜輝石が認められる。背景は
1mmメッシュ。

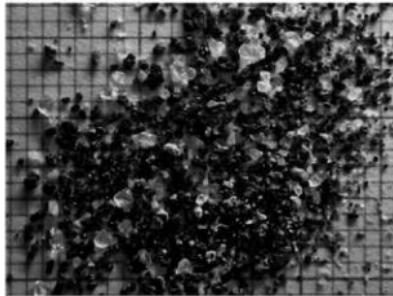


写真5 D工区1区深掘地点・試料9（落射光）
As-BP Group 最下部のMP. β 石英を含む。
重鉱物には斜方輝石や単斜輝石が認められ
る。背景は1mmメッシュ。



写真6 D工区1区深掘地点・試料10（落射光）
ATに由来する無色透明のバブル型ガラスを
含み、 β 石英も認められる。重鉱物には、斜
方輝石や単斜輝石が認められる。背景は1mm
メッシュ。

第2節 上細井中西部遺跡群出土炭化材同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

上細井中西部遺跡群（前橋市上細井町・青柳町所在）は、赤城山南西麓から広がる緩斜面の末端に立地し、その先には広瀬川低地帯が広がる。これまでの調査の結果、奈良・平安時代の集落が検出されている。今回は住居跡に関連した炭化材の種類を知り、当時の木材利用に関する情報を得る。

2. 試料

分析試料は、遺跡より出土した炭化材13点である。試料の詳細は結果とともに第3表に示す。

3. 分析方法

木口（横断面）・桿目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

4. 結果

結果を第3表に示す。検出された試料はクリが最も多く5点、ケヤキ、コナラ亜属クヌギ節、カエデ属が各2点、タケ亜科、イネ科草本類が各1点である。

以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節

(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*)

ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

第3表 樹種同定結果

地 点	番 号	樹 種
30B19A 工区4区H-11	炭化材1	ケヤキ
30B19A 工区4区H-11	炭化材2	ケヤキ
30B19A 工区4区H-11	炭化材3	カエデ属
30B19A 工区4区H-11	炭化材4	タケ亜科
30B19A 工区4区H-11	スミ No.27	クリ
30B19A 工区4区H-11	スミ No.28	クリ
30B19A 工区4区H-11	スミフク土	カエデ属
30B19A 工区4区H-11	スミのクダ	イネ科草本類？
31B21B 工区1区J-1	炭	コナラ亜属クヌギ節
31B21B 工区2区H-3	炭化材1	クリ
31B21B 工区2区H-3	炭化材2	クリ
31B21B 工区2区H-3	炭化材3	コナラ亜属クヌギ節
31B21B 工区2区H-3	炭化材4	クリ

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で管壁は薄い。単孔および2~3個が複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列~交互状。放射組織は同性、1~5細胞幅、10~30細胞高。木織維が木口面において不規則な紋様をなす。

・イネ科 (Gramineae)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを織維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。タケ亜科 (Bambusoideae) は、織維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。特に周辺部で顕著である。一方、試料が脆弱で、細胞壁がうすく、織維細胞が薄い試料は草本類 (grass) とした。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。

5. 考察

検出された炭化材のうち、多い種類はクリである。クリは、重硬な木材であり、加工が容易で水湿に強いので建物の柱材などの構造材に多用される。その他、家具、建具、屋根、器具等様々な用途で使われる。この他、火持ちが良いことから薪炭材としても優良である。次に多いコナラ亜属クヌギ節も、クリに準じた使われ方をするため、用途は広い。またクリとクヌギ節は、コナラ節などと共に人里に多い樹木で、里山林を構成する。里山林は、適度な伐採や粗染の収奪などが行われることにより維持管理される森林（二次林）で、萌芽による更新が容易な陽樹で構成される。おそらく、当時（奈良・平安時代）人里近くにこのような二次林が存在し、そこから木材を得ていたと思われる。

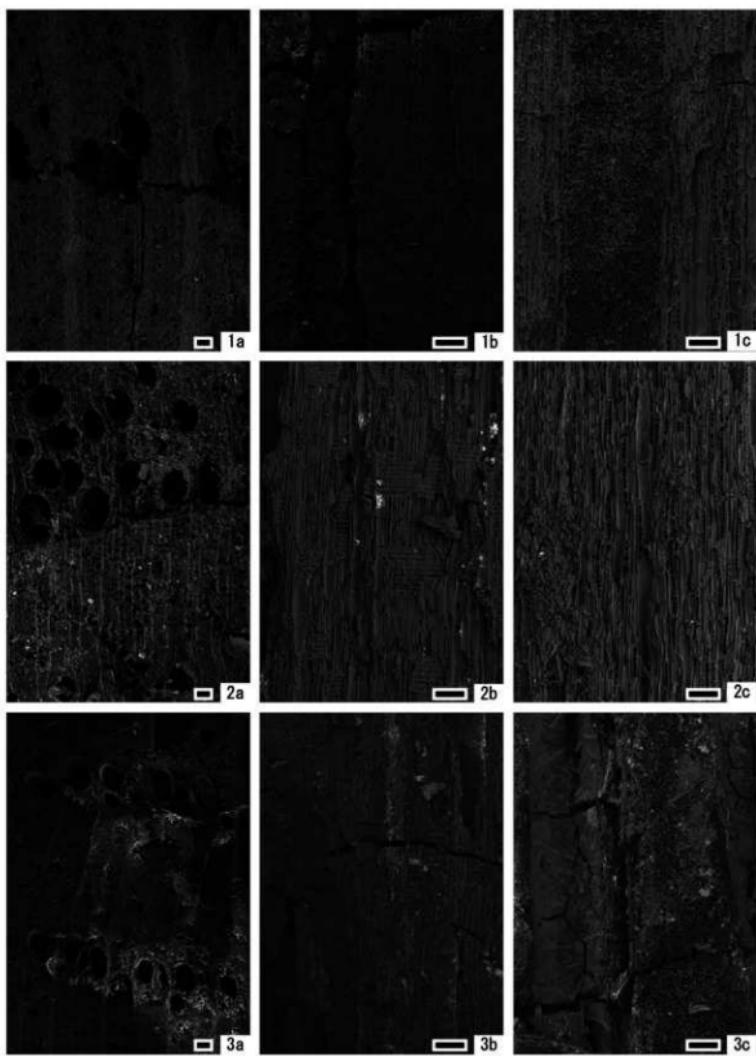
ケヤキは堅く丈夫で木目が美しい良材であり、大きな木材が得やすいことから、建材、器具材、彫刻など様々な用途に用いられる。日本各地に普通に生育する種類であり、里山林にもよくみられる。カエデの木材は、重硬で粘りがあるため、器具材などの用途に向く。人里近くや河川沿いなどの明るい林地を好むため、ケヤキ同様里山林にも多くみられる。このように検出された種類は遺跡周辺に生育している樹木を採取し、利用したと思われる。

このほか、主に屋根材として用いられるイネ科草本類と、柔軟性に富み、器具や資材として多用されるタケ類が出土している。タケ亜科は径が細いことから、ササの仲間と思われる。これらは、古代の住居では壁材、屋根材として用いられることが多く、建築資材等として利用されたと思われる。

木製品用材データベース（伊東・山田編、2012）をみると、県内の奈良・平安時代の炭化材は、主に住居跡から出土しており、クリ、コナラ節、クヌギ節が多用される傾向にある。またケヤキやカエデ属も散見される。さらに、主に屋根材として用いられる茅材や様々な資材として多用されるタケ類の出土も県内では多い。

引用文献

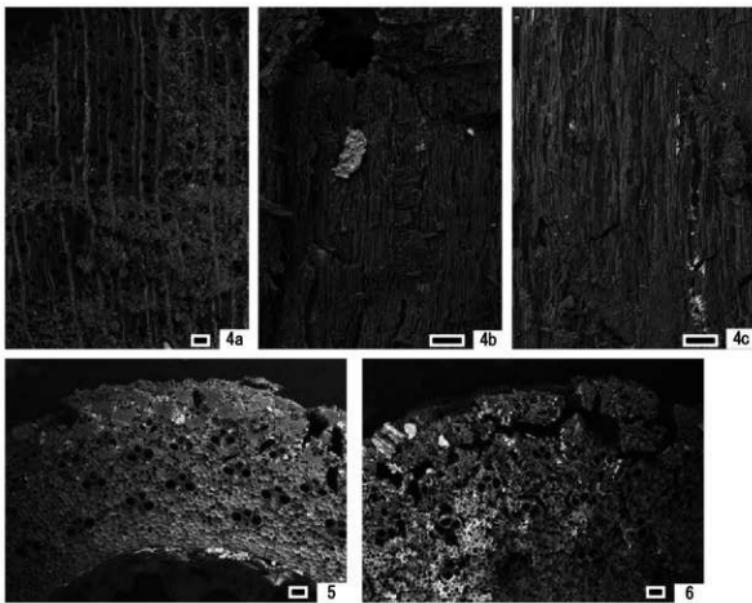
- 林 昭三 (1991) 日本産木材顯微鏡写真集、京都大学木質科学研究所。
伊東隆夫 (1995) 日本産広葉樹材の解剖学の記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, pp.81~181.
伊東隆夫 (1996) 日本産広葉樹材の解剖学の記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, pp.66~176.
伊東隆夫 (1997) 日本産広葉樹材の解剖学の記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, pp.83~201.
伊東隆夫 (1998) 日本産広葉樹材の解剖学の記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, pp.30~166.
伊東隆夫 (1999) 日本産広葉樹材の解剖学の記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, pp.47~216.
伊東隆夫・山田昌久(編) (2012) 木の考古学 出土木製品用材データベース、海青社, 449p.
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) (2006) 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顯微鏡的特徴リスト、伊東 隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
島地 謙・伊東隆夫 (1982) 図説木材組織、地球社, 176p.
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) (1998) 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顯微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. コナラ垂属クヌギ節(31B21 1区 J-1 炭)
2. クリ(31B21 2区 H-3 炭化材1)
3. ケヤキ(30B19 4区 H-11 炭化材1)

a:木口 b:柾目 c:板目
スケールは100 μm

第9図 炭化材 (I)



4. カエデ属(30B19 4区 H-11 スミフク土)
 5. タケ亜科(30B19 4区 H-11 炭化材4)
 6. イネ科草本類?(30B19 4区 H-11 スミのクダ)

a:木口 b:径目 c:板目
スケールは100 μm

第10図 炭化材 (2)

第3節 上細井中西部遺跡群出土の黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展(パレオ・ラボ)

1. はじめに

前橋市上細井町に所在する上細井中西部遺跡群では、縄文時代前期の遺物を伴う竪穴住居跡や土坑が検出されている。ここでは、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器31点である(第4表)。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分光計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

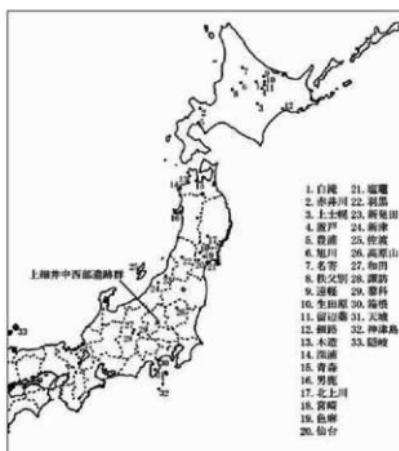
黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率 = Rb強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)
- 2) Sr分率 = Sr強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)
- 3) Mn強度 × 100 / Fe強度
- 4) log(Fe強度 / K強度)

次に、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 × 100 / Fe強度の判別図

第4表 分析対象となる黒曜石

分析No.	T区	遺構名	器種	備考
1	B T区 1区	J-2	石器	31 B 21 B T区 1, J-2, 15
2		J-2	石器	31 B 21 B T区 1, J-2, 54
3		J-3	石器	31 B 21 B T区 1, J-3, 2
4		J-5	石器	31 B 21 B T区 1, J-5覆土
5			剥片	31 B 21 B T区 1, J-5, 7
6		J-1	剥片	31 B 21 B T区 4, J-1, 22
7				
8				
9		J-2	剥片	31 B 21 B T区 4, J-2覆土
10				
11				
12				
13	B T区 4区			
14		J-3	剥片	31 B 21 B T区 4, J-3覆土
15			石核	
16		J-4	剥片	31B21B T区 4, J-4覆土
17		J-5	剥片	31B21B T区 4, J-5覆土
18			石核	
19				
20				
21	D T区 3区	JD-11	剥片	3 B 24 D T区 3, JD-11覆土
22				
23				
24				
25				
26	D T区 4区-1		剥片	3 B 24 D T区 4-1, J-1覆土
27		J-1		
28			石核	
29				
30			石器未成品	
31				



第11図 黒曜石産地分布図(東日本)

第5表 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白 滝	赤石山山頂 (43), 八号沢露頭 (15)	赤石山山頂, 八号沢露頭, 八号沢, 黒曜の沢, 輓加林道 (36)
		7の沢川支流 (2), IK露頭 (10), 十勝沢露頭直下河床 (11), アジサイの滝露頭 (10)	
	赤井川	曲川・土木川 (24)	
	上士幌	十勝一級 (4), タウシュベツ川右岸 (42), タウシュベツ川左岸 (10), 十三ノ沢 (32)	
	置戸所	置戸山 (5)	
	豊浦	所山 (5)	
	旭川	豊泉 (10)	
	名寄	近文台 (8), 雨翁台 (2)	
	秩父別	忠烈布川 (19)	
	秩父別	近文台 (8)	
	秩父別	中山 (65)	
	遠軽	社名瀬川河床 (2)	
	生田原	仁田布川河床 (10)	
	留辺蘂	ケショマップ川河床 (9)	
	留辺蘂	留辺蘂 (2)	
	釧路	釧路市営スキー場 (9), 阿寒川右岸 (2), 阿寒川左岸 (6)	
	木造	出来島海岸 (15), 鶴ヶ坂 (10)	
	深浦	出来島海岸 (15)	
青森	八森山	岡崎浜 (7), 八森山公園 (8)	
	青森	天田内川 (6)	
	金ヶ崎	金ヶ崎温泉 (10)	
	男鹿	駿本海岸 (4)	
秋田	北上川	北上折居1	
	北上川	北上折居2	北上川 (9), 真城 (33)
	北上川	北上折居3	
岩手	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉 (40)
	色麻	根岸	根岸 (40)
	仙台	秋保1	土蔵 (18)
	仙台	秋保2	
	塩竈	塩竈	塩竈 (10)
山形	月山	月山莊前 (24), 大越沢 (10)	
	羽黒	櫛引	たらのき代 (19)
新潟	新発田	板山	板山牧場 (10)
	新津	金津	追分 (4)
	佐渡	真光寺	金津 (7)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢 (22)
	七尋沢	七尋沢 (3), 宮川 (3), 枝持沢 (3)	
長野	和田	西餅屋	芙蓉バーライト土砂集積場 (30)
		龜山	龜山 (14), 東餅屋 (54)
		小深沢	小深沢 (42)
		土屋橋1	土屋橋西 (10)
		土屋橋2	新和田トンネル北 (20), 土屋橋北西 (58), 土屋橋西 (1)
		古峰	和田峰トンネル上 (28), 古峰 (38), 和田峰スキー場 (28)
		ブドウ沢	ブドウ沢 (20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下 (20)
		高松沢	高松沢 (19)
		諏訪	星ヶ台 (35), 星ヶ塔 (20)
蓼科	冷山	冷山 (20), 麦草峠 (20), 麦草峠東 (20)	
	芦ノ湯	芦ノ湯 (20)	
神奈川	箱根	烟宿	烟宿 (51)
		鍛冶屋	鍛冶屋 (20)
		上多賀	上多賀 (20)
		天城	柏峠 (20)
静岡	天城	柏峠	柏峠 (20)
	恩馳島	恩馳島 (27)	
東京	神津島	砂崎	砂崎 (20)
	久見	久見バーライト中 (6), 久見採掘現場 (5)	
島根	隠岐	対浦	対浦海岸 (3), 加茂 (4), 岸浜 (3)
	対浦	対浦海岸 (3), 加茂 (4), 岸浜 (3)	

と横軸 Sr 分率－縦軸 log (Fe 強度／K 強度) の判別図を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log (Fe 強度／K 強度) の値が減少する点に注意が必要である（望月 1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

判別図のバックデータとなる原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第 5 表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第 11 図に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

第 6 表に石器の測定値および算出した指標値を、第 12・13 図に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするために、図では各判別群を橢円で取り囲んである。

分析の結果、31 点すべてが星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）の範囲にプロットされた。

第 5 表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。今回分析した石器は、すべて信州の諏訪エリア産であった。

4. おわりに

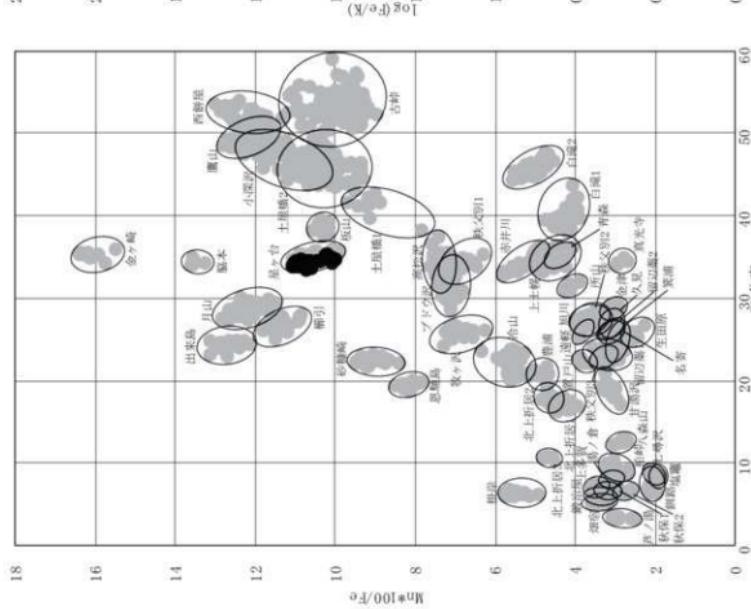
上総井中西部遺跡群より出土した縄文時代前期の黒曜石製石器計 31 点について、蛍光 X 線分析による産地推定を行った。その結果、31 点すべてが諏訪エリア産と推定された。

引用文献

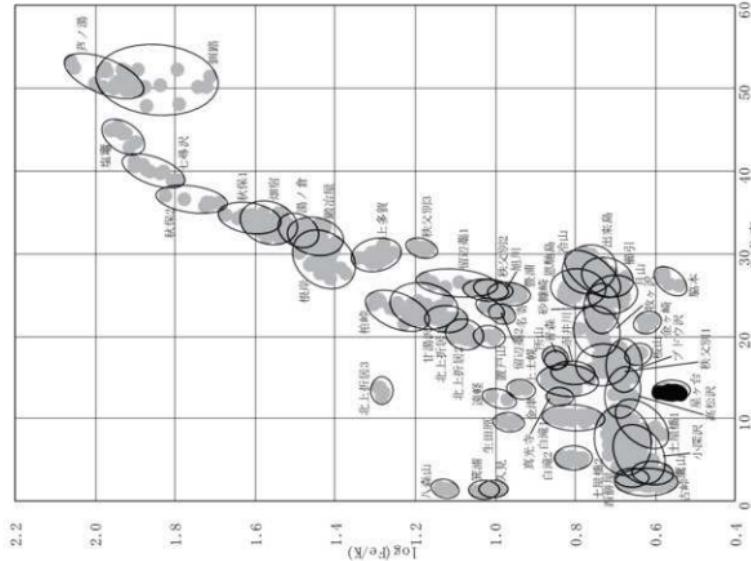
望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2 —上和田城山遺跡篇—」大和市教育委員会、pp.172-179.

第6表 測定値および产地推定結果

分析No	K 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	Mn*100 Fe	Sr 分率	log Fe K	判別群	エリア	分析No
1	285.7	109.6	1047.6	782.9	296.6	395.4	790.2	34.56	10.46	13.09	0.56	星ヶ台	調訪	1
2	247.8	98.8	918.7	740.1	288.7	384.5	771.5	33.87	10.75	13.21	0.57	星ヶ台	調訪	2
3	230.3	90.1	900.6	661.1	247.9	333.6	660.5	34.74	10.00	13.03	0.59	星ヶ台	調訪	3
4	237.3	93.2	868.5	701.4	272.4	370.4	735.3	33.73	10.73	13.10	0.56	星ヶ台	調訪	4
5	337.1	130.4	1225.9	927.1	355.4	474.4	938.6	34.39	10.63	13.19	0.56	星ヶ台	調訪	5
6	212.4	84.0	781.9	617.1	245.9	325.4	652.8	33.52	10.74	13.35	0.57	星ヶ台	調訪	6
7	274.0	105.6	954.3	750.7	292.7	392.2	778.6	33.90	11.07	13.22	0.54	星ヶ台	調訪	7
8	206.8	101.7	919.0	752.8	288.0	399.8	786.4	33.80	11.06	12.93	0.54	星ヶ台	調訪	8
9	280.0	108.8	1013.3	748.1	285.2	386.5	754.5	34.41	10.73	13.12	0.56	星ヶ台	調訪	9
10	277.0	108.5	993.0	771.4	295.3	390.7	815.1	33.95	10.93	13.00	0.55	星ヶ台	調訪	10
11	254.5	91.8	898.9	622.6	230.6	306.8	601.0	35.36	10.21	13.10	0.55	星ヶ台	調訪	11
12	257.2	104.7	950.4	715.6	273.2	368.2	733.4	34.23	11.01	13.07	0.57	星ヶ台	調訪	12
13	313.5	122.4	1152.9	879.5	337.9	457.5	898.2	34.18	10.62	13.13	0.57	星ヶ台	調訪	13
14	325.7	124.8	1170.7	921.4	354.0	471.2	928.0	34.45	10.66	13.24	0.56	星ヶ台	調訪	14
15	259.4	99.5	987.1	719.0	271.8	356.3	712.2	34.91	10.08	13.20	0.58	星ヶ台	調訪	15
16	260.0	103.3	936.7	725.3	278.0	381.2	754.7	33.90	11.03	13.00	0.56	星ヶ台	調訪	16
17	278.3	107.0	1031.1	780.2	298.4	399.7	783.2	34.50	10.38	13.19	0.57	星ヶ台	調訪	17
18	311.8	121.1	1111.5	836.0	321.6	427.5	843.6	34.42	10.90	13.24	0.55	星ヶ台	調訪	18
19	262.7	99.6	960.0	725.7	272.5	369.5	734.0	34.53	10.37	12.97	0.56	星ヶ台	調訪	19
20	261.8	76.4	720.9	561.4	220.1	296.7	593.4	33.59	10.60	13.17	0.55	星ヶ台	調訪	20
21	309.8	119.5	1110.1	867.1	331.5	444.3	881.4	34.35	10.77	13.13	0.55	星ヶ台	調訪	21
22	252.7	98.2	905.1	674.1	259.1	350.1	694.7	34.08	10.84	13.10	0.55	星ヶ台	調訪	22
23	301.5	114.8	1080.3	849.1	323.3	433.9	857.1	34.47	10.63	13.12	0.55	星ヶ台	調訪	23
24	323.1	127.0	1158.4	864.9	327.9	443.5	876.5	34.42	10.96	13.05	0.55	星ヶ台	調訪	24
25	249.8	93.9	930.8	712.6	273.3	367.6	722.8	34.32	10.08	13.16	0.57	星ヶ台	調訪	25
26	288.3	109.2	1064.1	731.0	273.3	362.1	713.2	35.15	10.26	13.14	0.57	星ヶ台	調訪	26
27	256.9	98.0	915.6	726.7	281.9	372.7	741.5	34.23	10.71	13.28	0.55	星ヶ台	調訪	27
28	310.5	120.6	1113.4	865.4	332.6	443.9	873.4	34.41	10.83	13.22	0.55	星ヶ台	調訪	28
29	351.3	135.9	1253.9	951.7	359.1	485.0	949.0	34.67	10.84	13.08	0.55	星ヶ台	調訪	29
30	341.5	127.1	1193.4	900.6	345.1	457.5	914.2	34.41	10.65	13.18	0.54	星ヶ台	調訪	30
31	334.9	126.9	1192.0	905.6	349.3	466.0	935.6	34.09	10.65	13.15	0.55	星ヶ台	調訪	31



第12図 黒曜石製石器の产地推定判別図(1)



第13図 黒曜石製石器の产地推定判別図(2)

第7章 まとめ

第1節 上細井中西部遺跡群の縄文時代

1. 本遺跡群の縄文時代概観

赤城山南西麓に位置する本遺跡群では、総じて縄文時代の遺物出土量はあまり多くはなく、堆積覆土から該期の遺構と判断したものも含まれるが、縄文時代の遺構として、A区：住居址1軒・土坑2基、B区：住居址9軒・土坑36基、C区：土坑15基、D区：住居址5軒・土坑43基、ピット47基が検出されている。遺構外出土遺物として早期前半の井草式から後期中葉の加曾利B2式まで出土しており、本遺跡群は断続的ながら長期的に反復利用されていたことが理解される。

本遺跡群周辺の縄文時代草創期の遺物は、東方の堤遺跡（群埋文 2013）にて石槍の製作址が検出されたほかは、上百駄山遺跡（富士見村教委 1995）で微隆起線文土器が、小神明勝沢境遺跡（群埋文 2012）で有茎尖頭器が出土しているのみであり、当地域は散発的な利用にとどまっていたと考えられる。

早期になると、本遺跡群B・C区の中間に位置する上細井中島遺跡（群埋文 2013）では撫糸文土器期の住居址や集石遺構が検出されている。赤城白川を挟んで西方に位置する青柳宿上遺跡（群埋文 2015）では子母口式期の住居址や、押型文～条痕文土器期の集石遺構、土器・石器集中箇所が出土したほか、撫糸文～条痕文土器期の遺物包含層が検出されている。本遺跡群北方に位置する坂上遺跡（富士見村教委 1994）では撫糸文～条痕文土器期の集石遺構が確認されている。また、B・D区間にあたる山王・柴遺跡群（群埋文 2016）で夏島式土器が出土するなど、早期になると遺構が確認されるとともに、遺構外出土を含めた遺物の出土量も増加しており、次第に当地域を含む赤城山南西麓が頻繁に利用されるようになる様子が伺える。本遺跡群出土の撫糸文土器や鶴ヶ島台式などの条痕文土器なども、当地域利用の活性化に伴うものと考えられる。

前期になると赤城山南麓で住居址の検出軒数の増加が指摘され、白川扇状地扇端の台地上では150軒を超える住居址が確認されている（群埋文 2012ほか）。前期前半の住居址は久保田遺跡（富士見村教委 1989）や芳賀東部团地遺跡群（前橋市教委 1990）、前期中葉の住居址は芳賀東部团地遺跡群などで検出されている。本遺跡群D区では、黒浜式期の住居址2軒、花積下層式期の土坑1基、黒浜式期の土坑1基が検出され、遺構外出土遺物としても花積下層式～黒浜・有尾式期の土器が出土しており、当地域における反復居住の結果と見られる。また、前期後半になると本遺跡群でも住居址や土坑が検出されており、当地域利用の痕跡が明瞭になるとともに、本遺跡群の中心時期に当たる。検出遺構は前期後半～前中期中葉（諸磯a式～十三菩提式）の住居址10軒、土坑8基を数える。これらの遺構は赤城白川と觀音川に画された台地のB区に占地するものの、時期により分布域が異なる。

中期になると遺構数は減少するものの阿玉台II式期の土坑や中期中葉の住居址が竜の口川東岸の台地西縁にあたるA区で検出されている。遺構外で新巻類型土器が採集され、D区でも勝坂式土器が確認されている。中期前半から中葉の集落遺跡は、本遺跡を含め周辺地域では減少するものの、赤城山南西麓から南麓にかけて大規模な集落が形成される。西南麓では三原田遺跡（群馬県企業局 1980ほか）や道訓前遺跡（北橘村教委 2001）、南麓では鼻毛石中山遺跡（宮城村教委 1996）などがあり、本遺跡北方1.5kmほどの位置には旭久保遺跡群、東方3.5kmほどの位置には五代遺跡群（前橋市教委 2015ほか）が所在し、大規模で拠点的な集落が確認されている。拠点集落周辺に、本遺跡のような小規模な遺跡が構築されたと見ることができる。中期後半はA区から谷を隔てて西側のB区にて加曾利EIII式期の住居址1軒が検出され、遺構外でも土器が採集されている。A・B区間に位置する新田上遺跡（群埋文 2015）では12軒の住居址が検出され、東方に位置する上細井中島遺跡でも住居址7軒が検出されている。いずれも加曾利EIII式期の住居址であり、大規模な集落の端部に本遺跡が位置すると考えられる。

後期ではB区にて堀之内2式や加曾利B2式が遺構外から出土しているのみであり、遺構は検出されていない。称名寺式期の住居址は小神明遺跡群や堤遺跡、芳賀北曲輪遺跡（前橋市埋文調査団 1990）などで検出されており、中期から継続する集落（芳賀北曲輪遺跡）と、中期末～後期初頭に形成される集落（堤遺跡等）が認められる（群理文 2013）。本遺跡は、周辺地域の反復利用に伴って短期的に利用されたものと考えられる。

晩期になると、白川扇状地一帯を見ても確認されておらず、遺跡の立地に大きな変化が生じたことが推定される。

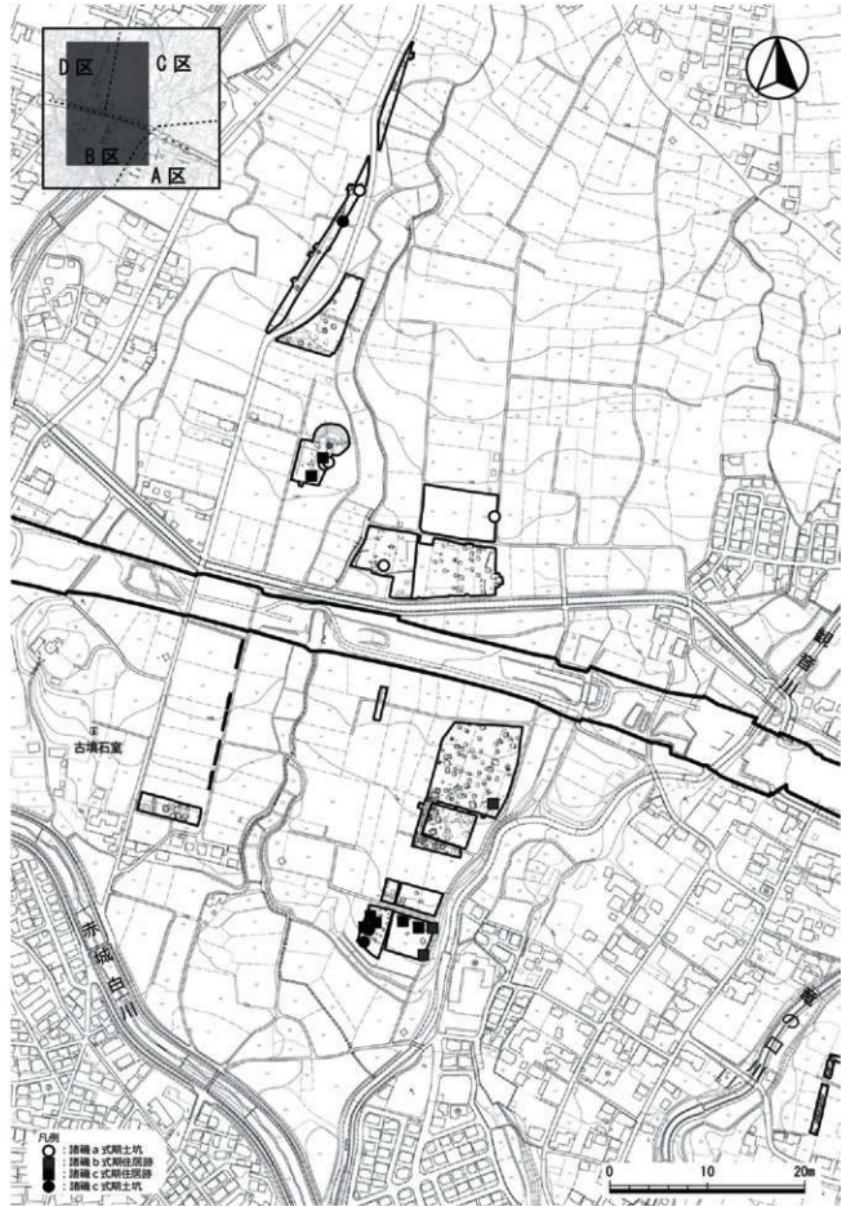
2. 赤城山南西麓地域における前期後半の遺跡

本遺跡群の中心時期となる前期後半について、遺構の分布や周辺遺跡の様相について概観したい。上述のとおり赤城白川と觀音川に画された台地に占地するが、時期により分布域や遺構密度が異なっている。諸磯a式期の遺構としては土坑5基が検出され、縦長に画された台地の中央部に占地し、住居址は検出されていない。諸磯a式期の集落は、芳賀東部团地遺跡群や白川遺跡、川白田遺跡、上泉唐ノ堀遺跡などで住居址が検出されており、9軒検出された芳賀東部团地遺跡群の頻繁な反復利用が認められるものの、1～2軒程度の検出にとどまる遺跡も多く、広い範囲で散発的な利用が想定される。

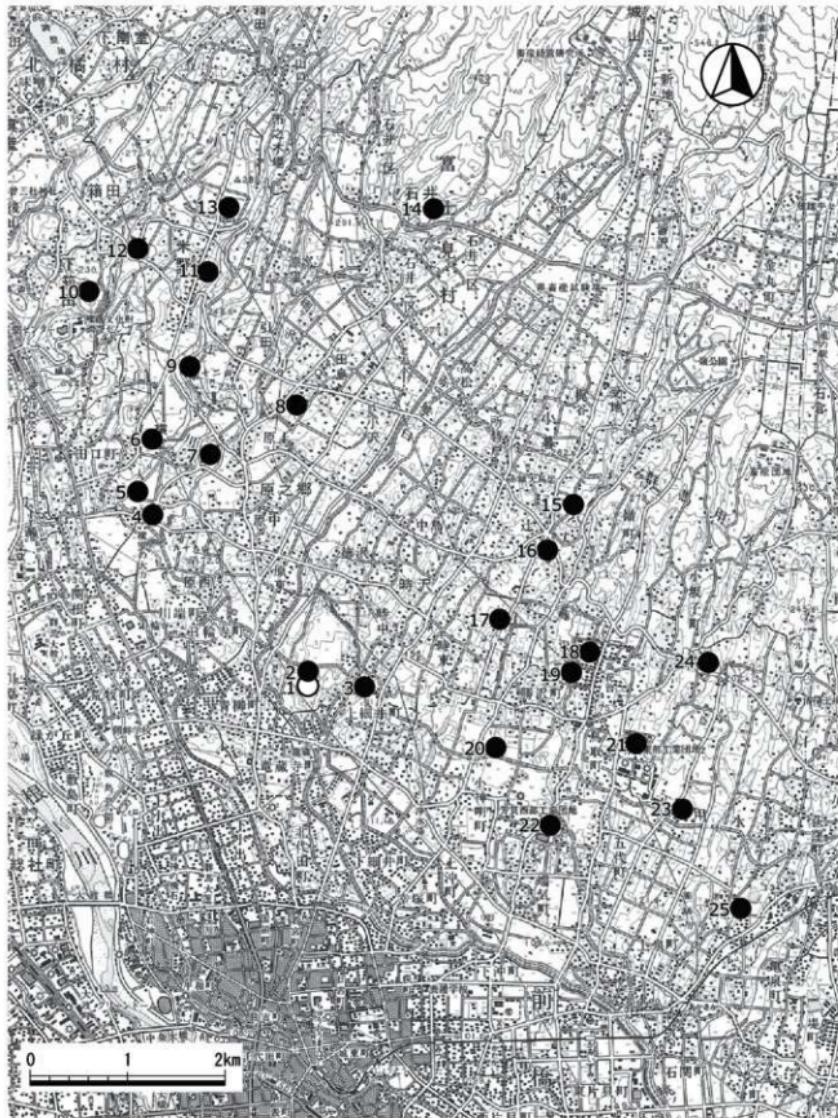
本遺跡群では諸磯b式期住居址が3軒検出されており、いずれも台地南端部東縁の觀音川に面して占地する。住居址の分布域北側に接する上細井蟬山遺跡は同じ台地上に占地しており、一体の集落と見ることができるだろう。その場合、本遺跡群の調査では台地縁辺部で住居址が確認されているが、台地中央部まで居住域が広がっていた可能性がある。周辺地域では10軒前後の住居址が検出される遺跡も多く、愛宕山遺跡や上泉唐ノ堀遺跡をはじめ、上細井蟬山遺跡、川白田遺跡などがある。この時期には安中市中野谷松原遺跡（安中市教委 1996）や昭和村糸井宮前遺跡（群理文 1986）といった大規模な拠点集落の形成が認められ、これらの遺跡も拠点集落の一つであろう。12軒の住居址が検出された愛宕山遺跡について、一時期には1～2軒程度の分布と指摘がなされているが（富士見村教委 1995）、その分反復してその地を利用した証左と言え、赤城山南西麓地域の活発な利用が想定される。

諸磯c式期は本遺跡群における縄文時代の活動のピークであり、住居址7軒、土坑3基が検出されている。台地南端部にまとまる傾向が認められるが、北側の台地中央部付近でも遺構が検出されており、台地を広く利用していることが窺える。周辺地域には引き続き住居址の検出される遺跡が多く、愛宕山遺跡、上百駄山遺跡、広面遺跡、新田上遺跡、芳賀東部团地遺跡群、芳賀北曲輪遺跡、五代砂留遺跡群、上細井蟬山遺跡などで数軒～10軒前後の住居址が検出されている。特に本遺跡群と上細井蟬山遺跡は同一集落と見られ、豎穴状遺構を含めると合計で10軒以上の集落となり、芳賀東部团地遺跡群とともに本遺跡群は拠点的な集落の一つと見ることができよう。赤城山南西麓地域において、諸磯c式期に住居址数の減少が認められ、中期後半まで遺跡数の減少が見られることから、寒冷期（ボンドサイクル・イベント4）との関連が指摘されている（群理文 2012）。一方、上泉唐ノ堀遺跡では、黒浜式期から形成された集落が諸磯b式期にピークを迎え、諸磯c式期の遺構が検出されていないことから、集落を移動させた可能性が指摘されている（群理文 2010）。芳賀東部团地遺跡群では諸磯b式期に住居址数が減少するものの、諸磯c式期には再度住居址数の増加がみられる（群理文 2012）。諸磯b式期に比べ大規模集落の形成の動きは鈍くなるものの、継続して当地域の土地利用が活発であったと考えられる。

赤城山南西麓では前期末葉以降遺跡数が減少するが、上述のとおり縄文時代中期には環状を呈する大規模な拠点集落へと収斂していくものと考えられる。



第14図 上細井中西部遺跡群諸塚式期の遺構の分布



- 1: 上細井中西部遺跡群 2: 上細井彈山遺跡 3: 新田上遺跡 4: 岩之下遺跡 5: 田中田遺跡 6: 陣馬遺跡 7: 田中遺跡
 8: 白川遺跡 9: 慶宕山遺跡 10: 芝山遺跡 11: 米野田遺跡 12: 向吹張遺跡 13: 東上原遺跡 14: 叢上遺跡 15: 広面遺跡
 16: 寺間遺跡 17: 上百駄山遺跡 18: 芳賀北工業団地遺跡 19: 芳賀北曲輪遺跡 20: 小神明勝沢境遺跡
 21: 芳賀東部工業団地遺跡 22: 芳賀西部工業団地遺跡 23: 五代砂留遺跡群 24: 川白田遺跡 25: 上泉鹿ノ堀遺跡

第15図 赤城山南西麓における諸礎式期遺跡の分布

第2節 上細井中西部遺跡群における弥生時代中期の土器群

1. 遺跡の位置と立地

上細井中西部遺跡群の西側で、遺跡内を東西に走る上武国道の南側、令和元年（2019）に発掘調査したB工区の南側1区で、3軒の竪穴住居、北側の2区で1軒の竪穴住居が検出され、その他、平安期の竪穴住居覆土などから弥生時代中期中葉の土器群が比較的まとまって出土した。

遺跡地は、赤城山から南西に向かって伸びるなだらかな幅の広い丘陵性台地の南端部に位置している。この丘陵性台地は更新世前期の赤城白川による白川扇状地とされ、遺跡は、白川扇状地と広瀬川低地との境界部分に位置している。中央には湧水を伴う浅く細い谷地が形成され、丘陵地の東西面はそれぞれ南流する観音川と赤城白川で浸食されている。

2. 周辺の同時期の遺跡

古くは昭和39年（1964）刊行の『弥生式土器集成』¹⁾に上細井出土として第16図のコップ型の小型土器が紹介されている。その後、群馬県立歴史博物館による群馬県出土弥生土器集成²⁾に再録されている。

平成18年（2006）から平成24年（2012）頃まで、国道17号線バイパス（上武国道）建設に係わる緊急発掘調査により、この白川扇状地上の中央やや南側に東西に大きなトレンチが穿たれることになった。その結果、多くの遺跡が確認され発掘調査された。

上泉地区から田口地区まで延長約13kmの間に31遺跡が発掘調査されたが、弥生時代中期中葉の遺構は3遺跡で検出されたのみであり、その希薄さが目立つ。しかし、本遺跡地周辺の上細井、南橋地区に限れば、本遺跡を含め新田上遺跡³⁾・青柳宿上遺跡⁴⁾、川端根岸遺跡⁵⁾の4遺跡が確認されたことになり、さらに近接する富士見町横室地区ではかつて調査された田中田遺跡⁶⁾で、当該期の遺物の出土が知られており、本地域に当該期の遺跡が比較的集中していることがわかる。

3. 検出された土器群

検出された土器群は、B工区1区Y-1号竪穴住居（第17図 1～27、第18図 28～44）、B工区1区J-2号竪穴住居跡覆土（第18図 45～59）、B工区1区Y-2号竪穴住居（第19図 60～89、第20図 90）、B工区1区J-3号竪穴住居覆土（第20図 91～96）、B工区2区Y-1号竪穴住居（97～106）、B工区2区2号竪穴住居覆土（111～117）、土壤等一括（118～120）である。図示していない資料を含めて全体で300点程の資料である。

B工区1区Y-1、同Y-2、B工区2区Y-1の各住居は、竪穴住居からの出土資料である。他は縦て住居覆土、表採などの資料である。

土器群は、完形品は無く、ほぼすべてが破片である。確認できる器種には偏りが認められる。壺（第17・18図29、第19図 60～70、第20図 97など）が多く、甕（第18図 30～35、45など）が少ない。また、僅かに筒形土器（第19図 71、第20図 91、111）、鉢・浅鉢（第18図 28、第20図 90）などが認められる。また、文様は沈線文による重四角形文・三角形文・繩文・刺突文で構成され、磨り消し繩文が認められる。条痕文はほとんど見られない。

第18図 28は半裁竹簡による平行沈線や波状文を胴中部に、下部には多重弧文を施ししその頂点にそれぞれ円形の貼付文を、施すもので、胎土は精選され緻密で、内面は丁寧な圧磨が施される鉢型土器で、北信地方の栗林1式土器に類似が多い。同図36～39も同系統の土器で、壺の頭部であろう。

同34は甕で口縁端部が僅かに外反する。器面外面に斜方向の櫛描による條痕文が施されたもので、同じく栗林1式の甕と考えられる。また、第18図 29は壺の口縁部で、内湾する受け口状の口縁部で細描沈線文が特徴的な

土器で、東北南部の二ツ釜式土器の壺口縁部と考えられる。

隣接する新田上遺跡からは北陸地方小松式の壺の口縁部が検出されているが、本遺跡では未検出である。代わって、第20図-92の口縁端部口唇部裏面を指頭圧痕で薄く摘まみ上げている壺の一部で、埼玉県南部の宮ノ台式に伴うものが出土している。

以上の特徴から本遺跡で検出された弥生土器群は、弥生時代中期中葉の土器群として考えられ、隣接する新田上遺跡と同時期で、青柳宿上遺跡に後続する時期に位置づけられよう。

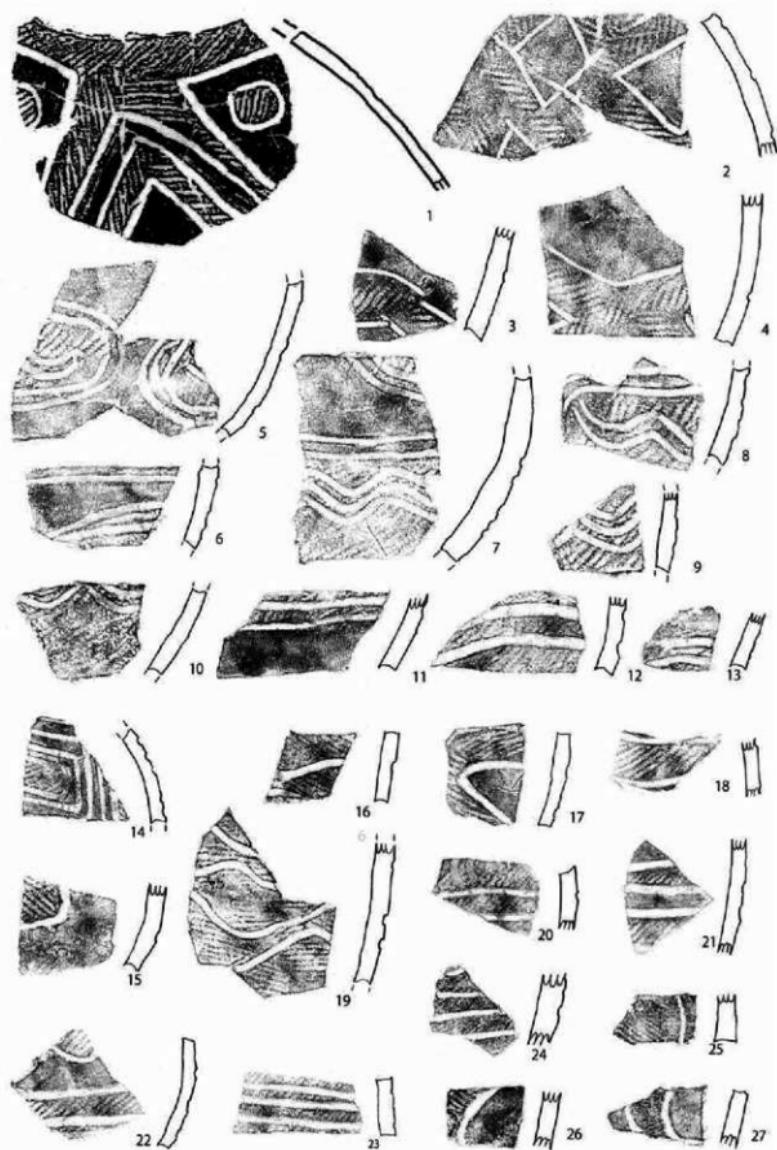
本稿を草すにあたり、石川日出志、大木伸一郎、中島正一の各先生方には多くのご教示、資料の実見などのご便宜をいただきました。ここに感謝申し上げます。また、群馬県立歴史博物館には、所蔵品の観察の機会を与えていただき合わせて感謝申し上げます。

注

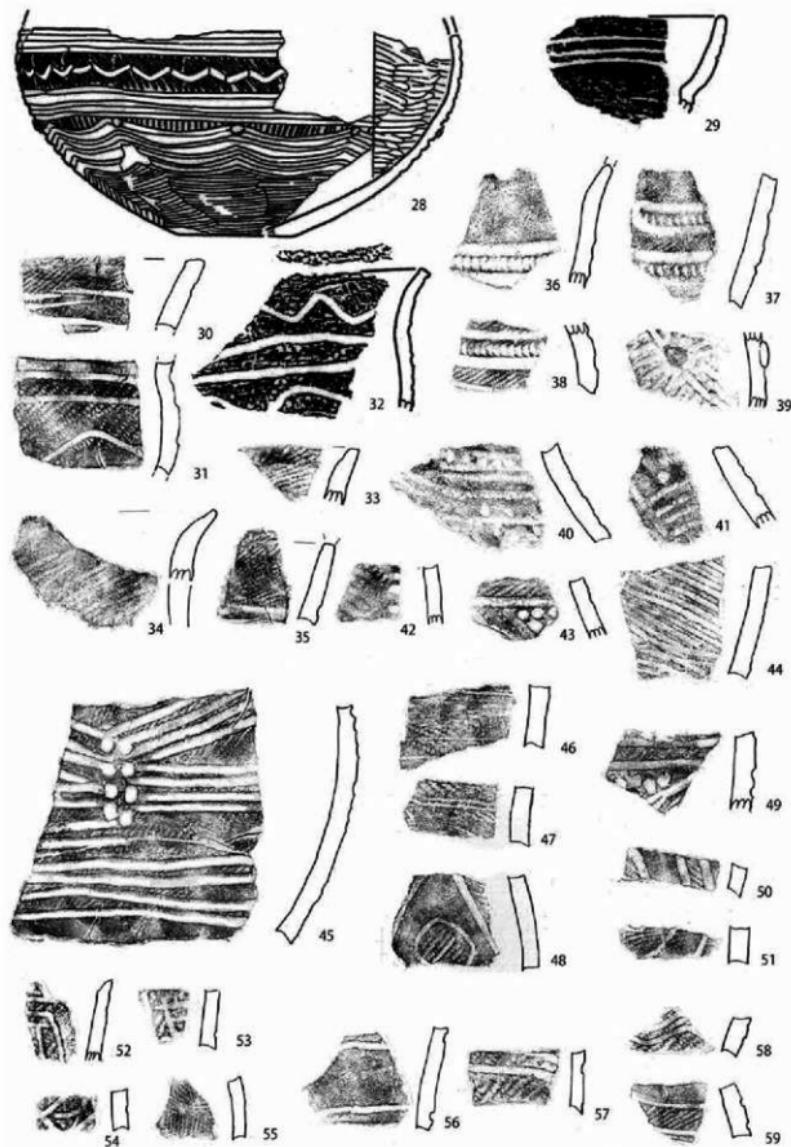
- 1) 工楽善通「北関東I」弥生土器集成 本編2 1968
- 2) 群馬県立博物館「群馬県地域における弥生時代資料の集成I」1978
- 3) (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 591「新田上遺跡」一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書 2015
- 4) (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 602「弓切塚遺跡青柳宿上遺跡」一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書 2015
- 5) (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 624「川端根岸遺跡」一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書 2017
- 6) 富士見村教育委員会「田中田・雍谷戸・見廻」1986



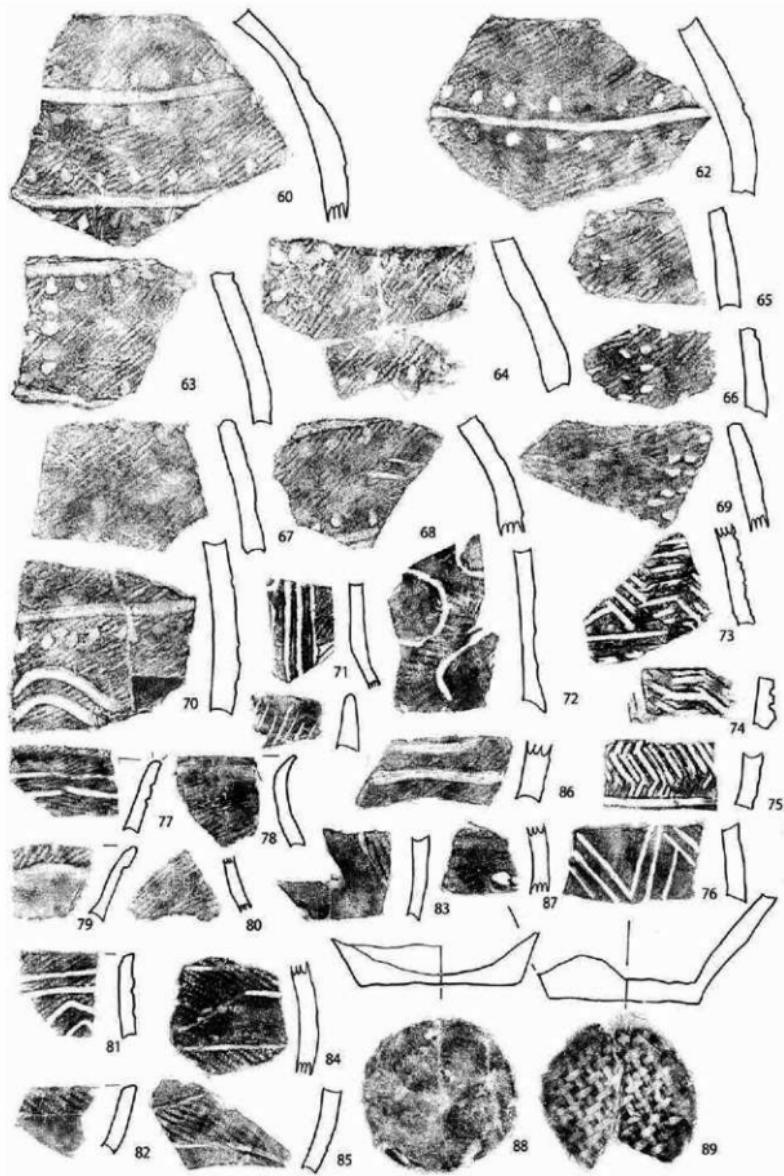
第16図 『弥生土器集成 本編2 北関東I』で取り上げられた上細井出土土器（群馬県立歴史博物館蔵）



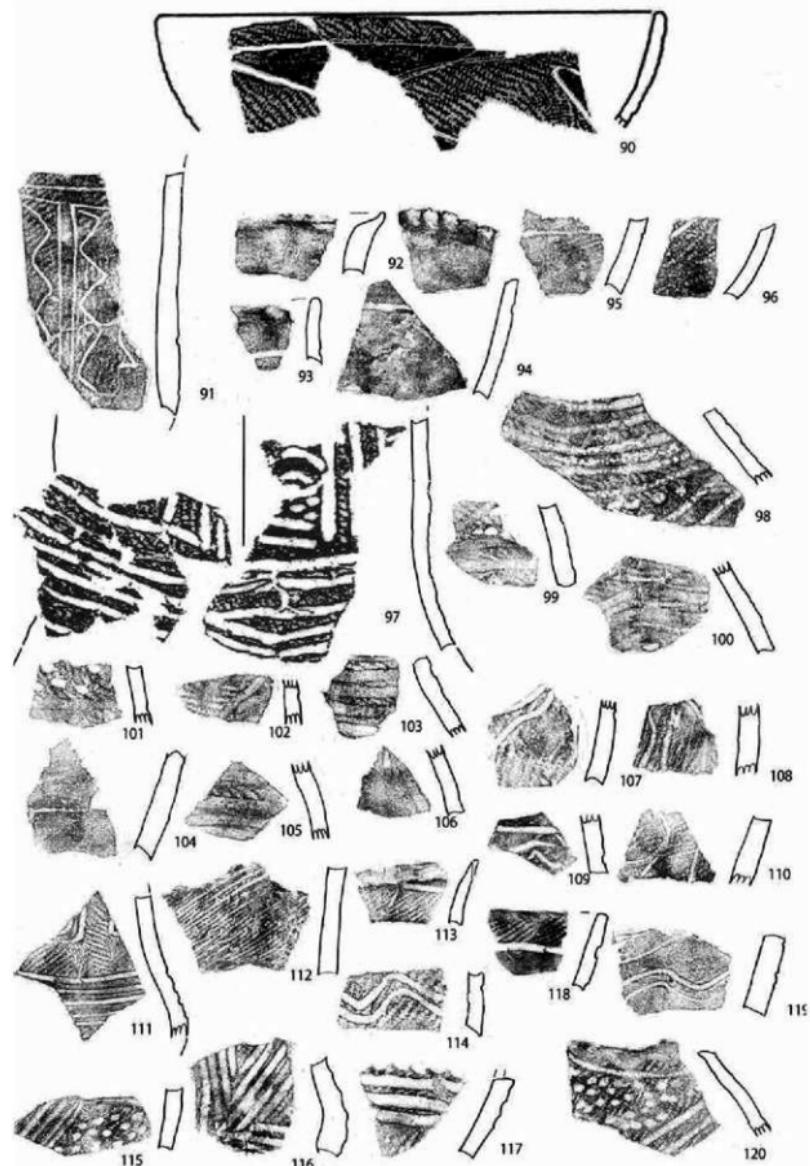
第17図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器（1）



第18図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器（2）



第19図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器 (3)



第20図 上細井中西部遺跡群出土弥生土器（4）

第3節 上細井中西部遺跡群の竪穴建物の変遷について

(はじめに)

上細井中西部遺跡群では、縄文時代前期から居住痕跡が認められ、弥生時代、その後の時代へと連綿と生活が営まれていたことが窺える。そのうち古墳時代から平安時代の竪穴建物跡は308軒が確認され、構築年代を知りうる建物跡は274軒に及んでいる。ここでは本遺跡群の集落の変遷について、その分布から検討してみたい。集落跡の範囲については、A～D工区の調査区全体に及んでおり、調査区外にも広がりを見せるることは確実であるが、現時点での発掘調査の成果で得られた範囲で記述する。

(各時期の分布状況)

古墳時代以降には、4世紀に集落の形成がはじまる。4世紀代では、本遺跡群南端のB工区4区に2軒、北西端のD工区4区―3に4軒の竪穴建物跡が検出されており、調査区の外側へさらなる広がりをみせる可能性が考えられる。

5世紀代の竪穴建物跡は4軒検出されており、前時代の4世紀から集落規模は小規模なまま変化が見られず、その分布も竜ノ口川左岸のA工区の3―3区にのみ存在している。

6世紀代では、前半期の竪穴建物跡は検出されなかつたが、後半期の竪穴建物跡が12軒検出され、わずかに集落規模を拡大して再び竪穴建物が構築されるようになる。その分布は、A工区10区に3軒・B工区1区に1軒・B工区3区に1軒・B工区4区に2軒・B工区5区に5軒が確認され、本遺跡群北側のC・D工区では検出されず、赤城白川と觀音川の間の地域の中でも南側に集落の中心があつたと考えられる。

周辺遺跡の状況を見ると5世紀後半から6世紀前半に集落が途絶える遺跡（山王・柴遺跡、芳賀東部団地遺跡群（前橋市教委）、田口上田尻・田口下田尻遺跡）や集落が形成されない遺跡（引切塚遺跡、青柳宿上遺跡、上細井岬山遺跡など）も多く、周辺の状況と一致する。芳賀西部団地遺跡群の5世紀後半～6世紀初頭の31基の古墳群や山王・柴遺跡の5世紀後半～6世紀代の方墳・竪穴式小石室といった墓域としての利用が確認されており、この時期に本遺跡群を含む地域は、居住域から墓域へと利用状況が変化したため竪穴建物跡の検出がみられなくなった可能性が考えられる（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2016ほか）。

7世紀では33軒の竪穴建物跡が確認され、その内31軒が7世紀後半のものである。7世紀前半に集落はいったん途絶えるが、7世紀後半になって規模を大きく拡大してこの地に本格的な居住がはじまつたことがわかる。

7世紀の竪穴建物跡の分布は、A工区2区2軒・A工区3―1区1軒・A工区3―3区1軒・A工区4区3軒・A工区7区1軒・A工区10区2軒・B工区3区4軒・B工区5区5軒・B工区7区3軒・C工区7軒・D工区2区1軒・D工区4区3軒となり、本遺跡群の調査区全域に分布しているが、竜の口川左岸地域よりも、赤城白川と觀音川の間の地域により多くの竪穴建物跡が分布しているようである。

8世紀代では98軒の竪穴建物跡が検出され、本遺跡群における集落規模の最大のピークとなっている。時期は、8世紀初頭6軒・8世紀前半41軒・8世紀中葉5軒・8世紀後半37軒・8世紀末1軒となっており、本遺跡群では、8世紀に入ると集落規模が拡大し、8世紀を通じて規模を維持していたものと考えられる。

また、その分布は、8世紀初頭はC工区4軒・D工区2区1軒・D工区4区1軒である。8世紀前半はA工区1区2軒・A工区2区1軒・A工区3―2区4軒・A工区4区4軒・B工区2区1軒・B工区3区2軒・B工区5区15軒・C工区5軒・D工区2区1軒・D工区4区6軒、8世紀中葉はC工区3軒・D工区1区1軒・D工区2区1軒、8世紀後半はA工区1区6軒・A工区2区3軒・A工区3―1区1軒・A工区5区1軒・A工区10区2軒・B工区2区3軒・B工区5区9軒・B工区7区2軒・C工区2軒・D工区2区に2軒・D工区4区に6軒である。8世紀代になると集落域が竜の口川左岸地域にまで拡大するが、集落域の中心は引き続き赤城白川と觀

音川に挟まれた台地上にあったと考えられる。

9世紀では73軒の竪穴建物跡が検出され、8世紀代に引き続き集落規模を維持している。9世紀前半14軒・中葉1軒・後半54軒、9世紀代が4軒となり、ほとんどが9世紀後半に構築されたものであった。竪穴建物跡の分布は、9世紀前半ではA工区3—2区1軒・A工区4区1軒・B工区2区2軒・B工区4区1軒・B工区5区6軒・B工区7区2軒・D工区2区1軒である。9世紀中葉はC工区1軒、9世紀後半はA工区1区1軒・A工区3—1区3軒・A工区3—3区に2軒・A工区7区1軒・B工区1区1軒・B工区4区3軒・B工区5区33軒・C工区1区7軒・D工区1区1軒・D工区4区2軒である。

9世紀においては、前半から中葉にかけて竪穴建物の構築が低調であるが、その要因として弘仁9年（818年）に発生した大地震の影響が推定される。8世紀や9世紀前半の集落規模の大きくなる時期に中心となったと考えられる赤城白川と観音川の間の台地の南側地域は両河川の合流地点に近く、居住に適さない状況になっていた可能性がある。しかし、9世紀後半には再び多くの竪穴建物が構築されていることから、災害の影響はそれほど深刻ではなかったと考えられる。

10世紀になると竪穴建物跡は著しく減少し、10世紀前半7軒、10世紀後半5軒、10世紀代11軒の検出にとどまる。10世紀の竪穴建物の分布は、赤城白川と観音川の間の台地上に位置するB工区5区に1軒とC工区に2軒がみられる他は、全て竜之口川左岸のA工区1区～3区に集中している。

11世紀になると、10世紀よりさらに竪穴建物跡は減少し、11世紀前半5軒、11世紀後半1軒、11世紀代5軒である。11世紀の竪穴建物の分布は、A工区1区に2軒・A工区2区に3軒・A工区3—2区に1軒・A工区3—3区に1軒・A工区4区に1軒・A工区5区に3軒となっており、全て竜之口川の左岸に集中している。

（まとめ）

上細井中西部遺跡群では古墳時代から平安時代まで、集落が形成されない時期を含みながらも11世紀後半まで増減がありながら繰り返しこの地への居住が行われていたようである。

5世紀代に竜之口川左岸地域に小規模な集落が形成されるが、集落規模が大きくなり始めるのは6世紀後半からであり、集落規模が最も大きくなる8世紀代・9世紀代の集落の中心は赤城白川と観音川の間の地域へ移動したようである。しかし、再び集落規模が小さくなる10世紀・11世紀代には竜之口川左岸の地域へ中心が移っていく。

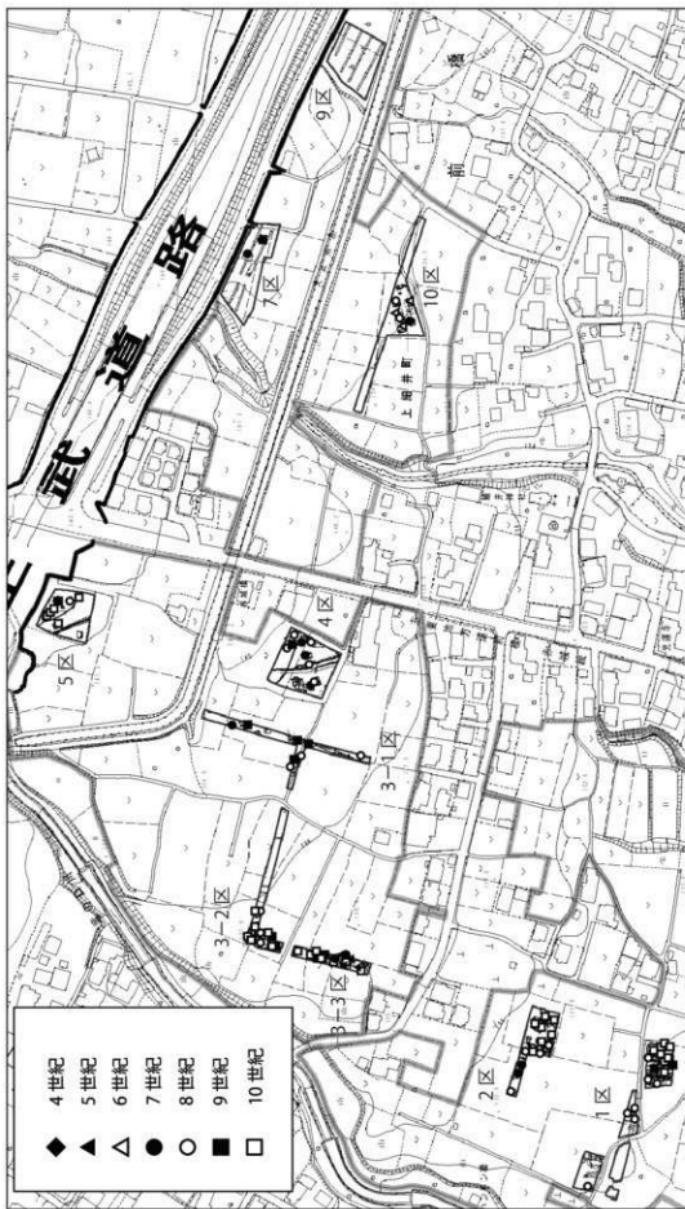
集落規模の拡大と縮小の原因として、5世紀後半から6世紀については土地利用の変化、9世紀前半については地震による影響の可能性が考えられる。

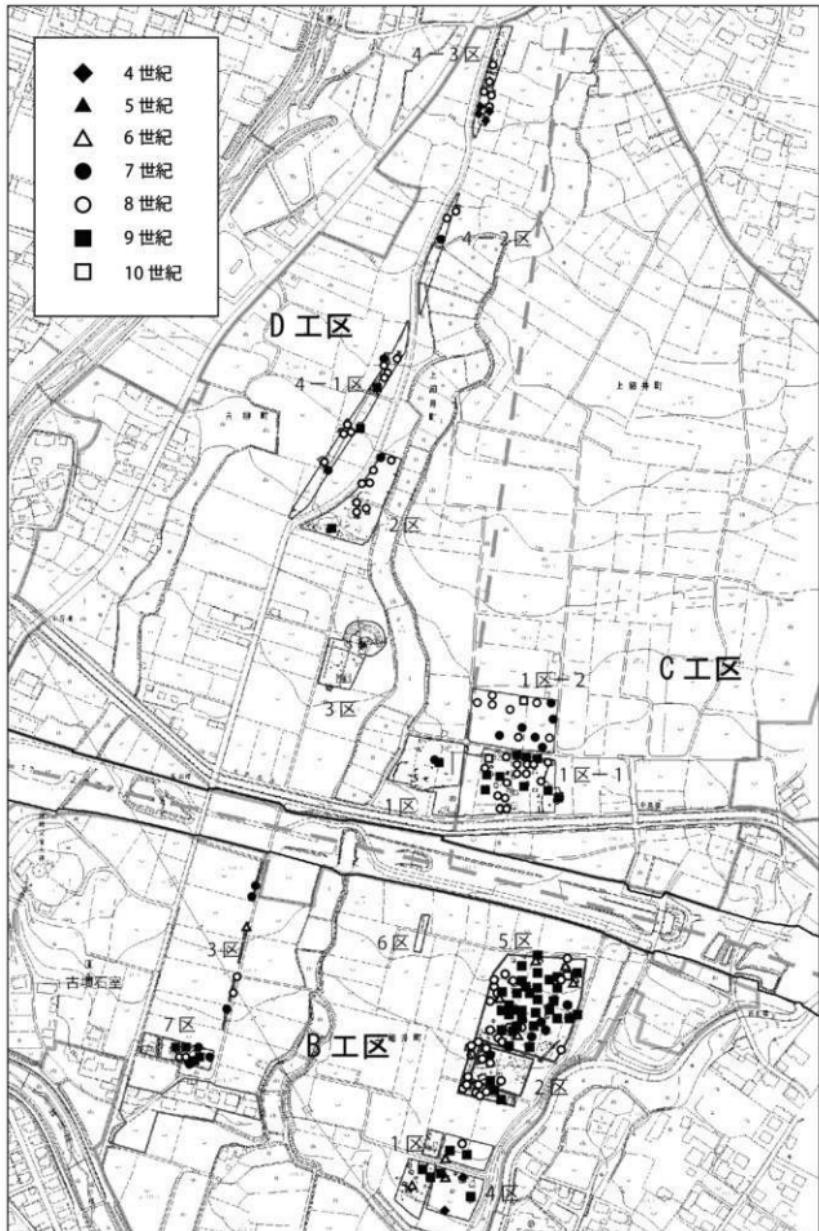
また、竪穴建物跡の増減や集落域が移動する要因については、中央集権体制の構築や律令制の崩壊などを考慮に入れ、周辺の遺跡の様相と合わせて探っていくことで、赤城山南麓地域の景観を描き出すことができるだろう。

第7表 上総并中西部遺跡群各調査区の時期別住居軒数

	A.IIK 1K	A.IIK 2K	A.IIK 3-1K	A.IIK 3-2K	A.IIK 3-3K	A.IIK 4K	A.IIK 5K	A.IIK 6K	A.IIK 7K	B.IIK 1K	B.IIK 2K	B.IIK 3K	B.IIK 4K	B.IIK 5K	B.IIK 7K	C.IIK 1K	D.IIK 1K	D.IIK 2K	D.IIK 4K	動物 合計	
4世紀																					
5世紀																					
6世紀後半																					
7世紀前半																					
7世紀後半																					
7世紀代																					
7世紀後半から8世紀	1																				
7世紀末から8世紀初頭	1																				
7世紀末から8世紀前半																					
8世紀初頭																					
8世紀前半	2	1																			
8世紀中葉																					
8世紀後半	6	3	1																		
8世紀末																					
8世紀代																					
8世紀末から9世紀初頭																					
9世紀前半	1																				
9世紀中葉																					
9世紀後半	1		3		2					1						3	33		7	1	
9世紀代			1	1					1											2	54
9世紀末から10世紀初頭																					4
9世紀前半																					1
10世紀初頭																					1
10世紀前半																					1
10世紀後半																					5
10世紀代	3	1	4		2				1												11
10世紀後半から11世紀初頭	1	2																			3
11世紀前半	3								1	1											5
11世紀後半										1											1
11世紀代	2								1												5
不明	2	4	3	3	2	1		1	2							3	9	1	2	34	
調査区合計	20	18	11	16	16	11	9	3	8	3	6	7	9	79	9	46	2	10	26	369	

第21図 A工区遺構分布図





第22図 BからD工区遺構分布図

第4節 碇石をもつ竪穴建物跡

(はじめに)

「礎石」は建物の柱を受ける土台で、柱を支える石である。礎石を使った建物の歴史は古く、仏教の伝来とともに中国・朝鮮半島から伝わったとされている。

礎石建物は、古代城柵遺跡・官衙遺跡・寺院跡などに広く用いられ、8世紀後半以降に地方官衙の主要な建物が礎石建物化していく状況が指摘されている（平野 2007）。

その中で、東日本においては、竪穴建物跡の中にも礎石をもつものが散見される。

(礎石をもつ竪穴建物跡の地理的・時間的分布)

礎石をもつ竪穴建物跡の事例は、長野県15遺跡27例、山梨県4遺跡6例、群馬県15遺跡29例、岐阜県では2遺跡2例、埼玉県に1遺跡1例確認されており（大胡町教育委員会 1997、平野 2007）、ほぼ本州中央で確認されている。

確認されている事例は、8世紀～10世紀にかけてのもので、8世紀後半以降に礎石建物化が進む状況と密接に関連していると考えられている（平野 2007）。

(礎石をもつ竪穴建物跡の構造)

礎石を据え付ける状況については、以下の3つに分類されている（齋藤 2001）。

- A：床面に据え置くもの
- B：柱穴状のピットを床面まで埋め戻し、その上に置くもの
- C：柱穴の底面に置くもの

また、礎石を配置する位置については、以下の6つに分類されている（第1図、平野 2007）。

- ①：竪穴部中央の主柱（4本主柱など）部分全てと、壁下などのそれ以外の支柱部分全てに礎石を用いるもの。
- ②：竪穴部中央の主柱穴部分のみに礎石を用いるもの。
- ③：竪穴部中央に主柱穴とともに部分的に礎石を用いるもの。
- ④：無柱穴竪穴建物タイプで、四隅に主柱を置き、そこに礎石を用いるもの。間仕切り等に伴う礎石もみられる。
- ⑤：竪穴部中央に主柱穴があり、壁下や間仕切り部分に礎石を用いるもの。
- ⑥：柱穴はみられず、礎石1個だけがみられるもの。

(群馬県内の事例)

群馬県の事例は、現在までに報告されているものは15遺跡29例確認されている。礎石の据え付けについて見ていくと、A類が16例で最も多い。B類は3例でC類は6例、A類とC類の両方があるものが3例で、B類とC類両方があるものが1例である。つまり、柱穴を必要としないものが半数以上を占めている。

礎石を配置する位置については②類が19例と最も多く、③類が6例、④類が1例、⑥類が3例存在する。これまでに①・⑤類の事例は発見されていない。県外の事例では、長野県では①～⑤類の事例が、山梨県では②・④類がみられ、地域ごとに配置には差があるようである。

県内の事例は12遺跡26例が沼田・渋川の赤城山の山麓地域に分布している。この地域に集中する理由について、同地域に10世紀前後に存在していたとされる「宮田寺」と称した方一町の寺域を有する寺院との関連が想定

されている（沼田市教育委員会 1995）。

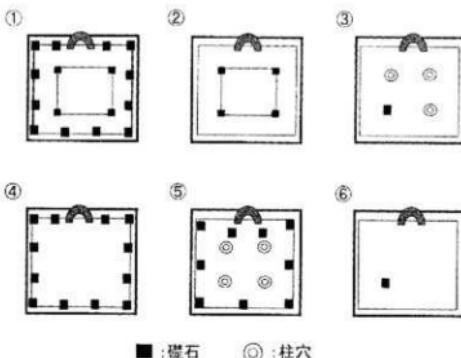
また、遺構の年代としては時期的には9世紀前半から10世紀代のものが多い。

（礎石をもつ竪穴建物跡の評価）

群馬県の堀越中道遺跡では、礎石をもつ竪穴建物跡が集落内では最大のもので、礎石の掘り方に根石を設けて安定させていることから、寺院等の建築に拘わる人物の介在を推察しており、火床を作う土坑や多数の鉄製品と羽口や鉄滓の出土から鍛冶に関わる中心的な建物と考えている（大胡町教育委員会 1997）。

埼玉県の阿知越遺跡では、須恵器大甕と鉄製品の出土量が他の住居より多いこと、墨書き土器が礎石をもつ住居と太い壁柱穴がめぐる特殊な住居の2軒のみでしか出土しないこと、3点の腰帶具と考えられる溶解した銅の小塊（礎石をもつ住居は火災を被っており、他の遺構出土の巡方と比較して腰帶具と判断している）が出土していることから、この建物に居住する人物が下級官人層に連なる者であったことを推察している（児玉町教育委員会 1983）。

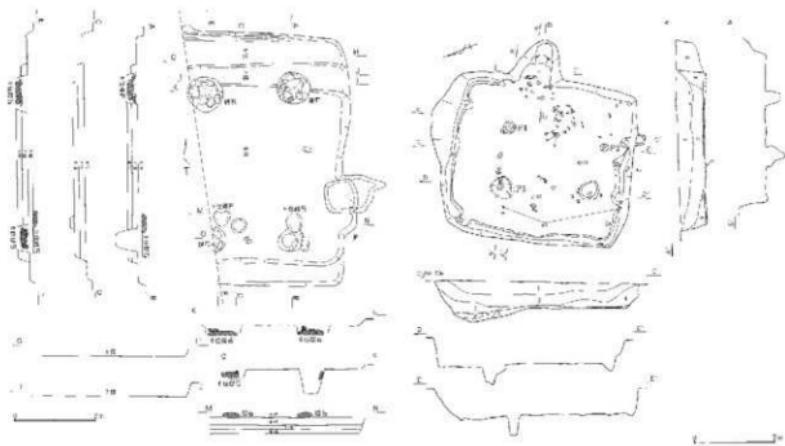
上細井中西部遺跡群において礎石をもつ竪穴建物跡は、A工区3-3区の7号竪穴建物跡で確認されている。構造の特徴は、据え付けについてはA類で礎石の配置は④類であった。県内では、④類の事例は初めての発見である。また、この竪穴建物跡からは、他の竪穴建物では出土しない「石」、「石上」の墨書き土器や腰帶具（丸瓶）などが発見されており、堀越中道遺跡や阿知越遺跡と同様に特別な意味をもつ竪穴建物である可能性が考えられる。



第23図 稳石配置の類型（平野 2007を引用）

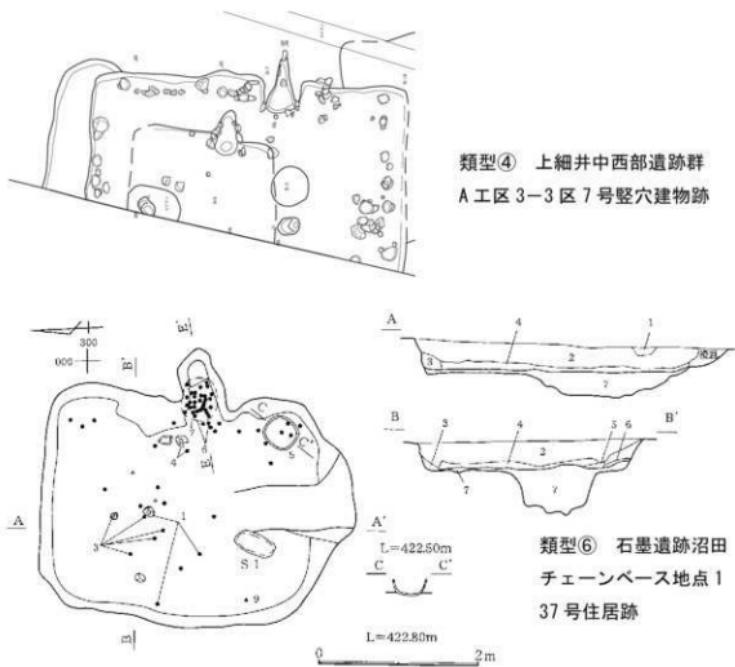
第8表 群馬県内の事例一覧表

遺跡名	遺構名	据え付け	礎石配置	時期
上緑井中西部遺跡群	A工区3-3区 7号竪穴建物跡	A	④	9世紀後半
若宮遺跡	3号住居跡	A	②	奈良時代
	6号住居跡	C	②	奈良時代
	9号住居跡	A	②	奈良時代
	13号住居跡	A	③	9世紀前半
下川田下原遺跡	18号住居跡	A	②	9世紀前半
堀越中道遺跡	32号住居跡	B	②	平安時代
糸井宮前遺跡	C区16号住居跡	B+C	②	9世紀
石墨遺跡	2号住居跡	A	⑥	
村主遺跡	5号住居跡	B	②	平安時代
	19号住居跡	A	⑥	平安時代
戸神諏訪遺跡	10号住居跡	C	②	9世紀前半?
戸神諏訪II遺跡	29号住居跡	A	②	10世紀
戸神諏訪III遺跡	41号住居跡	A+C	②	
戸神諏訪V遺跡	2号住居跡	B	②	10世紀?
	6号住居跡	A	②	9世紀?
	18号住居跡	A	②	
	24号住居跡	C	②	9世紀後半
	30号住居跡	A+C	②	9世紀?
	42号住居跡	C	②	10世紀
	43号住居跡	A	②	9世紀後半
	46号住居跡	C	②	10世紀
石墨遺跡沼田チェーンベース地点I	5号住居跡	A	③	9世紀後葉
	16号住居跡	A+C	③	9世紀後葉~10世紀前葉
	37号住居跡	A	⑥	9世紀前半
	41号住居跡	A	③	9世紀前半
町田上原遺跡	3号住居跡	A	③	10世紀
町田手古又遺跡	6号住居跡	C	②	古代
	24号住居跡	A	③	古代

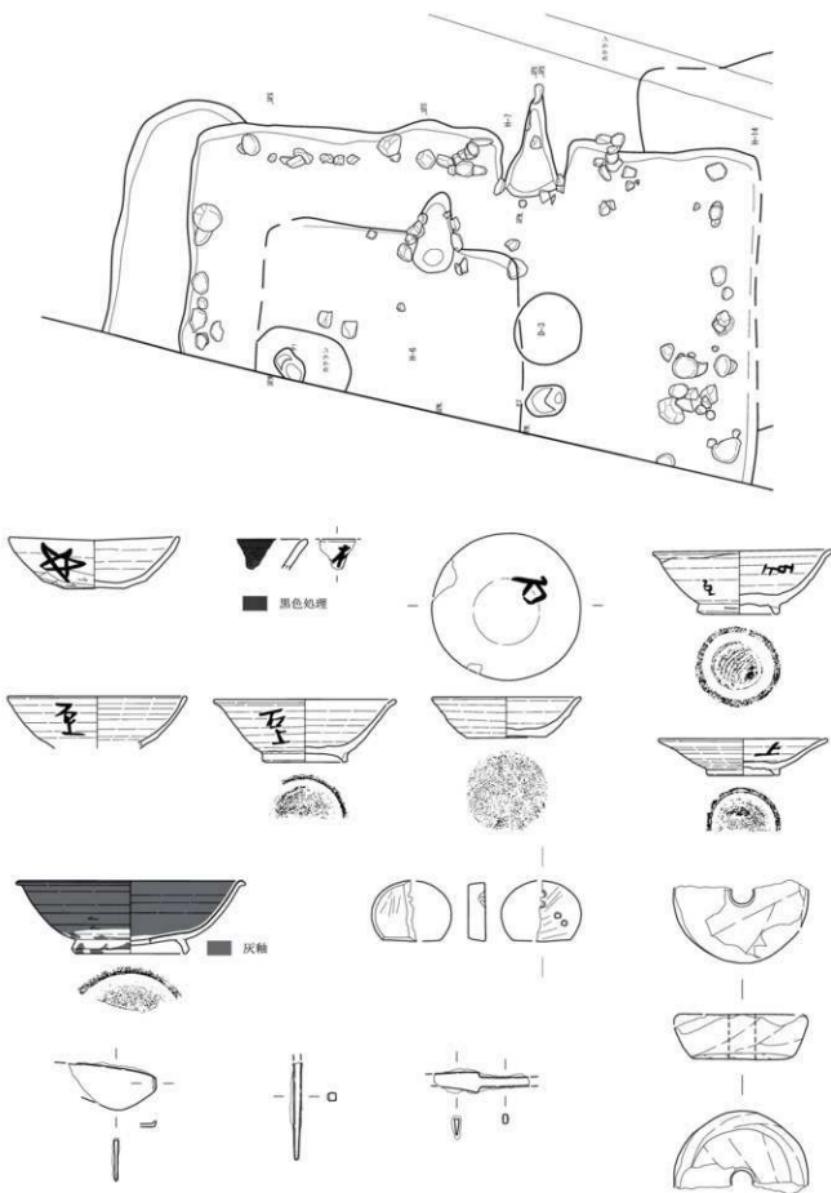


類型② 若宮遺跡 6～9号住居跡

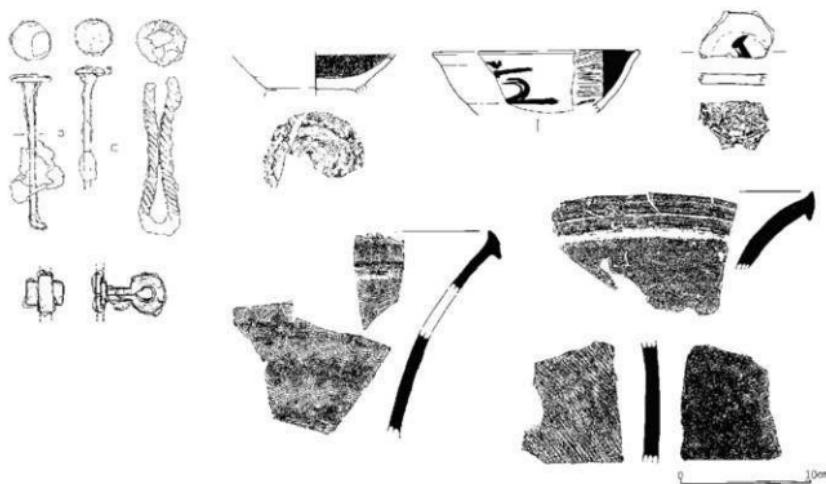
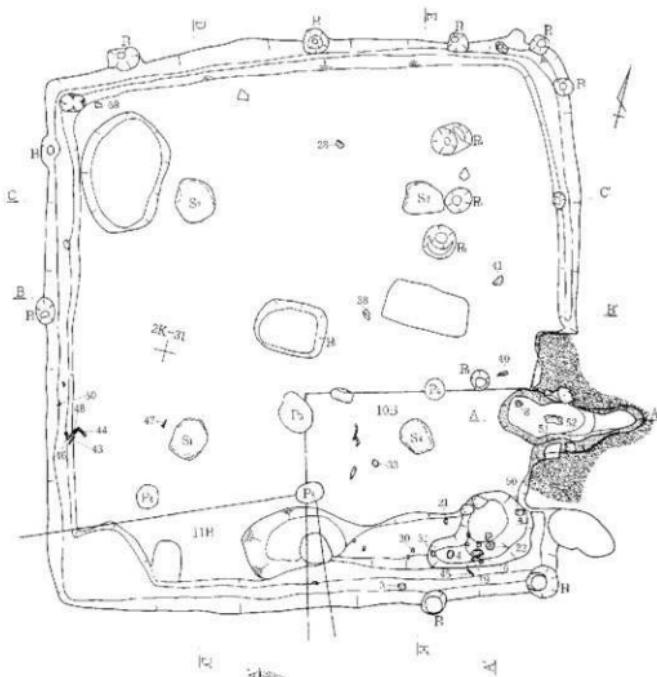
類型③ 下川田平井遺跡 13号住居跡



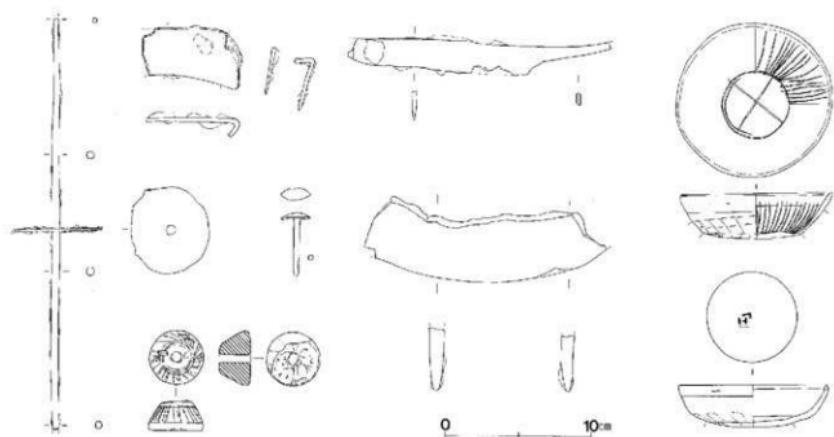
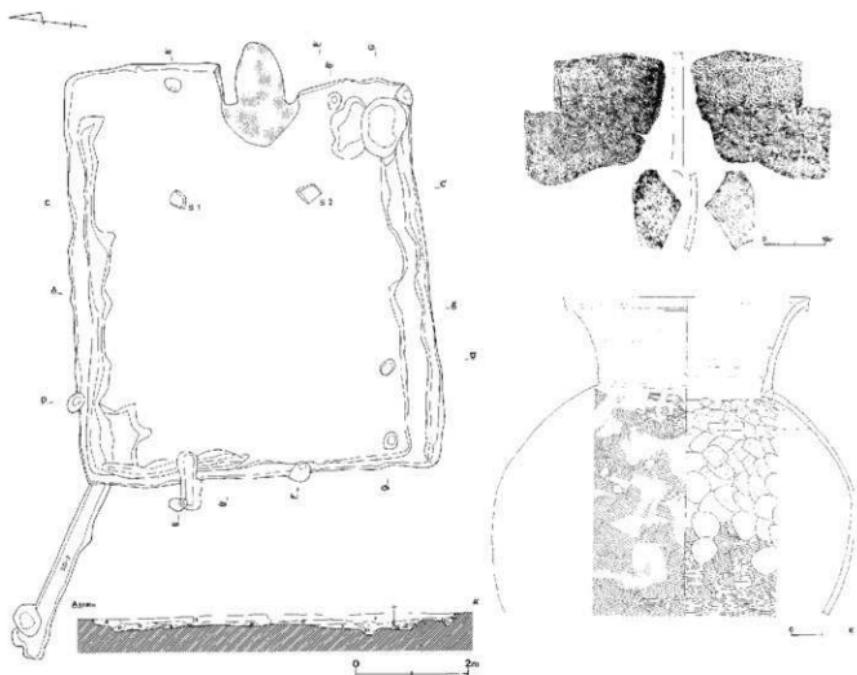
第24図 各類型の代表的な事例（縮尺不同）



第25図 上細井中西部遺跡群検出構造と主な出土遺物



第26図 堀越中道遺跡検出遺構と主な出土遺物



第27図 阿知越遺跡検出構造と主な出土遺物

第5節 上細井中西部遺跡群のカマドについて

はじめに

上細井中西部遺跡群において検出された古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物跡（時期不明のもの、カマド出現期以前の建物跡も含む）308軒のうち、カマドをもつ竪穴建物跡は249軒ある（1軒に2つ以上のカマドをもつ場合も1軒と数えている）。検出されたカマドはほとんどが崩壊していて、もとの形状を保っているものは少ないが、残存状況によってどのように作られたかを復元することが可能である。以下に本遺跡群のカマドの特徴について概観してみたい。

カマドの遺存状態

カマドが検出された竪穴建物跡は、A工区80軒、B工区96軒、C工区44軒、D工区29軒である。カマドの遺存状態としては、「もとの状態を良く残すもの」、「カマドの崩壊に何らかの手を加えたもの」、「竪穴建物跡の埋没過程で自然に壊れたものか壊されたものか不明なもの」の大きく3つに分けられる。

大部分のカマドは崩壊過程の判然としないものであったが、遺存状態の良好なものも5例あり、いずれも石材によって焚口部から煙道部まで組まれているのが確認された。調査所見として、石組みを良く残すカマドは、その他のカマドよりも焼土の分布が少ない傾向が見られた。また、人為的な崩壊と推測されるものは46例あり、建物内にカマドの構築材と考えられる石材が散乱し、カマドを壊した後に石材を建物内に遺棄したものと考えられる。石材は竪穴建物内の全体に広く散乱するものは少なく、ほとんどの事例でカマドの周辺にまとめて分布していた（第28図—1・2）。

カマドの構築材

本遺跡群で検出された竪穴建物跡のうち、カマドの構築状況がよく観察される例は80例ある。それは、A類：石を主要な構築材とするもの、B類：粘土を主要な構築材とするもの、C類：土器を芯材とし、粘土により構築するもの、D類：折衷的なものに分けられる。ここでは、A類とB類のカマドについて検討したい。

A類：石を主要な構築材とするカマド

64例検出されている（建物内に石材が散乱しているものを含む）。カマドの構築に用いられた石材は、加工のされていない20~30cm程の川原石が多い。形状は亜円錐・亜角錐・棒状・楕円形・円形・扁平な形態を呈するものと多様である。本遺跡群は調査区周辺に赤城白川・觀音川・竜之口川など河川が多くあり、カマドの構築材となる石材は近在地から容易に手に入れられたと推測される。一方、加工石材を構築材としているカマドは、B工区5区17号竪穴建物跡とB工区7区8号竪穴建物跡（第29図—3・4）の2例のみであり、自然石が構築材の主体であったと考えられる。

B類：粘土を主要な構築材とするカマド

17例検出されている。カマドに用いられている粘土は主に黄褐色粘土である（C工区では地山の粘質土が白色を呈する場所があり、白色粘土を用いたカマドが確認されている）。本遺跡群では、A工区2区（第28図—3）・3—1区・3—3区（第28図—4）・4区、C工区に粘土探掘坑が検出され、地山の黄褐色の粘質土を掘り込んでいることが確認されている。また、貼床の下の地山である黄褐色粘質土を掘り込む床下土坑が、竪穴建物跡の広い範囲を占めている例や複数の床下土坑が掘られている竪穴建物跡はAからD工区のどの調査区においても見られる（第28図—5・6）。粘土探掘坑・床下土坑の規模から探掘できる粘質土が量としてそれほど多くない事例がほとんどであり、また、粘質土自体がそれほど粘質の強い土ではないため、土器の製作などに用いたとは考えにくく、探掘された粘質土はカマドの構築材として用いられた可能性が想定される。

なお、本遺跡群で検出されたカマドが据え付けられた竪穴建物跡の年代は、A類64軒のうち年代の判別した55軒では、6世紀代2軒、7世紀代5軒、8世紀代10軒、9世紀代26軒、10世紀代8軒、11世紀代4軒となり、6世紀代から作られはじめ、9世紀代にピークがあり11世紀代まで続いている。また、B類17軒のうち年代の判別可能な14軒の年代は、6世紀代1軒、7世紀代6軒、8世紀代6軒、9世紀代1軒となり、6世紀代から作られはじめ7・8世紀にピークがあり9世紀代まで続いている。

周辺遺跡の様相

周辺遺跡においても、石を主要な構築材とするカマド・粘土を主要な構築材とするカマド・土器を芯材として構築したカマドが確認されている。その中で、良好な遺存状態のものは少ないものの、燃焼部や煙道部に構築材の石材が残されているものやカマドの周囲に構築材と考えられる石材が散乱している例は南櫛東原遺跡や山王・柴遺跡などでも数多く見つかっている。

石を主要な構築材とするカマドをもつ竪穴建物跡は、6世紀末から10世紀代までのものが検出されている。

まとめ

本遺跡群の竪穴建物跡では、複数のカマド構築方法が確認され、A類（石を主要な構築材とするカマド）が多いことは周辺遺跡と共通しており、本地域の特徴と考えられる。

A類とB類（粘土を主要な構築材とするカマド）を比較すると、A類は、6世紀以降から作られはじめ、9世紀に特に多く作られ、11世紀まで連続して作られている。一方、B類は6世紀から作られはじめ、7・8世紀に多く作られ、9世紀まで続くが10世紀以降の竪穴建物跡では検出されなかった。A類・B類のカマドは6世紀以降から作られはじめることは共通しているが、A類がより遅い時期にピークを迎え、新しい時代まで継続して作られているのに対して、B類はより早い時期にピークがあり、新しい時代には継続して作られない。

また、A類は本遺跡と周辺遺跡の検出事例を観察すると、より古い時代のカマドは比較的大きさや形状の揃った石材によって非常に精緻に組まれているのに対して、時代が新しくなると石材に統一性がなくなってくる傾向がうかがえる（第29・30図）。



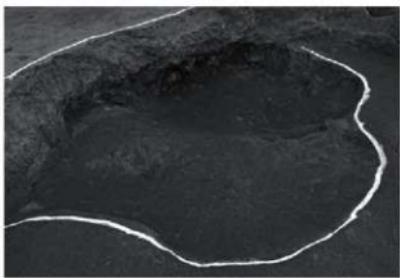
1 A工区3-3区H-9
石材の散乱する状況



2 D工区1区H-1
石材の散乱する状況



3 A工区2区1号粘土採掘坑



4 A工区3-3区1号粘土採掘坑



5 C工区1区-1 H-11
床下土坑検出状況



6 C工区1区-2 H-43
床下土坑検出状況

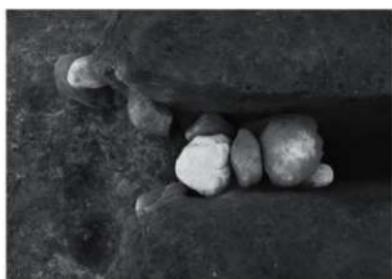
第28図 上細井中西部遺跡群検出遺構



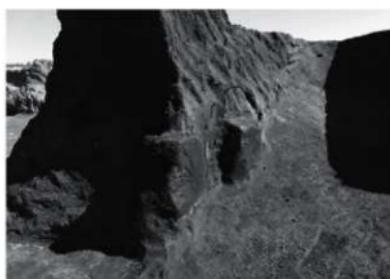
1 D工区4区 H-10
(7世紀前半)



2 D工区4区 H-13
(7世紀後半)



3 B工区5区 H-17
(7世紀後半)



4 B工区7区 H-8
(9世紀前半)



5 A工区3-3区 H-6
(10世紀前半)



6 A工区3-2区 H-2
(10世紀後半)

第29図 上細井中西部遺跡群検出の石材で構築されたカマド



第30図 周辺遺跡から検出された石材で構築されたカマド

第6節 上細井中西部遺跡群出土の文字資料

器形と器種

上細井中西部遺跡群では文字資料96点が出土した。その内訳は墨書き土器が70点、刻書き土器が23点、墨書き・刻書き両方がある土器1点、合計94点の土器の他、刻書き錘車が2点である。遺跡群全体の出土遺物の割合としては非常に少ない割合である。

墨書き・刻書きの施された土器の器種は、土師器が60点、須恵器が30点、黒色土器が3点、灰釉陶器が1点である。また、それらの器形は壺が79点、高台付壺が2点、皿が1点、高台付皿が2点、碗が6点、高台付碗が2点、壺が2点である。

主体は壺で、次いで碗といったいわゆる供膳具が大多数を占めており、出土傾向に比例して日常生活で使用されていた土器が多い。

出土遺構

文字資料の出土した遺構についてみると、竪穴建物跡からの出土が83点、土坑からの出土が2点、竪穴状遺構から1点、溝からの出土が10点である。

圧倒的に竪穴建物跡からの出土が多いが、「玄」と記された墨書き土器等、建物内で何らかの祭祀的行為の際に使用されたと考えられる遺物もあり、竪穴建物廃絶後に投棄されたり、自然に流れ込んだという理由ばかりではないとみられる。

大半は、各竪穴建物跡から1～2点ほどの出土であるが、A工区3区―3の7号竪穴建物跡では6点、B工区5区の59号及び69号竪穴建物跡ではそれぞれ5点出土し、同一文字の記された土器がまとまって検出された。1遺構から最も多くの文字資料が出土したA工区3区―3の7号竪穴建物跡は、礎石のある竪穴建物であり、B工区5区の69号竪穴建物跡は、他の建物と比較するとかなり大型の建物で床面が丁寧に堅く作られているという他の住居とは異なる特徴を持っている。また、B工区5区の1号溝からは「へ」の文字が記された土器が5点まとまって出土し、合計で墨書き土器が9点出土している。その他、平瓶・盤といった遺物も見つかっている。

年代

文字資料が出土した遺物の年代については、7世紀後半2点、8世紀初頭2点、8世紀前半10点、8世紀中葉2点、8世紀後半9点、8世紀末～9世紀初頭1点、9世紀前半9点、9世紀後半48点、10世紀初頭1点、10世紀前半1点、10世紀代1点、不明10点である。本遺跡群で出土した文字資料は8世紀代から次第に増加し9世紀後半の資料が全体の半数以上を占める。全国的に集落遺跡から出土する文字資料は9世紀代のものが圧倒的に多いとされ（高島 2017）、そうした傾向と一致している。

文字記入の部位

出土した文字資料のうち土器の文字記入部位についてみてみると、94点中内面に文字が記入されたものが18点、外表面は50点、内外両面は26点であり、外表面に記入されたものが半数以上を占める。また、文字の記された位置について判別できるものは、底部が58点、口縁部が3点、口縁から体部が3点、体部から底部が4点、体部が26点であり、底部に記されたものが最も多くなっている。

一般的に集落遺跡の文字の記された土器は、概して体部外表面に文字が記されたものが多く、宮都・官衙・寺院等の遺跡から出土するものには概して底部外表面に記されたものが多い傾向が指摘されており（高島 2000、2006、2012）、本遺跡の性格の一端を示唆する。

釈読可能な文字

本遺跡出土の文字資料は1文字のものがほとんどである。2文字のものには「石上」、破損して二文字目が不明であるが「子□」と記されたものがある。

集落遺跡から出土する土器の文字資料は、同じ文字が記されている例が多く、その集落の標識的な文字と考えられる（平川 2000、高島 2000）。本遺跡群で最も多い文字は「へ」であり、これが標識的な文字と考えられる。「へ」は略字であるが、「へ」の墨書きを記した土器の出土の多いB工区の5区から「舍」の墨書き土器が出土しており、「舍」の略字である可能性が考えられる。

「舍」の文字が表すものとしては、役職名である「舍人」あるいは官舎・兵舎・宿舎などの建物をさす文字等が候補として挙げられる。

群馬県出土の墨書き・刻書き土器集成（1）（群馬県教育委員会 1989）を参考として、本遺跡出土の釈読可能な文字を分類すると、下記の通りに分けられる。

記号：「☆」「×」「＊」

数字：「十」

美称・奉獻に関連：「富」

生産の場に関連：「田」

建物・社会構成に関連：「庄」「舍」「工」

地名に関連？：「真」

人名に関連？：「石上」「石」「伴」「子□」

その他：「牛」「上」「位」「大」

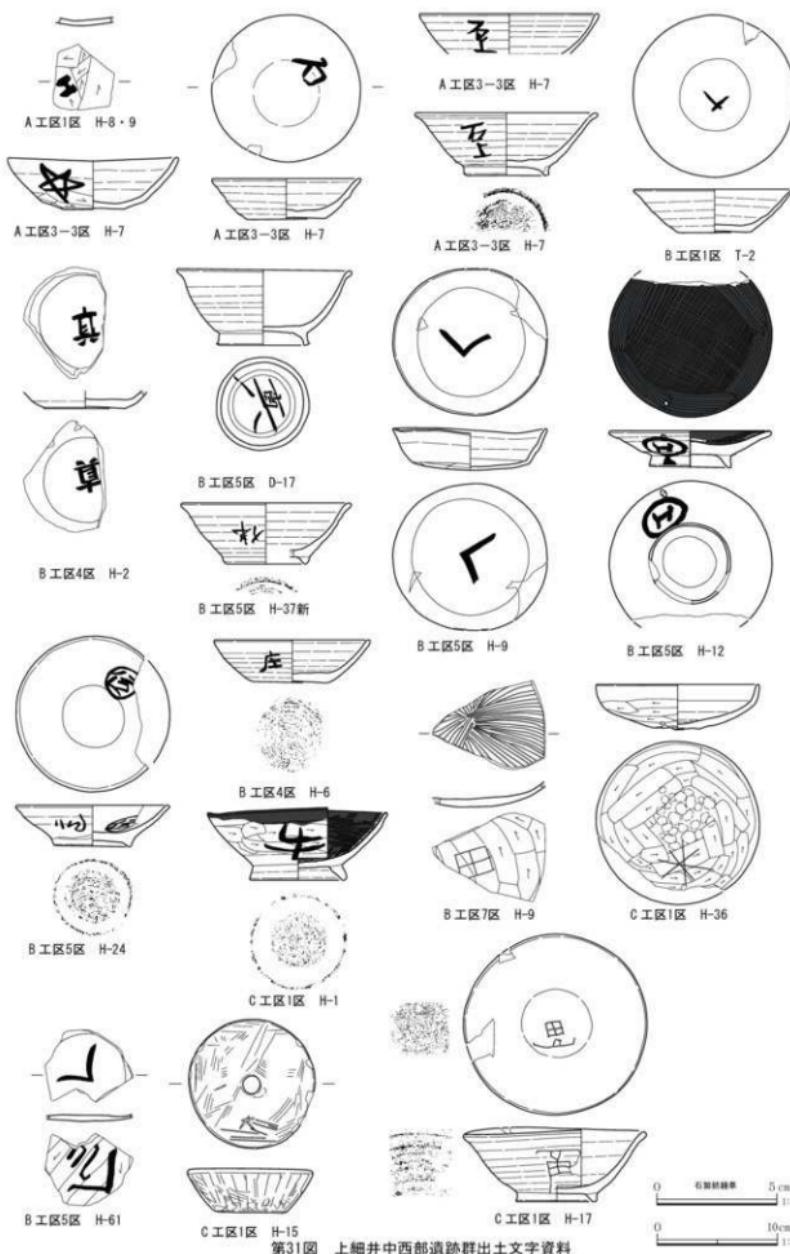
周辺遺跡の様相

上細井中島遺跡2点、上細井蟬山遺跡9点、新田上遺跡29点、天王・東紺屋谷戸遺跡56点、上町・時沢西紺屋谷戸遺跡8点、大久保遺跡4点検出されている。周辺の遺跡では、ほとんどが8世紀後半～9世紀後半のものであり、本遺跡と同様な傾向が認められる。

また、釈読可能な文字で本遺跡と関連が考えられるものには、上細井蟬山遺跡の「石」、新田上遺跡の「石□」、大久保遺跡の「石」があり、これは石上氏の氏族名を表すと考えられ、本遺跡の構成員として石上氏が関わっていた可能性が考えられる。

さらに、B工区5区17号土坑より出土した「真」と記された土器について考察を進めたい。墨書き「真」の文字が記された土器は、本遺跡から約500m東の時沢西萩林遺跡で内面に「真合」、外面上に「真□」と記された墨書き土器が検出されている。時沢西萩林遺跡の考察では、「真」の文字は和名類聚抄に記載されている郷のうち渋川市北橘町真壁に存在していたとされる真壁郷の頭文字の意味で書かれた可能性が指摘されている（富士見村教育委員会 2007）。

本遺跡出土の文字資料の性格については周辺遺跡での出土事例を含めて検討が必要となるであろう。



第31図 上細井中西部遺跡群出土文字資料

A horizontal scale bar with markings at 0 and 5 cm. The text "石製材器皿" is written above the scale bar.

A horizontal ruler scale marked from 0 to 10 cm. The numbers 0 and 10 cm are at the ends of the scale. There are four major tick marks between 0 and 10, dividing the distance into five equal segments of 2 cm each.

第7節 上細井中西部遺跡群出土の特殊遺物

(はじめに)

上細井中西部遺跡群においては、集落遺跡からの出土頻度の低い特殊遺物が出土している。本遺跡の性格の一端を解明する上で重要と考えられる遺物の特徴を以下に述べていく。

(上細井中西部遺跡群の特徴的な遺物について)

1. 特殊な土器類

特殊な土器類については、盤が3点、高盤が2点確認されている。盤は、B工区3区2号竪穴建物跡とB工区5区62号竪穴建物跡とB工区5区1号溝跡から、高盤はA工区3—3区14号竪穴建物跡とB工区5区33号竪穴建物跡から出土している。

周辺遺跡では、王久保遺跡から盤が2点、小神明富土塚遺跡から盤が3点、天王遺跡から盤が18点・台付盤が4点、時沢西紺屋谷戸遺跡から盤が1点、芳賀東部団地遺跡（前橋市）から盤が4点・高盤が1点、東紺屋谷戸遺跡から盤が1点、東田之口遺跡から盤が3点・高盤が1点出土している。

2. 文字資料

文字資料については、墨書き土器・刻書き土器・刻書き錘車が確認されているが、詳細については第6節を参照。

3. 文字の記入に関連する遺物

文字の記入に関連する遺物のうち、硯は2点確認されていて、A工区4区の1号溝跡とB工区5区33号竪穴建物跡から円面硯の破片が出土している。

平瓶については2点確認されていて、B工区5区1号溝跡から1点、C工区1区25号竪穴建物跡から1点出土している。

文字の記入に関する遺物について、周辺遺跡からは上町遺跡と時沢西紺屋谷戸遺跡から転用硯が1点ずつ、上細井蟬山遺跡から転用硯1点・二面硯1点、山王・柴遺跡では風字硯が1点、新田上遺跡から転用硯が1点、天王遺跡から転用硯2点・円面硯2点、胴城遺跡から転用硯が1点、芳賀東部団地遺跡（事業団）では転用硯が2点、芳賀東部団地遺跡（前橋市）では円面硯が2点、東紺屋谷戸遺跡から転用硯が2点出土している。また上町遺跡・時沢西紺屋谷戸遺跡・山王・柴遺跡・東田之口遺跡・芳賀東部団地遺跡（前橋市）からは平瓶も出土している。

4. 緑釉陶器

緑釉陶器片は5点確認されていて、A工区1区10号竪穴建物跡から1点、A工区3—2区の11号・12号竪穴建物跡から1点ずつ、3号土坑から1点、A工区3—3区の遺構外から1点確認されている。緑釉陶器はA工区に集中してみられ、他の工区では確認されていない。

周辺遺跡では、胴城遺跡から3点出土が確認されている。

5. 腰帶具

腰帶具は、6点確認されていて、その内訳は鉢具1点、丸鞘2点、巡方1点、鉈尾2点である。鉢具はB工区5区16号竪穴建物跡から出土していて、鉄製である。

丸鞘はA工区3—3区の7号竪穴建物跡から1点出土していて、花崗岩製である。もう1点はB工区5区61号

竪穴建物跡から1点出土していて、銅製である。

巡方は、A工区3—3区の遺構外から出土していて、蛇紋岩製である。

鉈尾はB工区5区27号竪穴建物跡とC工区1区の41号竪穴建物跡から出土していて、いずれも銅製である。

上細井中西部遺跡群の丸鞆・巡方・鉈尾については、大きさが3cm程度のものと4cm程度のものの二つの大きさのグループに分けられる。

群馬県内で発見されている腰帶具は、135遺跡256点出土している。その内訳は銅製の鉸具7点・丸鞆52点・巡方60点・鉈尾19点、石製の丸鞆39点・巡方39点・鉈尾7点、鉄製の鉸具6点・丸鞆7点・巡方11点・鉈尾2点、種別詳細不明2点で、国府推定地および国分寺周辺遺跡での出土例が際立っている（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013）。

周辺の遺跡では、上町遺跡から石製丸鞆1点、新田上遺跡から丸鞆が1点、天王遺跡から巡方が1点、鳥取福藏寺遺跡から巡方1点、芳賀東部団地遺跡（事業団）から丸鞆1点・巡方1点・鉈尾1点、芳賀東部団地遺跡（前橋市）から巡方が2点と丸鞆1点、鉸具が2点出土している。

6. 銭貨

銭貨はB工区5区の76号竪穴建物跡から3点出土しておりその内訳は神功開寶（鋳造年代765年）が1点、富壽神寶（鋳造年代818年）が2点、C工区の27号竪穴建物から貞觀永寶（鋳造年代870年）が1点出土している。B工区5区76号竪穴建物跡では建物の隅から出土し、C工区の27号竪穴建物跡では床下土坑の底面から出土している。覆土中ではなく出土状況に特徴がみられることから、何らかの祭祀的な行為に用いられた可能性もあり、周辺遺跡や他の多くの出土事例との比較検討が必要になると考えられる。

周辺の遺跡において、銭貨の出土は多くの遺跡でみられるが（宋錢・明錢等）、皇朝十二銭の出土は五代砂留遺跡群で長年大寶が1点出土しているのみである。

7. 錫冶関連遺物

錫冶関連遺物としては、羽口・鉄滓・台石等が出土している。羽口はB工区2区1号竪穴建物跡から1点、B工区5区24号竪穴建物跡から1点、48号竪穴建物跡から4点、C工区1区36号竪穴建物跡から1点、D工区1区1号竪穴建物跡から1点、D工区4区2号竪穴建物跡から1点出土している。鉄滓はB工区5区40号竪穴建物跡から多数（実測図は1点のみ図示）、C工区27号竪穴建物跡から1点、D工区1区1号竪穴建物跡から多数（実測図は1点のみ図示）、D工区4区2号竪穴建物跡から2点出土している。椀形を呈するものは、A工区2区10号竪穴建物跡と13号竪穴建物跡から1点ずつ、B工区5区1号・38号・48号・61号・69号竪穴建物跡から1点ずつ、40号竪穴建物跡から6点、B工区7区3号竪穴建物跡から1点、D工区1区1号竪穴建物跡から2点出土している。

鉄分が付着し、被熱の痕跡が明らかな台石はD工区4区2号竪穴建物跡から1点出土している。

錫冶関連遺物が出土する遺構の中で、B工区の48号竪穴建物跡では、覆土中から湯玉や鍛造剝片が多数検出されており、鉄滓が混在または固着した鉄塊を加熱・鍛打して純化し、銅を製造する工程が行われていた可能性が高いと考えられる。

周辺遺跡では、芳賀東部団地遺跡（前橋市）で5カ所の製錫関連遺構が検出されており、そのうち1カ所は精錬炉と考えられている。また、羽口・鉄滓等も多数出土している。五代砂留遺跡では、錫冶遺構が1カ所検出されている。鳥取福藏寺遺跡では竪穴建物跡から羽口・鉄滓・鍛造剝片が多数検出されており、精錬錫冶炉の痕跡ではないかと考えられている。胴城遺跡、鳥取松合下遺跡、壬生保遺跡、上細井蟬山遺跡、上細井中島遺跡、上町遺跡、時沢西紺屋谷戸遺跡においても鉄滓・椀形滓・羽口等の錫冶関連遺物が検出されている。

(まとめ)

以上のように上細井中西部遺跡群出土の特徴的な遺物についてみてきたが、全体的な分布の傾向として、土器類・腰帶具はA工区3—3区に、B工区5区に特に集中して出土している。鍛冶関連遺物に関しては、B工区5区に特に集中して見られる。

A工区3—3区は、礎石をもつ竪穴建物を検出した調査区であり、B工区5区は他調査区に比べて竪穴建物の密度度が高く、また大型の竪穴建物が検出されていることから上細井中西部遺跡群の中でも集落の中心と考えられる。

周辺遺跡においての土器類や腰帶具、鍛冶関連遺物の出土状況を見ると、赤城山南麓地域には同様の傾向をもつ遺跡が点在していることがわかる。8世紀中葉から11世紀後半にかけての有力豪族の拠点と考えられる（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013）芳賀東部團地遺跡を中心として周辺地に支群的な集落が形成されていたことが想定される。

第9表 周辺遺跡出土の特殊遺物

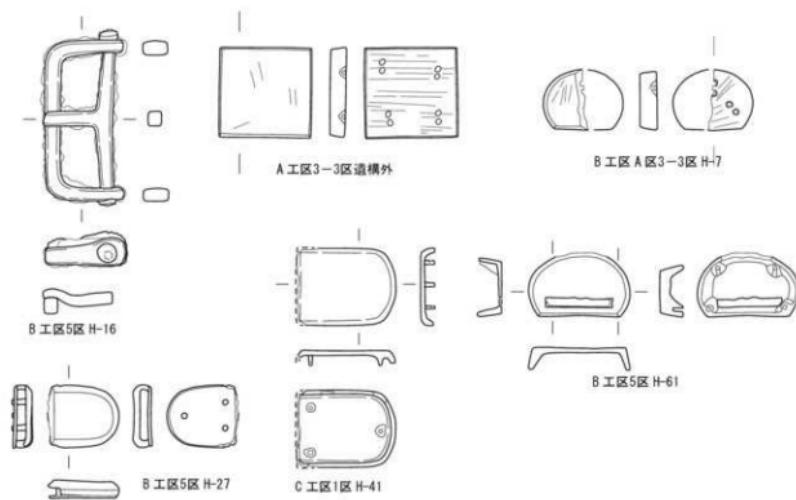
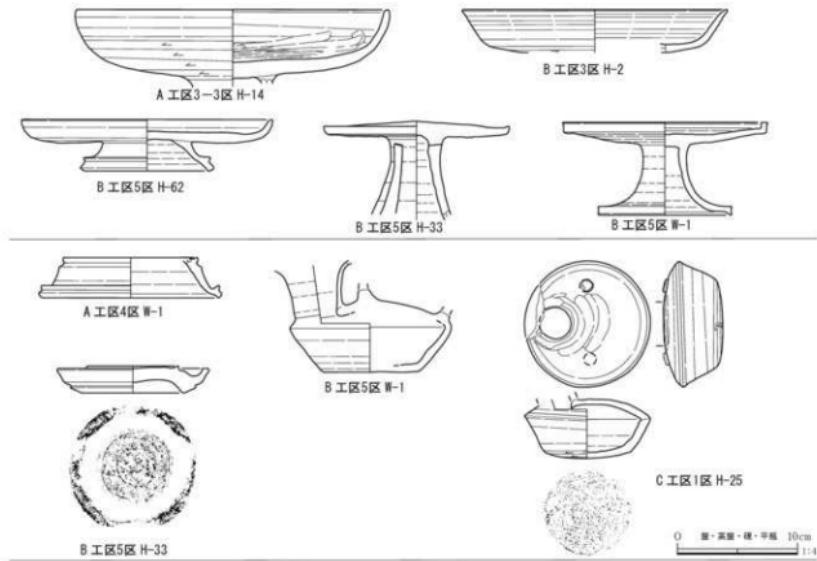
遺跡名	鏡	平瓶	腰帶具	錢貨 (皇朝十二錢)	縁軸陶器	盤・高盤
上細井中西部遺跡群	2(円面鏡)	2	6(丸鱗1) (巡方2) (範尾2) (鉢貝1)	4(神功開寶1) (富壽神寶2) (貞觀永寶1)	5	5
王久保遺跡	—	—	—	—	—	2
上町遺跡	1(転用鏡)	1	1(丸鱗)	—	—	—
上町・西紺屋谷戸遺跡(連続部分)	—	1	—	—	—	—
上細井五十嵐遺跡	—	—	—	—	—	—
上細井岬山遺跡	1(転用鏡) 1(二面鏡)	—	—	—	—	—
小神明富士塚遺跡	—	—	—	—	—	3
五代砂留遺跡群	—	—	—	1(長年大寶)	—	—
山王・柴遺跡	1(風字鏡)	1	—	—	—	—
新田上遺跡	1(転用鏡)	—	1(丸鱗)	—	—	—
天王遺跡	2(転用鏡) 2(円面鏡)	—	1(巡方)	—	—	22
胴城遺跡	1(転用鏡)	—	—	—	3	—
鳥取福藏寺遺跡	—	—	1(巡方)	—	—	—
鳥取福藏寺II遺跡	—	—	—	—	—	—
鳥取松合下遺跡	—	—	—	—	—	—
西紺屋谷戸遺跡	1(転用鏡)	1	—	—	—	1
芳賀東部團地遺跡(事業団)	2(転用鏡)	—	3(丸鱗1) (巡方1) (範尾1)	—	—	—
芳賀東部團地遺跡(前橋市)	2(円面鏡)	1	5(丸鱗1) (巡方2) (鉢貝1)	—	—	5
東紺屋谷戸遺跡	2(転用鏡)	—	—	—	—	1
東田之口遺跡	—	3	—	—	—	4

*各報告書をもとに作成

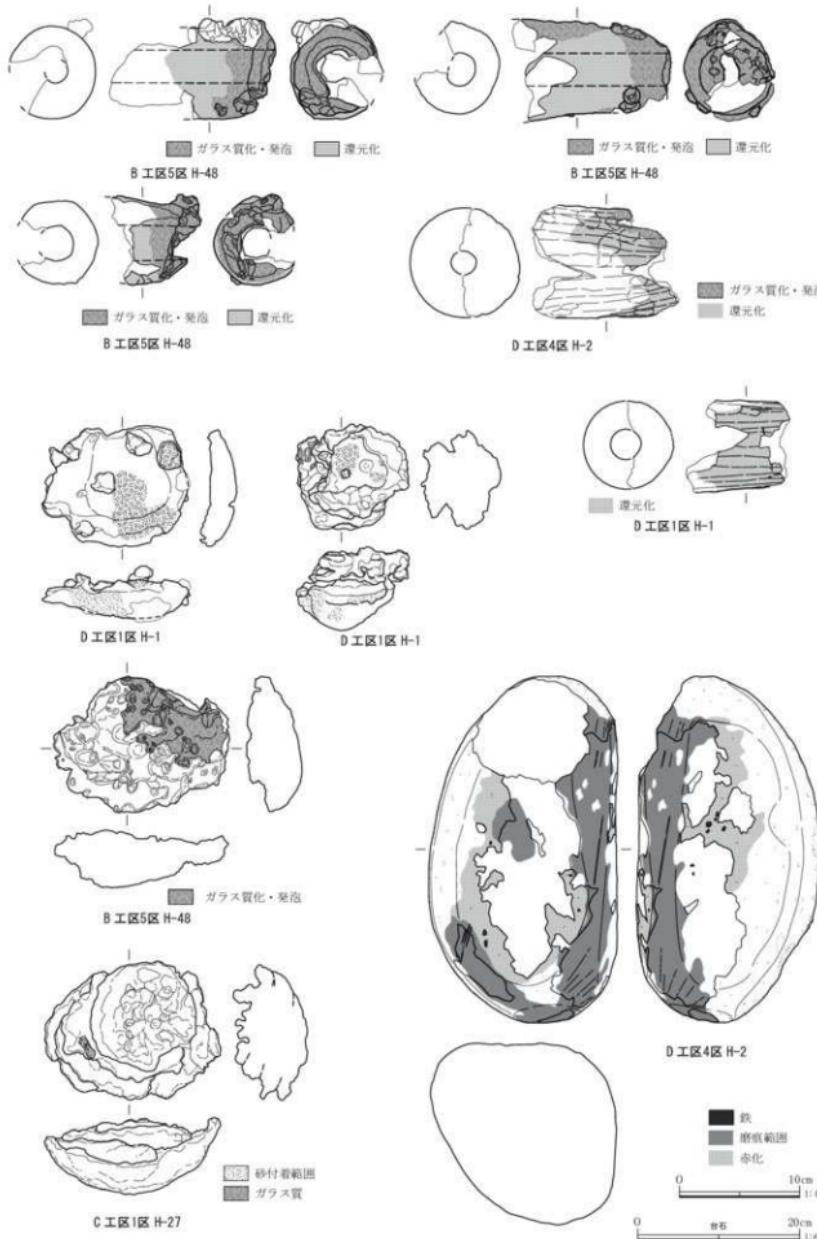
第10表 周辺遺跡の製鉄・鍛冶関連遺構・遺物

遺跡名	製鉄・鍛冶関連遺構	参考遺物	時期	備考	
上郷井中西部遺跡群	A 工区 2 区H-10・13 B 工区 5 区H-1・38・ 61・69 B 工区 7 区H-3	楕円窓治溝	A 2 H 10～10世紀後半～ 11世紀初頭、A 2 H 13 ～8世紀前半、B 5 H 1 ～8世紀後半、B 5 H 38～7世紀後半、B 61・69～9世紀後半、B 7 H 3～9世紀前半	遺物のみ	
	B 工区 2 区H-1 B 工区 5 区H-24 C 工区H-36	羽口J	B 2 H 1～8世紀後半、 B 5 H 24～9世紀後半、 C 1 H 36～8世紀初頭	遺物のみ	
	C 工区H-27	鉄滓	9世紀後半	遺物のみ	
	B 工区 5 区H-40	楕形窓治溝、鉄滓	9世紀後半	小鍛冶？	
	B 工区 5 区H-48	楕形窓治溝、羽口J	8世紀前半	小鍛冶	
	D 工区 1 区H-1	楕形窓治溝、鉄滓、羽口J	9世紀後半	小鍛冶？	
	D 工区 4 区H-2	鉄滓、羽口J・台石	8世紀後半	小鍛冶？	
	上町遺跡	羽口J・鉄滓	9世紀中葉	遺物のみ	
	21号住居	楕形窓治溝、鉄滓	9世紀中葉～後葉	遺物のみ	
	26号住居	楕形窓治溝	9世紀中葉	遺物のみ	
王久保遺跡	5区1号鍛冶工房	鍛造削片・粒状滓・楕形窓治溝	9世紀後半	鍛冶工房	
	2区2号ビット	羽口J		遺物のみ	
	4区6号住居	楕形窓治溝	8世紀中頃	遺物のみ	
	4区7号住居	楕形窓治溝、不明の滓	10世紀後半	遺物のみ	
上郷井鶴山遺跡	9号堅穴住居	楕形窓治溝	9世紀後半	遺物のみ	
	2号住居	楕形窓治溝	9世紀後半	遺物のみ	
五代沙留遺跡群	284・285・286・299・ 300 土坑	鍛造削片・粒状滓化物・金床 石	9世紀後半	小鍛冶	
	8号住居	東ねた状態の鐵器→鉄滓	10世紀前半	遺物のみ	
御城遺跡	33号住居	鉄滓（火炎痕あり）	10世紀後半	遺物のみ	
	11号住居	割れた鉄器前→8世紀後半～9世紀 の型壓型に伴う鍛造滓	8世紀後半～9世紀	遺物のみ	
	13号住居	楕形窓治溝	8世紀前半～中頃	遺物のみ	
鳥取松合下遺跡	H-37号住居址	精鍊鍛冶炉=整円形 3.4 × 3.2 m・深さ 0.25 m 地床約 0.51 × 0.34・深さ 0.2 m フゴイ座あり	羽口J・鋤・鍛造削片・羽口J・ 鉄滓・鍛造削片・羽口J・ 鉄滓總重量 38kg	9世紀中頃	小鍛冶・精鍊鍛冶 工房
	鳥取福岡寺遺跡	小土坑 14、燒土入り円形 土坑	鉄滓	9世紀後半	2基、地床がか。
芳賀東部併地遺跡 (前橋市)	4号製鍛址	精鍊炉=方形、1.1 × 1.2 m・ 深さ 0.54 m、鍛がりあり	焼石・楕形窓治溝・チップス・羽口J・ が壁	9世紀中葉	製鉄炉
	5号製鍛址	鍛冶炉=ビット状、 0.32 × 0.34 m・深さ 0.12 m	焼石・羽口J・鉄滓	9世紀中葉	小鍛冶
	T 1号鍛冶址	鍛冶炉=圓丸長方形、 1.23 × 0.83 m・深さ 0.2 m	鉄滓・羽口J	8世紀後葉～9世紀前葉	小鍛冶
	T 2号鍛冶址	鍛冶炉=舟形、 3.25 × 6.00 m・深さ 0.4 m	焼石・鉄滓・チップス・羽口J・鉄滓	8世紀後葉～9世紀前葉	小鍛冶
	T 3号鍛冶址	鍛冶炉=推定圓丸長方形、 5 × 3 m・深さ 0.23 ~ 0.36 m	花崗岩・鉄滓・チップス・羽口J	8世紀後葉	小鍛冶
	H 58号住居跡	石多數出土	鉄滓・羽口J	9世紀初頭	小鍛冶
	H 87号住居跡	床面中央に石組み	チップス・鉄滓・羽口J	9世紀後半	小鍛冶
	H 198号住居跡	床面から凝灰岩・焼石	鉄滓・鉄製品	9世紀中頃	遺物のみ
	H 216号住居跡		鉄製馬具・鉄製鋸鉋車・鉄鎌・鉄滓	9世紀前半	遺物のみ
	F 2住、G14・15住、 I 2住		F 2 = 9世紀前半、 G14 = 8世紀中頃、 G15 = 9世紀前半、 I 2 = 5世紀中頃	遺物のみ（I 2は 流れ込みか）	

*財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013 を参考に作成



第32図 上細井中西部遺跡群出土の特殊遺物



第33図 上細井中西部遺跡群出土の鍛冶関連遺物

第8章 引用・参考文献

- 安中市教育委員会 1996 『中野谷松原遺跡』
- 池田敏宏 1999 『仏堂のある風景』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
1999 『研究紀要』栃木県埋蔵文化財センター
- 大胡町教育委員会 1997 『堀越中道遺跡』
- 川白田遺跡調査会 1998 『川白田遺跡』
- 群馬県企業局 1980 『三原田遺跡第1巻』
1990 『三原田遺跡第2巻』
1992 『三原田遺跡第3巻』
- 群馬県教育委員会 1989 『群馬県出土の墨書・刻書土器集成(1)』
1992 『群馬県出土の墨書・刻書土器集成(2)』
1998 『群馬県出土の墨書・刻書土器集成(3)』
- 坂口一・三浦京子 1986 『奈良・平安時代の土器の編年』『群馬県史研究』第24号
- 埼玉県児玉郡児玉町教育委員会 1983 『阿知越遺跡I』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『糸井宮前遺跡I』
1986 『大原II遺跡 村主遺跡』
『糸井宮前遺跡II』
1988 『群馬の考古学』
1990 『戸神諏訪遺跡』
2001 『石塚遺跡(沼田チェーンベース地点1)』
2010 『上泉唐ノ堀遺跡』
2011 『上泉唐ノ堀遺跡 上泉新田塚遺跡群』
『東田之口遺跡』
2012 『小神明勝沢境遺跡 小神明富士塚遺跡』
『五代砂留遺跡群』
『鳥取松合下遺跡 脊城遺跡』
2013 『丑子遺跡・上細井五十嵐遺跡』
『王久保遺跡』
『上町・時沢西組屋谷戸遺跡』
『上細井蟬山遺跡』
『上細井中島遺跡』
『新屋敷遺跡 上西根遺跡 関遺跡(1)』
『堤遺跡』
『天王・東組屋谷戸遺跡』
『芳賀東部団地遺跡』
2015 『新田上遺跡』
『弓切塚遺跡 青柳宿上遺跡』
- 2016 『山王・柴遺跡』
- 渋川市教育委員会 1998 『若宮遺跡』

- 閔 和彦 1994 『日本古代社会生活史の研究』
- 関口功一 2014 『群馬歴史民俗』35
- 高崎光司 1989 『考古学雑誌』74-3
- 高島英之 2000 『古代出土文字資料の研究』
- 2006 『古代東国地域史と出土文字資料』
- 2012 『出土文字資料と古代の東国』
- 2017 「群馬県前橋市上細井町新田上遺跡出土墨書き土器についての一考察」『研究紀要』35 pp.115-134
- 奈良文化財研究所 2003 『古代官衙・集落と墨書き土器—墨書き土器の機能と性格をめぐって—』
- 2004 『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』
- 沼田市教育委員会 1985 『石墨遺跡』
- 1992 『沼田北部地区遺跡群Ⅰ（戸神諏訪Ⅱ遺跡）』
- 1993 『戸神諏訪Ⅲ遺跡』
- 1994 『戸神諏訪Ⅳ遺跡』
- 1995 『戸神諏訪Ⅴ遺跡』
- 1996 『町田上原遺跡・岡谷十二遺跡・岡谷西原遺跡』
- 1997 『町田手古又遺跡・岡谷毛勝遺跡』
- 沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1993 『稲荷遺跡』
- 平川 南 2000 『墨書き土器の研究』
- 平野 修 2007 「礎石をもつ堅穴建物」『考古学ジャーナル』559 pp.20-24
- 富士見村遺跡調査会 1996 『組之木原遺跡』
- 富士見村教育委員会 1989 『白川遺跡 由森遺跡 久保田遺跡』
- 1992 『東組屋谷戸遺跡』
- 『広面遺跡』
- 1994 『坂上遺跡』
- 『愛宕山遺跡 初室古墳 愛宕遺跡 日向遺跡』
- 1995 『上百駄山遺跡 寺間遺跡 孫田遺跡』
- 1998 『旭久保B遺跡』
- 『原之郷鍬沢遺跡』
- 2006 『時沢宮東遺跡』
- 2007 『時沢西萩林遺跡』
- 北橘村教育委員会 1993 『芝山遺跡』
- 2001 『道訓前遺跡』
- 前橋市教育委員会 1984 『芳賀東部団地遺跡Ⅰ』
- 1988 『芳賀東部団地遺跡Ⅱ』
- 1990 『芳賀東部団地遺跡Ⅲ』
- 1991 『芳賀西部団地遺跡』
- 1994 『芳賀北部団地遺跡Ⅰ』
- 2015 『五代深堀Ⅰ遺跡No.2』
- 2018 『五代伊勢宮Ⅶ・Ⅷ遺跡』

- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990 『芳賀北曲輪遺跡』
1997 『鳥取福藏寺遺跡』
1998 『鳥取福藏寺II遺跡』
2000 『五代木福II遺跡 五代深堀I遺跡』
2001 『五代伊勢宮II遺跡』
2002 『五代伊勢宮III遺跡 五代深堀II遺跡 五代中原I遺跡 五代伊勢宮IV遺跡』
『五代伊勢宮V遺跡』
2003 『五代伊勢宮IV遺跡 五代中原II遺跡』
2005 『五代木福IV遺跡 五代深堀III遺跡』
2007 『五代伊勢宮遺跡(1)』
2009 『上細井北遺跡群No.1』
2010 『上細井北遺跡群No.2』
- 宮城村教育委員会 1996 『鼻毛石中山遺跡』
松田 猛 2002 『赤城村歴史資料館紀要』 4
雄山閣 2015 『季刊考古学』 131

抄 錄

フ リ ガ ナ	カミホソイチュウセイブイセキダン
書 名	上細井中西部遺跡群
副 書 名	上細井中西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷 次	
シ リ ー ズ 名	
編 著 者 名	村越純子
編 集 機 閣	前橋市教育委員会事務局文化財保護課
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市総社町三丁目11番地4
発 行 年 月 日	2024年3月15日

フ リ ガ ナ 所収遺跡名	フ リ ガ ナ 所 在 地	コ ー ド		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
カミホソイチュウセイブイセキダン 上細井中西部遺跡群	前橋市上細井町・青柳町	10201	30B19 31B21 2B22 3B24	36°25'37"	139°4'33"	20180514 ～ 20210311	44.164m ²	土地改良

種 別	集落跡、古墳
主 な 時 代	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代
遺 跡 概 要	縄文時代竪穴建物15軒、縄文土坑101基、弥生時代竪穴建物3軒、古墳2基、古墳～平安時代竪穴建物308軒、掘立柱建物跡11棟、竪穴状遺構6基、溝跡28条、道路跡4条、土坑144基、戸門跡1基、落ち込み7基、ピット556基
特 記 事 項	縄文時代前期中葉から中期後半の竪穴建物跡を検出。前期後半が本遺跡群の中心時期と考えられる。 弥生時代中期中葉の竪穴建物跡と土器群検出される。赤城南麓地域に当該期の遺跡は少ないが、上細井・南橋地区に限ると比較的の遺跡が集中している。 古墳時代後期に造られた古墳の周堀からは大刀と銀象嵌が全面に施された鈔が出土。古墳時代から平安時代にかけては連續と集落跡が形成されるが、特に8・9世紀に集落規模が大きくなる。掘立柱建物跡の検出は少ないものの、礎石をもつ竪穴建物跡や大型の床面の非常に堅密な竪穴建物跡が検出されており、墨書き・刻書き土器、腰帶具、硯、平瓶などやや特殊な遺構・遺物が発見されている。
要 約	上細井中西部遺跡群は、標高約400mの旧富士見村大河原付近を扇頂として東端を藤沢川、西端を細ヶ沢川とする広い範囲で緩斜面を形成している白川扇状地の扇端に所在する。縄文時代から平安時代の集落跡を中心とした遺跡群である。

上細井中西部遺跡群

上細井中西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

《第1分冊・本文編》

令和6年2月26日 印刷
令和6年3月15日 発行

発行・編集 前橋市教育委員会 文化財保護課

前橋市総社町三丁目11番4号

印 刷 朝日印刷工業株式会社
